

仕上がり見本の作成ありがとうございます

仕上がり見本をご確認ください

本は仕上がり見本通りに印刷されます。
誤字脱字や文章、画像の抜けもそのまま印刷されますのでよくご確認ください。

背表紙を忘れずにご確認ください

背表紙の文字は、半角英数字以外は縦書きで表記されるため、背表紙と表紙のタイトルで見え方が異なる場合があります。よくご確認ください。
背表紙のタイトルを別途指定したい場合、「本の設定」にて、背表紙用のタイトルを別途入力することが出来ます。
※半角英数字と全角文字が混じっている場合は特にご注意ください。
※ページ数が少ない場合は、背表紙に文字は入りません。

ご注意

印刷・製本のご注文は、最新の仕上がり見本のみが対象となります。
この仕上がり見本をご確認後に「編集し直す」で編集中に戻すとこの仕上がり見本で印刷・製本をおこなうことはできません。
再編集後に、新たに仕上がり見本の作成をお願いします。
※編集内容は、保存されていますので、消える事はありません。

※このページと背表紙の確認ページ、4 ページ目の白ページは、印刷されません。

(この仕上がり見本の印刷コード番号：107957-20140910084220-HRH)

作成した仕上がり見本の設定内容

本のタイトル：残侠諷わっ子
著者名：伊藤正房
本のサイズ：標準サイズ(B6)
文字の方向：たて書き
書体：明朝
目次：巻頭に入れる
記事の並び：「古い日付」を先頭にする
改ページ：日付ごと
本文中の日付印刷：印刷しない
PDFにする日付範囲（開始）：2014.08.02
PDFにする日付範囲（終了）：2014.08.30
コメント：印刷しない
表紙に日付範囲の印刷：印刷しない
表紙にブログURLの印刷：印刷しない

英数字が90度回転しないようにするには、全角文字で入力してください。

<英数字を半角で入力した場合>

子育て日記 VOL. 2

▼
子育て日記 VOL. 2


<英数字を全角で入力した場合>

子育て日記 VOL. 2


▼
子育て日記 VOL. 2

残侠諏わっ子

伊藤正房



背表紙は左のようになります。
半角英数字を使用している場合は**半角英数字**だけ**90度回転**した状態になります。
なお製本サービスをご利用の場合、このPDFの総ページ数が一定のページ数（モノクロは121ページ、カラーは142ページ）に達しない場合は背表紙に文字は入りません。ご承知おきください。





残俠諏わっ子

伊藤正房

子わ誂俠残

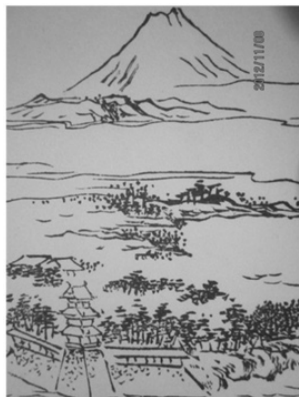
伊藤正房

目次

伊藤正房の本	3	333
伊藤正房の本	2	332
伊藤正房の本	1	331
.....		330
.....		329
.....		328
.....		280
.....		237
.....		200
.....		153
天竜の女(ひと)		152
.....		137
.....		88
.....		60
.....		2
残俠譚わっ子		1

パウダーガイド社の本

残俠譚わっ子



上 諏訪湖衣ヶ崎の高嶋城図（天主の直上は二の丸館）
下 廃仏毀釈で破壊された諏訪明神上社五重塔図

信濃国諏訪領民

二人の童（わらべ）がいた。諏訪湖に注ぐ六斗川河口のあたりである。今日は魚網でハヤ（うぐい）を掬う遊びに興じているようであった。水が盛り上がりつつ流れる川央の早瀬を避けて岸よりに魚は群れるのである。

近在の百姓の子たちが川遊びをする景色と異なるのは、離れた場所に数人の侍がたむろし馬も見えらる。みれば二人の童の着衣も、どことなく垢抜けて上等なものであり、百姓の子のボロ纏とは明らかに違っていた。

童のひとりには諏訪大輔で諏訪藩家老で千二百石扶持の諏訪図書の家長である。

諏訪の藩主と同姓であることからわかるように、諏訪図書の系は諏訪惣領家の分家という家系である。

もう一人は千野兵庫である。兵庫は同じく諏訪藩家老で一千石扶持の千野貞典の長男であった。

千野氏も諏訪氏とは主従ではあるが、関が原以前からの古い歴史では、諏方氏の分流でもあった。

大輔も兵庫も、諏訪で生まれ諏訪の湖水を見て育まれた。まがえることない生粋の諏わっ子である。

兵庫のほうが3歳ほど年嵩（としかさ）であったが、川遊びのさなかに歳や身分を意識する子はい

ない。

遠くに見え隠れしている侍たちは、それぞれの家中の御伝役（守役）であった。

この時代、人の身分と立場は生まれた時点でほぼ決まる。百姓に生まれれば、生涯を百姓としての分際を超えることはなく、武士にあつてもその下限を下回ることはない。その分限（ぶげん）は、

「自分は、〇〇である。」

の範囲に収まらねばならず、上限下限を逸脱してはならない秩序であつた。

それゆえ二人は上限下限の狭間で、そのがんじがらめの身分制度の奴隷となつて、生きなければならぬ運命に翻弄されることになる。

「大輔、網の位置が悪いぞ。もつと上のほうへ入れるどう。」

「おおほうか。兵庫、下から追つてくりようや。」

兵庫は大輔が構えた網のほうへハヤを下流から追いこむのだった。

やがて獲れたハヤを岸辺の砂州で、守り役の侍が火であぶるのである。岸に群れるカトギ（よし）の茎で串ざしにして、火の周囲の砂に差込み強火の遠火であぶるのが良い。

普段洗練された食を供されるこれら家老の息子二人は、このような野性味豊かな焼き魚をことさら好んだのである。あつあつの焼きたてのウグイをほうばりながら、

「上流のなあ、宮川のほうまでいきやあアメナユ（アマゴ）が獲れるぜ。」

「こんだ（今度）、いつてみるか。」

「おう。」

土手の須具利（すぐり）の実は酸っぱくて、魚を食べた後の口直しに最適だった。

房貝具利（ふさすぐり）とすこし大きくて一つずつ小枝に生（な）る、すぐりと二種類あった。

ここから下流は諏訪湖の河口となつて、湖での漁は、瀬の川とは違う世界である。湖に棲むのは鯉など大型の魚であるが、漁村の小和田（こわだ）村などの3村がえ既得権でもつ沖漁、ほんの一部の地域に許された氷あけの明湖（あけうみ＝明海）での漁業権など、ややこしい利権が絡んで簡単には遊べない。

諏訪藩には課税のための「湖検地」という制度まであり、課税は水上にまで及ぶのであった。

また湖での漁法は、四ツ手網漁（丸竹のそこ網）とか牢屋漁（追込力ゴ）などで、沖へは丸太船（丸太半割りのくり抜き舟）や、板を矧（は）ぐ「さんば舟」を使うのであった。

大輔と兵庫があそぶ今日の六斗川の淀みには、青空のポツカリ浮かんだ雲が映っていたが、中瀬からのよせ波を受けて、しきりにゆがんでいるのが見えていた。

見渡せば諏訪湖に近い田は沼のような「どべつ田」で、百姓は、田下駄、桶なんば（桶に鼻緒をすげたもの）、田舟などを使って、作毛の作業に格闘しているのであった。

諏訪大輔の住む諏訪藩高嶋城二の丸というのは、城の東側の濠（ほり）の機能を果たしていた中

門川（三の丸川）以南、本丸までの総称である。

千野兵庫の住む三の丸館は南側に位置する。二人はおなじ家老家の帝王学を御伝（おつたえ）教授）されていたし、剣術の腕はドングリだが、おなじ道場に通っていたのである。

その剣術道場は、やはり郷の漁村小和田村にあった。

小和田村は高嶋村と称していたが、そこは文禄年間、日根野領主が高嶋城を築く建築予定地となり、氏神の八剣神社とともにここに移された。このとき高嶋村を小和田村と改名したのである。

村は衣（ころも）の渡川と中門川（三の丸川）にはさまれた一郭で、ここには公式行事につかう御殿、拝領屋敷、御勘定所が並んでいた。

御伝えのこと

七年の年月が流れた。

川遊びの歳を卒業し、二人は普段の修養に励む歳になっていた。学問については、近習に有識の者が揃えられ、日々学科を違えて教授に訪れた。

剣術道場は小和田にあり、二人も多数の藩士に混じって木剣を振るうのだった。

「大輔、明日は小阪観音で方丈さまのご御伝え（進講）があるぞ。馬で行くか。籠（かこ）で行くか。」

木剣で素振りをしながら兵庫が問うた。

「馬で行くじゃあ。」

大輔は、湖水の丁度反対側の岸边にある小阪観音院へは馬で行くべきだと思つた。籠^{かご}たと供揃えが厄介である。馬なら天気さえ良ければさわやかな湖水からの風を切つて行かれる。

翌日大輔は、旧小阪城跡にある小阪観音の境内にいた。小阪観音院の正式名称は、龍光山観音院といい御本尊は十一面観音菩薩である。

ここから見る景色は、咲き始めた小阪観音院のアジサイの陰から、東方正面にみどりの唐沢山と地藏寺（じぞうじ）、その奥すこし南にうす青い八ヶ岳を借景にして、春霞がたゆとう湖の姿があつた。

その日、大輔と兵庫を迎えた小阪観音院の方丈が、本堂の観音像の前で厳かに語り聞かせたのは、二人の代にいたるまでの諏訪氏の存在と、領民が神の子であつた所以（ゆえん）の説話であつた。

二百年以上も前のことである。甲斐国の武田によりこの諏訪の地は奪われた。前後に政策上よしみを通じするため藩主諏訪頼重の女（むすめ）が、政略上、武田信玄の側室となり武田勝頼を産んで、旧諏方国と甲斐国の武田が姻戚関係を構築した。

旧諏方国とは、「統（しよく）日本紀」に出てくる国名で、養老5年「信濃国を割（さ）きて諏方

(すわ) 国をおく」とありこれを便宜上「旧諏方国」と呼ぶ。旧諏方国はその後信濃国になり消えた。政略結婚にまつわる伝は、その時代に諏訪藩が生き残りを賭けた一連の壮大なドラマであった。そのときのこの女は諏訪御寮人とだけ記されており名はない、「鉄山録」によれば、弘治1年(1555年)に25歳で没したとある。

後の世で、流行作家が由布姫とか湖衣姫とか、小説やテレビドラマで勝手につけた名前が世に一人歩きしており、また地元市が観光用に、その名を用いて銅像を湖中に建てたりした。

しかしこの御寮人と記された女の本名は、詳らかでないのが真実である。この御寮人が居住したのが小阪観音院であった。

これらの歴史の陰に垣間見られる人々は、みんな諏訪大輔にとつては直系の血の道となる祖の人々である。

この日、回廊からみる小阪観音院の奥庭はアジサイが咲き始め、諏訪湖を見下ろす境内の日陰には、水引(みずひき)群生しているの印象的だった。

さて、諏訪氏は強豪武田軍に滅ぼされたが、その強豪武田一族も盛者必滅の理に従い滅亡した。そしてその後、全国は麻のように乱れた戦国の世となつていった。

あの武田は滅亡して野垂れ死にしたが、諏訪氏は敗れたりとはいえ、その血脈がこの地に脈々と遺されていた。

畏れ多くも諏訪明神の聖域にわずかにひとり、諏訪神社大祝（おおほふり＝人神）の職にあつた諏訪頼忠が、神の領域で隠然と諏訪氏の血脈を守っていたのだ。

関が原合戦より60年前のこと、豊臣秀吉の強引な国替え政策により諏訪氏は武蔵国へ移封され、諏訪の地は思いならずも他州者の日根野氏の知行地となつてしまった。

日根野高吉（ひねのたかよし）は、織田と豊臣に仕え、軍功により信濃諏訪郡を与えられたのである。

この60年間諏訪領民は、新領主日根野氏の下で塗炭の苦しみを舐めた

その最たるものは、文禄元年から7年ほどかけた諏訪高嶋城の建設への賦役であつた、また、諏訪の民にとって心のよりどころだつた諏訪神を奪われた失つたことである。

諏訪の領民が、何にも変えがたい諏訪神を失つたのは、有史以来2回ある。1回目は、この日根野政権における60年間の神奪いであり、2回目は、ほかならぬ近過去に属する明治初年の、維新政府の廃仏毀釈という神奪いであつた。

60年間といえは家系では一代か二代を経る長期間である。星霜移つてすでに領民の大半は、新領主日根野高吉による支配下で、物心ともまた信仰の意識も、非諏訪の方向へ洗脳されていたであらう。

危惧をもつた諏訪郷の古老たちは若者たちに、われらはほかならぬ諏訪神の氏子であることを語り継いだのであつた。

しかし他州者の領主日根野氏には、郷に根付く諏訪神への信仰とその歴史の重みが分らず、諏訪神など道端の道祖神程度のものとの認識であったのであろう。

諏訪領民にとつて、諏訪神を絆とする同胞意識の源泉を断ち切られた生活は、生きる希望を断ち切られたようなものであった。

一方で、諏訪高嶋城の建設のため、運上金（税金）、資材や人身の徴発、すなわち城砦の石垣には祖霊やどる墓石まで奪われ、礎石を埋める作業では領民の人柱まで強要されたのであった。

湖上の浮城として優雅な風情を見せた諏訪高嶋城は、諏訪人民の血と汗で彩られた怨念の城でもあった。

その冬の時代を耐えた後、諏訪氏は地元で復権した。それは徳川に組した諏訪氏の先見の明だった。関が原での徳川の勝ちいくさである。その勝利に功あつて、諏訪氏はもとの聖地諏訪への復権がかなつたのである。

慶長6年の諏訪の殿様の諏訪郷への入部は、領民の歓喜で迎えられた。この間の艱難（かんなん）の悪夢も霧散したのであった。

このとき諏訪氏の復権に協力したのが、地元の豪族の千野（ちの）氏であった。千野兵庫の祖である。

千野氏は、諏訪氏とともに武蔵へ移封される以前からの主従である。千野氏と諏訪氏は諏訪明神をいただく芻頭（ふんけい）の仲であり、ともに相並んでこの地の豪族として君臨してきたのであつ

た。

諏訪の地を離れてからも望郷の聖地諏訪は両雄の共通の神域であり、「いつかは祖霊まします諏訪へ復権すべし。」

と、両雄は君臣の立場を超えて志相携え、その機を狙っていた輩（ともがら）であつた。

小阪観音院の方丈は、御伝え（進講）の末に、二人を睨むように見てつけ加えた。

「いずれの家にも氏神があり、土地には地神、国土には国ツ神がおわす。この諏訪には諏訪神がおられ、太古より領民はみな氏子である。上に立つ者は領民を敵に回してはならぬ。領民をすべて諏訪神の氏子として慈しむのじゃぞ。

二千年近くも前の故事がある。漢制の郡（地方）の太守（たいしゅ＝長官）の良は善政を施した、その俸禄は二千石（せき）であつたという。これを以て、善政を執り行う地方長官を、「良二千石（りようにせんせき）」と別称す。

善政こそは王者の大儀じゃ。漢の国は広大であつたので、数多（あまた）の太守（地方長官）が赴任したが、善政を施す者は少なかつた。

役人は墮落して、官職の売買まで行なわれるありさまだつた。賂（まいない）を多く取れる地方の官職の値は高く、貧困な地方の賂は叩き売りされた。嘆かわしいことじゃつた。良は二千石だつたが毅然として民からの賂を廢した。

この良は亮に通じる。亮は明るい人、転じて字（あざな）は孔明という。

さて大輔殿、兵庫殿。お二人ともいづれ諏訪の太守役となろう。この漢代の故事に曰く諸葛孔明を見習い、諏訪の民草に慕われる高邁な家老即ち「良二千石（りようにせんせき）」になれかし。さすればこの諏訪の地は安泰にて無事治定するであろう。

朱子四書、和漢古典、故事などを多読し研鑽すべし。

殊にお二人は家老家の跡取りある。諏訪家の二本の矢じや。仮にも互いに刺し違えることあつてはならじ。終生よき輩（ともがら）にてありたし。禍福（かふく）門なし。唯（ただ）人の招くのみ。お互いのう。」

小阪観音院の方丈の御伝え（進講）は終わった。

方丈は過去の諏訪家のありようを實によく識っており、有職家（ゆうそくか）をまがう生き字引だった。

特に方丈が警告した運命的な最後の一言は、数十年後の大輔と兵庫の差し違えを懸念したものだ。だが、終生二人の教訓となり、また一方で方丈の予言どおりに世は動くことになっていった。

やがて方丈の孫娘が、茶をかざして二人の前に供した。

「粗茶でございます。」

「そなた、ここの娘か。名は。」

「はい、さら（沙良）と申します。」

「いくつじやな。」

「15でございませう。」

兵庫は全く無関心だったが、大輔はうつむき加減に話す沙良なる娘に好感を抱いた。大輔には観音堂の裏にアジサイが淡紅色に群れて咲く風情に、この可憐な娘を重ね合わせたのである。そして今は堅苦しい城内が別世界のように思えた。

西の塩嶺（えんれい＝塩尻峠）に茜（あかね）がさして巻層雲は金色の残照を受けていた。大輔は自身真っ赤に染まって、いやがうえにも赤い夕空に目を向けた。そして一刻値千金の春宵は暮れ終わった。

千野兵庫は、そんな大輔にかまわず、

「先に行くぞ。」

と、馬をかけて去った。

家老三の丸千野貞典

その宵のこと、城に近い三の丸川は湖からの波が逆流し、月影は小波（さざなみ）に不規則なゆれを見せていた。

「月がきれいだったのう。」

諏訪藩家老三の丸千野貞典は、諏訪湖畔を横にみるこの三の丸川辺の汀（みぎわ）に立つてつぶやいた。

しかし月を愛するには不相応なほど心は揺れていた。心の暗雲がまもなくこの月を隠すのかもしれない。

諏訪藩家老の三の丸千野貞典は、先ほど藩主諏訪忠虎から過分な加増を内示されていたのである。これといつての理由はない。ただの藩主の思いつきか気まぐれである。

それは国老と呼ばれている家老諏訪図書家の二の丸家と同じ、1200石に遇するといふものであつたが決して喜ぶことではなかつた。

「火種になる。」

千野貞典は綸言（りんげん＝天子の声）に対して辞退もならず、諏訪藩全体の火種となるものと、藩主の気まぐれに戸惑いつつ受け止めた。

湖水からの春の風は、殊に夜半ともなれば肌身に凍みる。ふと見上げる諏訪高嶋城は衣の崎の方向に浮いていた。

問題の所在は明らかである。

関が原戦後の慶長6年、功あつて諏訪忠実が故郷の諏訪領へ復帰したが、忠実には、長男の頼水と次男の頼雄がいた。

藩主諏訪忠実は、嫡男の諏訪頼水を藩主後継にすえ、次男の頼雄を二の丸で家老職に据えた。

そして盟友の千野氏を同じく家老職に任じて二家老制を布いたのである。このとき藩主忠実は、將來諏訪惣領家に嗣子なきときは、二の丸諏訪家から襲封（世継）する遺訓を遺したのであった。

さらに二家老制を布くにあたり、二の丸の家老諏訪家と三の丸の家老千野職に200石の差をつけて序列を明確にした。即ち、二の丸上席である。

この処遇は両家老家共に殊更の異存はなく、平穩に数代を経て現今に至ったものである。

ところがこの度の千野家200石加増の内示では、二人の家老が同じ石高になってしまい、従来の二の丸諏訪家優先の根柢がなくなるのである。これでは藩内の序列が崩れ、藩の行政執行に差し障りが生じるのは明白である。

千野貞典は現在、勤続50年、人格高潔にして名家老の評判が高い。

「この処遇は、二の丸諏訪家が納得しまい。」

千野貞典は迷っていた。二の丸諏訪家は惣領家に至近の系であり、藩主に子なきのときは世継ぎを出す諏訪惣領家の傍系である。

一方、三の丸の家老千野家は諏訪に根ついた豪族で、諏訪神の化身の標榜は諏訪氏に任せ、自らはその神を媒体として諏訪惣領家と一体不可分の立場にいる、

千野氏の系は平安時代に遡及すれば、諏訪家の系では一番古い諏方大祝家の由緒深い血脈でもある。

経年の間に諏訪惣領家と主従の契りをむすび、出自を違える身分となったが、だからこそ代々の藩

主は200石の差をつけ、異例ではあるが藩制に二人の家老職をおいて、その次席に任じ重きをおいてきたのである。

然るにこのたびの加増は、わたくし千野貞典の人徳を高くかうという藩主の恣意的なものである。藩主独断の藩内の状況をわきまえない気まぐれといえる。

「これは。祖訓にも違える暴挙。」

千野貞典は、月影に黒く枝を張った赤松を見上げた。

「千野家にはありがたい大殿の配慮だが、これは諏訪藩の将来百年の大計を誤るものかもしれぬな。」

老獺な千野貞典は、城内の勢力地図を思い浮かべていた。

夜半であった。千野貞典は眠れぬまま三の丸館（やかた）の回廊をすこし湖畔側へ移動し、湖に月光をうけてきらめく小波（さざなみ）を見た。

ここに、千野貞典が恐れたとおりの、新たな城内の序列に伴う抗争が起こったのであった。

関が原戦後の諏訪藩

諏訪藩は徳川に味方し関が原で勝利の後、戦功により自ら聖地と崇める諏訪郷に復帰することができた。諏訪の領民はすべて諏訪明神の氏子である。領民は諏訪氏の帰郷を、諏訪明神の復帰として狂

喜した。

新領主諏訪頼水は、これら諏訪領民の期待に応えるべく民生の安定に施策を集中し、農地の拡大をその主たる政策目的とした。

そのためには諏訪神社の神域であった、八ヶ岳の裾野の狩場など聖地の伐開も辞さなかった。

新領主諏訪頼水は領民の糧の量産のため、タブーをのり超え神域の伐開を手がけ、農地を拡大する政策をとったのであった。

そもそも縄文時代から、諏訪の地神は狩猟の神の守矢神だった。神話では出雲族が農耕の地神を旗印に移入したことになる。これら二つの神は、糧をめぐる確執を経て、山と里に棲み分けた。狩猟族と稲作族の棲み分けである。

やがて両神は習合して共通の一つの神を祀るようになり、神は大祝（おおほふり）職に乗り移った。神事は諏方守矢神を戴いてきた神長官職のもとで差配され、習合した後は諏訪明神として具現化された。

現実的にはこの流れは、縄文から弥生への時代の移行を、戦（いくさ）と神の習合で象徴したものである。

言い換えると、狩猟経済から農耕経済への歴史の移行を神話で例えたものであろう。

諏訪神社は、元祖は諏方（守矢）神が出雲神と習合した神で狩猟の神である。

したがって元祖諏方神社は、縄文民族の狩猟のフィールドなど、広大な原野を神域として保有し、

氏子（民）も領する行政体でもあった。

その後慶安元年、徳川家光の諏訪神社上社に千石、下社に五百石の朱印状を与える措置により、諏訪神社は政体からは分離して、専ら神域となっていくのである。

これら諏訪藩の農地拡大に功あったのが、戦後の初代藩主諏訪頼水の弟で、二の丸家老の諏訪頼雄であった。

諏訪頼忠実はこの二人の父のは、長男の頼水よりその弟の頼雄を愛していたという。

このような場合考えられるその理由は、子の母にあたる御手掛け（側室）を寵愛するあまり、反射的にその御手掛けが産んだ子を偏愛するなどの下世話な理由が多い。藩主の愚に対して側近の役人が人知れず苦勞する所以（ゆえん）である。

そのときは諏訪藩では、藩主の諏訪頼忠の意をなんとか押さえて、法度を優先して嫡子頼水を嗣子としたのであった。

二の丸諏訪家と同三の丸千野家を、横並びの1200石にするという内示は、序列と秩序を重んじる城内各方面に、不気味な色合いを放って受け止められた。

城内の不穏さに氣ついた三の丸家老の側近の矢沢典膳は、

「殿、当千野家へのご加増はありがたいことなれど、二の丸家老諏訪家あたりの意向にも氣を配らねば。」

「そうよのお。とりかえしのつかぬことになるやもな。」

三の丸家老の千野貞典は、戸惑いながらもそれ以上に語らず、静かに照らされたあたりの月光を見やった。

諏訪家百年の大計

「お上人。いかがしたものであろうかの。」

天道上人は千野氏の菩提寺の管主であり、千野貞典の学友でもあった。思い余った千野は、加増のことにつき天道上人に私的に諮問したのである。

「千野殿の懸念、諏訪家百年の大計を思えばもつともと存ずる。しかし繪言（りんげん＝天子の言）である。ここはよくよく考えねばのう。」

「お上人。家臣への俸禄の加増は、大殿の専決事項なれど、その適否及び規模は、御重役の評議を経て内示すべきもの。しかるにこれは大殿の差越（規範無視）による措置順逆の誤りと思われる。」
 言つてもせん無いことだと思つたが、つい愚痴が出る千野貞典であった。

「いかさま。人事は政治だといわれておる。千野殿の言われるとおりじゃ。しかし、いまさら評議にかけ、大殿へこの事案の内示を差し戻しするはなるまい。われらが逆意と取られよう。また改めて二の丸家老の諏訪図書殿へ協議を持ちかけるもまた然り。」

これは事案決定における大殿の差越（規範無視）の瑕疵だが、取り消しは叶うまい。千野殿、これはお受けせざるを得まい。」

「人事は政治。」

千野貞典はつぶやいてみた。藩政では多くの異なる人格の藩士が複数でチームワークを組んで藩政に当たっている、このチームワークを活かすも殺すも人の取り合わせである。

そのような配慮を「人事は政治」と言うが、藩士はボランティアではない。チームを構成するのは個々の藩士であるから、上下職位の席次に沿った合理的で、信頼され得る体系で俸禄を給されるのが必須である。

然るにその秩序を、藩主が勝手な思いつきの抜擢人事で乱すのは、まさに差越（規範無視）であり、家臣の信頼を損ねる行為と言わねばならない。

とはいえ、藩主が素人考えで企てたこの発想は、自分では良かれと思つた錯誤とも言える。

その愛すべき藩主は得意満面で悪びれず、

「貞典。どうだ、良い考えであらう。喜んでくれ。」

と、言いたげに、千野貞典が喜ぶ顔を待っているに違いない。

しかし、そのような愚考を藩主の頭に生じせしめた責任は、補佐役の家老にあつたのかも知れぬ。

ことごとく配慮に欠ける藩主を批判するのは容易（たやす）いが、その前に補佐役の家老が藩主にそのようなことを、言いだす隙を与えてはならなかつたのだ。

千野貞典は、僭越極まるこの藩主を哀れとも思い、愛しいとも思う感情に襲われ、援けたいと思つた。

「やむを得ん。毒食らわば皿までじゃ。わしらも覚悟を決めよう。」

天道上人と一時の（いっとき）の雑談を経て、三の丸家老の千野貞典は腹をくくつた。

「大殿の、ありがたきご配慮じゃ。この加増の栄お受け申す。」

千野貞典は居並ぶ側近に告げた。居並ぶ側近とは、千野家譜代の忠臣である。それを聞く家臣の面々は、ある者は目を閉じ、ある者は天井に顔を向きあげて、その座は溜息さえ漏れそうな鎮痛な雰囲気であつた。

ここに以後百年にわたる、諏訪藩の二の丸と三の丸のお家騒動の幕が切つて落とされたのであつた。

一方、藩主の差越（迷言）による千野家老家に対する加増と俸禄横並びの措置は、諏訪藩の上席家老を拝命する二の丸諏訪家に対しては、天地を違えるほどの衝撃をあたえることになった。

二の丸家諏訪家の近習役の花岡克明は、同役の小阪八双に怒りの態でぶつつけた。

「大殿は、何をお考えなのか。」

「さよう。二の丸諏訪家は、大殿に子なきときは、藩の世継ぎまで奉（たてまつ）る創訓の家柄である。」

それゆえ藩の上席家老を拝命しており、俸禄も三の丸千野殿の石高を上回るならいである。」

すでに問題は手続問題を超えて、二人の家老の優劣資質にかかる感情問題に発展していった。その影響と藩行政上の混乱は、まず政策論争から始まり、徐々に感情的な対立に発展して確執をみた。

以後、宝暦から明和年間には、二の丸諏訪家と三の丸の千野家による政策の違いが領民を混乱させたのだった。まさに領民不在の藩士派閥だけのいがみ合い、すなわちコップの中の嵐であり、争いどころにも大義はないものだった。この子供の喧嘩に、領民にはいい面（つら）の皮ともいえるとはちりであった。

藩主もやがて遅ればせながら、家老の権限が横並びになるような無秩序を煽る加増を軽々に口にした誤りに気付きあわてた。しかしいまさら悔いてみても引つ込みはつかなかった。わずかに、

「先職優先でことを進めるべし。」

と、取り繕い断じるのが精一杯であった。

「二家老同格ではあるが、年功（先職）に倣い家老の諏訪図書の意見を優先して藩政を執行せよ。」という、とってつけたような意味であろうか。

しかし俸禄石高の伴わない職位の優劣は、公定性に欠けるものがあつた。

藩政の合理的な執行は、人事の処遇などの内部運営の基盤において、官僚が永年にわたつて営々と積み上げてきた、有形無形の秩序を無視しては進まないものである。

その影響は大きかった。藩政の現場では片や新田開発と、此方（こなた）新田つぶしが同時進行す

るなど、不思議な不統一の施策がみられたのであった。

それは二の丸、三の丸抗争が、諏訪藩の上級から下級に至るすべての役人たちに、おのずから色分けを強要する仕儀となつたからである。まさに代理戦争から起こつた現場の混乱であつた。

藩役人は郡（こおり）奉行の配下にあつて、作毛の作付け計画から収穫に至るまで農事行政のため村々を巡回していた。藩役人は、各村長（むらおさ）を通じて、農事の点検、即ち水利、草場の入り合い権の調整、収穫の状況などを点検し、収穫量を把握するのである。

領民は、城内の勢力争いによる藩のちぐはぐな行政指導に戸惑い、接する藩役人の派閥の色合いを横目で見ながら、農事にいそしむのであつた。

三の丸千野兵庫と二の丸諏訪大輔は、竹馬の友柄ではあつたが、両家の政争が熾烈になるにしたがつて、その間（はざま）で戸惑いつつ、しかしそれぞれの体制に順じざるを得なかつた。

「兵庫、皮肉なもんだなえ。まあり（周囲）がなあ、煩（うる）そうてな。」
「しよおがねえじゃ。」

すでに子供に域を超えた歳まわりの千野兵庫と諏訪大輔は、それぞれの立場の自覚を強要されていつたのである。

事実、二人の行く末には心ならずも、容赦ない血で血を洗う凄惨な運命の嵐が待ち構えているのである。

おこうさま

諏訪は平和な郷であるが寒冷の地である。高地で四方を山に囲まれた諏訪盆地での作毛は、年一回に過ぎない。

わずか年一回の稲作はかけがえのない領民の命の綱でもあり、稲作は神とともにあった。

田の神は田ごとにご降臨あそばすので、田に竹柱を高く立て、その先に鐸（たく）をつるして叩いたりするのが伝統であった。

この鐸は、鉄鐸で神代では銅製だった。さらに後代には鉄が丸められて通称「さなぎ鈴」と呼ばれた。「サ」は、稲作に伴う古代語であり、早苗、早乙女、桜に象徴されている。「ナ」は鳴らすの「な」で、「ギ」は言うまでもなく鈴をつるすための木と解釈されるものである。

領民は氷が解ける卯月から収穫の霜月まで、早朝から田の水掛けや田の草とり、肥料として草場からの刈草を田の土中へ埋め込む作業など、農事に密着して日々を過ごすのだった。

大輔も子として父の家老諏訪図書とともに、時折各村を巡回して領民の生活に寄り添いつつ、作毛の状況などみてまわったのである。

それは諏訪神社の元祖守矢神の春の神事、酉（とり）の御頭祭（おんとうさい）がつつがなく終わったころだった。

この春を呼ぶ祭は呪術がかった神秘的な神事である。その前段に冬祭があり、地神のみしゃぐち神

の降臨を仰ぐ。この神をへび神様と呼ぶ古老もいた。蛇とともに神主が冬籠りの儀式をするからであろうか。

春祭では伝説の「おこうさま」が登場する。古老の話ではおこうさまは一年ごとに選ばれた子供の神主であり、これら神事の後には御贄柱（おにえばしら）の上に縛られ神への生贄（いけにえ）にされたと伝承される。縄文の古代神は、救いの神ばかりではなく恐ろしいたり神にもなった。

狩猟の神には鹿やウサギなどの獲物の首を供え、族長は明日の新たな獲物の恵与を神に祈念したであろう。

族長とは、後の邪馬台国の卑弥呼に相当する役割であったに相違ない。

もし翌日の狩で獲物が獲られなければ、族長の呪詛か、捧げた供物のいずれかに瑕疵があった天罰と評価されよう。

ならば、神は族に供物のレベルアップを要求していると断じられたであろうし、人々からは族長が行なう呪術に、不信任を投げかけられることになったかもしれない。

そうなれば族長のカリスマは地に落ち、クーデターも起こったであろう。上下にかかわらず、すべての人々が、狩猟の成果を基準に、神への畏敬の念を抱いていたのであろう。

そこで神による獲物の恵与を願い、この世に「生きさせていたたく」ためには、情け容赦なく人間の生身も生贄にされ、この神の前に捧げられたという、際限のない苛酷な縄文の掟が垣間見られる。だから縄文時代の人々の生贄は、「縄文のロマン」などという発想では説明できないはずである。

ちなみに西洋の人種のルーツは首狩族だと異端視する向きも見受けられるが、洋の東西を問わず神は「生存」の権化であり、神の前には、生体のお贄（にえ）や生首を捧げる普遍的文化が、世界中に厳然として存在したのである。

神長屋敷

大輔は、諏訪郷の領民が諏訪明神に対して敬虔に傳（かしず）き、自ら氏子として諏訪神の伝統に忠実であることに驚いた。

今年の作毛は、見た限りでは順調のようだった。もつとも見立てはスペシャリティーの見回り役からずでに報告を受けていた。

見回りの途中、湖南（こなみ）村から中州村を折れて諏訪明神を横に見た。

「大輔、来年は寅年のおんばしらだ。前の申年のときはそちはまた小さかった。各村の氏子衆が主だが、近々小町神原（ごうはら）の諏訪明神守矢神長官府庁か高部（たかべ）村の神長屋敷へ赴き、神長官の守矢惟實殿と打ち合わせをせざるまい。いや惟實殿は近頃病と聞いた。あるいはお子の實友殿になろうかの。祭の日取りと神木の見立てのことだ。いよいよ藩の出番だ。」

神長官は諏訪神社上社五官の束ねで、大祝に続く総括である。この五官とは神長官・禰宣太夫・権祝・擬祝・副祝の五神官の総称である。

神長屋敷は高部村にあり、高部の地名は古代に諏訪明神に捧げる贄鷹を狩ったという由緒ある行事に由来する。

「神長官の守矢惟實殿は、古来諏訪の守矢神の裔で、神そのものといわれるほど敬われたお方である。あだやおろそかにはできぬ。家老職をもってじきじきに伺おう。」

神話で語られるように出雲族が諏訪へ侵入した話の後に、諏訪郷への侵入で勝者となったのは出雲族であったことになっている。

すなわち縄文時代に代わる弥生時代の幕開けを象徴する神話である。

負けたとされる守矢神は出雲族の「たけみなかたの神」を、守矢神に代わって諏訪神に祀りあげることになった。

そしてその出雲神が降臨してのりうつった人神を「大祝（おおほふり）」職として表向きの諏訪神に立てたのである、

しかし古来諏訪を仕切ってきた地神の守矢神が、人民のなかで衰えることはなかった。諏訪の人民にとって守矢神は、大祝も及ばぬほど実質的にはあがめられた。

この「神長官」守矢家の系は一子相伝に徹し、七十代を超える諏訪の歴史的な准現人神ともなっていた。

「神長屋敷への使いの件、父上は近頃風邪を引きやすくなったとお見受けいたします。その役はわたくしめにお命じくいただきますよう。」

「他にもある。信濃の各藩からも お騎馬（きば）の奉納を受ける。各藩との連絡差配も肝要。」
 諏訪明神のおんばしら祭は、七年一度寅年と申年に交互に行なわれる諏訪郷の大祭である。お騎馬とは、大祭のアトラクションで、大名行列を模したイベントである。

従者が殿さまの下馬乗馬の折の草履（じょうり又はぞうり）とって奉る部分が強調されているので、「草履とり」などと呼ばれることもある。また番傘を高く放り上げて鳥居の上などを越えさせて、再び何事もなかったように、もとの従者の手に収まるなど、サーカスマがいの秘技も披露される。

「お騎馬」は、信濃全域の豪族領主から諏訪明神へ奉納されるが、その執行の順序などで争いまで起こる騒ぎとなったこともある。

その年、千野兵庫の父、三の丸家老職千野貞典は六十（むそ）路の旅を終えみまかった。

「兵庫、家老の序列のことで、思いならずも諏訪藩に火種を残したまま逝くのは心が残る。しかし命長辱多（いのち永ければまた辱多し）といえり。もはや逝かねばなるまい。兵庫、藩政の一寸先は聞じゃ。後は、頼むぞよ。」

また、古来より、吉凶は、糾（あざな）える縄のごとし、という。いいこともあれば悪きことも訪れる。どんな逆境に陥っていても、めげずに諏訪惣領家をお守りすることを旨とすべし。」

それは、黄泉から駕輿（がよ）の迎えを受けた折、父が最後に兵庫を呼んで語った遺言（いごん）

だった。

葬儀は、形式に則り厳かに執行された。江戸屋敷の藩主からも丁重なる弔意が届けられたのであった。

その日は小春日和であった。諏訪湖の小波は金色に細かく立ち座棺を送る藩士たちは、名家老だった千野貞典の偉業をしのんだ。

小阪観音院の女

千野兵庫が十六歳の秋、家老の千野貞典は逝った。

名家老と評された千野貞典が没した後、千野家の家督は兵庫に継がれた。諏訪藩の二家老制は変わることもなく、二の丸家老諏訪図書も、同格新任の三の丸家老千野兵庫もご用部屋で並んで政務を執った。

待遇は横並びだが、先職優先（年功序列）の立場で諏訪図書が上席であった。

図書は、新任の三の丸家老千野兵庫への実務上の指導もあり、老骨に鞭打つ日々であった。

「二の丸千野家老千野貞典殿が没してより、同役の兵庫を相手に日々おおせぎ（大変）なことじゃ。」

家老諏訪図書はこの状況に隠居もならず愚痴も多かった。このとき諏訪大輔は、未だ家老家部屋住

(見習い)の閑職であり、父諏訪圖書の陰にいて気楽な身だった。

今日は、大輔はめずらしくうららかな陽気に誘われるように、先日訪れた向かい湖岸の小阪観音院へ馬を進めた。

あの時心騒いだ寺娘の沙良に、もう一度逢いたいと思ったからである。

「大輔さま、ようこそおわたりくださいました。」

方丈は慇懃だった。

「通りかかったついでじゃ。茶を所望。」

方丈は庫裏へ案内して消えた。すでに以心伝心、事前の知らせのない藩要人諏訪大輔の訪問は忍びの私用である。

「沙良、しばらくどうぞ。」

「ようこそおわたりくださいました。」

沙良は、方丈とおなじセリフを述べた。いつぞや公式に訪れたとき、沙良をはじめてみて心ときめいた大輔であった。沙良は目もとパッチリのタイプで、受け口の小柄に愛しく感じた大輔だった。

今日の沙良は、雪輪の江戸小紋に半幅ものを献上に男結びできりつときめていた。

帯締めは濃い紫で体は締まって見え、着物と帯の間からちらり見える帯揚げは、薄紫のりんどう色であった。

庫裏の脇の小部屋は衣装べやであろうか。赤い実が鈴なりの手入れのないナンテンが障子に陽を受けて影をなしてゆれていた。

沙良は、上気して歯を食いしばり目を閉じていた。大輔が初めて接交（まじ）わった女であった。

大輔は、沙良の着物のすそを広げて自分の男を、沙良の女に押し付けたがすぐに果てた。

果てた途端に後悔した。前後をわかまえず我れを忘れて沙良に、男を預けた欲情に後悔したのである。

「無理をさせたな。」

大輔はわびた。沙良ははじめられたように身をひいて居住まいを正した。そして呆然と膝頭に手をついたまま、目を伏した姿勢で大輔の言葉を待った。

その後公務の間を見てはしばしば小阪観音を訪れる大輔が見られた。

大輔の父諏訪図書は、付き人から大輔の小阪観音院の方丈の娘との逢瀬の話を知ると、早速大輔の嫁とりを考えた。

話は急速に進み、江戸の旗本四百石、蜂谷成喜の娘に白羽の矢が立ち、その年のうちに成婚となったのである。

冬霞が帷（とぼり）となって湖にかかる昼、珍しい平行虹がうつすらと見えていた。袴を直しながら大輔がつぶやいた。

「嫁をとることになった。」

大輔は沙良に告げた。

「いつか聞かねばならぬお言葉と存じておりました。」

座す沙良はひぎを硬く閉めていた。大輔が今先ほど挿入し、撃ち込んだ愛の水の戻りを気にしていたのである。

「落ち着いたら、沙良も迎えたい。」

すでに一年にわたる逢瀬であった。沙良は、大輔の訪問を心待ちにするほどになっていたのである。

「いずれ、また来た折にナ。」

大輔は今日も沙良の女に十分満足させられ、心は落ち着いていた。

その日は湖波も穏やかだった。澄んだ空気の沖に漁師の丸太舟があった。

翌月の一回で、二人の逢瀬は終末を迎えることになった。そしてその後二人は生涯二度とめぐり合うことはなかったのである。

沙良は、その日大輔との接交（おめこ）の後の身支度の脇で、大輔の目を愛おしく見て言った。

「だんなさまは領民の上にたつ公人でございます。あらぬ誹（そし）りをお受けになつては身分に障ります。この沙良のことはもうお忘れくださいまし。もうこちらにはお渡りなきよう。」

奇しくも大輔は、まったく同じ意味のセリフを、これは父諏訪図書から昨日言い渡されていたのであった。

その日、大輔は、沙良と並んで観音像を礼拝するのだった。むかし大輔の系の祖の諏訪御寮人といわれた悲劇の女（むすめ）も、悲の底から礼拝したであろう十一面観音菩薩である。

振り返り仰ぐ小阪観音院の坂上に、泣き濡れて袖を噛みひつそりと馬上の大輔を見送る沙良の姿があった。

「沙良。すまぬ。」

そつとつぶやく大輔に、湖畔からの微風は光っていた。

10年の後

そして諏訪郷に10年の年が流れた。だれもが無意識のうちにも、十年の歳月の重みを受け止めていた。

諏訪藩内の二の丸と三の丸の確執は、依然として果てるあてもなく続いていた。その膠着状態が続くこと10年、城内での権力争いを目の前に見ながら育ってきた次代の両派のリーダーが確立した。

台頭したリーダーは、二の丸、三の丸でそれぞれたくましく成長した22歳の二の丸の諏訪大輔と、25歳になった三の丸の千野兵庫である。

同じ池の鯉が色模様を変えて成熟したのである。お互いに気心も知れた竹馬の友だったが、思いならずも大輔と兵庫は二の丸派と三の丸派の双頭の主役となり、やがて相克（そうこく）相食む諷訪藩のお家騒動が、ますます峻烈に展開していくのである。

両人にとつては、二人がお互いを天敵と運命つけられるゆえんは重々理解していたが、さらに戸惑いながら実質的にも渦中のリーダーとなつていった。

諷訪藩の重役の議の席では、家老諷訪図書の対面に同じ家老として歳は若いが同格待遇の千野兵庫が座すのである。

諷訪大輔は依然として部屋住（見習い）家老であり、公式の場ではほとんど発言権はない。

この両家老は千二百石扶持で同格である。わずかに違いは藩主が便宜的に命じた、「先職優先」つまり年功序列というお題目だけにすぎなかった。したがつて両家老の意見が異なる場合、混沌として事案が決定に至らず事態の收拾がつかないのであった。

これが諷訪藩百年の大計の誤算となつたが、もともとは藩主の人事の差配のミスによるものであった。

仮に改めて両者の石高に差をつけ混乱を是正しようとすれば、それ自体が再びの騒ぎとならう。またミスを追及すれば、現状を裁断した藩主を貶（おとし）める由々しき事態となる。

一人か二人の処分どころか、誰か重役が一人切腹して果てねばならぬような騒ぎとならう。藩主のうっかり人事ミスではあつても、家臣のだれも文句は言えないまさに「綸言（天子の言）汗のごと

し」なのである。

これらの確執は、発生後10年を経ても、領民とは全く関係ないところで行なわれており、またいずれの側からも天下に示す大義もない無益なものであった。

災害復興新役所

明和元年（1764年）とその翌年、諏訪藩は藩政始まって以来の大規模な満水（洪水）にみまわれた。宮川と上川、六斗川があふれ諏訪の盆地は泥海となってしまったのである。

山からの急流は山崩れを誘発して、至るところに土石流を流し、沢筋の各所に見るも無残な爪あとを残したのである。また人畜埋没や家屋倒壊など被害も甚大であった。

それまでは藩役人による新田開発や新田のつぶしあいや、一般の作毛の指導の不統一は日常茶飯事で、あたかもゲームのようにもめていた。

しかし、このような自然災害が、天からの懲罰のように下されて非常時となった今、人的な争いに現（うつつ）をぬかしている場合ではなくなったのである。当然藩をあげて、災害の復旧に全力を傾注すべきときであった。

然るにこの期（こ）に及んでも城内の派閥抗争は、今やるべき災害復旧の行政を見失わせ、藩政は、何をどこから手をつけていいかも分らないほど弱体化していた。

目前の大満水で、田も畑も流されてしまっているにもかかわらず、藩は効果的な施策が打ち出せなかったのである。

各所の堤防は決壊して泥水が噴出し、左や右の堤防を失った大川は、その流域を田畑の方まで広げて侵食し、我が物顔で低地にむけ、複数の新川を掘り込んで流れている惨状である。

昨日まで見事に実っていた収穫前の金色の稲穂は、無残にも泥をかぶって流れに埋没して倒れ、その上を上流からの倒木が転がってくるという、見る影もない昨日までの穀倉地帯の惨状だった。

百姓たちは、農具を持って改修作業に集まってきたが、あまりのことになす術（すべ）もないまま、呆然と荒れ果てた河床に立つばかりだった。そして幾週間も無為な時間だけが経過していったのである。

緊急事態であるにもかかわらず藩は、二の丸の家老と三の丸の家老が同格なので、指揮命令の権限がこんがらがって、効果的な行政対応がとれないのである。

「宮川と上川の満水の状況は、左（さ）のとおりである。千野殿、貴殿の責においてこれを理（おさ）むべし。」

家老諏訪図書が絵図を扇でしめした。

「これはしたり、諏訪殿。被害は広範囲である。川筋で分担するか、流域ごとに工区を設定し、これを分割し復旧に当たるのが至当である。」

兵庫は反論した。

「しかしそれでは資材の調達が二様となり、緊急の工事への対応が出来申すさず。」
諏訪藩は、緊急に現場事務所を設けなければならないという総論にはいずれも異議がないものの、各論となると誰が担当し予算はどうするかも決まらなかった。

やつと三の丸が復興の担当と決まり、三の丸家老の千野兵庫を司令塔とする復興役所が立ち上げられた。

当の千野兵庫は押し着せの復興役所への出仕を不承不承受諾したが、城内から追い出されたようである。面白くない。

「土木奉行まがいの仕事など、己のやる役ではない。」

との思いは、先年娶った気位（きぐらい）の高い妻の眉根の影に由来した。

「そんな汚い仕事をあなたはやるのですか。同役の諏訪大輔殿が何ゆえお出ましあそばされずや。」
何事にも謹厳実直な性質の兵庫は、妻の「女の正論」をかわしきれないのだった。

それゆえに大輔を引き合いにだす過剰な妻の侮りと、自らも納得しない土木工事役との現実をめげたのである。

司令塔が私情におぼれクサツている有様だから、中間以下の役人もモラル（志気）に欠け、実に懈怠（無気力）な新役所ができてしまった。

復旧現場の混乱

従来の諏訪藩の災害復旧のセオリーでは、災害復旧はすべて、村ごとの自己負担と責任でやらせていた。

もともと藩がやる従来型の災害復旧事業をみると、被害状況の把握とお助け米の準備、災害見舞金の支給ランクに極難、中難などの評価をつける査定作業程度を専権している程度に過ぎなかった。そして実際の復旧施工は、各村の共同作業で済ませていたのである。

しかし、今回のような激甚災害では、藩をあげての復旧のプロジェクトが必須なのは論を待たない。このように大掛かりの堤防修復や、泥濘（でいねい）の田畑、道路の復旧は、藩の普請奉行の配下で行なうべきものである。今回の激甚被災は、いままでの各村の共同作業で済ませる規模をはるかの超えていたのである。

それゆえ過去に例がないほどの大規模な災害復旧工事に、城内ではの喧々譁々の評議が踊ったのであった。そして彼我その御役の押し付け合いの末に、やっと復旧新役所が立ちあがった。

この大災害復興新役所の庁舎は、城から遠い六斗川の湖河口脇に置かれた。

司令塔の千野兵庫は役目柄、城を離れて日々新役所へ出仕したが、兵庫もびつくりするほど役人としての動きがにぶかった。

河川の堤防は決壊してそれぞれの田は、境界も分らない泥の海である。決壊箇所から田のいたると

ころへ新川が掘り込まれ、そこは流木やゴミのほか大石小石が散乱しているのであった。

村長たちも協力を申し出て、人足の招集は村長の回状で比較的スムーズだった。回状には、百姓ども復旧工事に招集されるについては、手弁当りで、くわ、鋤簾（じょれん）等の農具持参で、指定の日程に指定の現場に集結するよう達せられていた。

しかし百姓は集まってみたものの、どこからどのように手をつけたらいいのかも分らず、右往左往するばかりであった。藩役人は、

「お役人様、お手配を。」

と、村長から作業の指示を催促され、やっと

「さて、それは身共（みども）私（わが）らの仕事か。」

と、顔を見合わせるのであった。復興の凶面もなく、資材の手配もなく、人足だけ集めてもやりようを知らない烏合の衆であった。

藩では、被災区域をいくつかの工区に分けて、村別に工区を指定することになった。工区によつて規模や難易度が異なるので、一目で工事量と手間暇の軽重が予測できるのである。

そこで各村は、少しでも楽な工区の指定を期待したが、それは工区の指定を差配する役人への賄（まいない）が飛び交うことともなっていた。

役人はいえ、いづれの階級の役人も遠慮なく収賄し、事あることに賂（まいない）行政を生み、やがて上から下まで贈収賄勝手の汚れきった役所になってしまった。

このようなモラル（士気）の欠如した、懈怠な役人が寄り集まったことにより、災害復旧工事は滞るばかりであった。

決壊した堤防の修復が完了せぬ間に、次の満水でまた決壊するなどのことが頻繁に起こったのである。責任感の欠如した藩役人には、己が蓄財以外に興味もないようだった。領民は、日々緊張感のない無気力な役人の姿を見るにつけ失望のきわみであった。

自然災害は人の都合を待つてはくれず、さらに翌年には遅霜（おそじも）にみまわれ農作物は全滅し、領民は踏んだり蹴つたりの死活状況におとしいれられたのであった。

その翌々年から3年連続のさらなる満水は、領民に塗炭の苦しみをもたらした。

情け容赦なく襲ってきた次の自然災害は、早魃（かんばつ）であった。こんどは皮肉にも宮川と上川は、河床を見せるほどカラカラに干上がったのである。

このように明和元年に続く毎年の変地異は、明和7年までの間、断続して諏訪領を襲ったのである。

この非常事態にあたって、藩がとったひとつ覚えの施策は、件（くだん）の災害復興新役所の創設のほかに、復興運上（復興税）の増額課税、消費の抑制指導、生活改善指導などで、領民にとっては負担の多い人災ばかりであった。

責任者でトップの千野兵庫も、これでよいと思っていたわけではなかった。復興当局の責任者として具体的な結果を出さねばならないし、受けるそのプレッシャーは極限まで達していた。

兵庫の性格は抜刀隊や切り込み隊のような爆発型ではない。どうにもならないらだちは千野兵庫の腹の中で煮えくりかえっていた。

一方屋敷では、気位（きぐらい）の高い妻の皮肉にも、じつと耐えなければならぬ兵庫は、公私ともに四面楚歌であった。

領民の側からは、運上（税）金増額や続く賦役など、やらずぼったくりの無為無策の新役所に対して不満が極限に達していた。このままいけば強訴なども予想される一触即発の危機が懸念された。

領民の中には、座して死を待つより公儀へ直訴しようとする動きもみられたのである。

トップの兵庫が恐れたのは、この体（てい）たらくをいいことに、二の丸の諏訪大輔一派が糾弾を目論む所業に出ることであった。竹馬の友の大輔であつても今は敵方の領袖である。

流域を見回る総奉行の千野兵庫は、領民の冷やかな目にさらされながら、罵声こそあびせられないものの、心も顔も引きつっていた。

諏訪大輔登場

千野兵庫の率いる災害復興新役所の現場の醜聞は、すでに二の丸の部屋住（見習い）家老職の諏訪大輔のもとへ逐一報告されていた。

「あいつら、3年もかかって決壊した堤防ひとつ修復できん。何をやっておるか。」

災害復興新役所の体たらくを見聞きする都度、諏訪大輔の正義感がさわぐのだった。

「千野兵庫の災害復興新役所の体たらくは見かねます。私だったらそんな小恥ずかしい実のない悠長な復旧工事はしません。」

大輔は父諏訪図書に、暗に担当者の交代を提案してみた。

「言うな大輔。わが二の丸諏訪家があのようなとらえどころのない災害復旧工事を背負ってはならぬ。兵庫にやらせておけ。案ずるな。いづれ民の力をもつて曲がりなりにも片つくはずじゃ。」

図書は、百姓の底力を知っていた。素人の懈怠（怠惰）な役人どもが、現場であれこれ頓珍漢な差配をしたところで、復旧工事がうまくいくわけがない。現に現場は四苦八苦しているではないか。

実際に工事にかかわる人足は、役人ではなく賦役で駆りだされた百姓である。百姓のパワーです。土仕事は信頼できる。彼らは土のプロであつて、その力は役人などより格段に信頼できる。

「大輔、みておれ。時間はかかるうが、藩の災害復興役所は非力でも、現場の百姓の力で復興は必ず成し遂げられる。」

二の丸家老の諏訪図書は言い切った。一方で諏訪図書は、復旧工事の責任者の三の丸千野兵庫の越度（失敗）を密かに期待し、千野兵庫がこの復旧事業の重荷に耐えかねて、自滅に陥るのを念じているようにみえた。

諏訪藩江戸屋敷

藩主諏訪忠厚は参勤交代で諏訪藩江戸屋敷にあった。諏訪高嶋藩江戸屋敷は、麴町、日本橋、神田、市ヶ谷など時代によりその所を変えた。

この時代には上屋敷が銀座に、中屋敷が港区（現）に、下屋敷が渋谷区（現）にあり、一千坪から一万坪もある広い敷地だった。

諏訪藩江戸屋敷の主たる任務は、藩主の世話と、江戸幕府とのつなぎ役である。

ときおり江戸屋敷用人を通じて国許の藩政について形式的な報告があるが、藩主は聞き置く程度のことであつた。

諏訪藩江戸屋敷は、用人渡辺三行が仕切っていたが、江戸の責任者としての用人役の主たる仕事は情報収集である。

国許の状況把握はもちろん、江戸幕府、親藩の意向を把握するとともに、諏訪藩の安寧のためできることは何でもしなければならない。

また諏訪郷からの出稼ぎの領民の保護・管理も任務の一つであつた。諏訪郷からの出稼ぎ人は、現今の海外総領事館への「在留届」提出さながらの「お届け」を義務つけられていたのである。

記載事項としては、身分事項のほかに奉公先、連絡先、宿泊先、居所等であつた。

一方、江戸の藩邸に仕える藩士は、江戸常番と呼ばれ、まれに夫婦同伴もみられたが、多くは単身赴任で、半年又は数ヶ月の交代で諏訪と江戸とを行き来するのであつた。

諏訪藩江戸上屋敷の用人、渡辺三行は多忙だった。

「このところ国許からの情報に齟齬がおおいのう。」

二の丸と三の丸が、同一の事案について異なった情報と意見を持参するからである。

国許の大災害の復旧事業にあつても、二の丸家老と三の丸家老が別々の報告を送ってきているのであつた。

同じ諏訪藩から同じ災害復旧事業に、片や復旧は順調、此方復旧は難渋との報告では事業執行の評価を断じかね、藩主への報告に迷うのであつた。

しかしそこはよくしたもので、藩主の心安らかなる日々の継続を自らの第一の役目と考えれば、たとえ国許で憂慮すべき事項があるにしても、国許安寧、静謐と報告すればこと足りる。

いずれにしても国許は、不自然な組織体制がたたり、諏訪藩の指揮命令系統は狂っているのである。

互いに建前を主張しているだけで、どちらにも大義が見受けられない。

「小賢しくも、武士の一分などとぬかしおる。いずれも自己満足のチャンチャラおかしい武士道である。」

渡辺はそう思っていた。

渡辺は、書面で送られて来る諏訪藩の実勢報告を仔細に点検はしたが、それら情報は渡辺により薄められ、アレンジされて大殿に報告されるのであつた。

諏訪藩主帰郷

明和八年、藩主忠厚は、亡父の法事のため諏訪へお国入りすることとなった。発心は、正室お政の方が、

「大殿は、信仰心がおありか。日々、祖に感謝申し上げ、時には墓参もあつて然るべし。」
と、日々、懈怠に見える藩主の忠厚に冷たい目を向けたことにある。数格上の阿部家より腰入れしたお政の方は、夫君に傳（かしず）くような奥方ではなかった。したがって諏訪藩主といえども奥方には一目置かねばならなかった。

江戸屋敷用人渡辺三行は、諏訪藩のこの重要な公式行事に際して諏訪まで随行し、噂にだけ聞き面識のない二の丸諏訪大輔と、三の丸千野兵庫に会ってみようと思つた。

仄聞（そくぶん）漏れ承る）するに、国許の双頭の一方の三の丸千野兵庫は謹厳実直、片や二の丸諏訪大輔は豪放磊落と聞こえていた。

渡辺三行はいずれかを取り込んで、己が権力を諏訪藩の全権に拡大しようと思つた。目論む野心家であつた。

久々の藩主のお国入りで、諏訪郷全体が謹厳な雰囲気に入れられ、藩のお役にある者は日々緊張するのであつた。

当時、幕府から甲州街道を参勤交代道に指定されていたのは、信濃国では諏訪高島藩、伊那高遠藩、飯田藩の三藩だけで、他の各藩は中山道（なかせんどう）が指定されていた。

参勤交代とは、幕府が全国の大名に課した、隔年1回の藩主江戸詰め義務である。入れ替わりに藩主の正室が江戸詰めとなった。

500人から2000人の行列には、5千万円から2億円にも上る経費を要し、藩財政を圧迫したが、これも幕府の各藩の力を削（そ）ぐ政策の一つであった。

甲州街道の場合、大部分は地元甲斐国に属しているが、もともと甲州街道は、江戸と甲府を結ぶものだった。以遠は後からの延長路である。

だから延長部分は、信州側からは甲州街道と呼ぶが、甲州側からは、信州街道と呼ぶ性格の街道である。

甲斐は武田家滅亡後、徳川の第四家ともいえる徳川氏が支配した。

戦略的には甲斐国は、江戸に不都合あるときの避難地、すなわち「第二江戸」構想をもって天領とされていたのである。時代が下ると、幕府に甲府勤番などという職制を作り、上司に逆意（反抗）するような幕府の問題官僚の、山流し（「島流し」のもじり）の地として使われたりした。

千野兵庫の時代より少し前の享保9年から、川越の柳沢吉保が入封した地となっていたが、老中柳沢吉保は幕閣だから、ふだんから江戸詰めで参勤交代などはなかった。

南信の三藩のみが参勤交代で、至近の甲州街道を指定されたが、一般に甲州街道は、アップダウン

が激しいなど悪路だったし難所が多かったこと。また、宿場も貧弱、周辺の物価も高いなどの悪評判で敬遠された。

諏訪藩主が、祖の墓参に国入りした諏訪郷への甲州街道筋では、途中の笹子川が頻繁に氾濫して、しばしば通行不能になるなど難儀な旅であった。

この笹子川あたりの旧甲州街道は、人造湖の相模湖建設に伴って、今はその湖底に沈んでいる。

信濃境の蔦木（つたき）宿まで、殿様がご到着になったと早馬の通知を承るころから、高鳴城内は落ち着きのない日々が訪れた。蔦木宿は城からほぼ一日の里程である。

明日には、藩主が諏訪へ国入りとなるのである。

随行の諏訪藩江戸屋敷用人渡辺は、藩主に先んじて一日早く来城した。打ち合わせのためである。

ところがやんぬるかな国家老の諏訪図書は、病の床にあり起き上がることもできないありさまであった。

江戸屋敷用人渡辺は、家老諏訪図書の代理として迎えた諏訪大輔と、藩主在郷中の対応にかかる打ち合わせをするようになった。渡辺三行と諏訪大輔は、高鳴城の迎賓の間で相対した。

「ご用人の渡辺さま、大殿の道中つつがなきこと大慶に存じます。また、ご用人さまには遠路大儀でございました。」

「これは、諏訪大輔殿。お父上の病のことお見舞い申す。拙者、渡辺三行。江戸家老心得を拝命す

る用人である。以後、お見知り置き願う。日来（日頃）、国許（くにもと）の守りご苦勞に存ずる。」

そして、一時（いっとき）の辞儀の後、

「ご用人様。法事にあたり、遺憾ながら二の丸家老諏訪図書が、折あしく病の床におり参列できない仕儀となりました。ついては、わたくし諏訪大輔に代理として首座での参列の栄賜りますれば幸甚。」

大輔は臆面なく渡辺三行に申し出た。

この公式行事参列の序列は、藩士の家格の序列を公に示す場であり、また藩士本人の勤務評定の場でもある。

大輔の主張は、二の丸家老は三の丸家老と石高では同格だが、同時に大殿から下されている「先職優先」の断を根拠としたものである。

「大輔殿。貴殿はいまだ家老職にあらず。お父上の家老諏訪図書殿の代理とはいえども部屋住（見習い）の身である。然るにもかかわらず大殿の奉る法事の席で首座という仕儀は、城内の重役諸侯の理解が得られる信があり申すや。」

「わかりませぬ。」

大輔は率直に応えた。この微妙な会話はなぜか江戸屋敷用人である渡辺三行の心に響くものがあつた。通らぬ理屈を分つていながら、悪びれず申告できる度量に好感も感じられた。

「この男、大きい。」

世間の常識では、藩主の法事にあたり焼香の順序や占める座の序列は、同格の家老が複数いれば、先職家老すなわち年功序列に従うのが普通であり、先職の家老諏訪図書が勤めることになる。

しかるに先職家老諏訪図書に事故ある場合は、年功第二席の家老職の千野兵庫が、職位の順に従って首座を勤めるべきであろう。

大輔の申し出は先職家老の息子であることを理由に、自らの立場も分際もわきまえないまま、現職の家老千野兵庫を差し置こうとする挑戦である。

江戸屋敷用人渡辺は、明日もう一方の現職家老の千野兵庫の意見を聞いたうえで、大殿の裁断を仰ぐつもりであった。

「やせても枯れても自分は現職家老である。この際首座を承るは家老のわたくし以外にはあり申さず。未だ若年の見習い家老諏訪大輔の、後塵を拝するのは潔（いざぎ）良しとせず。」

千野兵庫は応えた。正当な主張である。

これを聞いた藩主諏訪忠厚は裁定できなかつた。判断の基準を持ち合わせない優柔不断のトップであった。あまつさえ、

「そちはどう思う。」

と、側用人渡辺三行に振る始末だった。

渡辺は得たりとばかり、法事の首座には家老の諏訪図書の一子諏訪大輔を、代理に充てるが至当と

推薦したのだった。

諏訪大輔回状

藩主の法事以来、風は大輔のほうへ吹いていた。法事を契機に諏訪大輔のステージが整ったのであった。

大輔は、ここぞとばかり、

「宮川、上川の大水の被害で百姓どもから急訴ありと伝え聞く。然るにすでに三年を経、未だ復旧の兆しなしは、藩の威光にも由々しき障りあるものと遺憾なり。

以下その故をつまびらかにせん。責任者三の丸家老の千野兵庫に、復旧現場の工事差配にその資質を欠く仕儀あり。さらに上級役人は災害復旧事業への義務感も危機感も欠如のままと指摘されおり候。それ故上下役人ども懈怠にて働かず。あまつさえ民に賂（まいない）を求むなど、狡猾悪行口にも出せぬ悪辣の極みなり。この上は災害復旧新役所務所を早急に解体し、不埒（ふらち）な役人どもを責任者ともども懲戒すべし。さすれば悪の温床は解消し、領民の怨嗟も収まるべく候。以上相成然。」

と、公然と千野兵庫を指弾したのである。

さらに大輔は、千野兵庫の追い落としの証拠集めのため、隠密を放って諏訪のほうぼうの怨嗟の声

を集めた。歴史の残る「大輔回状」である。

また大輔は直接各村へ視察に出向き領民の声を聞いた。

諏訪大輔はその日は、原山さま（はらやま＝原山祭）に乗じて地方廻りを企図した。

諏訪神社に属する広大なお狩場は、八ヶ岳一帯にありここを古来、御射（みさ）山と称していた。

その源（もと）は、縄文人の狩猟生活のフィールドであったことに由来する。ここにいくつかの社が点在していた。

八月の諏訪は日差しは強いが木陰は実に涼しい。大輔は幾度も大木の下で馬を止めて水を飲んだ。

お狩場への道は山田を分けて登る坂であり、道は八ヶ岳へ向かってまっすぐに続いていた。すでに田には穂が出て、今年の作毛は並のようだった。

大輔の一行は、ふもとの原山地区、中新田、払沢（はらいざわ）、富士見村の作毛を見ながら、田で稗（ひえ）ぬきをする百姓どもをかわして登っていくのだった。

このあたりの田は、高度に沿った棚田を形成している。田の下側は押しなべて土手となっており「耕して天に至る」ほど極端ではないが、百姓には日々耕地通いが難儀である。

このあたりは通称「山田」と呼ばれ、反収量も里の田に比べ劣るのが普通である。かける水がより冷たい所為（せい）であろう。

見やれば、山側には山裾に張り付いたような粗末な百姓家が見え、白い幹の胡桃（くるみ）、木肌

あざやかな唐桃（からもも＝杏）、真つ黒な幹の渋（柿の原種）の大木が、みねぞ（いちい）の生垣に周りを覆われるように立っていた。

「ようこそ御射山社へおいでくださいました。」

諏訪明神の神長官守矢實友がねぎらった。

「守矢殿、お世話をかける。」

諏訪明神上社の神事は数えれば年に75度もある。このうち御射山（みさやま）祭は4度あり、お狩場方面で行なわれる。すべて諏訪明神の守矢神長官の差配で執行される神事であった。いずれも諏訪郷に、縄文の時代から伝わる地神への饗応と呪いである。

獲物の多寡は縄文人の死活問題であり、神の恵みに生身の生贄まで捧げる壮烈な儀式として伝承されていた。

他に、皐月の押立御狩、水無月の御作田（みさくた）神事、文月の御射山御狩、長月の秋尾御狩も4度ある。

伊勢の大神宮は、万世一系の天皇を讃えて編纂された記紀の神話を出典とした造営物であり、権威で飾られた華麗な神神である。

しかし諏訪神は縄文人自身が、狩猟生活から体得した古代神である。縄文人や弥生人という人種

は、人間に進化しきった地上の生物の畜であった。

縄文の諏訪神という地神は、まぎれもなく縄文人が互いに手に手をとって生命維持を賭した、血なまぐさい生活の波動に寄り添う神であった。

鹿などの獲物の首を歓喜のうちに斬りとり、その生き血を数人の家族で啜（すす）りあったのである。その心温まる民の土くさい生活態様を、数千年を経た今これらの神事で見ることが出来る。

この地神は、みしゃぐち様と呼ばれ、自然界の樹、笹、石、へご降臨あそばされた精霊様を祭政体に見立てて営まれる。

諏訪大社の五官が並んで諏訪大輔を迎えた。御幣をもった守矢神長官が前に進み、

「今日は、原山さまのお祭りでございます。諏訪大神と国常立（くにとこたち）尊を設えて祀ります。」

と、恭しく辞を述べた。

祭は、御射山社を中心に行なわれ、地元の御射山神戸（こうど）村民が伝統的に専属して神事のこ用を拝命している。

神長官守矢實友が述べた「はらやまさま」とは、この御射山（みさやま）社とお狩場が、諏訪郷の原山地区にあることから通称された祭である。

そして御神の域を万民に解放し、呼び方にあっても誰にも分り易い、そしてより言いやすい「はら

やまさま」と難語を碎き語り、御神の加護を万民に散華しようとして試みる神職の心温まる配慮であった。

時代が下つてからは、庶民のため語呂合わせで原山を「腹」に見立て、腹痛の快癒の利益を標榜しているなどはその現われである。

また、2歳児の厄除けとして、うなぎやどじょうの放流を奉納し、これを放生会（ほうじょうえ）と称し祭礼のすそを広げている。

その脇には、すすきで壁まで葺いた穗屋があり、神職が泊り込んで神に饗応するのである。

神事は動態的である。いくつかの社がお旅所となつた後、奥宮の大四御慮社（おおよつみほしや）での大四御庵の神事が行なわれるのである。

この最後の神事では神への饗応と、山霊神昇神の儀で、立木へ向かつて矢を射るのである。

大輔は、めまぐるしい原山さまの祭事を見聞し、領民の敬虔な信仰に胸を打たれるのだった。

さらに大輔は続いて、安国寺門前村、高部村、中河原村、新井村、南大塩村、鋳物師屋（いもじや）村、玉川村、芹ヶ沢村、栗生（くりゆう）村、平野（現岡谷）村、神宮寺（じぐじ）村、ほか山浦方面の金沢村などの村長から、災害復興新役所が及ぼした領民難渋の開陳を受けた。

その結果をみると、千野兵庫をトップとする災害復興新役所への不満はおびた。だしものだった。大輔は、これらの事前調査の結果をかざして、二の丸千野兵庫の糾弾に打って出る決意を固めた。

「有賀宇左衛門。大目付として災害復興新役所の業務、經理ほかの監査に当たるべし。」
 諏訪大輔は、正式に二の丸家老職代理として、藩の大目付役に災害復興新役所の事業監査を命じたのであった。

命を受けた大目付役は各村長あてに、災害復興新役所から難渋を受けた事実があれば、その条項を文書をもって上申するよう依命で通達した。

この「諏訪大輔回状」は、諏訪郷の村々の一部に今も残されている。

「明和七庚寅年中沢村 御回状之写 十二月 七兵衛」と書かれた表紙の史料では、「諸役人無尽之儀、役人が上下ともその向きの威をかりて諸般無理押しするなど百姓町人難渋と仄聞す。藩役人の不正等は直ちに大目付に申し出よ。隠すと落ち度とみなす。村長は、難渋の内訳を簡条書きし封印のまま諏訪大輔殿まで大目付経由で提出すべし。」というものであった。

歴史に残っている諏訪大輔あての「難渋書（回答）」の下書きは、明和八年正月菊澤新田村の難渋簡条書、同年同月下古田村の難渋口上書、安永四年閏十二月笹原新田村の諏訪大輔へ口上書、安永六年三月北大塩村諏訪大輔へ申上、など多数ある。

そして「右奉願上候通ニ御厚情御慈悲ニ被仰付被下置候八重々難有仕合ニ奉存候 名主、年寄、百姓総代、」とべられていた。

明和一件

そこにはおびただしい災害復興新役所への不満が、したためられて回答されていたのである。

やがて基礎資料にあたる監査報告書が、大輔のもとに上がってきたが、災害復興新役所による、実にあくどい領民弾圧の実態が明らかになった。

諏訪藩大目付役の有賀宇左衛門は、口聞（訊問）にあたり、役目柄と断り三の丸家老職千野兵庫と相対して口聞に及んだ。罪科取調べである。

「千野家老殿に借門（しゃもん＝質疑）す。数年にわたる復興運上（税）増額、冥加金の増額、また被災民への儉約令の施行の仕儀にお上（かみ）の疑義あり、それらへの貴職の存念はいかに。」

兵庫は毅然として応じた。

「それは必要悪である。では逆に大目付役に問い申そう。この未曾有の激甚災害復旧の財源を、いずれから調達せよというのか。」

兵庫はしたたかに問い返した。ここは強気に出なければ、あることないこといのように公式に書かれるであろう。大目付は、家老職の兵庫の開き直りとその剣幕にめげたようだった。

「これはしたり、藩大目付（めつけ）の役は監査の執行にあり。お言葉の後段で問われるような疑には、お応えする立場にあらず。」

「ならば申そう。未曾有のこの災害における、人心を含む復旧の全権限は当方の職権の範囲である。誰からであろうと指弾される余地はござ候わす。」

兵庫はなおも論をたたみかけ、大目付の口聞が総論から細目（さいもく）に及ぶ前に突き放した。

しかし、一旦煽（あお）られて火がついた領民側は、各村長（むらおき）を訴人にたてて、藩に對し挙（こぞ）って災害復興新役所の廃止と、責任者千野兵庫以下各級藩役人の更迭と懲戒の強訴に及んできたのであった。

藩としては一揆まがいの領民の動きは由々しきことであり、何らかの誠意を示して、領民の沈静化を図る必要に迫られた。

この一連の流れは、煽（あお）りたてた大輔の思惑に沿った行方を示していた。

「してやったり。」

とばかり、家老代行の諏訪大輔は、職権をもって諏訪藩江戸屋敷へ出張し、用人渡辺三行の助言を得つつ、藩主に災害復興新役所の責任者千野兵庫以下の罪状を報告したのである。

江戸屋敷用人の渡辺三行とは、諏訪での藩主の法事以来、すでに気心を通じる仲であったので話は早かった。これにより災害復興新役所の廃止と、かかわった千野兵庫以下25名が断罪されたのであった。

これを諏訪藩の歴史では「明和一件」と称している。

また巷間「信州仙人床（しんしゅうねざめのとこ）」などの、お家騒動の娯楽本として好事家（こゝろずか）むけに出版された。もちろん藩名や個人名はすべて変えられ、いづれから出されたものかを隠し、版木によらず写本にしたものである。

皮肉なもので千野兵庫が失脚した後は、気象、地象とも日々好日に転じ、諏訪盆地を流れ下る宮川にも上川にも洪水はなく、両大川には魚影の色も濃い平和な日が訪れていた。

それは幼い日、大輔とともに川を漁（あさ）り、とれたハヤを岸边であつあつの串刺しにして、二人でおぼったあの日と同じ穏やかな郷の諏訪景色だった。

数年にわたる宮川と上川の氾濫の復旧は、動員された百姓自身の手で立派に復旧し、後代へ民力をつないだのである。

しかしこれら災害復旧工事に当たって、数年前に華々しく創設した災害復興新役所は、恥ずかしながら当事者能力を欠く役立たずのまま廃止されたのである。

いま被災地の田には、黄金の稲が陽に光り、高い美空はエメラルド色に光っていた。

今年には豊作の兆しである。そして民は、陽光をきらめかせて静かに流れる大川の瀬を眺めるにつけ、悪夢とともに去っていった三の丸家老の千野兵庫が、再び藩政に復権せぬことを念じたのである。

三の丸千野兵庫の失脚

明和一件によって三の丸次席家老職千野兵庫は、お役取あげで逼塞（ひっそく）の身となった。

一方、二の丸家老職諏訪大輔には晴れて出番が訪れた。諏訪大輔は千野兵庫を押しつけて、諏訪の藩政の表舞台に華々しくデビューすることになったのである。

「ま、お手並み拝見。」

無冠務役に左遷された千野兵庫は、この逆境に動じることなくこの先数年の行方を見通していた。

「若くて正義感だけの大輔に、藩の行政の差配はできない。豪放磊落といわれる諏訪大輔だが言動に緻密さが無い。それは必ず自らへの仇（あだ）となろうし、いずれゆきつまつて藩政で馬脚をあらわす。」

なにしろ兵庫は大輔の竹馬の友である。大輔の考えていることなど凡（およ）そお見通しだし、長所も欠点もわかっているのである。兵庫は側近の小平誠之助にそのようにうそぶいた。

私生活では千野兵庫の妻はすでに兵庫のもとから去っていた。

数年の夫の災害復興にかかる現場の仕事を、汚れたうだつの上からぬ低級の仕事と断じ、自らはファーストレディーを気取って、大奥まがいの優雅な御殿暮らしをイメージしていた気位の高い妻であった。

その日妻は、渋く細かい青海波の江戸小紋を着衣し、兵庫の前でキツとした面持ちで柳眉をつりあげ、

「旦那様、里へ帰らせていただきとうございます。」

抑揚のない声で三つ指を突いた。チラッと見えた帯揚げの薄桃色に変に印象的であった。妻は、夫

が左遷されたその屈辱に耐え切れず、離縁を申し出たのである。

「好きにせよ。」

千野兵庫は、妻の離縁の要請を二つ返事で受容した。そして、

「去るものは追うまい。」

と、嘯（うそぶ）いたのであった。千野兵庫はこの機とばかり日々悠々自適で読書三昧にふけた。

このように三の丸家老千野兵庫は、諏訪大輔によつて表舞台からひきずり下されたのであった。

天道上人

家老職の御取上げと逼塞（昼間閉門）の裁許（判決）を発令された千野兵庫であつたが、秋の彼岸の入りには墓参を許された。政権からは弾かれたものの、逼塞は蟄居閉門と違つて軽い刑なのである。

「千野殿は、お役お取り上げと逼塞とされたと聞いたが息災かのう。」

菩提寺の温泉寺の天道上人は訪れた兵庫に、本堂で急須（きびしよ）の茶を振舞つた。温泉寺の本堂はなんと、むかしの諏訪藩主が設（しつら）えた能楽堂を転用したものである。

ここには過去には御能御覽所、家老妻子拝見所、家中妻子拝見所なども設えられていた。

「あまた不徳の致すところにて、このような仕儀に相成りましてございます。今は捨仏（世捨て人）の日々にてござる。」

「いやいや、人士の浮き沈みの色模様は時の運じゃ。ま、横難（おうなん＝災難）のうちじゃ。藩主忠厚殿には、折をみておぬしの潔白をお伝たえしよう。」

天道上人は、先代の藩主諏訪忠林の学友であつた。しかし兵庫は、藩主が天道上人のとりなしに應じることはないだろうと思つた。それは藩政の実権が藩主にはないからである。

ところで天道上人が説く「学者有四失（学にある者に四ツの過失ある）」は、諏訪藩の学問の方法

の戒めとなつてゐる。

その四つとは、1 濫読の誤 2 少読の誤 3 無目的の誤 4 慢心の誤 である。

この四つの誤りを正し、人の善性を長発せしめること。すなわち「長善」こそ教育の原点である。

諏訪藩の近過去数代の藩主は政治バカだったが学問には優れていた。振り返れば、先代の藩主諏訪忠林は詩文書画に秀で「鷺湖（がこ＝諏訪湖）詩稿」を著わすなど大名の域を超える学者・芸術家であつたし、先々代の藩主の諏訪忠虎は俳句をよくし、俳号ももつてする有名人であつた。

またさらに先々代の前の藩主の諏訪忠晴にあつては、頼山陽の「日本外史」を紛（まが）うほど充実した「本朝武林伝」を著わした。

総じて諏訪藩主の系列は、政治より学問にのめりこんだことから、藩政には目が向かなかつた。その結果は、藩内の権力争いが噴出する原因となつていったのである。

しかしそれにより、藩政をないがしろにしたトップの報いとして、抜き差しならないお家騒動を起すことになつたのである。

兵庫は失脚しても、その境遇にめげず読書三昧で七年の無冠を平然と過ごせるという人徳の源泉は、諏訪藩主を源とする学問好みの藩内の風潮に由来した。

「兵庫殿、拙僧はご先代の千野貞典殿ともよき輩（ともがら）であつた。お父上が名家老とうたわれた資質の源泉は学びの心じゃつた。おぬしもこの境遇にめげず、捨仏（世捨て人）などと言わずに、いまを好機ととらえて学びなされ。拙僧はおぬしの味方である。」

「ありがたいお言葉にございます。」

秋の日に、庭の黄色のボサ菊風情の色香が映えた。

寺脇にはしだれ桜の枝が、風に揺が隠すように山門を覆っていた。菩提寺を離れ湖岸に出ると、秋分の湖風は馬上の位置からは肌寒く、高層のすじ雲の下で、唐沢山の木々が黄色がかったのが見えた。

諏訪明神の再来

家老諏訪図書は、この一件を機会に隠居した。

諏訪大輔は、兵庫より十年遅れた26歳で正式な家老に任ぜられ、勇躍藩政に躍り出たのである。

大輔が大目付に命じて兵庫一派の悪行にメスを加えた結果、悪の温床であった災害復興新役所が解体された。そして大輔は、不評の復興税の課税や冥加金の収奪、人的徴発などを撤廃し領民の喝采を浴びた。

「大輔さまは、諏訪明神さまの再来だ。」

領民は大輔に手をあわせるほどに持ち上げ、大輔は人気タレントをまがう人気者になっていった。

藩主のいる諏訪藩江戸屋敷でも、あの法事以来盟友となった御用人渡辺三行が、諏訪大輔の活躍を声高に宣伝し、諏訪大輔の評判は江戸でも絶頂であった。

このような前評判が大輔政権にとって順風となつてはいたが、実際に政権を担当してみると困難も多かった。

たとえば復興税の廃止は藩財政が萎縮し、その結果公共事業の抑制のやむなしを招くなど、自らの足をひっぱった。

民生が放漫にならぬよう布いた、儉約令、生活改善令の廃止は、領民には好評だったが勤儉の気風が崩れたため、その日暮らしの百姓には、歯止めのない浪費による困窮も見られた。

「なたね油と百姓は、絞れば絞るほど獲れる。」
とか、

「百姓は生かさず殺さず。」
と、というのが当時の領民管理の基本である。

財政問題は、緻密な性質の前政権の千野兵庫が、もつとも気を使った分野であつた。

千野兵庫のその施策の結果、自然災害のなかでも藩財政の破綻は辛うじて避けられたのである。

千野兵庫は評判は悪かつたが、やったことは苦肉の行政施策であつた。しかしその結果領民の不満は爆発した。

「大輔のスタンドプレーで、物事が解決することはない。」

千野兵庫はいずれの起死回生を期して、じつと次のチャンスを狙うことにした。

大輔のような正直な正義感だけでは、一国の経営は成り立たない。行政にはまずは財政基盤の確立

と、産業の振興が必須である。

諏訪郷の地場産業は、野鍛冶（のかじ）による鋸（のこぎり）の製作とか、鋳物、寒心天（寒天）、氷豆腐、氷もち、絹糸、刺し子、醸造などにみられたが、地方経済を牽引するような強力なものではなかった。

勢い米作が中心とならざるを得ず、旧来型の範囲にとどまるものであった。ならば、だれが政権を担当しても同じである。

諏訪大輔挫折の途

諏訪大輔が政権をとって政務を通じて理解し得たことは、改めて失脚した千野兵庫の苦労だった。

「兵庫の苦労が、今、やっとわかった。」

しかし政敵への同情評価は禁断である。

その後七年間の大輔の試行錯誤の政権では、過去に兵庫の政権で兵庫が批判されたのと同様のほころびが、あちこちに生じて大輔は焦ったのである。

これでは前政権の失点とおなじで、内外から非難を受けるのは自分ではないか。

政敵の千野兵庫はじつと隠棲しつつも健在である。おそらく兵庫は手癖ねひいて、大輔の失政を待っているであろう。

思えば七年前に大輔は、勇躍正義感をもって政権を担当したものの、今では理想と現実の差が大きいことを日々思い知らされるのであった。

「難儀じゃのう。」

大輔は頭を抱え、自分の無力を嘆いたものであった。

「やられるかもな。」

大輔は、頭脳明晰でやり手の千野兵庫の動きを恐れていた。一方でさらに驚いたのは大輔が善政とした各事業の執行にあたる藩役人が、こともあろうにいずれも賂（まいない）を得て事務執行していたことである。

この時代、もともと領民のための福祉行政などはありませんなかつた。災害復旧も通常は自己負担であつたし、教育、医療、村道、橋、水路の普請事業も行き倒れ埋葬まで村の自助であつた。

「なにか領民に恩恵を与えるような妙案を検討せよ。」

大輔は、落ち目の人気を挽回しようとして側近の五味一斉と計つた。

「卒（さお）の入れなおしはいかが。」

五味は、妙案を提案した。

「長めの間尺（けんじやく）を使うのでござるよ。さすれば、仮に一反（たん）の田は実質八畝（せ）になり申す。すなわち一反の年貢を八畝当分にいたすもの。」

「なるほど。」

大輔は、五味の才覚に感心した。内容は、間尺（けんじゃく）の1間竿を1〜2割長い竿にして検地をやり直すものであった。隠れた減税効果はあるが、無論明らかでない不正行為であるし、藩に入る年貢米も2〜3割減収になる。

この竿入れ再検地は試行されることになり、所管の検地野帳が修正された。

巷間「お情け竿」と呼ばれ、当然ながら好評を得て大輔の人気を押し上げた。

しかし、広大な藩内を一齐に再検地するいうわけにはいかず、村単位の順番だから、その順を巡ってまた賄賂の応酬合戦が始まることとなった。

この賄賂は、この減税相当分を財源としたもので、各級役人の蓄財に利されたのである。

これらの大輔一統による賄賂合戦は、恒常化しスキャンダルともなっていた。そのため役人によるやりたい放題の乱行が、領民の生活に混乱を来たしたのである。

大輔のスキャンダルは、江戸の大輔盟友の渡辺三行がごまかしてくれているので、藩主のもとには届いていない。

七年前、三の丸家老の千野兵庫は、贈収賄勝手災害復興新役所にあつて領民の不評を一身に受け、諏訪大輔の指弾により失脚したのであった。

千野兵庫は、処分を受けて失脚したとはいえ、隠然とその力を温存していた。中間派の多数の藩士も、彼我力関係を横目で見て、強い方へなびくのである。

大輔は、自分をよく識（し）る千野兵庫が、自分の失点を待っているに違いないと焦っていた。

政権にあるものが最も気をつけねばならないのは、観客席で見ている観客すなわち領民である。突如ブーイングで、選手の足をすくうからである。

政治はまさに一寸先が闇の世界であった。

家老諏訪大輔の、このところの放漫な藩政は、大輔の豪放磊落のキャラクターに発する弱点からであった。大輔の行政は差越（さえつ）法を踏まない）でポリシーに緻密さがないのである。

藩行政に携わる行政倫理は、穏当で普遍的なものでなくてはならない。大輔一派の諸行はあまりにも目立ち、政治家として周辺の理解を得られるものではなかった。

千万両の女

千野兵庫は失脚以来零落しつつも、悠々自適に読書三昧にふけていた。政権から外れた立場にいと、かえって藩政の動きがよく見えた。

千野兵庫は七年前の処分を受けた時の、お叱り書き（処分説明書）を引つ張り出してみた。

そこには、主文を家老職の御取上げと逼塞（ひっそく）昼間の外出制限）、とした裁許（判決）が仰付けられ、裁許の説明が生々しく示されていた。

見るたびに屈辱の思い出が再現した。そしてそれは兵庫にとっての埋み火であり、大輔への憎しみが改めて燃えあがるやけばつくいであった。

兵庫が居間としてゐる部屋の床の間には、祖先より伝承の甲冑が黒光りし威圧していた。甲冑には各所に亀甲の家紋が光っている。この甲冑は弓矢戦の中世風で累代の家宝である。

この床の間の甲冑に後から見られていると思うと、兵庫は祖霊に煽られているような焦燥の念が湧き上がるのだった。

栄光を背負つて立たねばならぬ身でありながら、今、自分は不覚ながら若輩の諏訪大輔に、してやられている身である。兵庫にとつては屈辱の極みであつた。

そもそも千野家には平安時代、上社大祝諏方（すわ）為貞の孫光親が、千野郷（現茅野市宮川）に住居して千野（茅野）氏を称したという重い由緒をもつ。

千野家は末代に至るまで、諏訪惣領家の繁栄とともに領民にもあがめられる、名誉ある家系であらねばならないのである。その歴史からのプレッシャーは、兵庫には苛酷なものでもあつた。

一方、現政権にある大輔は、公然と領民に賄賂を要求したり、美人を見れば情欲をあからさまにしたり、という乱行を行っているとの噂も聞こえた。政権にある者のおごりであろう。

諏訪では厳冬の酷寒の朝が頻繁に訪れるものの、長く続くことはなく2、3日耐えれば陽だまりに立ちたくなるような暖かい日の訪れもあつた。よく言われる三寒四温である。

千野兵庫の正室はすでに離縁して里へ帰つたが、後添えや側女（そばめ）の話は時折持ち込まれていた。

「殿、おそば仕えの女性（によしよう）の話がきております。」

「身元は。」

「城下の鍵の手の、千万両なる呉服屋の娘とか。奥方様がお去りになって千野様がさぞご不自由だろうと、納戸（なんど）頭の小飼宇左衛門殿からのお話でございます。」

「さて、いかがしたのか。」

兵庫は思案した。納戸頭の小飼とは、千野兵庫が宮川と上川の氾濫にともなう災害復興役所を差配をしていたときの差配頭であった。

小飼は兵庫失脚後は納戸役だったが、大輔の隆盛のころは寄りつきもしなかった。近頃大輔の不品行に伴う、大輔周辺の地盤沈下にも似た陰りが生じてくるに及んで、旧兵庫派がいささか力を盛り返してきている感触もあった。

その彼我力関係の浮き沈みについては、兵庫が三の丸用人を通じて聞こえていた。しかし兵庫本人は現在無冠無役で、これといつて復権の気配もない身の上である。

「その女性（によしよう）、会ってみよう。それも一興。」

無聊をかこつ兵庫は、小飼の紹介の呉服商千万両の娘を招いた。

「美和と申します。」

娘は、色白のうりざね顔だった。その夜、兵庫の閨房に入った美和は、さして嫌がる風もなく兵庫を受け入れた。

美和は、夜の枕辺に三つ指をついて、

「ご用、うけたまわります。」

と、あいさつして同衾の褥に入ってきた。

妻がいたとき兵庫は情欲には淡泊だったが、それは妻の心根に融和できなかったからであった。

妻の体を開いてみれば、乳、下腹部、陰部のいずれも女のそれだった。しかしそれぞれの部位は、妻という顔が夫の前で恥部を晒しているだけの女の従物であった。

胸に「乳」、股に「陰部」と、案内札を貼って見せているような妻との閨房では、兵庫は下腹部に、自ずからつき上がるような欲求を生じる夜はなかった。

妻の倫は、諏訪の家老家の正室としての矜持（きょうじほこり）を伝（つて）に、あくまでも外向きの業（ごう）に生きる女であり、兵庫という人格と結婚したわけではなかったのである。

兵庫は三日目には妻を遠ざけることになった。

妻は兵庫が災害復興新役所で、汚職にまみれた役人たちに足をひっぱられて失脚した後、ふがいない夫を責める気持ちはあっても、同情、理解する気持ちはなかった。そして高家から入嫁した、気高い女であるという自覚はついに変わらなかった。

千野家老家の正妻の地位が、夫の汚辱のまえに剥奪される機会に、妻はこの夫に見切りをつけたのであった。

この妻にとつては、家老職の肩書きのない兵庫など、世間体も悪くいたたまれなかったのである。

しかし兵庫にとつてみれば、この妻が最後に遺していった最大の内助の功は、この離縁の申し出であつたと生涯思うことになつた。

呉服商千万両の娘の美和は妻ではなく側女（そばめ）である。それだけに兵庫は気楽であつたし、美和の乳や陰部を見ても、妻と異なるものではなかつたが、改めて情欲をそそり、己が下腹部に手こたえある女としてのめり込めた。

美和は兵庫の性欲を十分に満たせる女だつた。

安永一件

「殿、諏訪大輔殿の行状、噂は芳（かんばし）しからず。いずれ破綻を来たすは必定なれど、確たる証拠を得ねば指弾かなわず。」

側近の志賀一斉がささやいた。

「大輔は、女性（によしよう）に脆（もろ）いとの風説あるにつき、ここは策をめぐらせてしかるべき女を、大輔殿のもとに入れ込んでみたら、何か有用な手がかりを得るかも知れませぬが。」

「そうよな。不正といえは情け竿（法外の減税）などは聞き及ぶが、情け竿は領民の支持を受けておる。決定的な証拠が欲しいのう。」

千野兵庫は腹心の、志賀一斉、吉田虎次郎らとはかり、江戸の藩主への直訴を目論んでいるので

あつた。

とはいえ、大輔の不行跡の確固たる証拠は得にくいのであつた。竿いれなどで法外の減税をしているが領民にとっては善政と見られている。

しかし兵庫の失脚後、躍進した大輔であつたが、七年の政権の慣れがおこりとなつて、今では自らをも制御不能なところまで自制を欠いているのであつた。大輔の藩政は、破綻がはじまつた兆しを見せていた。

大輔の悪行を指弾し、藩主にそれを訴え出るには、確たる証拠がなければならぬ。風聞だけで指弾書をしたためても、藩主は取り合わないであろう。

「あの女を大輔の閨（ねや）に入れ込んだらどうか。」

兵庫がつぶやいた。自分の側女（そばめ）の美和のことである。

「しかし殿、美和様は殿のご愛妾、もつたいのうございます。」

志賀と吉田はそう言ったが、二人の目はこの話を言い出す前から、美和をターゲットにしているようにみえた。

兵庫は、美和を諏訪大輔の寢所へ入れ込むにあたり、美和に因果を含めた。

「私は、だんな様をお慕い申しております。どうかこのまま私をおそばにおいていただけますよう。」

しかし兵庫は容赦なく告げた。

「美和、わしを慕とうてくれるなら、言うことをきいてくれ。わしにしてくれたように大輔に接することだ。ことが成就したときには必ずわしのもとへ戻すよつてにな。」

逼塞の処分中の千野兵庫の屋敷は、すでに居住者の色分けが届け出られていた。そこで拔かりなく美和と同じ年恰好の女中を、当て馬として家中に入れる術策を施した。

その女中と入れ替えに、美和をひそかに屋敷から湯小路の仕舞た屋（しもたや）へ、住み替えさせたのであった。

美和は、同じ色柄の装束に簍（やつ）して、夜陰にまぎれて籠（かご）に乗り、三の丸屋敷から消えた。

間をおかず味方の間諜（＝スパイ）は、女衞（ぜげん）もどきの口利きと策略を通じて、美和を大輔の側室の一人として、その閨房へ入れ込むことに成功した。

美和の女としての容姿は、好色な大輔好みであることは兵庫は先刻承知だった。敵方とはいえ大輔は、幼い時分からの勝手知つたるなじみなのである。

この策謀は兵庫には、大輔との隠れた以心伝心から来る策略のうちだった。そして美和に期待する閨房での女の秘術は兵庫しか知らない。美和は持ち前の色香で、大輔の心をとろけるように懐柔するだろう。

その後美和は、兵庫の思惑通りに大輔の男心をつかんだようであった。美和は夜な夜なお接交（めこ）の秘技を駆使して、大輔を籠絡しながら寝物語に、大輔の政治上の思惑や作戦を聞きだすであろう。

兵庫は美和が、大輔不正の証拠をつかむことを期待しつつ、他方では側女（そばめ）を失った無聊を、夏空の雲の流れに紛らわすのだった。それは美和のふくよかな下腹部の丘に似た艶な雲であった。

「未練な。」

兵庫は恥じた。羽振りのよい現職家老の大輔のもとで、美和は側女（そばめ）とはいえお付きの女中に傳（かし）つかれて、衣食や化粧の世話なども行き届き受けているだろう。

二の丸館には諏訪の温泉も湧出する「衣（ころも）の源泉」がある。それはアメ湯といって現在の上諏訪温泉では絶え果てた、ねばりのある温泉水であった。しかし兵庫の三の丸館の泉源は、失脚時に切断されており湯も出ないのであった。

やむを得ず家来は、大手門から虎口（こぐち）に至る縄手（なわて）という弓なりに曲げて作られた柳並木の一本道を抜け、鍵の手道に続く片羽、横町、本町、岡村の上級中級藩士の武家屋敷をかわして温泉をめざすのであった。

武士の家屋は、冠木門（かぶきもん）を構え、商家とは異なった雰囲気がある。

さらに入浴のためには、湯の脇（地名）平湯や虫（＝蒸）湯、場合によっては下諏訪（しものす

わ)の温泉を目指すのであった。

評判の湯の脇は上湯と下湯(平湯)に分かれていて、平湯はだいたい2日おきに女も入浴した。

時には湯治を兼ねて、遠方の蓼科の渋の湯まで出向く向きもあった。蓼科の渋の湯は珍しい炭酸湯で、源泉の湧出に付随して絶えず気泡が上がってくる珍しい湯である。

兵庫の側女だったころの美和は、女中もない無冠無役の兵庫の殺風景な屋敷うちで、兵庫とのお接交(めぐ)の直前には、湯がないので水で陰部を洗ってから閨房入りしていたのであった。

それは兵庫が美和の長襦袢をひらいて、薄暗い灯のあかりで見た美和の薄濡羽の陰毛で分ったし、挿入するとき接触するその付近の冷たさで体感した。

「だんなさま、ご用うけたまわります。」

ふと、美和のそんな声が聞こえてくる錯覚で、覚醒するような日々の独り寝の夜であった。

この美和を入れ込み女として使った色仕掛けがうまくいけば、女に無防備な大輔が漏らす悪辣な策謀を、奸賊の行為と決めつける確証が得られるのである。

つなぎは兵庫の政治拠点の温泉寺であった。天道上人の強力も得て、美和がつかないでくる閨房で得た多数の情報活用し、分析して指弾書の証拠にしたのである。

大輔は、冥加金の着服、公金の横領、城下の美女の強制的な召し上げ、城内での乱痴気騒ぎ、二の丸居宅の無断増改修を行なっているというものであった。

諏訪には江戸のような色街はないが、栄つてゐたのである。

淫逸遊樂などで上の社会が乱れば、その風潮はいち早く下民の社会に伝播し、城下全体の風紀の乱れにつながるのである、庶民が鬱（うつ）を散ずる酒戸（居酒屋）は多く、控えめながら娼楼なども殷賑（いんしん）盛るゝしていた。遊樂の普及は、信仰厚く勤儉な領民の良俗を貶める由々しき風潮である。

民草に墮落が生じると、藩全体の綱紀が緩んで百姓は働かず、農地は荒れ果てる。

兵庫には、大輔が為す藩政の墮落が下々の墮落の原因であるとみた。

兵庫に、大輔不正糾弾の絶好のチャンスが訪れた。それは内々藩主により兵庫への呼び出しがあったことによる。

過去に千野兵庫が三の丸家老在職中のこと、藩主から莫大なご用金を調達せよとの命を受けたことがあった。千野兵庫が用向きを問うと、

「内緒じゃ。」

と言うのであった。使途不明金である。兵庫は、

「困ったことになった。」

と、思いつつも国許にもどり、万難を排してこの使い道もわからない大金を調達したことがあったのである。

そしてその使途不明金は、算用方（さんようがた＝用度係）の伊藤重吉によつて用途を粉飾されて決算された。

しかし後遺症は避けられず、決算は収支ともその分だけ規模が異常にふくらみ、結局それが兵庫の失点に加算されるものとなったという苦い過去がある。

今回、藩主は再び同様のご用金の調達を、現政権の家老の諏訪大輔に依頼した。大輔は当時の兵庫と同様な立場で、算用方ともども試算してみたものの、粉飾可能な規模をはるかに超える高額な不正となつてしまい、藩主の依頼とはいえとても願意に添えるものではなかつた。

そして、明らかな無理難題を打診してきた藩主は、

「大殿からの命とはいえ、使途も分らぬ大金を調達することかなわず。」

と、断られてしまったのである。窮した藩主はこんどは内々だが、今は無冠無役の千野兵庫に藩政への復権も匂わせつつ、大輔が断つた大枚のご用金の調達を打診してきたのであつた。

「現家老の諏訪大輔は頼むに足らず。千野兵庫。そちが頼りじゃ。あの時と同様にこの金子を調達してくやれ。恩にきるぞよ。」

と、大殿の声が聞こえるようであつた。

藩主自身が遊樂の費用を、こともあろうに公金からツマミ食いをしようとするなどは不見識のきわみである。この藩主は、このようにいつも気まぐれ勝手のトラブルメーカーであつた。

今の兵庫に、藩主の願意に添えるような財務の権限があるわけがない。藩主は藩という組織がどう

いうものかの基礎もわからぬほど愚鈍であった。

しかし一方の兵庫としても、このチャンスを利用して活かさざるは愚である。

兵庫は自らの愛妾まで大輔に提供するという、重い犠牲を払って得た大輔の不正を糾弾する証拠があったが、これを公に上申して大輔を糾弾するためには、藩主への面会が叶わなければ意味がない。兵庫は次の課題として、藩主に面会するすべを策していたところであった。

思いがけずも藩主の側からの内々の兵庫への接触は、「渡りに船」にも似た手間の省ける幸運であった。この機会にうまく藩主の意向を操（あやつ）れば、大輔指弾の大望のほかに、一石二鳥で兵庫の復権にも及ぶチャンスである。兵庫の心は踊った。

諏訪藩の藩主は藩政に興味もなく、国許のことは国家老の諏訪大輔に任せっぱなしであったし、自らは日々遊樂三昧で湯水のごとく散財しているのである。金の力で参勤交代も免除されて、江戸に常駐して遊びほうけていた。

そしてその節度のなさは、この後におこる大名家の定番の世継ぎ争いの火種となっていくのであった。

藩主から呼び出しを受けた兵庫は、これこそ神の恵みとはかり欣喜雀躍江戸へ上り、藩主じきじきの特命を盾にして、藩主忠厚に対し現職家老大輔の凶状をつぶさに報告した。

それにはスパイとして大輔の閨（ねや）に送り込んだ、兵庫の側女の美和から得た情報が決め手になつていた。

「国許は、藩による民生の策よろしからずを以て、公序並々ならず。人心ややもすれば乱れつつあり。城下の酒戸、娼楼等の二業、三業の殷賑はその証（あかし）なり。隠し減税、逆意（違法）冥加金の収奪、賂（まいない）も多しを認む。

現家老の諏訪大輔の行状尋常ならず。疑念の儀件（くだん）の如（略）。また江戸屋敷用人による国許からの依命報告に国許静謐（せいひつ）問題なし」とあるは瑕疵（かし）誤りありて正しからず。」

藩主は驚き、大目付に調査を命じた。この時点で兵庫は美和に大輔の閨（ねや）からの宿下がりを目指したのであつた。

大目付の監査の結果は、兵庫の指弾のとおり、大輔の周辺に不穏当な多数の不正が指摘されたのである。

大目付の監査報告を受け藩主は裁定した。

「二の丸家老諏訪大輔の行状不届きにつき、家老職御取上げ及び逼塞（ひっそく）昼間の閉門）申し渡す。」

ここに諏訪大輔は失脚することとなり、三の丸家老職千野兵庫の復権が叶った次第である。

この諏訪大輔の失脚と千野兵庫の復権のドラマは巷間 安永一件 と称され、7年前に演じられ

た、千野兵庫の失脚と諏訪大輔の返り咲きのドラマ、すなわち 明和一件 のリベンジ劇として、二の丸と三の丸の確執の第一段階とされている。

これすなわち諏訪の郷土史では、両者のジャブの応酬程度に位置つけられている。

三の丸兵庫の復権

安永一件で三の丸の千野兵庫は、はれて家老職に復権した。

しかし藩主による敵方の大輔一派への仕置きは軽微なものであった。8年前の兵庫に下した仕置きとのバランスをとったのであろう。諏訪大輔は一応お役取上げと逼塞の処分であった。

しかし諏訪領民の間では、三の丸家老千野兵庫の復権は歓迎されなかった。8年前の重税を再現される恐怖もあったし、儉約令による締め付けへの拒絶反応がとびかった。

それは諏訪大輔が人気とりに行なった苦肉の領民救済策によるものである。

お情け竿と好評だった減税策は領民には評価され、諏訪大輔は諏訪明神の再来とまで言われていたのである。

「お館（やかた）様がお代わりになつたちゅうぜ。」

「こまるなあえ。昔のようなことをされちまっちゃあ。」

「大輔さまあ、どおしたずらなあえ。」

領民は農事の合間にこんな会話を交わし、大輔の政権を懐かしんだのであった。

家老千野兵庫は、隠忍自重の八年を経て復権したが、藩政には慎重であつた。それは自分の政権が必ずしも二の丸に勝っているわけではないことを、十分認識していたからである。財政基盤も人材も脆弱である。

なにしろ江戸の殿様諏訪忠厚は、生来の遊び人で歌舞遊樂を好み、国許の藩行政には関心もなく、自分の都合であれこれいつてくるし、遊樂のためなら湯水のように散財するのである。

兵庫は諏訪城内の勢力地図は、ほぼ拮抗しているとみていた。江戸表は、ほぼ大輔側が占めていて、大輔の盟友の用人渡辺三行は大輔の復権を期して江戸屋敷内を仕切っていた。

藩主はそのまま二の丸一派に囲まれ、屋敷内に拉致されたような状態であつた。

ここに愚鈍な藩主諏訪忠厚が、また新たに世継ぎ問題にかかわつてダダをこねはじめた。

そのいきさつは、お家騒動に定番の、正室や御手掛け（側室）などを巡る世継ぎ問題であつた。

世継ぎ問題とは、いずれの藩にもある藩内の、権力争いの代名詞である。

さて、藩主正妻のお政の方は、福山十萬石阿部正福の女で、才色兼備、婦徳の誉れ高いという評判だったが子がなかつた。側室に長子軍次郎が誕生し、三年後の明和八年に別の側室に次男鶴蔵が生まれた。

トラブルのきつかけは次男の鶴蔵の母のほうの側室を寵愛した藩主諏訪忠厚が、この次男鶴蔵を世

継ぎにしたいと言い出したことに起因する。

この時代長子相続が武家のならいである。次男の鶴藏を立てるとなると長男の軍次郎を廃嫡せねばならない。

正妻のお政の方は人倫にてらし、長男軍次郎以外に世継ぎはないとの正論をつらぬいた。

このような武家社会の封建制度における長子相続は、下々の社会にも準用されて、百姓屋でも長男が家を継いだ。しかしこれはもともと少ない田を「田分け」させぬよう制限する措置であった。「たわけもの」などの罵倒の言はこれが語源である。

次男以下は「ひやめし」と呼ばれ、長じても田畑を分与されることはなかったし、供される糧食も、さらに差別される社会だった。

もつともこの時代でも、末子（ばっし）相続を伝統とする地方があったことは注目される。親の介護等の義務を、田畑とともに末子に付与するのは合理的である。

藩主諏訪忠厚がもらした世継ぎの話は、藩内にこれをめぐる利害を伴いつつ派閥を形成した。藩主が言い出した妄言は、瞬く間に四方へ拡散したのである。

論言（りんげん＝天子の声）汗のごとし。トップがうっかりにでも漏らした一言でも、トップの言質は汗のように全体に流れ、組織の末端まで浸透していくのである。

諏訪城内二の丸派、三の丸派、江戸表の三者が絡みあう欲得がらみのお家騒動が、ここから展開していくことになったのである。

もつれた糸

かつて先代の藩主の、気まぐれによる人事ミスから発展することとなった二の丸、三の丸の確執は、すでに二十年を経てさらにもつれ、いまや泥沼ともいえる状況を呈していた。

二の丸側の選手は諏訪大輔であり、三の丸側の選手は現家老の千野兵庫である。この長年にわたる抗争の戦果は、明和一件と安永一件とにみられるように相星（あいぼし）で双方がそれぞれ一勝一敗だった。

しかし争いが収拾することはなく、今さらに決勝戦ともいえる第三戦に突入していたのである。

兵庫と大輔の双方に、身を挺して尽くすことになった大輔の閨の側女の美和の行く末は哀れであった。美和は心ならずも大輔の子を宿していた。

兵庫はそれを知らなかったが、知る知らないに関係なく、美和は諏訪大輔の閨（ねや）からの宿下りの時点で、いづれからも用済みとして切り捨てられた女であった。

美和は実家へ戻され、二度と元の主人の兵庫とも任（まみ）えることはなかった。

千野兵庫は諏訪大輔を追い落として、再び諏訪藩の家老として復権したものの、失脚した大輔との彼我勢力は、ほぼ五分五分である。さらに兜の緒を締めなくてはならないと自覚するのだった。

政変によって国許の実務は、三の丸の千野兵庫に政権に移行したが、藩主にとってはいづれでも良

かった。そして歌舞遊樂に埋没できる江戸屋敷に張り付いて、依然として国許の諏訪をふりかえることもまれだった。

「世継ぎに関し大殿のご意向は、次男鶴藏君であらせられる。」

江戸度屋敷用人渡辺三行は、逼塞謹慎中の盟友の諏訪大輔とも連絡をとりあい、次男鶴藏の擁立に奔走していた。さらなる同志を江戸と諏訪で募り、次男鶴藏擁立の支持層を広げてこれを実現するためである。

長子軍次郎の廃嫡の案も練られていた。その策には長子軍次郎の資質不適格をうたい、世継ぎから排除する策。長子と次男を入れ替える策。長子相続に頑強にこだわる正妻お政の方の排除をはかる策。長子軍次郎を毒殺する策。などいずれも物騒なものであった。そしてこのいくつかの策は実際に試されたのである。

江戸屋敷は大部分が諏訪大輔派だったが、まれに千野兵庫のシンバもまぎれていたので、情報は国許の家老職の千野兵庫のもとにも届けられた。

これらの情報を聞く都度、兵庫の胸はさわぎいたたまれない日が続いていた。

「長子軍次郎さまがあぶない。」

兵庫の側近の志賀徳三郎は、

「奥の正室のお政様は、賢明なお方ゆえ。めったなことではないとは思いますが、敵方は多数。心配なことではございます。」

と、顔を曇らせた。

「こは、国家老職としてご自身で江戸屋敷へ出向き、大殿に面会されるのが肝要と存じます。」

「そうよのう。話がこじれてしまうと、藩内のみならず公儀にも聞こえてしまう。大殿にお会いして、ご存念をうかがってみよう。」

兵庫は意を決して上京することにした。

しかし江戸屋敷の三の丸家老へのガードは固かった。

「大殿はお会いになりません。」

国許の家老職の千野兵庫さえ門前払いする江戸屋敷であった。用人の渡辺三行に取り込まれた藩主諏訪忠厚は、世継ぎ問題で片意地を張る状態であった。

「このまま帰国するわけには参らん。吃急の儀である。ご用人殿、なんとかお取次ぎを。」
ねばる兵庫に、

「議に及ばず。大殿は患つておいでです。」

「国老職としての面会である。これでは家老のお役が務まらぬ。」

兵庫は三ヶ月間滞在し藩主との面会の機会を待つのだった。

「千野殿、大殿から速やかに帰国し、国許の政務に当たるようご命令であります。即刻出立されませう。」

兵庫は結局藩主とは面会できず帰国することとなった。すべて諏訪大輔派の差し金であろう。その

走狗が江戸屋敷用人渡辺三行であった。

不首尾のまま諏訪へ戻った兵庫に、おっかけ裁許（処分判決）の通知が来た。裁許説明書では、藩主に無許可で諏訪を離れた罪状をしたためであった。

三の丸家老職の千野兵庫は、再び失脚することになった。

勝手に江戸へ出張したことを罪に問うものであったが、家老の出張は家老の職権内の職務である。この処分は、ためにする言いがかり、と言わずしてなんであろうか。

またもや家老職の御取上げと、逼塞（ひっそく＝昼間の閉門）の裁許であった。

代わりに発令されたのは、すでに隠居の身であった二の丸の諏訪図書を国家老とし、諏訪大輔は、江戸屋敷詰めに任ずというものだった。藩主を取り込んだ江戸屋敷用人渡辺三行の差し金である。

渡辺の思惑は、国許に並立する二家老制を、二の丸派の諏訪大輔の一家老制に変え、その大輔を己が傘の下へ取り込んで、政敵千野兵庫を排除する企てである。千野兵庫を排除した後は、大輔を己が意のままに操り、江戸と国許とに覇権を拡大する野心であった。

翌日、国許家老に再任された隠居の諏訪図書は、老骨に鞭打って再任家老職として渋い顔で登城するのだった。

城内は、いまだ三の丸千野兵庫一派が、比較優勢の政治地図が描かれていたからである。千野兵庫の処分は軽微なものだったし、一旦引退した諏訪図書が三の丸派と、五分五分で対抗できる状況では

なかつたのだ。

江戸常番に任せられた諏訪大輔が、江戸屋敷で専念したのは、己が同志を拡大する策とともに、できるだけ藩主に接して藩主の取り込みを策したことであつた。このため藩主忠厚は大輔一派に洗脳されていった。

やがて江戸屋敷用人渡辺三行の隠然たる力は、招聘した諏訪大輔を己が傘の下へ取り込み増大していった。

用人渡辺三行は、江戸常番の諏訪大輔さえも頭が上がらない存在になつていたのである。江戸屋敷内の新たな力関係の変化である。

いまや大輔自身は、江戸屋敷用人の渡辺三行の目下（めした）の盟友になつていたのである。

ともかく二の丸諏訪大輔派による千野兵庫退治は、このような裏工作の絡み合いを背景として進行したのである。

婦徳の誉れ

次に大輔と渡辺三行が目論んだのは、藩主次男の鶴蔵を世継ぎにするための具体的な策謀であった。

それにはまず堅物の、藩主正室お政の方の退治が第一であった。お政の方は諏訪藩を上回る家格の、福山十万石阿部正福の女（むすめ）である。才色兼備、婦徳の誉れ高い賢婦であった。

お政の方は大名家のならいに忠実で、次男の世継ぎなどありえないことと認じていた。

大輔と渡辺の両奸賊のタッグマッチでは、正室お政の方を怒らせ自ら離縁に誘導する作戦が練られた。

人倫に聡いお政の方は、曲がったことを容赦しない堅物である。その里の福山藩の阿部正倫は、後に幕閣の筆頭老中に列する切れ者であった。

里の誰に聞かせても、次男を世継ぎにするような措置は容認されないだろう。人倫にもとるこのよくな仕儀には、お政の方も阿部家も容認する余地はなかった。

お政の方は、諏訪藩のありようにあきれ返り、怒りのうちに諏訪家を見捨てたのである。

「次男鶴蔵を世継ぎにと目論（もくろ）む浅間敷（あさましき）大殿の仕儀、善意にあらざれば到底わが心の容に適（か）なうところにあらずして、もはや諏訪藩に列する屈辱に耐えず。件（くだ）

ん)の仕儀は、わが里福山藩阿部一族をも道つれ、天下にその恥を晒さんとの愚に存じ候。

然るに事わけてのお諫(いさ)めも届かず、また大殿のご改心の存念もみえ給わずして、万策尽きし果ては此処に暇(いとま)を乞い奉る。されば本日限り諏訪家との縁(えにし)は終わりしものと覚えおき候らえ。わらわ早々に里へ立つ所存。」

柳眉を逆立てたお政の方は、優柔不断な夫の諏訪忠厚に毅然として通告した。そして藩主の居間を退出するにあたり、お政の方は横向きに、

「恥知らず。」

と、唾棄するように言い捨てた。

ここに奸賊が目論んだ、正室お政の方の離縁が成立することとなった。

離縁のため江戸を離れるにあたって、お政の方は長子の軍次郎のまだ幼い両手を握って寄せた。その目には涙があつた。お政の方は、愛情のこもった切れ長の目を軍次郎に向け、しっかりと口調で諭すのだった。

「軍次郎、本意にあらざるも諏訪家の世継ぎにかかる理不尽、わが倫の容するところにあらず。すなわち諏訪家はわが座す家風にあらざりき。ここに母は福山の里へもどらん所存なり。

この先はそなた、もはや再びこの母とめぐりあうことは望むべくもなし。なんちようも日々息災にておわしてくやれ。

そなたは長じて後、必ずや諏訪の民草から慕われる高邁(こうまい)立派(りっぺい)な諏訪殿(すわどの)

に相成り給うべし。

そして軍次郎。卑近ながら去りゆくこの母からひとつ言いおく。よいか。日々渴々（かわかわ）し給うことなかれ。わが言聞かずば命取りになろう。すなわち乳母（めのと）の供する糧食のほかは、誓つて箸などつけ給うことなるまいぞ。

母は遠方にて、ひと時も欠かさずそなたへの神仏の御加護を祈念せむ。」

別れ際、涙ながらの説教を軍次郎に遺し、正室のお政の方は、陰で藩主がせめてもと設え饑（はなむけ）た大名加護で、里の阿部家へ旅立つたのである。

涙ながらに去つていった母お政の方の忠告と警告は効果があつた。諏訪藩世継ぎの諏訪軍次郎毒殺の企てと、調伏（ちようふく）の加持祈祷は、敵方によつて幾度も企てられたが、軍次郎は母が戒めた糧食に関する警告に忠実であつた。

そのため大輔方の仕掛けた、軍次郎毒殺等の謀略はすべて無に帰したのである。

しかしながらこの毒殺未遂事件は、こともあろうに逆臣千野兵庫方のしわざと逆に宣伝され、抗争相手の攻撃手段に活用される始末であつた。

目の上のタンコブのお政の方を、謀略をもつて里へ戻すという追放に成功した奸賊の大輔と用人渡辺は、その夜祝杯をあげ互いにほくそ笑んだのであつた。

「これで外堀が埋められ申した。」

「うまく次男の鶴藏君を擁立できれば、藩政を思い通りに切り回せるのお。」
その日は強風だった。江戸前の海から潮風が柳の枝葉を、水平になびかせるほどの風が諏訪藩江戸屋敷の庭樹を揺らせていた。

兵庫の決起

千野兵庫は政敵の諏訪大輔一派による讒言により、あらぬ罪で処分を受けて逼塞謹慎の身となった。今日は惘然とした面持ちで、父の千野貞典以来の学友の天道上人と相對していた。

「ここここに至って沈黙するは千野家の末代の恥。」

人の世の争いを知らぬげに、諏訪郷の風月は穏やかにみえた。茶をすすりながら兵庫は天道上人の意見を待った。

「拙僧もさよう心得る。千野殿、これ以上失うものがなくなつた今、お立ちになられよ。」

再び無冠無役となつた千野兵庫は、身が軽くなつた分に比例して心中は穏やかでなかつた。

兵庫の焦燥を察した天道上人は、

「よき方途を授けて進ぜよう。これは秘策じゃ。しかし諸刃の剣ともなるやも知れぬ。焦らず思案し才覚あれ。」

天道上人が提示した方途とは、諏訪家の祖の威光を借り、外戚の力で攻める作戦であつた。

天道上人は自身が諏訪惣領家の血筋である。諏訪藩の外戚、姻戚の所在を思い浮かべあれこれ思案のうえそのプログラムを示した。

「逼塞謹慎中の身ゆえ、江戸表への旅は隠密にせねばならぬ。幸い、手長神社（てながさま）の祭礼が近い。その夜三の丸周辺は、敵方の密偵の手配も手薄になろう。夜陰にまぎれて三の丸川をお下りなされ。湖水から富部（とんべ）に上陸（あがり）、和田峠を越え佐久から甲州へ迂回するのが上策かと思われる。必ず、腕の立つ防衛をお連れになることじゃ。敵方の追っ手もつくであろう。命がけの旅となるやもな。」

それは身も心も凍るような脱出劇だった。新月の闇が幸いした。兵庫は浪人風情に変装し、なびく上空の流れ雲を追いかけるように江戸へ向かつて翔（と）んだ。

兵庫のいでたちは深編み笠に野はかま、大小だけは立派な拵（たて）だった。供は兵庫の腹心で、腕にかけては手練（てだれ）の、五味介丸であった。

五味は、諏訪藩江戸屋敷のお庭番から兵庫が抜擢した三の丸館防衛役であった。介丸は諏訪の人ではない。属性は忍者に近い。柳生流の皆伝に加え伊賀の忍法に通じていた。

「介丸。わしを見失わぬ程度にうしろからついて来い。」

隠密の尾行があるかも知れず、供とはいっても並んで歩いては防衛役にならない。

夜道に早遅はないので、山越えが終わるまではなるべく夜道を歩くことにした。

やがて旅の途中の平和な日差しの下、街道の脇にはホテルブクロや吾亦紅（われもこう）の可憐な姿が見えた。

甲府盆地に下り、見知らぬ村々を左右に見ると富士川からの灌漑で、あたりの作毛は良好にみえ、甲斐国は安寧のさ中にあるようだった。

甲斐の富士川水運は、諏訪高島藩の年貢米の廻米として江戸へ納めるにつき、甲斐鰍沢（かじかざわ）までは中馬で運び、一時米蔵に預けてから舟で富士川を下るコースをとったのである。また同じルートの帰路は、諏訪への海方からの塩の道とした。

兵庫は今は無役だが家老のころ、役目から諏訪の年貢米の江戸回送にも目を配ったことを懐かしく思い出していた。

それにつけても今の自分は平和どころか、抜刀隊か切り込み隊のように目を吊り上げて道を急ぐ身である。

しかしコトはお家の一大事である。わが大義を貫かねば諏訪藩は存亡の危機にさらされるであろう。

「義はわれにある。」

兵庫は思い直して富士の山の傘雲に目をやった。勝沼の坂道で、不審な男女連れが後に見えた。

後方にかすむ諏訪の八ヶ岳を見返った折、気づいたのであった。二日前にも信濃境で見かけた男女であった。同じ方向を目指す単なる二人連れとも思えたが、用心に越したことはない。

「介丸。わしは甲州街道を離れ、ここから御坂超えで大月へ出る。そちはわしになりすまして笹子峠超えで街道を進むべし。あの二人が刺客と判明せし折は斬り捨てよ。そちは小仏峠までわしの風体で尾行をかわすのじゃ。援護は峠まででよい。そこから目立たぬよう疾（と）く諏訪へ戻れ。」

兵庫はその夜、介丸と変装を入れ替え御坂峠に向かったのである。

幸い、うまくまいたらしく、御坂超え以後あの二人連れを、兵庫が見ることはなかった。

兵庫の目論見どおり、介丸を兵庫と思い込んで、その介丸を追って笹子峠超えに向かったのである。

兵庫がひそかに向かった御坂峠のふもとの御坂（みさか）は、はるかな田園風景だった。ここは律令時代に甲斐国府が置かれ「古府中」と呼ばれた由緒の地である。

中世に至って台頭した武田氏は御坂ではなく、甲府の躑躅ヶ崎（現、武田神社）を本拠にした。甲府とは「甲斐国府中」の略称である。

ところで、兵庫はすでに予定の日程からは3日も遅れていた。

峠を越える正面は江戸の方向である。吹いてくる風も諏訪とは異なる江戸模様の風に感じられた。

ふと峠の方向を見返ると、山ひだの沢に鹿の群れが急坂を駆け上がるのが見えた。時折り、ピーという警告の声を何度か聞き、追っ手の刺客の隠呼かと不安にかられながら大月へ下った。

兵庫は笹子川の氾濫原から間道沿いに、出立から二週日もかけて江戸に入府したのであった。

追っ手

国許（くにもと）の諏訪城二の丸では、逐電（ちくでん）した千野兵庫を犯罪人として追っ手の刺客が組織された。

兵庫が逐電を受けて二の丸一派は、兵庫が諏訪と江戸表を舞台に、なにか重大な画策をするであろうと予想していた。

すでに兵庫の失脚したところから、兵庫の住む三の丸館には、張り込みが配置されていた。そして二の丸派は、江戸へ出立する兵庫の前後の動きは、早くから把握されていたのである。

それは三の丸防衛役の五味介丸が、敵の動きを監視して察知した。兵庫もそれを了知し自らの行動の裏に折込済みであった。

しかしこの夜、手長神社の祭礼にまぎれ、舟で下諏訪（しものすわ）の富部（とんべ）を経由する兵庫の策は、まんまと敵側の意表をついていた。

二の丸側は祭礼で気がぬかり、肝心な兵庫の監視を怠り兵庫の存在を見失ったのである。

そこであわてて茅野から甲州街道の富士見峠越えの途に刺客を送った。刺客は兵庫の暗殺を目論んだのである。追っ手の刺客は青柳宿で待ち伏せした。しかし兵庫は、その裏をかいて中山道から佐久に廻ったのであった。

第一段階の兵庫暗殺に失敗した二の丸は、佐久道と合流する追分で、次のチャンスを狙っていた。

兵庫は、甲府を過ぎた勝沼に近い古府中で、追っ手の刺客に気付いたのであった。

そこで兵庫は一計を案じ、供の五味介丸を自分の影にする策で、この刺客をまくことを目論んだのである。

兵庫が、御坂峠超えで刺客たちをくりました後、五味介丸は着衣を替えて兵庫の影になりすまし、甲州街道を悠然と歩いてみせていた。

笹子峠の急坂は、木立の森がうつそうと張り付いていた。だれもがこの道を首を下向きに伸ばし、自らの足元の動きだけを見て喘ぎながら登るのである。

その日峠道は風に荒れた。すこしの高度を稼ぎ振り返ると、層雲が谷間を覆って眺望はなく、時折天から稲妻と雷鳴がこだまする天気だった。まもなく驟雨がきそうな気配だった。

二人の刺客も同じ姿勢で介丸の後方を見え隠れして尾行してきていた。峠への道は、山麓に沿って左右の曲折が多く、それはターゲットを見失うほど曲っていた。

ぽつぽつと落ち始めた水滴は雨である。そのとき兵庫の影役の五味介丸は、自分が襲われると思っ

た。

見え隠れに尾行してくる二人連れが、諏訪藩二の丸派が放った刺客であることは間違いない。

襲ってくるすれば、人氣が少なく鬱蒼（うつそう）とした森に隠された、この笹子峠超えの山中にしかないであろう。

二人連れの刺客は訓練された隠密のはずである。そして彼我の場の有利不利を考えれば、刺客はお

そらく峠の下り道で、有利な上場から後背を狙って攻撃を仕掛けて来るに違いない。

今それを見越して、事前に攻守の所を替えねばならぬときである。ならば介丸は、自分が攻撃に有利な上場にいる今こそ、そのときであると判じた。

そのとき介丸は、大岩を巻いて登ったその岩上に立っていた。一陣の風が吹き去り、介丸が発する殺気を隠した。

ちょうど追隨してきた二人連れの刺客の頭上である。煽られた風のせいも、刺客たちは状況の把握に遅れをとった。そのわずかの隙間に防備が散漫となったのである。

今がそのときだ。介丸は、

「勝てる。」

と、思った。介丸は抜刀した。何気なく接近した刺客たちは、眼前に介丸の野袴の裾が翻（ひるがえ）ったのを見ただけであつた。

「あつ。」

不覚にも先を取られた先頭の刺客には退く余地がなかった。忍法の場の絡め手が優劣を決めた。介丸が岩上に立ったその時点で勝敗は決まっていた。

介丸の剣は、ひざの高さから横薙ぎに払われ、先頭の刺客は、何が起こったかも分からぬまま、打ち首同然に安易に首を飛ばされた。

追隨していた女は谷向きに倒れてくる首のない男を避け、間髪をいれず後方宙返りとともに、十字

手裏剣を構えるしぐさがあつた。

「甲賀だ。」

介丸は女忍者（くのいち）のとつさの動きで、甲賀の十字手裏剣の飛ぶ方向を見抜いた。

介丸はまず刺客男の首を薙ぎ、即、岩上から女の宙返り宙に追つて跳んだ。飛びながら剣を半円を描いて頭上に流した。瞬間、剣は既に活（いき）ていた。活生剣という。

同じ瞬間、女忍者は既に後方宙返りで腹をみせていた。宙で半回転した時、倒立した態勢から女忍者は、敵へ向けて十字手裏剣を投げるのが甲賀忍法のセオリーである。

投げさせると介丸は、右に持つ剣で捌かねばならず、この女を斬ることが難しくなるだろう。十字手裏剣を投げさせる前、すなわち女忍者が半回転する前に、ダメージを与えねばならない。

今、女を斬り倒す余間は1秒もない。女が後ろへ回転する瞬（まばた）きの間に、胸部、腹部、脚部の順に介丸の剣先からは遠くなつてしまうのだ。頭部、顔、胸部を打つには、宙にある介丸の剣からは遠くすでに機を失っていた。

脚部への斬込みでは、十字手裏剣が飛び相打ちとなる。

「腹だ。」

半回転前に、腹部へ剣先を中（あ）てられれば、女忍者は致命のダメージを受け十字手裏剣も飛ばせない、王手飛車取りの技となる。

介丸は剣先の動きを早めた。方法は、女の腹部に自分の腹部をできるだけ接近させ、撃ち込みの夕

イミングを早めるしかない。

そのための剣先の動きは百分の一秒である。そして狙いは腹部である。

「いれよ。」

気合とともに介丸は、女忍者の動体を追って、振り上げていた剣を唐竹割に振り下した。

介丸が打ち込んだその一振りは、辛うじて間に合った。剣先は女の下腹部から陰部を裂いたのである。

十字手裏剣は明後日（あさつて）の方向へ飛んでいった。女は着地でできず顔面から先にガレに叩きつけられていた。そして急坂に沿って6尺ほど滑落したが、血染めの股が深紫色に咲いた三つ葉躑躅（つつじ）の株に引っかかって制動された。

女の下部から、鮮血がほとぼしり散ってガレを汚した。跳んだ介丸の着地は完璧だった。

男はすでに絶命していた。女は、下腹部への剣先の食い込みが浅かったものの、カッと見開いているその目は死んでいた。

介丸は、己が戦いを振り返った。わずか2秒と半の戦いだった。右横一文字の薙ぎ払いと、間をおかず宙に跳んで、半円月に回し上げた剣を、縦に振りおろした二様の舞だった。

「ま、よかろう。」

介丸は、己の技を及第点で評価し、二人の死骸を左側の谷底へ蹴落とした。おりしも風雨が強まり、そのとき介丸も足をとられよろけた。

谷の急斜面には、れんげ躑躅（つつじ）が、今散った血しぶぎと同じ色で咲いているのがみえた。

江戸むらさき

千野兵庫は五味介丸と別れてから、そのような道中での殺傷事件のあったことを知る由もなく、御坂峠越えを果たして江戸の街に到着していた。

今回の兵庫の目的先は諏訪藩江戸屋敷ではない。天道上人のシナリオに添った諏訪藩の親藩と縁藩廻りであった。

まず藩主の妹婿の松平乗寛の屋敷である。松平乗寛は幕府奏者番であった。奏者番（そうじゃばん）とは幕府の職制の一つで、江戸城内で旗本や大名が將軍に謁見するとき取り次ぎをし、その姓名、進物を披露し。また殿中の礼式を掌った1万石以上の格式高いエリート武家である。

屋敷はいかめしい門構えと門かぶりの大黒松が威圧的であった。門番が誰何（すいか〓尋問）した。

「信濃諏訪藩国許の元家老職千野兵庫と申す。ご当主乗寛殿にご依頼の儀これ有、御意を得たく存ずる。」

「主人は、病中にてどなたにもお会いになれません。」

すでに諏訪大輔方の手が回っている雰囲気を感じる応対であった。門前払いである。

兵庫はふと門出に天道上人が何気なく警告した言葉を思い出した。

「心されよ、敵方は、こちらの動きを推量（おしはか）っているにちがいないまい。

ことに至近の親藩には見張りがつくやも知れぬ。千野殿が諏訪から消えたとなればことさらじゃ。」

兵庫は万一の追っ手を避け逃げるように、急いで松平乗寛の屋敷を急いで離れた。

気を取り直して兵庫が次に頼ったのは、福井藩越前家であった。越前家は遠縁ながら親藩である。現当主の越前少将は八代將軍吉宗の孫であった。

かつて諏訪藩の藩主の曾祖母が、この越前家から諏訪家へ輿入れした縁である。遠縁であったのが幸いし、ここまでは大輔側の手は回っていなかった。

「信濃諏訪藩国許の元家老職千野兵庫と申す。ご当主越前殿にご依頼の儀これ有、御意を得たく存ずる。」

同様のコールだったが越前家の用人は、諏訪家という名に敏感に反応した。

「門内でお待ちあれ。」

情報に聴く用心深い用人は、万が一にも尾行があるやも知れぬと配慮し、兵庫をとりあえず急ぎ門内へ誘導したのである。

「越前である。ご用向きは。」

当主越前少将は品のよい熟年であった。兵庫は居住まいを正し、諏訪藩江戸屋敷で画策されている

騒動の内容を順を追って訴えた。

「諏訪殿はなにか血迷つておいでのようじゃ。それはご正室お政殿の言い分が至当である。」

越前少将は、正室お政の方の離縁話のくだりは、現職の幕閣の候補にもなっている、阿部正倫に絡むことなので特に聞き耳を立てた。

「千野殿、よく分り申した。先ほどお尋ねになつたと聞く松平乗寛殿は諏訪家の至近の縁者、松平殿が己が屋敷で会うのをはばかるなら、早速、この場へ招聘いたそう。しばし別室で休息いたされよ。」

越前の居間を辞すと用人が問うた。

「千野殿。しばらく休息されますよう。迎賓の間がよろしいか、それとも数奇屋がお好みか。」

「ご配慮痛み入る。お数奇屋でお待ちいたす。」

数奇屋は日当たりの良い離れにあつた。千野兵庫はそこで、小半日ほど待たされた。

ここは赤坂という地と聞いていた。格式高い屋敷の中庭には、諏訪郷では見ることのできない薄紫の群れて咲く可憐な花が、背高の庭木の下草に使われていた。この花は後の世では絶滅したが、江戸むらさきである。群咲（むらさき）と書く。

閑静な庭の竹まいに群れるむらさきを愛（め）でつつ兵庫は、諏訪藩の行く末を占い、万端の好首尾を念じるのだった。

兵庫を別室へ送り出した後、越前少将は、この騒動を心に止めてしばし思案にふけた。

「これは由々しき事態である。諏訪殿にはその重大性が分つておらぬようじゃ。」

松平乗寛を前において、越前少将が首を横に振るように言った。

「松平殿、親藩の不都合は相身互（あいみたがい）。至近の親藩の諏訪家の危機じゃ。合従連衡（がつしょうれんこう）一致してで親藩や御一統の協力を得ねばなるまい。ついてはおぬし、主になつて対策を考えてはくれぬか。」

「分り申した。このことが明るみに出た場合、諏訪藩はよくて半知（知行半減）、最悪の場合はお家取り潰しは必定。早速、親族、分家、由緒を集め議に付すべしと思料いたします。」

兵庫は救われた思いだった。これら有識者の諫言は、何よりの藩主へのカンフル剤になるだろう。

諏訪藩縁故の諫言

「このこと、かなりこじれておる。」

松平乗寛は、頭を抱えた。諏訪の藩主自身に善悪の判断が欠け、当事者としての自覚がない。

「諏訪藩主は、馬の耳に念仏である。」

諏訪藩主に忠告したものの、全く反応がなかったと嘆くのがだった。

この世継ぎ問題は、今も続く二の丸派、三の丸派の抗争を基礎とするもので、単に世継ぎ問題とし

ただで解決できるものではなく、かてて加えて藩主の自覚のなさが問題を大きくしている。

松平乗寛は、かなりの荒療治が必須だと診断した。

「ついでには、長期戦を耐える資金も必要である。また、そうなると公儀にもれることも必定なれば、幕閣第一の権門家の抱きこみも必要である。」

松平乗寛の思いの先には、幕閣の田沼意次の姿があった。

この田沼は幕府老中となつて、天明六年に失脚するまで「田沼時代」を謳歌した。

幕閣として在任中、親子で一千億円の賄賂を受け取ったことが歴史に記されている。

兵庫の調達した贈賄の額も決して少なくなかったが、効果はそれなりにあったようである。

田沼意次は、諏訪大輔の側から陳情に訪れた著名な書家の三井親和（しんな）に、

「そちほどの名のある書家が、大輔ごときの企みにやすやすと乗つて、大輔側の運動に加担するはいかなるものか。」

と、いさめて暗にコトの行方を示唆した。三井親和とは、諏訪藩の江戸詰の藩士として尾羽うち枯らしていたが、実は世に当代随一の名を馳せていた、押しもおされぬ書家であった。

諏訪藩主諏訪忠厚は、コトここまで至つても、

「国許は静謐（せいひつしずか）である。と報告を受けている。」

とうそぶき、相変わらず遊興にのめりこんでいた。周囲を固める諏訪大輔や用人渡辺三行がそれ

上の情報をカットしているからである。

「大殿さま、国許は静謐で民草にあつても意気盛んであります。どうかわたくし共にお任せあれ、諏訪家の親戚筋の雑音には、なんらお気になさることはありません。心安らかにお過ごしありますよう。」

大輔と用人渡辺は、一つ覚えのように日々藩主に国許安寧（あんねい）を吹き込むのだった。

諏訪藩江戸屋敷の面々は当座目前の抗争に現（うつつ）をぬかしていたが、狭量の田舎武士の寄り集まりは、木と森との判別にもこと欠く唯我独尊であった。

外からの厳しい目と圧を過小評価し、自ら墓穴を掘っていることに気もついていない貧困の家風であったのだ。

県人氣質（かたぎ＝地域人特質）とうが、これらの気質は譏わっ子の共通する欠点の一つである。諏訪藩は元が貧困極まる田舎出の武士ばかりだから、目先の小事にかまけ、自分の姿を客観的に見るなどおぼつかない、木を見て森が見えない猪武者ばかりなのである。

だから親藩の松平や越前などが、公儀の外圧を必死で抑えている親心と周辺事情などには思いが及ばない。

いつか諏訪藩のお家騒動の噂は、江戸の市井に広まり、小屋（芝居）のネタとして打たれそうな気配もあった。このまま推移すれば、せっかくガードしている公儀も目をつぶっていられない事態が迫っていた。

江戸屋敷の孤立

諏訪藩の内部では、兵庫を公然と支持するグループも現れており、藩は二つに割れていた。

諏訪の温泉寺（おんせんじ）で、天道上人のもと兵庫支持方の有志が、75人の血判を取って代表者が江戸へ上がろうとする騒ぎもみられたのである。幕閣への陳情合戦には豪商からの金まで飛び交った。

このさわぎは双方の動きが活発化するにつれて、かえって諏訪藩の崩壊の危機を予断するもので、それは刻一刻とせまっていた。知らぬは歌舞遊楽にふける藩主だけであった。

親藩筋からの勧告はすでに数回に及んでいた。強気の諏訪大輔と用人渡辺三行も、度重なる外圧にすこしめげ始めている気配もあった。

「大輔殿。このまま突っ走れるだろうか。親藩の松平さまからは何度も翻意について強く言ってきている。ところで国許の状況はいかに。」

「親藩からの忠言のなかでは、公儀のお出ましの危惧にも言及しておるが、なんとしても次男の鶴藏さまの世継ぎを実現せねば、わしらは生き残れまい。国許も二つに割れてきたと聞く。」

「そこで、どうだろうか、表にはわしらの影を代理にたてて、わしらは奥に入って大殿に密着してお守りしたら。」

大輔も用人渡辺も、外部の動きのめまぐるしさに困惑の態であった。

二人の動搖に周囲は敏感だった。

松平乗寛は仲介に入つたはじめから、大輔と渡辺のコンビが仕切る、諏訪藩江戸屋敷の人的機構に問題のネックがあると見ていた。そして屋敷内の人材中から、とりあえずの二人に代わり得る人材を物色したのであった。

数十年にわたる二の丸派、三の丸派、そして江戸屋敷の三者の確執にあたつてきた旧スタッフは、いずれも古いしがらみに染まつていて意識の改革の余地がない。今こそ次に変わり得る、柔軟な頭脳の若手が必要だと思つたのである。

おそらくスタッフを代えても当面は同じであろう。しかしトップに立つてみれば、やがて今日までやってきたことの矛盾に気がつくのが若さである。

松平乗寛は、当面の当事者の大輔と渡辺を更迭し、しかる後に代えた人材のもつ当面の意識のままに前任者の政策を継続するものの、その後更なる改革すなわち同一人に二段階の意識改革を期待したのである、

数ヶ月後、いまは江戸屋敷の主導権は渡辺と大輔から離れ、より強硬な近藤主馬と上田右治馬の二人に代わつていた。

同時に、江戸屋敷の権力構造を松平乗寛の狙い目に沿つた方向に変化させ、旧来の大輔と渡辺の二

人のコンビの影響を排除する措置をとった。

そして大輔と用人の渡辺は諏訪へ帰国させる命により江戸屋敷から排除した。大輔と用人の渡辺は、江戸屋敷からの更迭に抵抗したが、すでに流れの瀬は変わっていた。

新しいトップの上田と近藤にとつては、過去にしがらみをもつ大輔と渡辺は、何の役にも立たぬ目の上のタンコブとなっており、いまや大輔と渡辺の味方は屋敷内にいなかったのである。

藩主は、自らの遊樂を好きなだけ保証してくれた大輔と渡辺に未練たらたらだったが、泣いて馬蜀(ばしよく)を斬らざるを得なかったのであった。大輔と渡辺は、不承不承江戸屋敷を去ることになった。

その後すぐに江戸屋敷内の新たな権力地図が描かれた。そして新しい上田と近藤の二人の若いトップへの新たな造反らしき気配もみられ、屋敷内のあちこちにゴタゴタが起こつたが、これも松平の狙い目のうちだった。

松平は、ここぞとばかり三つの最後通牒を突きつけた。

1、大輔一味の処罰 2、千野兵庫の復権 3、藩主の隠居と長子軍次郎の襲封(世継)であった。

そしてすかさずその翌日には、新しくトップとなつた近藤主馬と上田右治馬の二名を、拘束するという強権に出たのである。諏訪家親藩の松平乗寛のしたカンフル剤の極め付きであった。

隠居を、自分への淫逸遊樂の禁止としか受け止め得ない愚鈍な藩主は、松平乗寛のお叱りの受容を

浚っていたが、味方をすべて失った藩主はこれで絶体絶命となった。

藩主は自分の周りの側近を召し上げられ、自由な遊びもできなくなったのである。

天明一件

この藩主にとっては、今日まで大輔や渡辺などの用人は自分に尽くしてくれたにせよ、これら側近の追放や処分は、そのこと自体他人事でどうでも良いことであつた。

しかし自分の隠居となると藩主の地位を奪われ、好きな歌舞遊樂もできなくなってしまい、藩主の座を追われて、自分がただの人になってしまふというのが最大の苦痛なのであつた。

また、騒動の根源の世継ぎについては、次男の鶴松が最も寵愛する御手掛け（側室）の子だつたからである。

世に男の道楽として女遊びがあるが、御手掛けをもつ殿上人もその例に漏れない。複数の女を持つとき、後室優先で後から得た室の方に、比較優位の寵愛が注がれる傾向がみられる。いつの世でも妻ある男の浮気は、まさに後女優先ということである。

しかし冷静にみれば、長子軍次郎と次男の鶴松のいずれをとつたにしても、それは藩主の己が子のうちであり、ことさら子たちとの間に利害は生じるものではない。

ここに至り、藩主は、

「世継ぎを親藩の勧めのように、長子の軍次郎にせよ。」

と、藩主として当然のことを改めて嘯（うそぶ）くのだった。

側近が血で血を争った世継ぎ問題は、藩主にとつては、たまたま次男鶴松が寵愛する側室の子だった、というそれだけのフィリングの話なのであった。

この次男鶴蔵は欲もない子でおとなしくそのまま育ったが、後に十九歳で病を得て早世する運命を辿った。

また、次男の鶴松を産み、藩主のきまぐれながら、その寵愛を一身に我がものにしたお手掛けは、藩主の隠居とともに身ひとつで里へかえされたのであった。

稗史の原文では、御手掛の咎に付、御由緒（身内）方御列座へ御召有て、「其の方義大輔等と引合鶴松殿を嫡子二立てなんと願ひを致家を乱す悪事を巧ミたる罪重キ科也 男たる者ならハ打首たる処女たるによつて是を差免し永の暇を遣わす者也 金子五拾両暇料に下置れ（略）（略）囚人同様の躰二て親里へ送り渡し候也」と悪意の側室に描かれている。

藩主がこの諏訪藩のお家騒動の結末と、今後の藩制の改新という事態にあたって悩んだことは、自らの明日（あす）の身の置き所と、明後日（あさつて）の遊樂への絶望という程度のものであった。

「ま、仕方あるまい。」

藩主は、苦笑いしたものである。

側近のそれぞれも、己が利害で血みどろな争いしたのであるが、大義名分は藩と藩主に忠実こつ

こをしてみせたただけであった。

ここに宝暦13年に第6代高島藩主となつた諏訪忠厚は、天明元年に隠居を余儀なくされたのであつた。

この騒動を俯瞰すれば、諏訪藩内の領民不在の権力争いに尽き、君臣双方とも皮相(うわべだけ)なことであつた。

この藩主諏訪忠厚は、遊樂に耽つて藩政に疎かつたが、文化面には特異な才能があつたといわれている。もしも藩主でなかつたら、いずれかの適材として適所で大成した人物かもしれない。

大輔と渡辺は数人の供を引き連れ、諏訪へ向かう旅路の空にあつた。後顧の憂いはあつたが、江戸屋敷は既に後任の近藤主馬と、上田右治馬に委ねていた。

大輔と渡辺三行は、出立後に起こつた江戸の政変は知るべくもない。

「諏訪で、同士を集め、次男の鶴蔵君の世継ぎを期すべし。」

「次男の鶴蔵君を擁立すれば、再び家老の座で二の丸で権勢がふるえる。」

二人は、軽やかな足取りで中山道の和田峠を下つていった。右手に聳え立つ浅間嶺(あさまね)には今日も三筋の噴煙(げぶり)がなびいているのだった。

ふと脈絡なく大輔は16の歳、湖岸の小阪観音院の方丈の娘の沙良と結ばれた時のことを思い出した。

あれから十数年、沙良はどうしているだろうか。大輔は、室（しつ＝妻）を得てから行きずりの愛に浸った沙良は、そのまま忘却の彼方へ追いやつてしまつていたのであつた。

大輔は、久々に草笛を吹いてみた。そういえばと、あの時も沙良の脇で、今とおなじ草笛を吹いたことを思い出したのだつた。

「沙良。ほれ、これが草笛だ。試してみろ。」

沙良にはできなかつた。草を口に含むしぐさなど、若い身空の娘にははばかりなことだつた。

「分つた。では、聞いていろ。」

沙良は、大輔の横に座り、大輔の肩に遠慮がちに頭を寄せて聞いていた。

大輔の脳裏にもう一つの顔が浮かんだ。

千野兵庫である。同じ草笛から連想した景色だつた。宮川の土手のやまぶきの笛である。

兵庫も大輔も競つて土手に茂つた山吹の枝をとつて草笛を作つたのであつた。

見えないほど高いところから、草笛と同じ音が聞こえた。それはとんびの鳴き声だつた。

突然の天からの笛は、二人にとつて意外だつた。兵庫と大輔は顔を見合わせ興じたものだつた。

数十年後の今は、江戸から諏訪郷への帰り途である。ここ佐久の初秋の風はまぶしく登り坂の脇の日当たりの良い草場には、桔梗や女郎花（おみなえし）が色とりどりに咲く風情だつた。

あたかも大輔たちの入郷を待ち受けていたような、見なれたいつかのあの日とおなじ振り合いにも見えた。

大輔らは、江戸表から中山道（なかせんどう）を下って六日目の夕刻、湯の香恋しい下諏訪（しものすわ）宿に到着した。

二人が諏訪神社下社秋宮の境内前まで来ると、境内のそここに諏訪藩の役人数十人が、所在なげにたむろしているのが見られた。

迎えかと思つて接近していくと、それは奉行と捕り方ふぜいであつた。二人を認めた役人が走り寄り一礼した。

「卒爾（そつじ）ながら、諏訪大輔様と渡辺三行様の御一行とお見受けする。」

「いかにも、諏訪大輔である。」

「いかにも、渡辺三行である。」

馬上にあつた奉行が、合図の方向へ駆け寄つて下馬した。

「江戸屋敷からの命（めい）でございます。藩主の諏訪軍次郎さま御用につき、お二人を捕縛奉る。」

奉行の口上は、晴天の霹靂ともいえる告知であつた。

「ごめん。」

数人の捕方が寄り有無を言わせず、両手に早縄がかけられ、同時に腰の大小が奪われ次に青縄（本縄）がかけられた。数人の供の者も抗（あらが）う暇もなく多数の捕り手に捕縛された。

「藩主の諏訪軍次郎。」

大輔は復唱してみた。このどんでん返しの口上を大輔は信じられなかった。何が起こったのだ。すでに諏訪の家老職に充てられていた、諏訪図書や大輔の二人の子もいっせいに捕縛されており、二の丸派の壮々たる藩士たちも囚われていた。

追って、渡辺三行の後任の江戸屋敷用人の近藤主馬と上田右治馬も、罪人として厳重な警護のなかで諏訪へ送られ、暫時入牢となったのである。

それは天明元年の秋のことだった。

この後に二の丸派の諏訪大輔一統の終焉が訪れるが、これら一連の事件を、天明一件と称している。

肅清二の丸派

すでに旧藩主の隠居願いと。長子諏訪軍次郎の任官は公儀から同時に認められていた。そのとたんに諏訪藩は国許も江戸おもても、何もなかったように静謐となった。

諏訪藩は、翌天明二年は寅年で諏訪明神のおんばしら祭である。このイベントの準備で、今年は藩をあげて多忙だった。しかしこの時、諏訪藩の政務のステージには、もはや二の丸諏訪大輔一派の姿はなかった。

諏訪大輔、父の諏訪図書、旧江戸屋敷用人渡辺三行、後任の上田右次馬、その父上田宗夢、近藤主

馬いづれも土牢にあつたのである。

江戸城内の松の廊下である。

「千野兵庫殿、勅使下向の接待役ご苦労に存ずる。」

親藩で諏訪のお家騒動の解決の立役者だった、松平乗寛は江戸城内で兵庫をねぎらった。

この年、恒例の勅使下向にあたり、御勅使御馳走役に新藩主の軍次郎名を改めた、諏訪伊勢守忠肅が任命され、家老職の千野兵庫は、諏訪へ帰る間もなく江戸に留まり、事実上この大任に当たつたのである。

兵庫は、接待役の諏訪新藩主の介添え役で、烏帽子大紋の藩主の脇に袴（かみしも）の装束で控えていた。

「丁重なお言葉痛み入ります。」

「昨日、越前少将殿に御意を得た。このたびのこと、越前殿も至極ご満悦であつたぞ。」

「いずれ落ち着きましたら、新藩主とともに御あいさつに参上仕る所存。」

松平乗寛は一笑し。やがて乗寛の烏帽子大紋の装束の、畳（たたみ）をこする衣擦れの音が、松の廊下に響いて徐々に遠ざかつていくのだった。

愚鈍（ぐどん）な諏訪藩主には思いも及ばないが、諏訪騒動を大過ない形で理（おさ）め、諏訪惣領家はもとより諏訪の領民を救つた時の氏神は、越前少将の意向を体して尽力した、この松平

乗寛の才覚であつたのだ。

元禄14年(1701年)浅野内匠頭が吉良上野介を江戸城内で切りつけ、即日切腹を命じられた一件では、吉良家が断絶したあと惣領の吉良義周(よしちか)を他ならぬ当諏訪藩が罪人同様に預かつたのだつた。

事件はすでに80年も前のことである。しかし諏訪藩が当事的に身近にかかわつたその伝承と家訓を戴けば、浅野内匠頭が松の廊下で犯したようなミスは、絶対に許されないのだつた。

この時代、尊王派と佐幕派との対立が目立っていた時期でもある。先の見えにくい世情があつた。明和4年には、江戸表に世を震撼とさせた明和事件があつた。

「もし一天の君を尊ばざる者ありとせば、それは即ち賊臣なり。」

山形第弐の過激な尊王思想である。幕府は山形第弐らの尊王派を三十名捕縛し、山形第弐は義に殉じた。以後、京や大阪を舞台に尊王派と佐幕派の国権を巡る争いが起こるのである。

徳川250年の社会的矛盾が、封建体制を自ずから崩壊に導いた時代の流れであつた。

諏訪藩には未だ尊王を大つぴらに叫ぶ藩士はいなかつた。諏訪藩は家老千野兵庫を中心に、幕藩体制に従順だつた。

今や諏訪藩の唯一の家老の千野兵庫は、伝統の勅使下向ご接待役を、軍次郎名を改めた、諏訪伊勢

守忠肅を表立てて、衆人環視のなかで滞りなく演出してのけたのである。

兵庫は諏訪藩の名譽を背負つて、究極のプレッシャーを耐えていたが、勅使下向の接待が無事終わ
り江戸城のこの役から解放された。

勅使下向接待について、諏訪史料叢書では、「御勅使御馳走役首尾能相済勅使ハ御上京遊ハされ候
二付君ハ勿論一統大悦仕候也」と記している。

兵庫は天明一件というお家騒動が決着してから、初めての諏訪郷入りであった。思えば天明元年の
あの手長神社の祭礼の晩、命がけで湖に漕ぎ出て富部（とんべ）へ上陸し、艱難を重ねて江戸へ入府
したのだった。

あれから足掛け2年、忌まわしい諏訪藩主の世継ぎ騒動を解決し、かつ新藩主諏訪伊勢守忠肅のデ
ビュー戦ともいえる、幕府の公式行事の勅使下向へ接待役を補佐するという大役を果たしたのだっ
た。

千野兵庫帰郷のこの日、兵庫は領民から凱旋將軍もどきの大歓迎を受けた。この兵庫歓迎のお祭り
騒ぎでは、中山道の和田峠付近まで歓迎の人々が出向いたほどであったという。

その年、天明二年の諏訪神社寅年のおんばしらは、千野兵庫は諏訪藩唯一の家老職の立場で馬上に
あつた。

おんばしらが終わると、兵庫には、もつと重い大役が控えていた。罪人として捕らえられていた、宿敵諏訪大輔らへの裁許（判決）の大仕事である。

それは兵庫の諏訪への帰郷から、一年近くも経つた天明二年の夏のことだった。未決拘留中のお家騒動の逆賊の口聞（取調べ）が始まったのである。

藩あげての勅使下向の御接待役のサポートや、七年に一度のおんばしら祭の執行が重なったために口聞が遅れに遅れたのである。

諏わっ子大輔

一年前、とらわれの身となつた大輔は土牢にぶち込まれたが、直後取調べはいつごろか牢番に問うと、

「みんな忙しいで、おんばしらが終わってからずらよ。」

来年のおんばしらは皐月に終わる。藩が落ち着くのはかなり先の来年の文月以降であろう。

仄聞すると父の諏訪図書、そして自分の二人の子も同様に入牢していた。諏訪二の丸家は全滅であつた。

「来年のおんばしらまで身が持つかのう。」

大輔は、同様に土牢に沈む身内の体を心配したのであつた。

他に、江戸屋敷元用人の渡辺三行や、江戸屋敷の仕事を引き継いだ近藤主馬と上田右治馬とその父も同様のようであつた。

諏訪に冬が来た。八ヶ岳の峰々に七回冠雪がみえると、諏訪の郷に雪が降るのである。そしてお城の北方の塩尻峠から湖を凍らせわたつて来るのが、塩嶺おろしである。

これら雪責め、風責めを受け、真冬の土牢は死ぬほど凍てて、排泄も垂れ流しであつた。牢番が箠（むしろ）を格子（こうし）の外へかけてくれてもほとんど防寒に効果はない。八大地獄にさえも、これ以上の肉体苦はないであろう極寒である。

大輔はすでに見えぬ目で、ボヤつとしたあかりの方向を見てブツブツとつぶやくのだった。

「八熱地獄（八者責める八つの地獄）に極寒の苦はなし。また、八難（仏と隔絶される八つの境界）に獄舎の仏法含まず（身も心も救われない）。」

それは何かの呪文のように土牢に木霊した。

そして年があけ、今は弥生の末の気配であつた。諏訪郷に季節の変わり目のカミ雪が、あたりを白銀に変えた。この雪は諏訪に春をもたらす天からの便りである。

さらに数週間を経て、諏訪の酷寒に辛うじて耐えたある日のことであつた。ふと見た牢の壁のコケの色かわりに気づいた。一面カビのような黒いコケが、少し緑色に変色しているのであつた。気がついて改めて獄舎から見た空は、早春を感じさせていた。

大輔は日々同じ姿勢で、ぼんやりとしたあかりの方に見えぬ目を向けていた。

もう立つこともできなかつた。牢につながれた身に明日はない。このまま朽ち果てる身ならば、煮るなり焼くなり一日も早く決着して欲しい。

寒気に朦朧とした大輔の前に、二十年も前の小阪の観音さまが現れた。そしてその笑みは、あついで組み敷いたあのときの、沙良の吐息と笑みに変わっていくのだった。そして大輔には子を抱きあやす沙良の姿も見えていた。

「なぜ、斯様（かよう）にも、沙良の幻に引かされるのだ。」

大輔は、沙良との二人の仲に、なにかもつと不思議な因縁が残っているの思慕かとも思うのだった。

いつか日も流れ、ふといずれかから勇壮な数百人の掛け声が聞こえてくるような気がした。幻聴とまがうものだったが、遠くから風によつて確かに聞こえてきた。今日は おんばしらの里曳きの日であらう。

幼いころ、諏訪藩の家老だった父の馬上から、諏訪明神の氏子たちが、はつらつとして曳く8本のおんばしらの巨木と滴る汗と、おんべ（御幣）を振って美声を聞かせる、ハッピー姿の木遣り衆たちを見た。

目処梶子（めどてこ）衆は左右に振りたくられる、カタツムリ型に見える目処梶子に綱で足場を作りおんべ（御幣）をあわせて振り、曳き子を叱咤する絵であった。

いま暗い牢で大輔が見ている幻聴と幻影は、まぎれもなくあのときの領民たちのものだ。

おんばしらの木遣り衆の美声と、曳き子の掛け声に心騒いでやまない大輔であった。

しかしその大輔は、すでに栄光も消え去った一塊の偶像に過ぎなかった。いまやあの大輔は、暗い牢に矜持（ほこり）も失い、ただうごめく罪人である。大輔の目には涙があった。

諏訪大輔は、偶々（たまたま）諏訪藩の家老家に生まれ、生まれながらに領民の上に立つ立場だった。

その地位にあつたという矜持は、後の世に残る歴史が、例え稗史（はいし）二七の歴史）であつても、我が一族の万死をもつて伝えられるだろう。

敵方がした悪辣な行為すらも、すべて敗軍の将とその一族郎党にかぶせて真実を獄門へおくり、勝者自らは正義の使者を標榜するに違いない。

「千野兵庫との勝負に負け、一二の丸派の覇権に失敗したわしにも、まだ男気はある。」

大輔政権に幾多の瑕疵ありといえども、大輔は義侠をもつて領民に寄り添つて藩政に当たつたという確信があつた。そしてかつての栄光の保持者の証（あかし）として大輔は、その義侠心の散華を念じた。

「言い訳はすまい。」

大輔は、牢獄の壁に向かつた叫んだ。

「我が一族とわが身は滅ぶとも、我が骨肉を肥（こやし）として郷の土へ還元し、草木一本なりとも増やすべし。」

それは残俠誦わっ子の本音であった。

そのときふと数十年前、小阪観音院の方丈が、大輔と兵庫に諭した運命的な一言がよみがえるのだった。

「禍福門なし、唯、人の招くのみ」

いいことも悪いことも、設えられた門から入ってくるわけではない。当事者が自らの行為によつて招くものだ。

刑場の露

裁許（判決）は二百人の多数に及んだ。罪名はすべて主君への逆意であるが、どこを見ても主君への反抗などなかったはずであり、処分は権力争いに決着をつけたけじめだった。

罪状などは、後からいくらでもでっち上げられるのである。したがって名指しされた罪人への個々の処分説明は大雑把な形式だった。

天明三卯年七月三日早朝に獄屋之前へ諸役人各罷出左之通の次第として、誦訪大輔部屋住家老職図書俵百五十石三十人扶 四十三才（罪状） 〳〵逆意之致方加之〳〵 重々不屈至極重罪之者二候

得共一度御家老職をも相勤候付別段之御召を以て切腹被仰付候 獄屋之前二而疊二疊敷白帷子（かたびら） 浅黄無紋之上下（かみしも） 介錯徒士目付 安藤友左衛門 介添 藤沢源八

裁許（判決）では、死刑に相当する重罪は、お家騒動の主役連中である。

諏訪大輔は切腹、渡辺三行、近藤主馬、上田右治馬、その父の上田宗夢は打ち首、諏訪図書及び大輔の二子は永年入牢、ほか200名に及ぶ多数がお叱り等の軽罪であった。

最高の刑が死刑であることは古今変わらないが、現代の一身専属的な死刑に比して、当時は、身内に類が及ぶ制度となっていた。即ち本人のみならず一族が連座したのである。

諏訪藩筆頭家老の諏訪図書と、大輔の二人の子の位置きは水牢だったが、いつそ打首のほうが人道的だった。結局この二の丸の主役たちは、三人とも3年以内にすべて牢死して果てたのである。いずれも蛇の生殺しであった。

この時代の刑法の刑種は、叱り・押込・敲（たたき）・追放・遠島・死罪の6種類となっているが、実際には他に多数の刑が執行された。それだけ時代とともに犯罪が多様化したという証拠である。

それをざっとみても、切腹、打首、流罪、水牢、入牢、欠所、預座敷込、預蟄居、御取上隠居、御取上、蟄居、閉門、逼塞（ひっそく）、御預、手錠（鎖）、戸ヅ、遠慮、屹度叱置、叱り、押込、慎み、など数え切れないほどある。

江戸時代の後期、蛮社の獄で永蟄居とされた三河国田原藩家老の渡辺崋山は、罪の裁許を受けると翌日切腹して果てた。

為政者側は、自らの名をもって死罪などの重罪を裁許し、そのため疎まれる立場を好まず、軽罪で

あつても罪自体を罪人が己が恥辱と心得て、処刑執行前に生害（自殺）して果てる武士のモラルを念じたのであつた。

諏訪騒動の裁許のなかでは、武士以外にも罪人を連座させ、一連の刑の体裁を整える工夫もあつた。

江戸屋敷の料理人を連座させているのは、世継ぎの諏訪軍次郎君（きみ）の毒殺を企んだというシナリオの正当化であろう。

また、上田右治馬家来と書かれた、塩沢村（現茅野市）の幸七にあつては、調伏の呪者というシナリオで手錠刑を課している。この調伏の呪者の連座では、諏訪神社上社前宮神原（ごうはら）の周泉院ほか個人数人が断罪されているが、諏訪騒動のプロット（筋書き）に沿って創られたものである。

これらを要すれば「逆意」と言う名目で、二の丸派への報復と排除を行なつたというシナリオに尽きるものだった。

この逆意方（ぎゃくいがた）処刑執行日は、天明三年文月三日である。

その日、諏訪大輔は既に、在牢一年を越えていた。

処刑は朝四つ半、即ち午前11時と定められていた。牢番は、朝五つ半（午前9時）には最後の食を供し、藤丸かごで刑場へ送り出す手順に従つて準備した。

ところがあろうことか、処刑の朝、牢番が格子から覗くと、大輔は既に絶命していたのである。大輔は、なぜか牢の格子とは逆を向き、両手を北側前方へ伸ばした姿勢で息絶えていた。

その手の方向は、諏訪湖のむこう岸の小阪観音院を指してた。

牢番が昨夜半に見た大輔は、目も開くことはなく、わずかに指先を動かすのがやつとの有様だったという。

この連絡をうけたトップの家老千野兵庫は怒りくるった。この刑執行全体の現場責任者の、五味介丸は兵庫の腹心で、往年の兵庫の防衛役であった。

兵庫は介丸の顔に、持った扇子を叩きつけ色をなして怒鳴った。

「たわけもの。武士の情けもわきまえず。おぬしらの役は、大輔が本日切腹できるよう、処刑までに体力を回復せしめることだったのじゃ。罪人とはいえ、あたら生ある大輔を牢で犬死させるとは何ごとぞ。」

五味介丸は、己が面前で怒りまくり、思いがけずも涙まで隠さず見せる家老千野兵庫の剣幕をみて、ハツと思いつたるものがあった。

「今、御家老の心は、われらの何の申し開きも届かぬほど翔んだ彼方にある。それは諏訪大輔殿との世界であろう。」

側近の五味介丸は、日来（日頃）は温厚を装い胸のうちを見せぬ家老千野兵庫が、地団太を踏んで取り乱す様を見て、やっと兵庫のあからさまな真心に触れられたように感じた。

「まことに申し訳ないことにて候。拙者どもの越度（落ち度）。この上は如何様（いかよう）にも、ご成敗を。」

「えい。聞かぬ。聞かぬ。さがれ。」

家老千野兵庫は、平伏した五味介丸を、正面から思いつきり蹴つ飛ばした。

しかし死んだ大輔を生き返らせる術はいずれにもなかった。

「改めて、諏訪大輔の切腹を本日執行せしめる。」

家老千野兵庫の決断であった。

「名誉刑である。諏訪大輔に立派に切腹させる場を与えねばならぬ。」

兵庫は、五味介丸を呼び密かに命じた。

「大輔の牢死について、守秘の対策を講じるべし。」

受命した五味介丸は、直ちに諏訪大輔の牢死を知り得るもの数名を拘束し隔離したのだった。

刑場には、諏訪大輔の切腹執行のため、白帷子（かたびらⅡ正装）が用意され、一応の切腹の形式は整えられたのであった。

切腹刑はあまた罪人のうち、唯一、元家老の諏訪大輔だけであったが、刑執行にあたっては困難を極めた。

刑場に畳（たたみ）二畳を敷き、その背の位置の地面に杭をうった。この杭を支えにして大輔を

縛って支え、正座の姿勢をつくろって見たが、如何（いかん）とも格好がつくものではなかった。

形式上始めに、役人が罪状の告知を、声を張り上げて無意味に演じた。

そもそも人間は寿命を基準に、順次この世から葬られるのが摂理である。死刑廃止論者の論を待つまでもなく、死刑執行とは世の法制によって、死刑囚という人の余命を断つ行為であり、その合理を形成する手続が裁判である。

しかし死刑囚が病死であれ虐待死であれ、死刑の執行前に獄死した場合は死刑の執行はない。死んでしまつては刑の執行の余地がないからである。

然るに千野兵庫が命じた切腹刑は、死んでいる大輔に対して切腹刑を執行せよというものであった。

既に死体となつていた大輔の遺体は、やむを得ず地にころがされ、刑吏の手により鉞（よき）で、薪（まき）を割るように首をはねた。

大輔の処刑に立会つた諏訪藩家老の千野兵庫は、首を切断された大輔の遺体を検分した。

「ゆるせ、大輔、これは名誉刑であるぞ。」

兵庫はつぶやいた。

それは幼児宮川の瀬で二人、はつらつとハヤを追つた、あのとときの竹馬の輩（ともがら）の大輔とは、似ても似つかぬただの肉塊にすぎなかった。

千野兵庫はすべてが終つた今、自分の心底と現実との整合がとれない葛藤とむなしさに襲われている

た。

「ゆるせ、大輔。」

兵庫は、もう一度つぶやいた。

諏訪騒動を振り返り、リターンマッチに例えれば、それは三回戦で構成されている。

宮川、上川の氾濫に伴って立ち上げられた災害復興新役所の混乱から、二の丸諏訪大輔の指弾により三の丸千野兵庫が左遷された事件を、明和一件という。

明和一件で千野兵庫を駆逐した諏訪大輔が政権をとったものの、その8年後に大スキャンダルを起こし、今度は千野兵庫にそれを指弾されて、諏訪大輔政権が崩壊した。これを安永一件という。

その後、諏訪惣領家に世継ぎ騒動が起き、明和一件で勝った諏訪大輔と、10年後に安永一件で勝った千野兵庫が、世継ぎ騒動を名目に決勝戦で覇権を争ったのである。

この二の丸派と三の丸派の決勝戦を、天明一件というが、戦果は、三の丸千野兵庫が勝ち、諏訪大輔の二の丸派が完膚なきまで叩きのめされたのであった。

ここに諏訪騒動のチャンピオンの栄冠は、三の丸派の家老千野兵庫が獲得することになったのである。

諏訪大輔の死体は諏訪市内の某寺の隅に埋められた。未加工の大石に法名を、「了性」と刻むた

の目印にすぎない墓標である。

了性 は、法名か目印か判然としない。伊豆七島の新島（にいじま）の島流し流人の墓にも、「刃」と彫られた目印（しるし）がある。大輔の「了性」も目印（しるし）の一種かもしれない。

なお、大輔の戒名は存在したが、その扱いについて、く大輔死骸ハ〇〇寺へ遺し処夜二入頼岳寺ヨリ僧来て葬則其戒名を大輔妻女之方江為持遺し候所妻女の曰く

「く併不忠の仁二御座候得者先祖の位牌と一所二置かたく御返し申候」

と、稗史が物語っている。

要すれば、大輔の死体を某寺に埋めるその夜、頼岳寺から僧が来て弔い、戒名を書いてくれたので、それを大輔の妻のところへ持参したところ、大輔の妻は、

「不忠の罪人として処刑された大輔の戒名を、祖先の位牌とともに仏壇には置けないので、せつかくですがお返しします。」

と、言って受け取らなかつた。したがって大輔の戒名は一度は存在したものの、妻女の手で破棄されたというのが実情である。

大輔以外の処刑では、元江戸家老待遇で権勢を極めた用人渡辺三行など、四人の打ち首の死体については引き取り人もおらず、周辺の寺も死体の処理を忌避したので、刑吏の手で刑場の隅にゴミとして埋められた。

諏訪大輔の埋められた寺は高台にあり、北向きには諏訪湖を望んでいる。

奇しくもその諏訪湖を隔てた対岸には、ほぼ同じ高台の位置に小阪観音院が向かい合っているのであつた。

小阪観音院は生前の大輔が16歳のとき、寺娘の沙良と結ばれた思い出の地であつた。

小阪観音の女

小阪観音院の方丈の娘の沙良は、この二十年間の諏訪の騒動を自分の目でしっかりと眺めてきた。諏訪大輔との逢瀬はあのかの一年でおわつた。

大輔が旗本の娘を娶つたからである。以来諏訪湖を隔てて東西に離れたまま永い時を送つてきたのである。

沙良は時折、埋み火（うずみび）が燃えあがるような大輔への恋しさを耐えねばならなかつた。そんなときは小阪観音院の崖上にあがつて、湖水の南東の衣ヶ崎に浮く高嶋城を遠望して大輔に思いをさせた。

おんばしらが終わった年の葉月は、普通だつたら領民は祭事が一段落し、これから農事に励めるシーズンとなる。しかし今年はお城に異変があつた。聞いたこともない獄門などと、血生臭い言葉が飛び交つたからである。

今年も秋が来た。沙良にとつては特に今年の秋はさびしいものだった。

沙良にとつては諏訪大輔の切腹や、未だ入牢中の大輔の親の諏訪図書や大輔の二人の子の行く末を思うと、身の毛がよだつほどおぞましいものであった。

沙良が大輔の忘れ形見の省吾を出産した二十年も前のこと、方丈からこつそり伝え聞いた大輔の父の諏訪図書は、参拝にこと寄せてこの小阪観音院を訪れ、沙良に因果を含めるのであった。

「沙良殿。大輔の子の出産のこと、決して世に漏らしてはならぬ。大輔本人にもじゃ。

生まれた子はそなたの子として育くむべし。わが諏訪家は不知。辛かろうがそれはおぬしと子と大輔のためじゃぞ。よくよく了見せよ。子の扶持は私（わし）から送る。」

大輔は蚊帳の外にあった。その二十年後の政変で大輔は、沙良が大輔の子をなした事実を知ることもなく切腹して果てた。

沙良もまた大輔の知らないところで年をかさねてきた。それぞれに流れた年月は、二人が別々な忘れ物と拾いものをして過ぎた年月だった。

今となつては、殊に諏訪大輔の子を抱える沙良には、子が現政権側の残党狩りの槍玉にあがるのが恐怖であつた。省吾が大輔の隠し子と公に判明したときは、大輔の政敵によって容赦なく抹殺されることは必定である。

諏訪郷の季節の推移は世の動静と無関係であつた。湖岸の柳はみどりのまま風に揺れていたが、対岸の唐沢山は、秋という季節に溶け込んで鮮やかな赤に燃えていた。

諏訪騒動による二の丸派の処刑が終った数ヶ月後のことであつた。

「おつかさま、今日は、お城の人が来るらしいぜ。」

すでに二十歳になる省吾は、寺男として観音堂の清掃に余念がなかつた。

「おう、ほうかえ。ほいじゃあ参道をよく掃いといとくれや。」

数ヶ月まえから諏訪大輔一族が処刑されてしまつた後、沙良はその吹き返しに煽られるような不安があつた。その不安とは省吾が、父大輔と瓜二つといえるほどまつぎ（似ている）であつたことである。

「だれかに悟られたら困る。」

小阪観音の参道の脇は笹竹の藪である。片側は切り落としてやはり笹竹の斜面となつていた。このたたずまいは三百年も前の小阪城の城壁の遺構だつたが、すでにそれは崩落してママ（土手）となつたものである。省吾は祖父の方丈から、

「諏訪家の安泰を御寮人の姫さまにお祈念されるため、ご家老さまがおいでになる。」

と、聞かされていたのであつた。

「われら御成門（おなりもん）でお待ちするが、お前は湖畔の取り付け口に待って、ご家老到着次第こちらへご案内申せ。」

御成門とは仰々しいが山門のことである。ここが城砦だつたころは、將軍家がくぐる御成門だつた

かもしれない。

「ようこそおわたりくださいました。」

「じゃまをする。方丈殿は息災かのう。」

「案内（あない）いたします。」

諏訪藩家老の千野兵庫は、数人の共を従えて山門へののぼり坂にかかった。兵庫はすでに四十路（よそじ）半ばの年格好である。

諏訪大輔を始めとする政敵を一掃し、江戸屋敷のトラブルメーカーの旧藩主諏訪忠厚を隠居させたあと、三の丸家老として兵庫が担いだ旧藩主長子の諏訪軍次郎が、諏訪忠肅と名を改め、伊勢守に任じられて諏訪藩主になるなど、兵庫には今はまさにわが世の春であった。

奸賊の処刑を執行したあと兵庫は、公務の合間の寺社参りに余念がなかった。この葉月の盂蘭盆には、兵庫はひそかに処刑で逝つた政敵であり、竹馬の輩（ともがら）であつた諏訪大輔の冥福も祈つたのであつた。

罪を憎んで、人を憎まずというが、兵庫はそれを地でいったつもりであつた。ただし、その人たるや、既に鬼籍に入つた「人」であつた。

そして今日は諏訪家の祖の御寮人の姫様一系へも、ご報告傍々参拝を思い立つたのだつた。

「ようこそおわたりくださいました。」

方丈と娘の沙良が迎えた。家老千野兵間は下馬の折、案内（あない）役の省吾の顔をまじまじと見

て言った。

「いずれかで遇（お）うたかの。そちの名はなんと申す。年は。」

山門に並んで迎えた方丈と沙良の前で、兵庫は改めて省吾を正面から見た。そして兵庫は省吾の顔に、いずれかに置き忘れてきたような懐かしい佛（おもかげ）を感じて思案したのであった。

諏訪藩のトップがこのような場で、軽々しく寺男ふぜいに声をかけることなどは普通ありえない。それを方丈が引き取った。

「これは寺男でございます。さあ。こちらへ。本堂へご案内します。」

話は方丈の機転で途切れた。

兵庫は寺男と呼ばれた省吾のその緊張した丸顔をみて、そこはかかない妙に懐かしい雰囲気を覚えた。

さらにそこから本堂の御寮人の、姫さまの観音像のほうへ歩み始めた兵庫は、誰にか声をかけられたような錯覚を覚えた。

「はて。いま、なにか申したかな。まか不思議な。」

兵庫は絶句して、自分の後方でじつと傳（かしず）いている省吾をもう一度振り返った。

そのあたりには、ただ湖水からの微風が光っているだけだった。

兵庫は小阪観音院の参拝と、諏訪家の祖の御寮人の姫様の系へのご報告をすませ、湖南（こなみ）

村から衣崎（ころもがさき）を經由して、兵庫の政治活動の拠点の温泉寺へまわった。馬上から諏訪湖の小波（さざなみ）に秋の陽が細かく反射して湖は銀色だった。

「千野殿、おつかれであろう。諏訪藩はおちつきましたかな。」

天道上人は、向かいあつて茶をすすする兵庫に語りかけた。小春日和であった。

「天道様のお力の賜物です。感謝申し上げます。」

「よいよい、しかし犠牲も多かつた。よくよく供養せねばのう。」

今年もボサ菊の黄色が映えていた。

「本意ながら。勝ち戦で敵方の将の首を挙げるは天下のならい。やむを得ません。」

「それはよい、敵将も本望じゃろう。」

そして上人は、動態的にうつつすら紅にかわりつつある西の山端を見ながらつぶやくのだった。

「思えば、大義のない争いじゃつた。武士の至誠を手玉に取り、領民の目を恐れぬ愚であつた。」

「藩政是にして、民その堵に安んず。」

兵庫は、古典の辞で返した。

「だが兵庫殿、落ちついてみれば、これは天下万民にかかわらぬ、ただ藩内の私闘にすぎなかつたのではあるまいか。」

「さて。さて。」

天道上人の正論を受けて、兵庫は返す言葉もなく苦笑した。

薄暮のころ兵庫は菩提寺の温泉寺を辞し、湖の見える寺の奥庭を通って山門へ向かった。境内に夕焼けの鐘が響いていた。

名家老

数年後、諏訪藩は落ちついた。既に二の丸は消え去り館（やかた）の名称だけ残った。これは当面、藩政の業務室に転用したのである。

いまや諏訪藩唯一の名家老の千野兵庫は、藩政の最高権力者であった。その行政手腕は余人（よじん）をもって代えがたい、と内外から認められるほどの名家老であった。

国許（くにもと）名家老を一人制にしたことが、藩政をやり易くもしたのである。

兵庫は主に、民生に目を配った。藩内の各村々の声を最大限取り上げ、民生の安寧に寄与する政策を打ち出していた。

昔、大輔と並んだお伝え（進講）の場で、小阪観音院で方丈は、地方政治における長官の心得を語った。中国後漢時代の諸葛孔明を引合にして方丈は声高々に、

「領民を慈しめ。領民を敵に回してはならぬ、」

と、論したのである。以来兵庫は、この方丈の説諭をひと時も忘れたことはなかった。

兵庫の施政の善政の一端を示す、大岡裁きもどきの挿話がある。

上諏訪郡（現、諏訪郡）乙事（おつこと）村の名主の五味伝兵衛が書き留めた業務日誌の「萬年書

留帳」が元ネタである。

このころはまだ日本狼がそこ此処に出没し、自然以外に触れ合うものがない民には、日本狼の撲滅が最大の課題であった。

現今、絶滅危惧などと正義感を主張してやまないくじらの保護団体等とは、全く逆の主張である。生命に害を及ぼす日本狼を駆逐したい日本中の切実な願望は、現代人が癌を駆逐したい願望と共通するものだった。

寛政十一年八ヶ岳山麓の乙事村で、村人が狼に襲われ食い殺される事故があった。

何人かの村人が、狼のリベンジで襲われて瀕死の重傷を負いながらも、それをものともせず果敢に狼退治をした顛末と、後日談が詳細に記録されている。

この情報は翌日、民生重視を標榜してやまない、諏訪藩家老千野兵庫の元にもたらされた。

後に、宮川小学校元教諭の五味豊子氏がこれを掘り起こし、アレンジして地域に残した遺稿である。そして昭和のころ、この話は地域の童話で「信州上諏訪郡乙事次郎兵衛狼合戦」と題され、幼児の教材としても普及したものである。五味豊子氏は筆者が宮川小学校一年生の時の担任教諭であった。先生はそれから50年後の没年前に、手がけたこの地域童話について、次のように熱く語ってくれた。

乙事村村民の次郎兵衛と伊右衛門、茂兵衛が草場へ行く途中、松兵衛が慌てふためいて来るのに出遭った。

「この先で、吉右衛門が狼に襲われている。」

老齡の松兵衛には、危機を知らせるため村へ走らせ、3人で現場へ駆けつけた。吉右衛門は狼の下敷きになって、息絶え絶えとなっていた。3人はあたりの石を拾って狼に投げつけた。

狼は3人に逆襲し、次郎兵衛にも噛みついた。伊右衛門は二箇所かまれて戦意を喪失して逃げてしまった。次郎兵衛と茂兵衛は狼を殺したいと思うが、何しろ狼は力が強いので、抱き伏せても後へ抜け出てしまう。このままでは返り討ちで二人ともお陀仏である。

「どうせ死ぬのなら狼を殺してから死にたい」

と、とつさに思い、

「南無、諏訪大明神」

と、唱えながら左の手で狼を押さえ付け、右の腕を狼の口の中へ肩までも突っ込んだ。そのとき駆けつけた兄の常右衛門が、組み伏せた狼の頭を、棒も折れんばかりに打ち据えやっとな狼を退治した。

吉右衛門の死骸を見ると、すでに狼に食われ骨ばかりだった。次郎兵衛は、傷口から滝のように出血し、体中狼の歯で負傷し衣服は真っ赤になっていた。

しとめた狼は、木に吊るし、奉行所役人の検分の後埋めた。

次郎兵衛、伊右衛門の傷の手当てには、立木様（たちきさま）開業医の（こと）の指示で、上諏訪の大山了円様と甲州中郡行室の五郎兵衛から妙薬を取り寄せた。

傷の癒えたころ、諏訪藩家老の千野兵庫が、奉行を通じて次郎兵衛ほか四名の狼事件の被害者を、高嶋城の三の丸屋敷へ招いた。

諏訪藩家老の千野兵庫は、青砂利の中庭で応対した。

「大儀である。その方どもの狼退治の模様を語ってくやれ。」

次郎兵衛は、口下手だったがトツトツと一切の経過を家老の前で奉った。家老の千野兵庫は、身を乗り出して百姓共が互いに命を賭して協力し、ついに狼を退治したいきさつを感動して聞き入っていた。

「次郎兵衛ほか皆のもの。武士も及ばぬそち等の勇氣とその俠氣に、この家老は感じ入ったぞ。みなな今後は内外にうけた傷を厭（いと）い、治療に専念するように。」

兵庫は、百姓五人に笑いかけ言葉を継いだ。

「本日は折角（せつかく）である。屋敷内で馳走いたす。心ゆくまで過ごすがよろう。勝手へ回れ。なお、そちたちへ褒美をとらせむ。」

家老千野兵庫は、居並ぶ五人の百姓へ、それぞれ高槻（たかつき）に盛った菓子に一両（約20万円）の金子を添えて恵与した。

「ところで、狼は群れの生じや。報復を企て村を襲うやもしれぬ。村をぬかりなく防衛せよ。」

兵庫は、その場に同席した奉行に、乙事村の警備態勢を強化しよう命じたのであった。

十三回忌

二の丸諏訪大輔一統が処刑されてから、すでに13年を数えた。

諏訪郷に年月は流れ、流れ去ったその13年は誰にも永かつたが、没した仏にも永かつたはずである。

兵庫は、政敵であり竹馬の輩（ともがら）の諏訪大輔をはじめ処刑した罪人を、己が流儀で密かに供養していた。多忙な彼岸の公式行事をかわした後、兵庫は天道上人とともに十三回忌に臨んだのであった。

その根底には、兵庫の信仰心に由来するものがあつた。兵庫は、諏訪騒動で二の丸一派の多くの政敵を抹殺した、兵庫が最高責任者として主宰した刑場のおぞましい光景は終生忘れられぬものだった。

殊に、鉞（ヨキ）で薪を切断するように切った大輔の首からは、血が飛び散り刑吏の袴は血の色にぬれた。

元用人渡辺三行は、打ち首の際すぎましい形相で虚空をにらんだまま絶命した。後に、水牢刑に付せられた元家老の諏訪図書は、垂れ流しの土牢で光も見ず朽ち果てた。大輔の二人の子も同様であつ

た。

死んだ人が再生する機会はありません。いかなる死に様（ぎま）で死のうが、死ねば肉体は朽ち果て、意識を司る頭脳も肉体の一部として朽ち果て、すべては消え去るのである。

骨、爪、髪、など無機質は現象的に遺る物質であるが、それが一人歩きして生前の己が姿を主張することは無い。同時代にこの世に生きた身内や知人が後から故人を語り、生前、澆刺と生きたその人となり、あの時この時の故人の喜怒哀楽を偲び、思い出してやるのが供養である。

それはあくまでも、生き残った人の五感に残った故人の断片的な姿に過ぎない。

兵庫は巡る回忌の都度、堂内で密かに独り合掌し、天道上人の読む陀羅尼経で己が心の寂寥を滅した。

今日は、大輔などの十三回忌であった。

「お上人。大儀。これは些少ながら十三回忌の布施にてお納めを。」

兵庫は懐の私費から布施を捧げ、上人は合掌し押し頂いて仏前に供した。

茶の席で兵庫は言った。

「お上人、時の過ぎ行くは、訳（わけ）なしじゃのう。」

「さよう。去るは日に疎くなりきは、善意ながら（＝意図しないまま）犯してきた罪の忘却よな。いかがかな、兵庫殿。」

「忘却あつてこそ、この世の救い。」

兵庫は笑んだ。

「はっはっはっ。兵庫殿は、ちかごろ名家老だったお父上にまつつき（＝そつくり）じゃ。お父上の貞典殿も話題に機転が敏であったぞ。」

天道上人は、目を細めて愉快そうに笑うのだった。

兵庫は、忌祀を済ませた後も漂う抹香に心安らかだった。人目を避けて墓地回りに逍遙すると、諏訪郷の温泉の硫黄臭が漂っていた。

そこには鐘楼があつた。この梵鐘は、永享二年、信州伊那の安養寺のために設えたものである。

それを天正10年に織田信忠の軍が掠奪し、諏訪市中洲にある法華寺まで引きずってきたという。

法華寺は織田信長が滞在したゆかりの寺だが、信長はこのときこの寺を本陣としたので、滞在した半月の間は、日本の政治の中心はこの寺に移ったという。

法華寺の隅に置かれたこのいわくつきの梵鐘は、織田家滅亡の後、当温泉寺開山に際してこの鐘楼に移設したのである。

山門の脇からいつもの鐘が響いた。改めて鐘楼に目をやると、そこには墨染衣の小僧が、槌にぶら下がっているのだった。

ふと兵庫は足を止めた。供養が済んだ安心感からか、童（わらべ）へ安易に声かけられる樂氣が生じたのである。

「そなた名は、いくつじゃ。」

兵庫は鐘つきの小僧に疑を問うた。そしてそういえば10年以上も前に、小阪観音院でも不思議に寺男の風貌に惹かれ、意味もなく声をかけたことを思い出した。

今もまた、同様な場面になったな、と自らの気の起伏を不思議に思ったものである。

小僧は緊張した面持ちで、

「凡（ぼん）と申します。十のときから寺男をしています。」

しゃべり方や立ち居振る舞いは幼なかつたが、その顔にはだれか懐かしい佛（おもかげ）を感じ、兵庫は己が脳裏に、忘れ去つた幾人かの顔を投影してみたのだった。

寺脇のしだれ桜をかわして、城への帰路を馬上で急ぐ兵庫の前方に、衣（ころも）の渡しが見えた。すでに秋の陽は山の端に落ちていた。

城下の鍵の手を曲がつて、高嶋城本丸の裏の土戸門（つちどもん）を左に見たとき、兵庫の意識に脈絡はなかつたが、突然先ほどの、凡と名乗つた温泉寺の小僧の佛（おもかげ）がよぎつた。

「そつた。あれは。もしや。」

兵庫は、思いあたる疑念が浮かんで独白した。が、それ以上は口にしなかつた。

運命の女

すでに十数年もまえのこと、美和は、いまをときめく諏訪藩国老の千野兵庫の側女（そばめ）だつ

た。

しかし兵庫は、自らの側女の美和を、政敵の大輔の寢所に入れ込み、大輔の行状を逐一報告させる間諜（スパイ）役に仕立てたことがあった。そして美和の得た情報を駆使した兵庫は、政敵諏訪大輔の追い落としに成功した。

美和は兵庫によって送り込まれた大輔の寢所で、濃厚な性行為で好色な大輔を籠絡し、寝物語に兵庫の喜ぶ秘密の情報を得たのであった。しかし作戦を通じて美和は大輔の子を宿すことになった。女子（おなご）の宿命的な悲哀である。

兵庫は諏訪大輔を失脚させるといふ目的達成とともに、用済みとなった美和をそのまま放逐したのである。

兵庫が美和を大輔に提供した所以（ゆえん）は、政敵諏訪大輔との生来の関係にあった。幼時から同じ池で飼育された大輔とならば兵庫は同一の女でも共有できた。大輔と兵庫はそれほど近い仲だったということだ。

さて、美和はお役が滞りなく完了した後も、兵庫のもとには戻されず、恋慕の兵庫に再び逢うことは叶（かな）わなかった。そして実家の呉服商の千万両へもどった美和は、ひっそりと大輔の子を産んだのである。

兵庫も大輔も、美和が運命の子を産んだことは知らない。だが、ひとり天道上人だけが知っていた。

それ以後のことは天道上人の才覚で仕組まれた、13年前の諏訪騒動の後始末の一つであった。

美和は、送り込まれた大輔の聞（ねや）から宿下（さ）がりとなつたとき、情報のつなぎ先の温泉寺に駆け込んだのであつた。

天道上人は美和に、声を潜め今後の美和の身の振り方を指示するのだった。

「よいか美和。子を産んだら、その子はこの寺の子じゃ。物（もの）心つくまでそなたに預けおく。くれぐれも自分の子と心得てはならぬ。

子には男女いずれでも 凡（つ）と命名すべし。出産、育児はなるべく目立たぬよう配慮せよ。子が十歳になったらその子をこの温泉寺に差し出すよう。それが母子ともに将来の行方が安堵される、唯一の術（すべ）である。」

美和は、一言反抗した。

「日々、女子（おなご）の身にある業のありよう口惜しく思いいたりし。わたくし女性として、いずれ様に操を奉じたてまつらんや。」

明日の見えない美和であつた。

「美和どの。男女いずれもその性（さが）に生まれしは偶然のこと。女子（おなご）に生まれ、女子で死んで行くは女子の定めじゃ。男（おのこ）とて同じじゃぞ。それぞれの男女がいずれに操を奉じるかを悟るは、もつと永く生きてみんとのう。」

「お上人様。私の身の振りようはいかに。」

「過ぎ去ったことは忘るるのが至当じゃ。美和殿。おぬしはまだ若い。この先、良いことは限りなくあるはずじゃ。男（おのこ）も女子（おなご）も、その性差を得たときから共に己が性（さが）の奴隷である。」

いずれもこの世では被害者なのじゃ。さればこそ互いにその傷を舐めあい、互いに同情せねばのう。その故をもって男女の共存の世は成り立つのじゃ。」

語る天道上人の背の岩座には、半迦趺座（はんかふざ＝略式の足組）の木造地藏菩薩座像が、慈悲深い尊顔で美和に語りかけるように置かれていた。

ここにも小阪観音院の娘の沙良と同様の、女子（おなご）の宿命に殉じる美和という女の悲哀があった。

美和は、産み落とした子の凡が10歳のとき、かつての天道上人の命に従って、温泉寺の小僧として寺へ差し戻したのであった。

凡なる小僧は、まさしく天道上人だけが知る、美和と諏訪大輔の運命の子だった。

長善館

いまや諏訪大輔一族の家系は絶え果てていた。

あの忌まわしい刑場や牢獄の跡は、星霜が移り変わった今日ではその場所の特定はできない。

凡そ死者には戒名を付し、葬儀後の埋葬地には墓標を建て、経文と香華をもって永く供養すべきところ、刑死者の故にすべてを剥奪して土中に遺棄した塵芥の場であった。

その場は世評でも、刑死者の魂魄が浮かばれぬまま、魍魎魍魎と化して留まる地として忌み嫌われ続けたのである。よって忌み地として、藩の公式文書以外には記録が控えられたのは当然である。

その後、諏訪大輔の政治拠点の二の丸の館（やかた）は、お取り上げ後に廃された。そしてほとぼりが冷めるのを待って、二の丸館の跡地は藩校の長善館となった。

藩校は、徳川時代の各藩藩士の教育機関であるが、全国で274校あったという。
このうち同名の「長善館」は全国に4校あった。

「長善」は五経の一つである「礼記」48編中の「学記」からの出典である。元はといえば各藩校は幕府昌平坂学問所で学んだ、程朱学（ていしゅがく＝朱子学）を学ぶ者や儒者の教鞭によって行なわれたことから、各地の藩校にいくつかの類似の名称がみられる。

これ以外にも、軍学と称する学問があった。その時代、平和ボケした武士たちには、軍学という語の響きは新鮮であり魅力があった。軍学者は講義用のテキストを、孫子などの書物からコピペで設え、教授法も自己流でメシの種にした。

幕府へのクーデターで歴史に名を残した、由比（橘）正雪などは、この軍学者の類（たぐい）である。

諏訪藩の「長善館」は、享和三年、天道上人の勧めで、家老の千野兵庫により設置され、諏訪藩の篤学俊敏の士の学びの道場としてあつた。

また、二の丸館（やかた）の跡地には、諏訪大輔の祖が祀つた稲荷大明神が残されていた。千野兵庫は諏訪大輔一族のたたりを恐れ、丁重に別所へ遷宮のうえ安置した。

勝者がたたりを恐れて敗者を大仰に祀る風習は、神話の時代からの習わしである。

残侠諏訪郷

謹厳実直な三の丸家老千野兵庫とその裔は、明治二年（1869年）の維新政府による版籍奉還で、諏訪藩の領地領民が中央政府に属することになるまで、諏訪家の家老職として諏訪惣領家を守つたのであつた。

また縄文時代から連綿、営々と諏訪人民の心の支えとなつてきた地神の諏訪神は、明治元年（1868年）太政官布告による神仏分離策により迫害され、畏れ多くも大祝と神長官の制度は国家により廃止させられた。諏訪明神上社にあつた五重塔もこのとき破壊されたのである。

民の神をことごとく殺してしまつた明治政府は、代わりに国権で神道を唯一の国ツ神とした。そしてこの神道の理念は日本の軍国主義の基本に据えられ、昭和に至るまで富国強兵の国家政策のバックボーンにされたのである。

しかしながらこの神頼みは御利益がなく、敗戦という日本帝国の崩壊を招いたのである。

あまつさえ戦後、奉安殿に祀られてきた現人神も、神ゆえの重荷に耐えきれず自ら神格を否定し「人間宣言」をされ、明治政府によってお仕着せで祀りあげられた国家神道は自滅していったのである。

諏訪のシンボルの湖は、諏訪の湖（うみ）といわれている。創世記から諏訪郷に住みついた人類を育んだ、古代からの記憶の海である。

人類が移り住んできた後も、陰影の濃い山巒に霞たゆとうその風景は、それら未開人の頭脳と薄弱な視野に映っていた。

それは原始の湖畔の影絵であつたにちがいない。

波打つ諏訪湖岸には、諏わっ子の日々の生活をステージにした、大河のような幾多の人生ドラマがあつたのである。了

（出典）

諏訪史料叢書

諏訪教育会編

茅野市史

茅野市

鳴湖水鑑

岩波泰明 編著

諏訪八勝詩 復刻 武居幸重

復刻諏訪郷友会報 郷友会

長善館物語 関之 南信日々新聞社

新長善館物語 片野満 ”

信州上諏訪郡乙事次郎兵衛狼合戦 五味豊子 (1951年度宮川小教諭)

諏訪の史料協力

神長官守矢史料館史料寄託主 守矢早苗 氏

地元有識者 (在 宮川) 五味和子 氏

元 東京都教員(生 岡谷) 増沢和夫 氏

天竜の女(ひと)



諏訪湖上空の天竜の影

プロローグ

遠野物語

汽車を下（お）り、北上川（きたかみがわ）を渡り、その川の支流猿（さる）ヶ石川（いしがわ）の溪（たに）を伝（つた）いて、東の方へ入ること十三里、遠野の町に至る。

山奥には珍しき繁華の地なり。伝えいう、遠野郷の地大昔はすべて一円の湖水なりしに、その水猿ヶ石川となりて人界に流れ出でしより、自然にかくのごとき邑落（ゆうらく）をなせしなりと。されば谷川のこの猿ヶ石に落ちうもの甚（はなは）だ多く、俗に七内八崎（なないやさき）ありと称す。内（ない）は沢または谷のことにて、奥州の地名には多くあり。（柳田國男 「遠野物語」）

遠野の郷

今から1500年も前の雄略天皇の時代には、すでに養蚕は普及して民の豊かな稼ぎとなっていた。天皇から蚕（こ）を集めよ、と命じられた側近の小子部栖軽（ちさこべすがる）が、蚕（こ）を子と違えたという真面目な話がある（山本周五郎「ちいさこべ」）。

ここ、みちのくでも稀少な現金を稼ぐため、農家は1年に数回のワンポイントの副業として、養蚕を行うのが通例だった。春蚕（はるご）から、夏蚕を経て、秋蚕に至る三回の養蚕と、余裕の度合い

によつては晩秋蚕（ばんしゅうさん）を加えて、年四度の養蚕の機会がある。これらをフルに稼動すると、稲の時期を避けたとしても結構過重な労働だった。

稲作には、稲が水に守られて手がかからない時期がある。その隙を狙つて農家の労働の場は、これら養蚕のため田から桑畑へと移るのである。

このときは家族全員が、田から離れた山の畑で、桑もぎ作業にとりかかった。

両手の人差し指に指輪のような鉄刃（つめ）をはめ、親指と鉄刃で下から上方向に葉を摘み、器用に背籠へ入れるのである。

手馴れたもので百姓たちは、2 m近い夏虫色のぎざぎざの桑葉の畑に分け入るや、わずか数十秒のうち一本ずつ桑葉の茂る木を裸にし、葉がなくなった桑木を、自分より後へ押しやって、次々に前進する早業を持つている。

生き物の飼育であるから、養蚕には日々桑の葉が必須である。規模にもよるが、タネ屋（蚕種製造業者）から購入する蚕の幼虫が1 kg あれば、農家の蚕室（さんしつ）は板の間30畳、山の桑畑は5反歩を要する。

田舎の家屋が大型に建られている理由は、この蚕室用の板の間を広く取っているためである。

蚕は10日サイクルで5度脱皮するが、その後は体が透きとおりにヒキた（桑を食べなくなる）状態になる。

それまでは蚕は、桑を食べる分だけコシリ（排泄物）が出るので、食べ残しの桑の葉脈とともに、

日に一回百枚単位の蚕棚（かいこだな）の平たい籠にかけた網を前後二人で持ち上げ、一時間以上もかけて一枚ずつこのコシリと、食べ残しの桑の葉脈を捨てるのである。

ただ広い板敷きの蚕室では、蚕が桑を食べるわずかな音が重なりあつてザワザワと喧騒である。そこは人体には高温に過ぎる保温と、蚕と桑の葉のにおいが充満して籠っている世界である。

雨天の作業は極難であつた。しかもぬれている桑を蚕に与えてはならない制約がある。

ここ、みちのく遠野郷の農家に、この家（や）の次男の上村次郎が誕生したのは大正5年のことだつた。

ちょうど養蚕真つ盛りの時期だつた。産婦の母は広い蚕室の脇の、3畳くらいの布団部屋で産後を過こしたのである。

「おかいこさまが、ヒキた（桑を食べなくなつた）繭繭つくりが始まる。」

と、稲わらを波型に折り曲げる機械で、ガチャガチャとまぶし（繭床）を織りながら、父は、

「へえ、桑はいらねで楽だ。まあ、寝てろや。」

と、言葉少なくて言つたが、母のヨネは産婆の忠告も無視して、一刻もはやく仕事に出たい風情だつた。

農家の主婦は貧乏性である。昼間から布団で横になつて居るのは、取り残されているようであつた。まねなかつた。

産婦の母ヨネは、産後3日目には家事に従事した。

繭は、はじめは中の蚕が透けて見えるほど薄い。やがて指で押してつぶれないほど固くなる頃、まゆかき という作業に入る。繭をまぶしから取り出す作業である。手動けばとり機で繭を覆った真綿(まわた) 状のくずを除去すると、つややかな光沢の繭がはじけるように踊り出し、この期の農家の作業はすべて完了するのである。

繭は白布の大袋へ詰められて、仲介人を経て製糸工場へ集荷され、製糸工場では糸引き女の手で生糸に製造される。

繭にはさなぎが入っているが、生糸の生産過程には繭の煮沸処理の工程があるので、このときやおうなく処分される。

戦時戦後の食糧難の時代には、このサナギを醤油で煮しめて食用にしたものである。

21世紀のレトロを装う食卓でも、サナギの佃煮が供され珍重されている。

種苗として使われる繭は、別に選りすぐったものである。たね屋といわれる種苗所で、蛾の卵から幼虫に掃(ハ工)工程の呼称) かれる。

時々取り残された繭から、10cmもある巨大な蛾が羽化して飛び交うが、これが蚕のなれの果である。

もの心がつくころから上村次郎は、この遠野の寒村で、明媚な自然に育まれた。

普段からほとんど抑揚のない平坦な日々の重なりだが、よく見ると百姓家のライフステージは農事に沿ってメリハリがあつた。

いうまでもなく、植物動物を育てなければならぬのが農事であり、農家はそれに翻弄されるサイクルによって、日々が進行しているのである。

そんななかでも、年一度の秋祭りは盛大だつた。義太夫用の太棹（ふとざお）を叩くあいや節とか、じよんがら節の泣き三味線などを聞かせる芸は定番である。

子供たちが期待したのは、田舎芝居であつた。景気の良い年には、村の資産家の地主さまが元になつて、芝居のドサ一座を呼びよせてくれたりしたのである。

鎮守の森のお堂の正面には、従七位、正八位、勳六等、功五級などと、冠（かんむり）がついた近在の名士の芳名が、寄付額に順じてありがたく大書され、祀りあげられているのだつた。

一座は鎮守の森のお堂前広場に小屋がけた。

その森には、誰も関心を示さないが、享保、天明、文化の時代の女講の碑や、元禄2年の念仏庚申供養塔などが並んでいた。

芝居の演目では、極め付きの赤城の子守唄など、任侠ものに子供たちの人気があつた。

子供たちは、国定忠治のセリフやフリを真似るなどして、その後しばらくは、子供の暇な世界を華やかにしていた。

次郎には兄がいた。ここは長子相続の地であつたので、3つ違いだったが長男と次郎とは親の扱い

も異なっていた。将来、跡を取る惣領息子は年端もいかないうちから、農事の見習いを課せられていた。

稲刈り、稲こきには、尋常小学校も暇を取らせられて田に出た。まともな労働力にはならないが、家の跡取りの心構えを醸成するためである。それはいずれの農家でも当たり前の風景だった。

一方の次郎たち次男坊や三男坊は、冷や飯といわれ、いずれ分家するか、都会へ出るかの不定形の身であった。

尋常小学校への入学は、次郎の生活を変えた。それまで親との世界がすべてだった周辺に、先生という存在が加わり、次郎の目を外向きに変えていったのである。

このころの尋常小学校では、教科書は唯一国定（こくてい）で、濃いねずみの地にシミで表題が縦書きされた、絵もなく色もない表紙の教科書が使われていた。

算数の九九などの暗記とか、地理、歴史など各教科もそれなりに教えたが、なんといつてもメインは修身で、親に孝、君に忠というしつけが尋常小学校の中心であった。

神武天皇から始まる歴代天皇の名前を暗記させられ、教育勅語の暗記も必修であった。奉安殿の前では最敬礼を強要されたのである。

教科書には、神代七代（かみやななよ）や天照大神（あまてらすおおみかみ）などのいわれと、神様のスケッチが神々しく描かれ、神話教育は最盛期であった。

真面目に高天原神話を教える訓導（教員）を通して、次郎は教育への最初の不信をもった。年端も

いかない子供であるが、天の上に戻ればがあるわけがないことは容易に分るのである。

「天皇陛下はいすれにおわすか。」

と問われて、

「天皇陛下は、押入れにおわします。」

と応えた児童の話が、作家坪井栄の、二十四の瞳 に書かれているのは、この時代を象徴的に著わしている。この学校は押入れを奉安殿に転用していたのである。

いずれも国民教育としては、実に無理が多いいかさま教育だと感じた子供たちであった。

明治29年の御真影御下賜に伴う奉迎式心得によれば、旭旗もち、校長、村長、助役、学務委員、議員、その他数種の役職者と訓導、高等科生徒が隊列を組んで行進すべしとある。

学校火災で奉安殿が焼け、ご真影（天皇の写真）を焼失した校長が、自殺したなどの悲劇も語られたのはこの時代の世相であった。

訓導と呼ばれた当時の教員は、多くが尊大な態度で、生徒への体罰も教育の一環と心得ていた。訓導にとって、伝家の宝刀は唯一体罰であった。当時の教育は、調教とか飼育の類であったが、それが普通であった。

生徒にとつては、先生に殴打されるなどは日常茶飯事で、親もそれが当然と思っていたし、子の性を叩きなおしてくれる暴力先生に感謝もしていた。

正月の四方拝（しほうはい）とか春秋皇霊（こうれい）祭とか紀元節の公式行事には、「雲にそび

ゆるたかちほの〜と、訳も分らず大声で歌わされたものである。

この日は、なぜか紅白饅頭が配られる日であったので、子供たちはこの祝祭日を心待ちにした。

次郎は、その名のとおり長男ではない。いずれ家からは出て行かねばならない定めだった。

親は、それを哀れと思ったか、兄は尋常小学校6年だけで終らせたが、二男の次郎は中学校へ進学させた。旧制中学校は5年制である。

次郎は、思春期といわれる中学生になった。やがて次郎は異性にもめざめ、性差を認識すのだった。

よくしたもので、こんな田舎の寂しい社会にも、気を引かれる少女は何人もいたが、男女交際などはハナからご法度であった。

旧制中学校は5年制で、すべて男子校と決まっていたから、女気はいずこにもなかった。

しかし異性へのめざめは、それまでの次郎の古びた世界に、あたらしい夢の世界への広がりをもたらすことになった。それはいつの間にか次郎の胸に、バラ色の雲とともにもたらされた。とはいっても、特定の女友達などいるわけはなかった。

遠野中学校は、遠野にあった。遠野高女もあり、それぞれ朝の同じ時間帯に通学した。

高女生が日々姦（かしま）しくしゃべり合ったり、チラチラと意図的に中学生を見やるしぐさをするのを、次郎も心ときめく思いで横目に見たものであった。

中学校の先生は、後期中等教育はしつけの場ではないと割り切り、生徒により高度な学問の道筋を

教授した。

もはや尋常小学校のような教員による体罰はなかった。しかしその代わりに上級生が、下級生に鉄拳制裁をする事例は見られたので、恐怖の対象は上級生との確執に移っていった。

真面目な四年生、五年生は、高等学校（旧制）などの上級学校の受験を目指すため、そのような下世話なことに目をくれもせず、受験勉強に埋没していた。だから暴力を振るう上級生は、自己を顕示したい直情径行（歯止め欠ける）型の劣悪な二年生とか、体育系でも技量はともかく、勉強のほうは劣る部類の輩（やから）が多かった。

しかし学年進行で滞りない学校生活では、これも自分が下級生である数年間の間のでき事である。これらの相手、すなわち、いじめっ子をうまくかわす術は、二男坊の次郎には、気難しい兄をもつ周辺環境から、既に生活の知恵として身につけていた。

また旧制中学校は義務教育ではないので、成績の順位は達成度別に番付け表で公表され、ボーダーラインを下回る生徒は、退学などで容赦なく淘汰された。

上村は、そこそこに成績は良かった。そして順調に周囲から信頼される上級生になっていった。次郎には、下級生を殴ることを趣味とするような小さなスケールの生徒ではなかった。

その年、昭和6年は満州事変勃発の年である。

巷では古賀正夫の「酒は涙かためいきか」が流れていた。昭和2年に経済恐慌があり、その影響でずっと日本の社会は打ちひしがれていたのであった。

不透明な軍国日本の先行きは、経済恐慌の形で現われていったのである。

次郎の進路

中学4年生になった秋のころ、担任の岩波先生が上村を呼んで言った。

「上村。お前、軍官学校へ行かんか。満州の学校だぞ。その気があれば推薦してやるぞ。」

満州国軍官学校とは、かいらい国満州の国軍の兵士の養成機関である。日本への友好的な軍人の養成を旨とする機関であった。

当時、軍の学校は結構人気だった。陸軍士官学校や海軍兵学校は、一線の幹部兵士の養成所でありエリートに進むコースだったが、その身分は応召兵と同じ軍人そのもので場は戦場である。

岩波先生のお勧めは、この軍官学校や陸軍経理学校などの、後方支援部門の軍学校だった。

「オーソドックスな高等学校（旧制）や師範学校もいいが、今後は、学生の徴兵猶予がなくなるといふ噂もある。今は非常時だから、学業の半ばで召集されるかもしれないのだ。それならば、はじめから軍の後方部門を志願したほうが得策かもしれないな。」

徴兵という兵役義務の制度は、人類の創世記からの遺物である。類人猿でさえ自己保全の手段は、戦いそのものであっただろうから、それが群れて種族を構築した原始の時代から、種族保全のため自衛権としての兵役義務は種族内の掟であった。古代ローマでは外敵が多く、自衛のため45歳までの

兵役義務があったという。

日本の徴兵制は、奈良時代の養老律令の軍防令で、1戸から1人を徴兵したことから始まった。防人（さきもり）の創設である。

近代では、大日本帝国憲法で「日本臣民ハ法律ノ定ムル所ニ従ヒ兵役ノ義務ヲ有ス」と、ハナから兵役の義務が盛り込まれたのである。

上村が知らない大昔から、このような徴兵制度はあったが、この制度はおよそ民意とはかけ離れたところにある制度でもあった。

岩波先生の先見の明はあった。後のことだが、日本の敗戦時には、満州国の消滅に伴って満州の軍官学校は廃止になり、希望する在學生は旧制の東京高校へ転校させた。

また、昭和24年には東京高校は、学制改革で東京大学となった。彼らは勞せず東大卒の学歴が付与され、戦後の社会で優位な学歴に立てたのである。

しかし岩波先生は、上村が4年生を終る年の3月転勤で去り、積極的に希望を表明しなかった上村は、話題の満州の軍官学校へ行くことはなかった。

次郎が中学4年の年度末、岩波先生は、花巻の中学校へ転勤していった。その日遠野はまだ雪景色だった。

岩波先生は、遠野中学校と遠野高女を歴任したので、二つの学校の男女生徒が、岩手軽便鉄道の遠

野駅で、先生の離任を見送ることになった。先生は次郎に、

「次郎。今は、教育界にとつては冬だ。これから日本は軍事一色になっていくだろう。おまえも翻弄されるだろうが、学問は普遍だ。めげずに進んでくれ。」

善良な教員の世界は、軍事とは別のところにあつた。残雪の遠野駅で、岩波先生は次郎の手を握つた。

「孝行せいや。」

岩波先生の最後の指導だつた。白い世界を、一声の汽笛とともに岩手輕便鉄道の黒い汽車は、花巻に向かつて離れていった。宮沢賢治の 銀河鉄道の夜 で、モデルにされた地方鉄道である。

別れの悲哀を感じながら駅舎を出ると、高女の生徒が数人姦しく会話中であつた。同じ町の尋常科にいたメンバーなのでみんな顔見知りである。

高女生はそれとなく次郎を意識しているようだつた。上の学校へ進学後は、男女とも話をするような環境にはないのだつた。その同年の一人は、京子といつてこの地の材木問屋の娘だつた。今は女子師範学校への進学を目指している才媛である。

京子は、尋常科のころから臆面もなく次郎に話しかける闊達な娘だつた。当時といえども、内股で歩く女ばかりではなかつたのだ。

「次郎ちゃん。今度5年生か。上の学校へ進学するか。」

次郎が悩んでいることを見透かすような、あけすけな問いかけた。

「んが。遠野で働く。」

「わたし、上の学校へいく。うちの商売を継がなくては」

京子は、安心したように笑って、再び高女生同士の話に戻っていった。行きずりのちよつとした会話だったが、なにか含むところがあつたようである。

やがて五年生の春秋が過ぎ去り、上村次郎は旧制中学校を卒業した。次郎もがんばったが、親も貧困のなかでがんばった。

クラスの半分は、上級学校や、軍の学校へ進学した。京子も同年に高女を卒業し、師範学校への進学のため遠野を離れていった。

元来次郎にはこれといって、特筆するような才能はなかった。ただ、博物（理科）の教場（きょうじょう）教室で学んだ地学や林業の授業は、山奥の遠野の地域に根ざした実用的な知識として身につけていた。

好きこそものの上手なれ。というが、上村は、家族が日々耕地でいそしむ姿を見て育った影響もあり、それら農事の知識を趣味に変え、この地でフィールドワークに身を投じようと思つたのである。

上村次郎が入社した遠野木材会社はいわゆる材木問屋である。田舎の会社だから入社は縁故が中心である。この遠野木材会社の一人娘が、先日師範学校へ進学していったあの京子だった。

京子は、上級学校へ進学したが、卒業後は家つき娘として、社長婦人におさまる星に生まれた立場であった。

次郎の採用には、京子のわがままもあつたようである。入社は学校紹介だったが、遠野木材の社長が次郎を名指しで引合してきたのであつた。

社長は佐々木といつて、この会社では将来を嘱望され、実績も上がつていた社員だつた。先代の社長の病死を機会に、社長に抜擢されたのである。いづれ京子がこの社長婦人になるのである。

京子は離郷前に、次郎のスカウトを未来の夫の佐々木に焚（た）きつけたのである。

「次郎ちゃんに、この会社へきてもらつて。」

京子のそんな声が聞こえるようだつた。

この仕事はやつてみると、けつこういろいろ異なる職種の職人と接触できた。

木を扱う職人は、まずは「大工」である。大工も、たつき大工から宮大工、果ては建具屋（たてぐや）などという分野まであり、それぞれ扱う材木が異なつてゐる。

扱う材木の種類と規模も、柱、梁（はり）、屋根材、のじ板、床材、天上材、壁材など数え切れない。

特に材質の良好なものは、「銘木（めいぼく）」といい、材木とは区別され、仕入れや販路も異なる。これは書院造りの家の床柱（とこばしら）など、内部装飾の分野であり彫刻もできる職人が取り扱う。

そのほかに、家具屋である。家具は、高級な桐箆笥（たんす）、桜材の茶箆笥やちゃぶ台（座卓）等、実に多数の種類の木工品として利用に供されている。さらには、桶屋、仏具屋、の分野もあるの
で、竹材も扱わねばならない。位牌から棺おけはこの分野である。

社員はトップから事務方を含めて25人ほど詰めていた。ほかに業種ごとに臨時雇いが20人単位
で集められ、従業員は延べ100人近かった。

社員はそろいの丸に十の字が入った屋号入りのハッピを纏い、足には軍靴のような頑丈な靴を履く
いでたちだった。作業員は、ねじりハチマキに股引（ももひき）地下足袋、胸あてのベストに、同じ
ハッピといういでたちである。

巨木の伐採の大道具小道具は、大きいものは万力（まんりき）、そして立木を引くのこぎりは幅
1尺もあつた。鉞（よき）、材をコロで転がすための鳶（とび）、牽引用の輪の付いた木釘、動力は
なくすべて人力である。

搬出は農耕馬で、道なき山の斜面を引き下したり、コロで横移動後に、転がり落とすのである。

会社は木材会社ではあつたが、社長の山つ気から、鉱物資源の探索にも手を出した。新たな事業の
展開である。

近在の山には、鉄鉱石や黄銅鉱等の鉱脈があるらしかった。古来からのハナシでは、金鉱もあつ
て、炭焼きをしながら金鉱を探したとも語られている。

上村次郎は社長の命で、その友人の「山師」について鉱石試掘の坑道を掘ることもあつた。山師

は、

「鉄、銅鉱はどこにでもあるが、実（み）になる鉱はたんとはねえぞ。」

その含有量が問題だというのだった。

鉱山の仕事は山師がその経験を伝授してくれたので、学校で学んだ博物（理科）の地質学の知識が役に立った。

なじみになった山師は、仮泊した古いすみやき小屋で、どぶろくをあおりながら次郎に誘いかけたものであった。

「次郎ちゃん。おれと組んで、全国規模で、鉱脈探しをしないか。」

しかしこの山師は、社長の山つ気を利用して私利をむき出しにするそぶりがみられた。

すでに木材会社の中堅であった次郎は、こんないかさま山師の妄言を真に受けて、会社が博打のよきな鉱山業へ手出しすることには危惧を持ったのである。

「狭い穴倉の息が詰まるところでの仕事はおら厭だ。おら、炭焼きか、きこりのほうがいいべ。」

次郎は、個人的には鉱山に興味を持ったが、この山師のような流離（さすらい）人もどきの不確実な鉱脈探しは受け入れ難かった。

やがて、いつしかこのお騒がせな山師は、成果も上がらないまま、会社へも寄り付かなくなり上村の周辺から消えていった。

10年後上村は、この木材会社の管理職としても、余人をもつては代えがたいほどの腕利きとの評判を受けていた。

遠野木材会社

上村次郎が就職した当時、遠野木材会社社長の佐々木真一は35歳、社員から抜擢され、遠野木材会社の創業家の婿となった男である。

遠野木材株式会社は、地元で木材を扱う業ではすでに100年を数える老舗である。

佐々木社長は、先代が見込んだその期待によく応えて、若年にもかかわらずトップとしての任務を果たしていた。

欠点は若さゆえの、仕事に前のめりの気（け）があることであつた。殊に、感情の起伏の激しさは、社長自らも自分に閉口しているだろうと思われるほど抑制を欠く人格であつた。

春風秋霜という格言がある。他人には春風のように優しく、自己には秋霜の如く厳しくあれ。という意味であろう。

この業界は現場が第一だから、作業員をどう使うか、業務命令をどう受容させるかが会社経営のポイントになるのである。

社長の佐々木の気負った態度には、誰がみても肩に力みがあつたのだ。社員管理をみても、職場に

怒号が飛び交うだけで寛容さは微塵もない「秋霜」であった。

「春風」などどこにも見当たらない、まさに土方（どかた）かヤクザが集まったような殺気立った飯場である。

この社長と作業員との一触即発の危ツかしい職場を、応変に捌いていたのは、既に中堅の管理職となっていた上村次郎であった。

「きさまら。誰のおかげで飯が食えると思っっているか。」

と、これは社長の定番のセリフだった。

「社長。怒鳴るのはよくない。ことを分けて話さない」と。

次郎は、社内の結束を乱す社長の言動を案じて、幾度となく間（なか）に入り引き分けた。

作業員の不満は聞いてやるだけでもよい。それはガス抜きである。すべての事柄が白黒ハッキリ決着がつくわけではないから、グレーゾーンは不満の源（もと）になるのである。しかし作業員の訴えを、聞いてやるだけで不平の半分は解消していく。

この社長のように尊大な態度で、有無を言わさない剣幕で命令していたら、社員の立つ瀬はなくては離れるばかりである。

上村次郎は作業員の不満を「聞いた」た。

次郎が入社して4年目のこと、師範学校へ遊学していた京子が卒業で帰郷し、即、佐々木社長の妻として迎えられた。

華燭の典は、田舎の風習で厳（おごそ）かだった。新居の建設が終って、運びこまれた家具類は、奥座敷で近隣に披露されるのである。わざわざ盛岡の店で調達し運んできたものである。

京子は、高女生のころは爛漫な性質（たちだった）が、年齢のせいか今は落ち着いていた。そして一人前の女性として、才色兼備の風情であった。

京子は上級学校を出ているだけあって、社内管理は適格だった。これら不満の従業員と尊大な社長との確執を、おさめる才覚も持ち合わせていた。

家つき娘として育まれた重みが、社長婦人となっても損なわれず、夫の社長に対しても威厳を示すのだった。

社長婦人となった京子も、立場を変えて上村のやり方を理解してくれた。

「次郎さん、この会社へ来てくれてありがとう。私が、次郎さんを採用するように社長に言い残しておいたのです。社長の行き届かないところは、援けてやってね。」

社長の佐々木は上村の仲裁を受容し、一面では上村を頼りにしたが、気の小さい社長からの反動も大きかった。

二言目にはだれ彼れなく「やめてもらう。」などと腹いせに威嚇する癖は、社長の資質を疑わせるものであった。

そんな会社で就職から幾年も過ぎた今、上村はこの会社には欠かせない実力社員と自他共に認める存在であった。

ところがあるとき突然、上村の一人身上に究極の禍根をきたす、深刻な事件が起こったのである。それは、上村と社長の佐々木との間で起こった。社長と上村は二人で社有林へ入った。国から割り当てられた供出用の材木十数トンの伐採の見立てのためである。

「供出（きょうしゅつ）とは、滅私奉公を嘯（うそぶ）く国への、私有資産の無償提供の制度である。

断れるものなら断りたいところであるが、開戦まえの日本では国家への奉仕は強制義務だった。費用の請求はできないし、まして供出を断るなどは「非国民」とのそしりと村八部の扱いを受ける不正常な社会環境がそこにあった。

隠された罪状

佐々木社長も上村も、重なるお上からの供出命令という実損の強制には、共通して心から反発を保持していた。

供出した材木が実際に戦地で目的どおり使われる保証はない。軍や国の役人が「横流し」しているという噂も聞こえてくるのであった。

その不信は供出への懐疑を招くのはもちろん、それに対応する人間関係にまで分裂を及ぼした。

木々に葉の茂らない春の山中だった。立ち並ぶ巨木にまぎれて可憐なあせびや、そしてその隣には、まだ遠い秋の紅葉を待つもみじが存在をアピールするのがみえた。さらにまたその隣には、三つ葉つつじもあけびのつるに巻かれ紫の花をみせていた。

それは同じ春でも、はんなりした都（みやこ）の風情とはかけ離れた、みちのく遠野の原色の風景だった。

二人は早池峰山中の半ばまでは、きこり道を登っていった。社有林は中腹のあり、その目印は、仙人堂であった。一の時代かに造られた半坪程度のお堂である。遠野民話で語られている仙人の住処。ことの起こりは、遠野早池峯（はやちね）山中で、佐々木が日頃の社員への不満を口にしたことからであった。

売り言葉に買い言葉が相乗して、「材木見立て」どころではない二人の大喧嘩となってしまった。

佐々木の抑制のない売り言葉と上村への殴打の制裁は、上村の憤りをあおるものとなった。

佐々木は、持っていたステッキを振り上げて、上村の肩を袈裟がけに打ちすえる暴挙にでた。

堪忍袋の緒が切れた上村は、素手ではあるが佐々木に「カウンターパンチを浴びせ反撃した。

互いの猪突の争いの結果は予期せぬものとなった。上村のパンチが過剰に過ぎ、佐々木社長は地に倒れ結果絶命することとなったのであった。

最後に佐々木は、驚いたように朦朧とした目と顔を上村に向けた。目はむけているものの目にダメージを受け、見えているかどうかは分からない。そして、

「きさま、おれがそんなに憎かったのか。」

と、自分から仕掛けた喧嘩であるにもかかわらず、その感覚は逆に被害者のような言い方だった。それ以上の言葉は佐々木の苦悶のなかで聞き取れなかった。

まだ興奮冷めやらぬ上村が立ちつくす足元で、佐々木社長は地を這うそぶりで、谷から響く水音の方へ、急な斜面を下方ヘトラバース（横ばい）気味に移動していった。

喧嘩で劣勢となった態勢を、たて直そうとする本能的な動きかもしれないなかった。そこは眼下に遠野諏訪神社を見下ろす崖の岩の張り出し部分だった。上村はとっさに佐々木の転落を抑えようと前に出たが、さらに攻め込まれると勘違いしてか、上村の動きに呼応するように佐々木は身を引いた。

途端に、余地の乏しい崖側に寄った佐々木は、この直後崖下へ転落していったのである。

谷に突き出した山吹（やまぶき）の枝が激しく揺れて、金色のひと重の花びらが、落下していく佐々木を追いかけるように散っていた。

上村のパンチが目だダメージを与え、佐々木は視力を喪失していたのであろう。

そこは山峡（やまかい）の奈落だった。約20mの谷底に転落していった佐々木の体は、途中パウンドし、谷川の鋭利な岩角へ叩きつけられ全く動かなくなった。

誰も見ていた者はいなかったが、先刻二人で最後に見立てた立木に、鼻（ふくろう）がいた。目を丸くして、その一部始終を見下ろしていたが、しばし後にバタバタと地面に接触しそうな低空で飛び去った。

佐々木は収容されたときには、すでに遺体となっていた。

上村と佐々木の確執が、ふとしたきっかけから重大な死亡事故となったのである。

畳の上の病死と異なり、このような死亡では、警察の検死が必要となり現場検証を経ることになる。

ここで生き残っている側の上村の供述の途には、真実を述べるか、隠すか、の二様の選択があった。

真実を述べるということは、犯罪者として自首することになり、隠す方途は虚偽の申告である。

上村は迷った。

佐々木が仕掛けた喧嘩であったが、それによつて喧嘩相手の佐々木が死亡したとなれば、生き残った側の上村は犯罪人として取調べを受け、場合によれば刑事事件として立件されるかもしれない。

現場は目撃者もない深山でのことである。良かれ悪しかれ上村の供述が唯一の決め手となろう。仮に、

「相手が仕掛けた喧嘩の末に、傷つき朦朧となった佐々木が誤つて谷底へ転落した。」

と、正直に供述した場合でも、殴り合いの原因とする上村の過剰防衛の疑いは避けられないし、殊に相手は転落死しているのだから、この事件の不起訴はありえない。

検死で事情を問われた上村は、迷いに迷つたが、佐々木社長との確執にはふれず、

「佐々木社長の転落は、業務下の偶然的事故だった。」

と、説明し現場検証では、

「足場の悪いところで、伐採の材木の見立をしようとし、不注意から谷へ転落してしまった。」

と、半分はうその供述をしたのである。検死でも現場検証でも、上村の言質はことさら警察に対して疑念を与える余地はなかった。

山中での目撃者不在のこの事件は、上村の事実を隠蔽したシナリオに沿って、佐々木社長の事故死という判定で決着した。

この現場検証のとき陳述する上村を、あの殺人現場を見ていた梟（ふくろう）が、再び現われて、背高のみつばつじの陰から、まん丸な目を開いて見下ろしていた。

この鳥には、昼間は何も見えていない。めくら飛行をしたのは、普段めつたに見かけない人間を強力な聴力で感じ取り、とっさの逃避をしたのであろう。

上村が佐々木社長を撲殺した一部始終を見ていた、地球上で唯一の生物であった。

欺瞞の葬式

誰も事実は知らないが、上村はこの故郷の地で大犯罪を犯したのである。その重圧は上村の生涯の傷となった。

地元の有力者であった佐々木社長の葬儀は、実に盛大なものであった。が、だれも佐々木社長の死

を疑問視する人はおらず、また誰ひとり専横で人望に欠ける社長の死を惜しんで悲しむ人もいなかった。

社長の事故死の後、一般の社員と作業員の関心は、職務上自分の地位が保全されるのか、すなわちこの会社は営業を継続できるのか、の一点だけだった。

上村は葬儀進行役であったが、この葬儀はそもそもが、当の上村が犯人となつて起こされたものである。

上村にはこの矛盾が恐ろしかった。それでも上村は、喪主の京子の脇に立つて、何食わぬ顔で葬儀を差配したのである。

葬儀中上村には、佐々木社長が最後に吐露した哀れつばいそのセリフが聞こえるようで、いたたまれなかつた。正面の飾られた佐々木社長の遺影は、

「キサマ、おれが、そんなに憎かつたのか。」

と、上村に迫る気配であつた。

今思えば佐々木は上村が、自分のする暴力でさえ温かく受け入れてくれる存在だと、勘違いしていたのかもしれない。このような心の驕（ひだ）は、弱い男がする夫婦間暴力でみられる。それは夫の妻への、屈折した恋心であるかもしれない。

遠野木材会社の創業家の親族たちは、法人登記ではすべて役員である。これら親族の思いはまた別のところにあつた。

血筋のないお雇い社長の佐々木の死は、創業家にとつては悲しみではなかった。この煩わしい事態のなか、次はだれを社長にたてて業務を軌道に乗せていくか、の一点が関心事であつたのである。

遠野木材会社は百年を越す老舗であつた。それほど永く会社を維持できている事蹟（ことわけ）は、代々の社長には身内を据えなかつたことにある。

世襲を避け外部からの社長を据えることで、社の運営を確実なものとする利を目論んだのである。

多くは子飼いの秀でた社員を、社長に登用してきた。社員から養子に迎えた社長候補者と、身内の手ごろな娘とを姻戚関係にすることで、何代も身内に同化させてきたのである。

これを閨閥（けいばつ）といい、家や事業を守るには最良の継投策である。

茶の湯や華道の、一子相伝（いっしそうでん）は身内への秘伝の伝授だが、伝統を重視する点では、まんざらそれと別ものでもない伝承の方法である。

佐々木社長が欠けた今は、喫緊には家付き娘の京子をピンチヒッターで社長の後釜に据えるにしても、だれか有能な社長を社の内外から招聘しなければならぬ。

創業家親族役員が共通に思い浮かべた社長候補は、押しなべて生え抜きで中堅社員の上村次郎だつた。

故佐々木社長の妻の京子の思惑も同様であつた。

「夫の会社経営は、不穏当なやり方だ。」

かつて京子は、上村にそう話した。

「私なりに社長をいさめますが、次郎さんも、忌憚なく進言してね。」

と、言うのだった。しかし故佐々木社長の独善は、それらの進言を逆恨みする態度で返されてきていた。

ではあるが、いま振り返ってみれば、社長の専横に不信任を叩きつけて辞めていく社員はいたが、社長の佐々木のほうから職権で、主体的にクビにした社員は一人もいなかった。

その事実から見れば佐々木は社員を弾圧したが、本意は逆ではなかったのかとも思われる。彼は社員が離反して去っていくのを、内心では恐れていたのかもしれない。

上村が佐々木を撲殺したときの言動も、上村がふと思ったように、佐々木にとっては上村に甘えなかった現われではなかったか。

上村はあの事件以来、辞職を決意していた。上村は常に罪に意識にさいなまれていた。鬱積した心では破れかぶれに

「おれが、殺したのだ。」

と、大声で世間に向けて叫びたい気持ちさえあった。それができればどんなに楽になれるだろうかと思つたものである。

一刻も早くこの地から永久（とあ）に去りたい気持ちでいっぱいだった。そして辞職にあたって、誰にも納得できそうな、穩当で容易な理由を真剣に考えていた。

佐々木社長の葬儀は滞りなく終わり、佐々木の遺体は埋葬された。葬儀中上村は会社の幹部として、喪服の京子に最後まで付き添っていた。

上村はそうしながらも陣痛のように、繰り返し襲われる罪の意識にさいなまれ、埋葬を早く済ませて、すべてから解放されたい思いでいっぱいだった。

上村が愛した遠野の山や遠く仰ぐ紺碧の空を見ても、いまは誰かに追いかけられているような、脅迫観念がトラウマになってしまい、何の慰めにはならなかった。

うつすらと見える早池峰の景観に救いを求めてみたりする上村に、それらの山々はあくまでも無関心で冷徹であった。

しかし山稜の下に、いくつかの炭焼きの煙が虚空に立ち上っている風景は、ちょっとした救いではあった。

今はバラ炭のシーズンであろう。煙は大きく広がっていた。

葬儀が済んだあと、23歳の佐々木社長の妻の京子は、途方にくれながら、「次郎さん、この会社をやっていかれるように、私を援けてくださいね。」と、懇願するその顔は真剣だった。

その誘いかけは、京子のプロポーズでもあった。社長に就くとは、京子の夫になることである。上村はいたたまれない思いで目を伏せた。

この会社の再興を願う親族の迷惑を、上村は如何（いかに）ともし難い絶望感で受け止めていた。あるときは狂人のように、大声で叫びながらこの場を逃げだしたい思いに駆られたこともあったのである。結局上村は、

「私には、できない。」

と、断るしかなかった。

「だって、おれが殺したのだ。おれが犯人だ。」

京子の憂い顔にせまられる都度、上村の心は張り裂けそうに騒いだ。

故郷さらば

「うさぎおいし、かの山々」とか「故郷を離るるうた」とかの、離郷旅情の唱歌がある。

いずれも望郷の念に満ちた歌であるが、「いい日旅立ち」ができる恵まれた境遇の人たちの歌である。

一方、上村は「逃亡」の人であった。そこには、将来を嘱望する高遠（こうえん）な理想はなかった。ただ打ちひしがれ逃亡するための離郷なのだ。社長の死は事故死とされた。しかし事實は違う。上村が撲殺したのである。

佐々木社長を亡きものにしてその座を奪い、その妻であった京子まで自分の妻にするような卑怯な

ことは究極の罪づくりである。それは昔、鎮守の森でよく見せられたドサ一座の任俠芝居の定番である。悪役が観衆にヤジを飛ばされ、憎まれ役になる勸善懲惡ものの筋書きではないか。

そのようなことは芝居の世界のことである。現実には自分自らを欺き、神々をも愚弄する野獣途(けものみち)であろう。

上村は悩みぬいた。この罪は、いずこで、だれに、どのように償えばいいのか。

ともかく故佐々木社長は昭和16年、40歳でほかならぬ上村に撲殺されたのである。

そしてそれは、上村だけの秘密であり、また糊塗しようなない事実でもあった。

今、公にはお構いなしとされている上村は、いまさらながらすべてを隠し通すしかない現実であった。

上村は、会社を辞職した。去る理由に思い余った上村は、

「仕事で知り合った山師と組んで、鉾脈探しに出る。」

と、すべてをうそで塗りかため、故佐々木社長の妻の京子の悲痛な懇願にも、両手で耳をふさいだのである。

ただ一人、父には伝えた。

「おど。おら、東京サいぐだ。もお、ここへは戻らん。」

今年仕込んだ濁酒(どぶろく)を味わっていた父は、

「ん。たまげだな。ジロ。おめ。会社で何かあったかや。」

「バカ言つて。なんもねー。おら、ずつとめえからきめただ、東京で働ぐど。」

父が、次郎の思いつめた顔を、どのように受け止めたかは分らない。父は、その場はそれ以上語らなかつた。父と次郎は別々の思いで互いの心をさぐりあつた。

この寒村で、父は数反部の田を耕し、同じくらいの桑畑で桑もぎに明け暮れる日々であつた。

普通、百姓家は日常野菜の緑に囲まれた耕地の奥にあつて、鶏やヤギが飼われている。

日々耕す父母は、蓑虫（みのむし）のようないでたちである。手甲（てっこう）に刺子（さしこ）の手袋、地下足袋に母はモンペ、父は股引で雨の日に蓑傘をつけるとまるつきり蓑虫なのであつた。

それから三日後、父は暮れなずむ田から田圃みちを辿つて帰ると、農具を納屋におき言つた。

「おめえは、一男だ。東京さいぐなア止めねえ。んだども誰にも黙つていげ。ガガにも、親族の誰にも言つてはなんね。おども、案じね。後は任せろ。」

母や兄や親族に別れを告げず夜逃げしろ。という父のアドバイスだつた。

父は、ここ数週間、息子の会社の社長の事故死に始まる、息子の司直とのやり取りや周囲の騒動を冷静に見ていた。そして、この子には何か隠していることがある。と見込んでいたようである。

父は、今日は畑に出たが、実は、佐々木社長の転落した早池峰の山中へ足を運んだのであつた。そして、その場所からの転落は、通常ではありえない不自然さを、在の百姓の目で感じ取つたのである。

そして父は、佐々木社長の転落の原因は、単なる本人の不注意によるものではないと見込んだのであった。

「ジロ。早池峰の御堂は、仙人が山で起こったことサ、壁へ書き記すだぞ。」

早池峰の途脇のお堂のことである。むかしから仙人が棲み、この山で遇った特異なことを壁に書くという伝説がある。父は、次郎が起こした犯罪をこの民話になぞらえたに違いない。

親の目はごまかしきれなかったようである。

その夜、心が凍りつくような軽便鉄道の汽笛を聞きながら、上村次郎は故郷を離れることになった。

上村の汽車は、まさに夜の銀河鉄道であった。車窓から天の川の銀河の薄明かりをバックに、黒々と天空に張りついたような、黒い早池峰の輪郭に別れを告げた。

「もう、遠野に戻ることはあるまい。」

上村はそう決意して、ふるさとへの「辞世」を詠んだ。

そしてまた 生きてぞ会わむ この郷(さと)に

銀河の流れ 消えてはるかに

花巻で乗り換え、ひっそり本線の夜汽車で上野へ向う上村は、響く汽笛にまぎれて自らのその言の葉をかみしめていた。ほの暗い三等車は人気（ひとけ）もなかった。

上村は行く先はどこでも良かった。あてがあるわけではない。ただ手持ちの退職金は確実に半年でなくなるだろう。上村は、窓を絶え間なく流れていく遠くの灯を見送っていた。

ガランとした三等車のランプの下で、ただ一人焼酎を飲んでいる労務者がいた。博打で入ったあぶく銭で、安酒を買ったのであろう。

そのとき、労務者の横顔に薄汚れたあのいかさま山師の面影をみた。そして炭焼き小屋であつた濁酒（どぶろく）の味を思い出したのである。その記憶はたちまち広がり、かつて炭焼き小屋で、同じ山師への転職を誘われたことを思い出した上村だった。

雑念とアイデアとは同時に沸いた。その雑念をきっかけに、会社を離職するとき、

「鉱山の鉱脈探しに出る。」

と、説得性もない現実離れた理由を告げたことを改めて思い出した。ひょうたんから駒という例えのような発意であつた。

「鉱山もいいのではないか。」

と、突然頭が急旋廻したのである。

汽車は夜明けの上野駅に到着した。駅前広場の灯が消されるころだった。

上村は、誰一人知る人もいない東京の街にたたずんだ。上野公園は桜のシーズンではなかった。西郷銅像の下で気を取り直し、とりあえず職探しをしようかと思った。

うまく住み込みの職でもあれば、「ヤサ（居所）」は探すこともない。

早速公立職業紹介所の門を叩いた。大正時代には財団法人が主体であった職業紹介所は、昭和5年以降は公立となっており、紹介料金は無料となっていたのである。

上村はここで、全国鉱山協会の紹介を受けた。ちょうど無資源国日本の隅々から資源を探索しようというキャンペーンが、国家主導で行われており、タイミングよく風は上村の方へ吹いて来ていたのであった。

上村は旧制中学を卒業しただけで、職歴もあり年齢も嵩んでいたにもかかわらず、全国鉱山協会は上村を再任用として採用してくれた。

半年の研修を経て、地方の鉱山へ派遣されることだった。その身分は軍属である。

鉱山の作業員は、朝鮮からの徴用の労務者が多く、労務管理は困難を極める。については就業経験のある即戦力の人材の登用が望ましいとされていた。

上村は遠野の旧制中学の博物（理科）の授業では、地質の基礎を学んでいたし、すでに木材会社の厳しい環境で現場作業員とまみえてきた。

上村はこれらの採用基準に合致しており、国策遂行のための有用な要員になりうると見込まれたのである。

そして翌週からは東京帝国大学の地質学教室へ送りこまれた。上村はここで、鉱物資源の探索に必要な全国の鉱山について学ぶことになった。

本来ならば東京帝大に正式に入学した学生の授業であるが、この時代は適齢の学生が多く徴兵されてしまっていて人材が払底し、どうしてもスペア（補強）となる人材を募集する必要があった。

成人年齢をもって徴兵検査となる定めだが、特に学生は徴兵猶予となっていた。これは軍に対して、学の独立という教育の聖域が対峙していたからである。しかし聖域は急速に切り崩された。

まず大学、専門学校の文科系学生の徴兵猶予が解除され、修学年限を3カ月短縮するという、極め付きの軍事優先の学事が押し切られたのである。

学校関係者にとっては、軍政に圧迫される由々しき事態となっていた。ここには戦争に学問は不要とそうぞぶく、倒錯した軍国日本の亡国への極まりが見えた。

昭和16年12月の真珠湾奇襲で、日本が二次大戦へ参加したのであるが、その直前の世情の混乱のはざままで、思いがけずも上村の境遇への偶然の後押しがあった。

「お前はラッキーボーイだ」

と、女神が微笑んでいるようにもみえていた。

帝大地質学教室での、講義の合間の研修生の雑談では、

「軍属になれば、徴兵はないからいいなあ。」

などの厭戦の会話が、内緒で交わされるのだった。

研修終了までの半年の間には、日本の土壇場といえる事件があった。三国同盟への参加と南方への軍の展開であった。

日本はもう抜き差しならない鬼門へ足を踏み入れ、奈落へまっさかさまに転落していたのであった。

信州諏訪盆地

東京帝国大学での研修終了後、上村は信州の諏訪郡宮川村の静香（しずか）鉱山へ派遣されることになった。

事前研修が終ったのは春まだし、帝大の校内の桜の開花が始まったころであった。

上村は交付された辞令を懐に、任地の諏訪郷へ急いだ。途中の甲府盆地には未だ花の影もなかった。蒸気機関車の牽引する6両編成の列車は新宿駅から6時間もかけ、最寄駅の茅野（ちの）駅に着した。

静香鉱山には航空機や大砲の金属部分に強度を加える、ニッケル鉱の産出が見込まれる、という長野県の鉱山調査部の報告がされていた。

すでに数年前から採鉱に入っており、労務者として徴用した朝鮮人が、十数人配置されていた。降り立った茅野駅は冬空の下、四方を枯れ山と雪の山に囲まれていた。時折、氷のような曇り空から風花が舞い、凍み入るような北風が吹いていた。

寒風吹きすさび残雪凍る標高1200mの地、晴ヶ峰に静香鉱山はあった。

そこは春の気配も感じられず、入る視界のどこもが凍てついていた。

静香鉱山は昭和8年に開通した杖突街道（現国道152号線）を、至近に見下ろす晴ヶ峰の脇にあった。

通称では晴ヶ峰といっているが、峰の位置は特定できず付近一帯を指すらしい。

上村が驚いたのは、ここから見おろす諏訪盆地は、上村の故郷の遠野の早池峯（はやちね）から見る、遠野盆地とよく似ていたことであつた。

上村は、任地の諏訪地方の湖沼や盆地の地質学的な生成過程や、日本列島の活断層構造の中央構造線（フォッサマグナ）や中央地溝帯の構造に興味を持った。

旧制中学の博物の授業で、地学を学んだとき感じた初々しい悠久の天地へのあこがれの再来であつた。

半年ほど特訓を受けた東京帝国大学の地質学教室でも、この地をめぐる大地裂帯と大地溝帯という呼称が何度も飛び交っていた。

中央構造線は、授業ではフォッサマグナとよばれていた。これは諏訪盆地を通る糸魚川静岡構造線であり、日本弧の中央を南北に横断する構造帯で、これにより東北日本と西南日本の地質が区別されている。

また、中央地溝帯は西南日本を内帯と外帯に分けるもので、赤石山脈の縁から南下して、紀伊半島の北部、四国北部を通り九州中部まで達している大活断層である。

1万年前の日本列島は日本海がまだ内海で、囲む海面も40mほど高かった。

信州諏訪湖の水面も、現在の標高760メートルを40メートルも上回わり、その湖岸は八ヶ岳のふもとまで及んでいた。現在の永明寺山や小泉、大泉山は湖上に浮かぶ小島だったという。この40mという数の根拠は帝大でも教えてくれなかった。多分、確たる数ではないのだろう。

この小泉島へ上陸すれば、遠くにたおやかなアルプスの雪と山霞（かすみ）がたゆとう風景のなかで、水鳥が水をかき湖面に映った逆さの白い山々の影を乱すのであった。

1万年前というのは地質時代の分類では、新世代第四期後期にあたる沖積世のところで、地殻に大きな変動があった。

古代諏訪湖の岸辺に聳え立っていた八ヶ岳の八つの峰だが、いつの時代かは富

士山の標高を超えるひとつの高山だった。誰も見た人はいないのだから言うのは自由である。

地元に笑い話がある。小学生むけのエピソードらしいが、「でえらばっち」と題があった。

富士山の女神と八ヶ岳の「でえらぼっち」は、背（せい）比べをした。頂上に樋をかけて水を流したら、水は富士山のほうへ流れた。悔しがった富士の女神は、八ヶ岳を蹴つ飛ばした。けとぼされた八ヶ岳は頭が八つに裂け低くなってしまうた。それを悲しんだ「でえらぼっち」の妹の蓼科山の涙が里にたまって諏訪湖ができた。大男のでえらぼっちがこの湖を埋めようと土を運んだとき、土くれが二つ落ちて、小泉山と大泉山ができた。

有史前の地球の造山活動のころは、火山活動でそのようなことはいくらでもあったであろう。

諏訪の上村

信州諏訪郡宮川村の静香鉦山へ鉦山技師として赴任した上村は、諏訪の地勢が自分の故郷の遠野といくつかの点で共通する歴史に由来することを知り、帝大の講義で学んだ地質学を実地に応用して調べようと思った。

遠野盆地は湖底の村である。かつては盆地全体が湖だった。諏訪も同様に巨大な湖だったが、1万年の昔の地殻変動で湖の大部分が失われた。そして流入する河川は、いずれもうねうねと蛇か竜のよううに盆地に下り、残存した諏訪湖を経て天竜川から太平洋へ流れていた。

それら河川は、自然の力で刻々と流域を変え、のた打ち回って火を吐き、水を吐き突つ走るのである。

諏訪の鉦山へ赴任した上村の興味をそそつたのは、諏訪の自然災害の歴史と受難した諏訪郷の人々のめげない力強さの伝統だった。

ここにも伝承の民話があった。

天竜の話である。甲賀三郎はふたりの兄と恋人を取り合ったが、卑怯な兄の策略で、蓼科山の人穴へ落とされ、排除されてしまった。13年後に地上に戻ったが、この間の幽閉生活に伴う辛苦と不信、怨嗟、咆哮の繰り返しにより三郎は、もはや人間の姿ではなかった。

いまや体は大きな竜に変わり果てていたのである。この世で失った恋人をさがし続け、やっと恋人を諏訪湖の底に見つけた三郎は、恨みの天竜になって湖へ消えたという。

諏訪湖へ注ぐ暴れ川が、この天竜の象徴であろう。民衆の自然への畏敬と氾濫への恐怖を天竜に象徴してあらわした民話である。

自然への畏敬のほかに、そこには宗教としての「古代神」の存在があった。上村の故郷遠野にも諏訪神社があるが、本家の諏訪大社は全国の1万社をこえる各地の諏訪神社の祖である。

諏訪の神話では、地つきの縄文人の守矢神と出雲から侵入した弥生人とが戦い、諏訪守矢神と、出雲人の持ち込んだ弥生の神とが習合（融合）し、新しい諏訪神を創出したといわれている。

これは時代の変わり目を象徴した神話である。弥生人である出雲族の米作の経済が、諏訪の縄文人の狩猟という原始型の経済と対立し争ったと解するのが適当である。

この争いは、短期決戦で行なわれたものではない。数百年を越える長期にわたつてのことだからで

あつたに違いない。

神話では、両族は侵入路の伊那谷の諏訪湖源頭の付近で、鉄輪（かなわ）と藤つるで戦つたとあるが、それら武器の意味するところは解読不能である。しかしこの戦いとは、新旧経済文化の、ゆつくりとした受容と否認の繰り返しのことであろう。

古来、諏訪郷の人々の強さは、受難してもめげなかつた伝統にある。侵入した弥生族との棲み分けに成功した縄文守矢族は、神の分野でも折り合いをつけ、地神を実質的な諏訪神として守つたのである。

受難にはこのほかに卑近な例で、隣国甲斐の武田軍の侵入による受難もあつたが、なにより数え切れないほど襲つた自然の激甚災害を筆頭に挙げねばならない。

近過去の受難である明治31年の「大水（氾濫）」の記録は、臨場感豊かな具体例である。

上村は地域史に残る明治の水害「横押の大水」を記録で知つた。その記録の裏側には、他州者の上村が字面から知る大水の被害をはるかに超えた、恐ろしい天竜の咆哮の事実が隠されていたのであつた。

現地宮川村役場御達 をみると、村議 伊藤房蔵 によつて書かれた文書（もんじよ）がある。明治三拾一年九月六、七日、暴風雨ノ為メ宮川水瞬時に漲えきし、堤塘壞崩八家浸入し、本村の田圃一湖面ノ如くなり中に砂礫泥土立木ヲ堆積し、作物皆無二属し近古来未曾有の惨憺タル一大被害に逢遭ス此の期に際し、当村は火急堤塘田圃等ノ回復を図り、目前ヲ思察シ将来を顧慮シツツ地下（じも

と) 一同八屈せず尚強度ヲ増加シ復旧工事に關する至便なるレールの一器ヲ購求シ、略々 と、
 役場らしく復旧工事を前提に激甚災害の状況を冷静に検討した文書(もんじよ)となつてゐる。

伝承、横押の大木

いつの時代にも、諏訪は風光明媚であつた。歴史が創作した地域の特色は、住民を少なからず地味にしてきたが、視界いっぱい広がる四方の秀嶺と、湖の鏡が住民の心をあでやかにした。川面のうねりがひそやかな流れを見せる時期があつた。

この時期は華やかな山々が紅葉に向かつて溶け込む季節の変わり目である。明日の仕事が決まらぬまま時間をもてあますような暇な日々から、周囲の稲穂のあなたに薄い紫色のべールをとおして水色の山々を仰ぎ、それは体からしみだすような憂鬱を含んだ時間の流れであつた。

そんな人間の安穩な日常は、いったん自然の摂理に向かえばあつという間に砕け散つてしまふのである。

明治31年秋のこと、この日は朝からどんよりとした雲がかかり激しい雨だつた。そして雨は夕刻まで間断(まだん)なく降り続いた。

周囲の山々は低い層雲に覆われていた。天竜はどこに潜んでいたのだろうか。

昼過ぎになつて山田徳三郎は、水防団から宮川が氾濫する恐れがあるので、半鐘による警告に注意するよう組(くみ)を通じて言い継ぎを受けた。

この時代気象台はあったが、天気予報の当否の確率は低かった。むしろ諏訪の田舎では、経験ある古老の予言がたよりの風雨の予断であった。

この日の豪雨は昭和でいえば、昭和34年の伊勢湾台風級の台風であつたらうか。

徳三郎の家はこの川沿いにあり、すぐ先が河がほぼ直角に右カーブする通称「セミ土手」になつていた。

ここは南アルプスの南端の守屋山から落ちる、中の沢川の急流も合流することから、数十メートルの合流中土手（なかどて）が併設され、あわせてそれが二重堤防の役割を果たしていた。

上から見るとセミの頭に似ているので、セミ土手（堤防）と呼ばれ、後代は「セミの頭（あたま）」と呼ばれた。

降り続く驟雨（しゅうう＝大雨）に村人は、三々五々川の増水の様子を見に集まり、

「やあ、こりゃあ、危ねえなえ。」

と言ひあつた。

すでに水防団がハッピをまとつて村を駆け回り、家々から「ねこ＝農事用の厚手の大むしろ」をかき集めていた。大川（おおかわ）の水量は急速に増して堤防の土手下3尺に達している。

100 m上流には渡戸橋（わたとぼし）がある。まずはこの木橋の流失を防がねばならない。橋梁に麻縄を何本か結び、堤防の土手の桜の真つ黒な大木の幹にゆわえつけた。

堤防土手の保護には、供出された「ねこ」の片方に大石を結び、堤防土手の上からのり面に沿つて

土手を覆う作業が進んでいた。

いずれの作業もゴウゴウと逆巻く濁流を、眼下に見ながらの作業で命がけである。

濁流は、大石、小石、根こそぎ倒れた生木（なまき）が流れる危険な流域で、橋脚には多くの倒木がからんで、ものが当たるたびにドーンと響き橋は大きく揺れるのであった。

また堤防土手ののり面をこすって流れてくる大量で高速の水流は、堤防土手を川側から押す力がその流速によって失われる現象が発生し、水流が堤防土手を外へ押し崩すのではなく、逆に堤防を反動で川側へ引つ張り込んで崩落させるのである。

「ねこ」で堤防土手を包むのは、土手と水流との接点を力学上の物理的なバランスを崩さない配慮と、直接堤防土手が急流により彫りこまれないためのせとぎわ作戦である。

水防団の面々は、声を掛け合って「ねこ」で土手を包む作業をしていた。

「やあ。もっと、マテ（ていねい）にやれやあ。ほんなこんじゃあ、ねこが流さつちもう。」
ゴウゴウと流れる濁流に減入りながらも、日没までには養生を終った。

村人は過去にその目で見てきた土手崩落のありようを理解していたので、学者が能書きを垂れるよりも、土手の崩壊のしくみが分かっていた。

徳三郎はこのとき50歳だったが、過去にも自宅のすぐ脇でその堤防土手が、水流に引つ張り込まれて流れ去っていく惨状を何度も見た。

土手を失うと濁流は思いのままに川のエリアを突破し、水泡は越波（えつば）して田地畑も家も牛馬も家屋も飲み込み、幾多の人命をも奪い去るのであった。

御維新（ごいつしん明治）になってから、もう5回目の氾濫である。幕末のまだ徳三郎が20歳にもならぬころからの経験では、二百廿日（はつか）前後はこの地の鬼門であった。

300年前の大氾濫では、村内の信濃安国寺の七堂伽藍が流され多くの僧侶の命が奪われ、村内の大町市場が壊滅したと伝えられている。

そしてそのときから、流域が500mも南側の山岸へ移動する変化があった。諏訪の盆地がすべて河川敷であるといういわれは、川筋が氾濫の都度左右に動くことによる。

歴史を紐解けば、治山治水が政治を左右する、といわれるくらい人類の自然災害への取り組みは重要な社会的課題であった。

天竜の咆哮

徳三郎は家人に、

「このまんま降りゃあ、堤防は決壊するらで、家財を運ぶぜ。」

と伝え、沢上の新家（分家）へ家族総出で畳（たたみ）まで大八車に積んで運んだ。夜半に入り、川の濁流はさらに増え続けた。提灯（ちようちん）や松明（たいまつ）

の灯が強風で軒並み消えた漆黒の闇の中、風の咆哮と濁流の轟音が響き渡っていた。半鐘の警告音は、アブが鳴く程度にしか聞こえなかった。

天竜が暴れだした。村人は沢上へ避難したが、途上の沢筋の、中の沢川を横切る小道はすでに破壊じていた。

ここ小川脇の小池宅も流失の危機にさらされているありさまで、さらにその下（しも）の分家の前の、大家の石垣は滝に変わっていた。

幸い水車小屋へひく横の水路が、分家への侵入を防いでくれたが、この沢筋のいくつかの支流でさえすべて氾濫中であつた。

山津波も予想されその土石流を考えると、あまり沢上も安全ではないのである。

さて、大川本流であるが、朝二時になると村人はもう祈るしかなかった。空からの放電と雷鳴が加わり、阿鼻叫喚（あびきようかん）の態であつた。

そして午前三時、天地をゆるがす大音響とともに、徳三郎宅脇の受け土手（ママ）から右カーブした左手一帯の堤防は、アツという間に水泡が噴出し決壊した。

嚴重に補強したはずの渡戸（わたと）橋も、瞬時に濁流の中に飲み込まれていった。

濁流に襲われた平（てえら）地区では暗闇のなか、叫ぶ人、泣く人多数あるも暗闇のなか所在定かでない（ママ）。そして受け土手に茂っていた、「たいそうかく（サイカチ）の太木」も流れていった。

大川が直角に曲がるちようどその角が、強力な流れに耐え切れず、横から押されて決壊した、まさに「横押し」の大水であった。

翌朝、小康状態となった天候の下で明らかになった、その被害の惨状はすざましいものであった。田園はすべて泥水をかぶり新しい数本の川ができて山岸まで瀬を打っていた。

被災した田畑や家屋は川下全域だったが、そのうち8軒は倒壊した。

その地獄のような光景のなか、流された子を探す必死の形相の母親は、やがて泥の中から息絶えた七歳ほどの子を探し出して胸に抱きしめた。

声もなく、視点も定まらない母親の目には何も見えていない。ただ、頬には山背風（やませ）に吹かれた涙が干乾びていた。

世代の交代

同年の中央政界をみると、政権を担っていたのが松方内閣であった。明治の30年代には日本の近代政治が成熟し、諸党乱立して「閥族内閣や盲従党（ママ）」に、「反旗を翻す動きが諏訪地方でも発信されている。東洋の危機を標榜する進歩党などがその代表であった。

諏訪では、明治35年の「二六新報」に、小川平吉が紹介されている。明治二年生、遊学後弁護士となつて明治外交要録を著わしたとある。

その後政治家に転身し、果ては鉄道大臣になるが、鉄道疑獄事件を起こした。さらに地元では、選挙違反で多くの村民が連座したのである。

大正4年には衆議院議員の選挙があつた。中央政界からは全国の地域ボスにむけて、膨大な檄ピラがまかされている。発信元は政権党では、立憲改進黨の党首の伯爵大隈重信、男爵加藤高明、若槻礼次郎、尾崎行雄、河野広中などで、地方議員候補を推薦し投票を依頼するものであつた。一方に立憲国民党の党首、犬飼毅の名もみえる。

犬飼毅（つよし）とは、1932年軍のクーデター五、一五事件で、狂気の軍人グループに殺された総理である。

山田徳三郎は配られる檄文を見ても、心騒ぐことはなかつた。

「こんな信州の寒村にまで、政治の恩恵が届くたあねえら。」

と、田舎の百姓には政治は不要だった。

山田徳三郎は、大正13年（1924年）70歳で人生を全うした。1913年（大正2年）の日本人の寿命は女性で44歳であった。だから70歳まで生きる人は少なく、徳三郎はまさに古来希な天寿だった。

葬儀の日徳三郎の座棺は近隣の村人の天秤棒で担がれ、信濃安国寺の永観堂墓地へ野辺送りされた。

葬儀は特別なことではない。村人は遺族の焼香の間、汗ばんだ顔を土に汚れた手でぬぐいながら、落葉松がもえぎ色と利休色に芽吹いたこずえを、手持ち無沙汰に眺めていた。

墓場にはいつぞやの大水で命を奪われた、何人かの被災者の白木の墓標がまだ新しい風情で目についていた。

やがて徳三郎の座棺が土におさまると、参列者は帰りの道々夕日の残り日が遠い山を、特にその部分だけを神々しく映しだしている絵を見て、おのおのが心に挽歌を念じたのである。

祖父徳三郎が世を去った数ヶ月後、入れ替わりに故人の孫むすめにあたるカナが誕生した。

世代の交代は世の常である。カナは先に誕生していた、長男の山田金雄の3つ歳下であった。

今は山田の家は代替わりし、徳三郎の子山田憲次が家長であった。

徳三郎の妻、すなわち憲次の母の七（なな）はいまだ健在だった。山田憲次は「横押しの大水」

のとき5才だったので、悲惨な災害の記憶は薄い。

亡父山田徳三郎は、

「この大川にゃあ天竜がいるだけ。いつかあばれたす。そのときゃあ中の沢（なかんさ）の上へ逃げる。」

と、遺言して逝った。いつものくせだ、目をしばたきながら子の憲次たちに語ったのだった。

大正時代の後半のこのころは、日本全土が貧しいながらも平和な時代であった。村では年1回の田作に加えて、4回の養蚕と、さらにその台間の畑作にいそしんだ。

一般には乳牛の酪農は見当たらず、ヤギとか綿羊（めんよう）、ウサギ、鶏、が副次的に飼われる村であった。

平穏な日々であったが、憲次は亡父徳三郎の遺言を引き継ぎ、幼児が集まるとお伽ばなしがわりに、

「かならずいつか繰り返し大水は来る。天竜は、どこかに潜んでその機会を待っているだてな。」と、諭すのだった。

「おめたち。晴ヶ峯へのぼってみろ。諏訪湖へ行く川は蛇のように、てえら（平地）おナアくねくね、うねっていくだけ。マテ（ていねい）に見るだけ。ありゃあ天竜だぞ。川の両側にある田んぼも河川敷ちゅってナ、流域のうちどお。竜があばれたらみんな川のナケー（中へ）へえっちまうだけ。おめたちは、逃げる。じく（塾Ⅱ大同義塾）んとけーいくどお。」

童（わらべ）たちは、幼ないながらもその臨場の感を真に受けていた。

「とおちゃ。おつかねーな一え。」

山田憲次の二人の子の金雄とカナはその話を脳裏に刻み、今は平穩な川筋を恐る恐る見るのだった。

カナは何年か後に祖父が言っていた晴ヶ峯へのぼって見た。それは伊那と諏訪を結ぶ峠だった。

湖へ注ぐ川が蛇のように、盆地の中心部へうねっていく。その両側は春から秋にかけて、青、緑、黄色と多色に変化していく水田が広がっていた。

太古にはこの諏訪の平ら全体が諏訪湖の湖底であったといわれている。

目を凝らすと、ちょうど中央線の鉄路に、延々と長い貨物列車が駅から発車するのが見えた。

3重連の機関車が牽引し、轟音とともにあえぎ登る絵になる風景である。

3重連だから機関士どおしの合図の汽笛も、呼応して3回発せられる。そして三つの煙突から真っ黒な煙とともに、喘息のような排煙とボイラーの蒸気音のリズムが、幾重にも山々にこたまして消えていった。

林道を歩んでふと気がつくど道端に、濃いめのピンクの やなぎらん が、夏の終わりを謳歌しているのだった。

この峠一带は、まもなくすすきの天下になるだろう。それは今見えている積乱雲が、秋のいわし雲に変わるころのことだと思う。

祖母の 七（なな） は、カナをかわいがった。尋常学校のころは雨模様になると、小さい傘を小脇に抱えて1kmの路を宮川尋常小学校へ迎えに行くのだった。ふんごみ（モンペ）に長靴のスタイルは普通だった。そして向かいから帰ってくる子供たちへのきなみ、

「尋常科の子は、へー、退けたかえ。」

と、声をかけてカナをさがした。

正月は「ウサギの肉だたき」の雑煮だった。ウサギの骨を叩きつなぎに肉もまぜ 団子にするのである。新潟、山形では、これはマタギ料理だが、同根のマタギはこの地方にもいたのだろうか。

このころ近在の山で熊を見た人はいたし、本鹿も首をとって剥製の飾りにした猟師もいた。

諏訪のウサギ料理も、山形地方の山里の「肉だたき」と同じレシピだから、縄文の昔からの狩猟の民の食文化が、いずれの地でも伝承されていたのだ。

カナの祖母の 七（なな） は、口数は少なかったがこの村の隅々まで人脈を持ち、良かれ悪しかれお互いの人格を評価しあうのだった。

「あのおばさまは、自分の娘の自慢ばかり、」

とか、

「字左衛門サのオカタあ（女房は）、自分の弱みは絶対見せねえ。」

とか評し、独語のあいまに、チェツ とか ケツ などと発音も加え、その意味と意図を強調する。

特に吝嗇（けち）とか気前がいいとかは、話題の中心におかれていた。

よく見ていると、口の開き方も普通は夕テ開きの口の形が、心なしか、平べったくなくてしゃべくのがみえるのだ。

口さがない老婆同士のいびりあいは、あちこちの嫁にも向けられた。村へ入嫁した嫁殿は例外なくいびられた。まずはゆきずりを装って偵察に寄り、嫁の働きぐあいを評価するのである。

善意を表に嫁のあいさつなどを監察するのであった。冬風吹く寒い日に寄ったら、

「寒いねえ。こんな日は、昼飯を食う暇もこたつにあたつていたいねえ。」

と、何気なく言った嫁がいたが、たちまちその言葉尻はとらえられていびられるのだった。

「あの家へは、寒い日じゃあ寄れねえ。」

と、老婆仲間の茶の席でこの嫁の評価が語られ、格好の話題となるのだ。

「まだ若けーだで、お客にそんなことを言つっちゃいけねーわなえ。」

と、その新家の嫁への評価が村中に広がり、風評として永く定着するのであった。

おばあさまたちは、元気なところは互いに辛らつな批判をしあっていたが、70歳過ぎとなつて一人ひとり欠けていくところになると、先行して黄泉へ逝つた知己を思い出しては悲しんだ。

それは、先行した死者を悼む形はとっているが、さにあらずして死者に自身の明日を重ね合わせ、世をはかなむ愚痴である。

「ウツ死（ち）んだら、何ンにもねーな。」

村のおばあさまたちは、だれもがそれを知っていた。過去に死んだ人が戻った例がないからである。

戦後のこと、新興宗教団体が

「おめさま。いま、不幸かも知れねーが、死んでから御本尊さまが天国へ導いてくれるぜ。」

と、積伏したときも、

「おらー。現世利益（りやく）以外は信じねー。」

と、老人は皆かたくなに拒絶した。永く現実に生きてきた身には、死後の世界などというまやかしは噴飯ものであった。

おばあさまたちは、だかれかまわずお互いに、くどくどと身の上と心情を吐露しつつ浪花節もどきに語り、やがて自らのセリフに酔って感極まり涙声に抑揚までつけ、語る表情も目の置き場も定まらない状況になっていくのである。相手の同情を得るためにはうそ泣きも辞さなかった。

これらおばあさまたちの自宅での居場所は、実に心もとないものだった。家はすでに嫁主導の空っ風か、すきま風が吹きすさんでいたのだ。

「死んだ後（のち）に、自分を思いだしてくる人はいるだろうか。」

という未練は、絶望の未来（あす）にわずかに残る光明であった。

既に語られているように、七（なな）のかわいがった山田カナは、故山田徳三郎と七（なな）の孫

である。カナの父は憲次という。徳三郎が没するのと入れ替えに、カナが誕生したのである。

この三代の人脈では、祖父の亡徳三郎と生存中の祖母の七（なな）だけが、あの横押しの大水の生き証人であった。時代が変われば事実には伝説になり忘れられていくのである。

このころ日本は大正後期の平和な時代が、少しづつ暮れなずんでいくように見えていた。このままではすまないような、せつばつまった雰囲気が感じられる時代に移りつつあった。

昭和2年には金融恐慌がおこり、愚鈍な百姓さえ、迫ってくる不気味な世界情勢の不安を感じるのだった。この恐慌を背景に大陸への軍事侵攻が行なわれ、満蒙開拓団として全国の農村から二男三男を組織する宣伝が行なわれた。

かつて、カナの生まれた大正13年前年に関東大震災があつた。この年から軍や警察による社会主義者の検束があいついだ。9月に、伊藤野枝、大杉栄、が憲兵に連れ去られ、その日のうちに扼殺されて死亡（甘粕事件）。また、昭和4年には、隣の諏訪郷湖南（こなみ）村で、獄にいたという共産党員伊藤千代子さの葬式があつた。

伊藤千代子は全国一斉共産党員検挙に連座し、拘束後拷問で発狂、24歳で虐殺された。この伊藤千代子は、身内の平林タイと姉妹同様に育つた。後に作家で名を成す平林タイ子である。

二人の才媛は諏訪高女卒業まで同じクラスにいて、互いにトップの成績を争つた仲である。また諏訪高女の先生でアララギ派の歌人でもあつた土屋文明に師事し、高女の良妻賢母を標榜する伝統の教

育に溶け込んだのであった。

官憲に殺害された伊藤千代子の遺体は、ひっそりと父親に引き取られて、お骨で故郷の諏訪へ帰ってきた。

葬儀の日、近所の人たちは畑の向こう側から、遠巻きに眺めて言う言葉もなかったが、

「おつかねえなえ。共産党だで、獄で殺されっちまったずらわえ。」

と、互いに耳元でささやきあった。

その後千代子さの身内は、千代子さのことにしてほとんど口にすることはなかった。

社会主義者へ気違いじみた国家の弾圧が続いたが、「反共は戦争前夜の声」といわれる。その翌年の満州事変をきっかけに、軍靴（ぐんか）の音とともに大陸へ侵攻していく歴史がそれを如実に語っている。

その横から見る日本帝国の姿は、まさに進軍ラッパとともに地獄へ落ち行く、亡国の隊列そのものであった。

その年は諏訪には幸い洪水もなく、遅霜（おそしも）の被害もなく作毛は順調だった。

秋（収穫）が終わると冬の仕事が待っている。諏訪では東京の「のりや海産物店」への出稼ぎへ行く若者が多かった。

出稼ぎ先は、先代からおなじみの東京大森あたりの海産物の店であった。この季節的奉公は金には

なったが、標準語を話せる資質が要求されるし、個人企業である主人一家と心の機微をはかる才覚も必要だった。

出稼ぎに関わった諏わっ子たちの、自虐的な身内ばなしが語られている。

住み込んだ諏訪の田舎者が、夜半就寝中に近在での火事に遇った。半鐘を聞いて二階の丁稚部屋の
雨戸を開けてみると、夜の空を焦がして赤々と地獄のような炎が上がっていた。主人が、一階か
ら、

「おーい、火事はどした。」

と、大声をあげた。諏わっ子の彼は、近所の町名どころか東も西も分らない。

とっさに、

「お故郷（くに）で申さば、塩の目、樺（かんば）沢通り。」

と、苦肉の応えをした。

自分の故郷の諏訪郷で、その火事の場合を当てはめてみるならば、塩の目、樺（かんば）沢通りあ
たりということになる。

後からの茶のみ話だが、聞く諏わっ子は、皆、身につまされたという。

塩の目通り、樺（かんば）沢通り、というのは、現茅野市の東方面「山浦（やまうら）」と呼称さ
れる地域の生活道路である。

このように諏訪郷の井戸の中からおのぼりし、機転もきかない田舎者には、都会暮らしは結構難儀

なことであつた。

一方で、都会に伝(つて)のない者は、地場の「寒心太」の製造に携わることもあつた。

「寒心太」とは、その字のように、「心太」すなわち、トコロテンである。

寒風吹きすさぶこの地の、天然の冷蔵庫を利用して寒心太を地場産業に開拓したのは、諏訪の小林翁だといわれている。

今は、「寒天」という名で普及しているが、これはトレードマーク(商標)からきたものである。識者のはなしでは「乾天」でもよかつたという。

特許権もない時代だつたから、開拓者の小林さんのアイデアはどんどん普及し、冬季寒風枯渇の諏訪地方を回生する、救世的な地場産業として普及していった。

天屋(てんや)と呼ばれる寒天製造工場の労務者は、長野県内の飯山や水内(みのち)、佐久方面から農閑期を利用して来る人たちだつた。

地元の人にとっては、至近の工場へ通いで就労でき、わざわざ東京の海苔屋くんたりまで出稼に出るよりは気楽ではあつた。

年齢のいった老人部隊や内職に意欲ある主婦は、「てんまるけ」といって、完成した寒天を一定の数で結わえる、出荷の準備作業に従事することもあつた。

その後、村人の「出稼ぎ先」の選択肢に、東京の海苔屋以外にも海外「満州」への移民が加えられ

た。お上（かみ）から「雄飛せよ」などと回覧板も回るようになったのである。

そのほかにも南方の植民地への雄飛も勧められていた。サイパン、パラオ、グアムなどのサトウキビ畑である。

このころ、すなわち昭和6年ごろのラジオでは、浪花節などの娯楽番組のほか、流行歌では、古賀正夫の「酒は涙かためいきか」が風靡していた。在郷の人は、外地や他郷へ流れていった身内や知人を歌で偲ぶのだった。

しかし自らのおかれた環境をみればそのような感傷に浸る暇もなく、日本は抜き差しならない迷路に入り込んだような気配を感じ、異様な不安を語る村人もいた。

「満州なんかへ行ったって。満州ちゆうところにも支那や朝鮮の衆（しよお）がいるずらに。どうやって日本人が入（へえ）っていかれるずら。」

と、疑問符のついた正論を述べる人もいた。

「ほりゃあ、お上（かみ）で入植地を斡旋してくれるつちゆうだでな。だまっていきゃあ、いいことおあるずらえ。」

「えれえ、さぶいところだつちゆうじゃあねえかえ。」

などと、半信半疑で会話する村人がみられるのだった。カナが無邪気に遊ぶころであった。

すでに10年も前、国策会社の東洋拓殖株式会社から、数次にわたり朝鮮移民募集公告が発せられ

ていた。

しかし古今をとわず便乗ビジネスがつきまとい、移民事業を私利に悪用するワルもいた。東洋拓殖同社の新聞広告では、

「私的に移民の斡旋手数料を要求するなどのことも見受けられるが、当社ではそのような不埒な輩（やから）とは、絶えて関係ないのでご注意あれ〜」
などと広告で警告している。

この移民事業は枯渇の日本の救世的事業と国家によって位置つけられたものだが、武力を背景に他国を領土支配し植民地化したものとして、世界中から非難される結果となる愚策であった。

歴史認識の課題は、中国、朝鮮が近代国家に成長した後代、改めてことあるごとに持ち出されて糾弾され、日本が四苦八苦する政治課題となった。

共通の苦難

1941年12月8日、世紀のだまし討ちといわれる真珠湾作戦が展開され、アメリカとの戦争が突入した。

その前々年1939年、ドイツがポーランドに侵入し、英仏が対独宣戦布告して第二次世界大戦が始まっていた。その翌年、日本は戦闘中のドイツとの同盟を締結することになる。

これを見たアメリカは直ちに日本との通商条約を打ち切り、対米関係は急速に悪化した。

開戦の半年ほど前の7月、日本はドイツの優勢な戦果を背景に、対米関係悪化で途絶えた資源の確保を目指して軍を展開し、南方への進出を図ったのである。

結局、対米交渉は出口なしのさらなる行き詰まりをみせ、1941年12月の真珠湾攻撃へと進んだのであった。

アメリカもまさかと思つた日本からの突然の攻撃に、無防備だった真珠湾は壊滅した。

晴天の霹靂で虚をつかれたアメリカは、その後、悪役日本のイメージとリベンジマインドを国民的レベルで醸成することとなった。そしてその憎しみは対日戦争へのかけがえない原動力となった。

「リメンバー・パールハーバー」は、アメリカ側においては、日本側の標語の「鬼畜米英」に相当するものである。

虎の尾を踏んでしまったような真珠湾攻撃は、アメリカ国民に日本人への究極の憎しみを醸し、その後の日本への見えざる強力な武器となつていたのである。

戦術的には議論はあるものの、大国アメリカを敵に回した緒戦で、日本は既に敗北していたのかもれない。

17歳のカナは来るべきものがきたと思つた。電柱には贅沢を禁ずるピラや、無意味な檄（げき）がべたべた貼られ、6軒組という隣組組織が作られ連絡体制や、相互扶助、納税集金、相互監視など民生にも軍国調の統制が入ってきた。

なごり雪が目立つ遅い春の諏訪郷には、カナが、いつぞや祖母七（なな）と探したふきの薹

(とう)が、今年も絶えることなく、世情とかけ離れた思いがけないところに顔をだしていた。

カナは、おさな心を越え、ほほに紅さす乙女に成長していった。

すでに日華事変(日中戦争)後、灯火管制は普及していたが、加えて食糧供出や金属類の回収、野良犬の調査まで回ってきた。犬の毛皮を被服に仕立てるためである。

精米は玄米に近い30%の白ひきと決められたが、この3分つき米とは、ほぼ玄米である。また、祝言は内々(うちうち)で茶菓をもつてとり行えとのお達しがあった。

いまさら改めて言われるまでもなく、この村には贅沢など根本からないのである。

幸い今年も田の作柄はよく豊作のようであった。

ラジオは村に2、3台しかないので戦況は不明だが、人伝てに聞くと帝国日本はとりあえずは景気よく攻め込んでいるようではある。南方も次々に占領して、資源の確保もできているようであった。

「鬼畜米英とよく聞が、いつたい日本は、どこの国と戦争を始めたずら。ついこの間は支那とか満州、朝鮮などという言葉が飛び交っていたがなえ。」

村人には、この戦争の相手すら分っていないかった。

鉱山の探索

二次大戦を遡る昭和8年のこと、諏訪郷の茅野から伊那の谷へ向けて開通した杖突街道は、県の土

木課の直営工事だった。

原道は7世紀以前に開かれた官道の、五畿七道のうちの東山道であるといわれるが、既にほとんどが消滅しており、ルートは新規に開削されたものである。

昭和6年の安国寺村区日誌をみると、杖突道路開削の事業は、平和だった村に大騒動をもたらしたとある。耕地のつぶれ地や、山林部分の取り崩し工事の調整、個人補償や、ルートへの選定は地元の人々のまとめ役が、関係者寄り集めて意見を聴取した。

御祓いの後、部分開通を繰り返してして完工に至ったこの県道は、舗装のない砂利道であるが、林道よりはましなものであった。国道152号線杖突街道である。

諏訪側は標高差が大きいのので、当時の鉄道省営バスは、背で炊く木炭ガスでは馬力が不足し坂が上れなかった。こんなときは客が下車して坂道を押し上げたのであった。

街道沿いに地元の大同義塾の塾生が、草木1本たりとも郷土を富ませるべく、桜を植樹した。大同義塾とは、諏訪の希代の秀才伊藤作左衛門（1868年生）が東京へ遊学後、故郷の村に開設した私塾である。命名は恩師福沢諭吉による。そして1947年までの55年間に5千人余が学んだ。

高遠の城址公園の有名な桜は、異種のこひがん桜で早生（わせ）だから、寒冷地の高遠でも東京におくれて2週後には咲くが、この街道に植えられたものは、そめいよしのであった。

昭和9年には、昭和の三大台風といわれる室戸台風が上陸し、低気圧で盛り上がった高潮が湾から浸水した大阪は、家屋倒壊、列車転覆、船舶水没など大被害を受けた。

台風は東北地方へ抜けた。室戸台風は911hPの超大型であったが、諏訪への直撃がなかったのが幸いだった。

諏訪郷への直撃は避けられたが、大川の水量は増していった。決壊こそしなかったが、カナは祖父徳三郎の遺言を再確認して身ひとつで逃げた。

この日天竜は吠えただけで、暴れることなく収まった。

日本国土は無資源である。しかし無駄な努力はあった。昭和14年国策で全国で鉱脈探しが行われた。そして杖突街道沿いの晴ヶ峰にニッケル鉱の埋蔵が見込まれ、県の試掘を経て、静香鉱山が誕生したのであった。ニッケル鉱は大砲の砲身や戦闘機のボディの強度を向上する合金として有用であった。

おりしも杖突街道が開通したことにより伊那方面との物流に加え、この鉱山の産物

も移送可能な立地条件が整ったのであった。

道路建設も、河川の改修も、多くの徴用した朝鮮人労務の主体であった。朝鮮半島から拉致まがいにつれてこられた労務者である。飯場は村人の居住エリアとは異なる晴ヶ峰の山中であった。

しかし棲み分けがあったとはいえ、そこは近隣だから常時朝鮮人と村人の接触する場面はあった。

普段、風評が先導する世論に洗脳されやすい善良な村人にとって、これら朝鮮人は、にわかに交流

しがたい人種との思いを醸成させられていた。いわゆるヘイトイメージである。

学校の生徒指導でも、この朝鮮人の飯場は勿論、近隣へ近づくことも禁止していた。

それまでも諏訪郷は、冬の寒天工場へ他州からの出稼ぎ者が集まる地だった。

寒天製造のこの出稼ぎ人夫にさえ、朝鮮人ではないにしても、以前から学童には、寒天工場へは近つかぬよう指導されていたのである。

カナは年頃でもあり、夜間の外出の禁止を厳しく言われていた。戦時中とはいえ

停車場のある町場ではまだ酒も飲めたので、酔っ払い労務者もいたなどがその事情である。

徴兵による出征は村人に風雲急をつげており、過去に経験したことがない異質な空気をもたらすのだった。

昭和7年安国寺村区日誌では、「午後三時ヨリ出征兵伊藤三次郎他の壮行会、鎮守様まえ。老幼男女三百名各々国旗を手にして門出を盛ナラシム。また、出征中は、区費等の賦課免除、月例祭日に神官による健勝祈願、家族慰問内容、玄米四俵く壹俵ヲ贈呈ス。当費用は任意寄付トシ不足は村負担」とあり、「出征軍人壮行用国旗を調製し各戸耆老あて配付を村決議」などの記載がみえるが、まだ日本に余裕があつた満州事変のころの記録である。

カナの村に、伊藤重作というカナの兄より5つ年上の男がいた。すでに日華事変（日中戦争）のころ徴兵されたのだが、3年ほどで帰ってきた。戦地で胸を患ったらしい。

兵の服務のことはよくわからないが、除隊ではなくしばらく休養するらしい。

近所の村人が慰勞したが、伊藤重作の憔悴の容姿は痛々しかった。あれほど頑丈な男だったが、「軍というところはそれほどまでに厳しいものか。」

と、言い合ったものである。

重作は、先年、帰郷の機会に祝言をあげた。しかし、祝言をあげたすぐ後に再召集がかけられて再び戦場へ呼び戻された。

「もう、戦場へは行きたくない。」

と、絶望の目で救いをもとめているような伊藤重作の顔は、はなばなしく歓呼で送る人々の目にも哀れだった。応召も二回目になると、戦地の実態は身をもって分っていたのである。

伊藤重作はこの再出征の途上、フィリピンレイテ沖で移送中の輸送船が魚雷攻撃を受け戦死、骨も帰らなかつた。

女中奉公

満州事変から始まった大陸の戦争は日華事変（日中戦争）に拡大していった。ポタンの掛け違いというが、この日華事変（日中戦争）に踏み込んだことが、すべての誤りの根源で、日本国民の不幸の源泉であつた（瀬島龍三「幾山河」）。

満州事変から10年を経て、カナは既に一人前の女だった。昭和17年カナは請われて町場の料亭へ女中奉公に出た。カナは田舎の娘丸出しの風体だったが、なんといつても番茶の出花のころだから、女中に立つてもそれなりにかっこうはついていた。座敷に出れば、かぼちゃの花くらいには見えたくもれない。

このころの宴会は、出征がらみの壮行会が多く、色はなく硬いもばかりだった。

明日を奪われた出世兵士の壮行会の後は、杯盤狼藉（はいばんろうぜき）となったが、それ以外の宴会はひっそりしたもので、ときおり経営者風情のどんな衆の集まりや、国防にかかる役人が、内密らしいヒソヒソ話をしている光景も見えた。

料亭の裏が停車場であった。中央線の茅野の停車場には貨物用の引込み線が多数造られ、近在の山々から運ばれた鉱石類を無蓋の貨車へ積み込むのであった。

話題の静香鉱山のニッケル鉱もそのひとつだったが、諏訪鉄山の鉄鉱石や入笠山鉱

山、大門峠の佐久境鉱山からも同様な鉱石が集荷されていたのである。

この茅野駅の多数の引込み線には、普段は貨車ばかり並んでいたがときどきD51（でこいち）という蒸気機関車が上諏訪の機関区から出張って来て、これらの引き込み線で上り下りの貨車を仕分け編成した。

上（かみ）川側のポイント先まで行ったり来たりりの作業で、踏み切りは常時遮断された。

D51は動輪4輪の馬力の大きいSLだが、大きいだけあって汽笛、下部からの蒸気の噴出は激しく近寄るのも恐怖だった。

操車は、汽笛で合図しながら旗をもった操車長の指示で、機関車が貨車を牽引してポイントを越えた位置まで進行したあと、ポイントを替えて、今度は逆走しながらスピードがつく時点で、機関車を制動しつつボンと貨車を押し放すのである。

放された貨車は惰性で自走して、すでに仕訳された貨車たまりの先頭の貨車へ衝突するが、このショックで連結器が相互に食い込み連結を完了する。

いずれの貨車も衝突のショックで、連鎖的に貨車の数だけ衝突音がガチャンガチャンと連続する風景である。

この連続する衝突音は、周囲の山々にこだまして盆地全体が喧騒を呈したが、これも鉾山の活況を象徴する音だった。

カナが女中で住み込む料亭は、停車場側からみると、鉄路に近い出荷用の材木置き場の道向こうにあった。そこには寒天組合の寒天のストックスペースなどがあったり、古びた大型4トンのボンネットトラックが赤さびて所在なく置かれていた。

町に数軒ある料亭は毎晩宴会が予約されていたが、昭和17年のうちは、材料は比較的スムーズに調達できた。

諏訪湖であがったフナやコイ、ワカサギ、螺（つぶがいゝたにし）など地のものだけでけっこう田舎料理はできる。ほかに野菜類も土地柄豊富であるし、季節によつては たけのこ や きのこ わらび やまうど、など移入をたよらず調達できたのである。

渴（かつ）々の都会と違つて当面の材料の苦労は少ないのであつた。

このように各鉾山の労働者が各方面から集まつてきているので、出征宴会のほかにも大小宴会で料亭は日夜繁昌した。

戦争中という暗い背景がなければ天国である。しかし男たちはいつ国からお呼びがかかつて、おおきみに召されるか背水の立場だつた。

現に昭和17年には、早くも帝都と呼ばれた東京は空襲を受けていた。戦争は始まつたばかりであるにもかかわらず、国の心臓部の東京がいとも簡単に空襲を受けるなど、ハナシにもならない日本の体たらくであつた。

鉾石を運搬してきたトラックに便乗した労務者が、そのまま酔いつぶれたり、遊興の末、翌朝は集荷に登る同じトラックで朝帰りする豪傑もみられる町の風景であつた。

「おれには、明日はねーだよ。」
などと自棄する男もいた。

カナはこれらの男たちを見て、やるせない気持ちになるのだった。救いようのない出口を閉ざされ

た男たちには、日本の国家の暴挙のなかで酒におぼれ、のた打ち回わるしかなかったのである。

日本の国家はまったく助けてくれない。助けるどころか、戦地へ無慈悲に駆り立て、こいつらの身柄を肉弾という消耗品にして、国益確保の盾（たて）にしようという悪魔の国家である。

鉱山労働者はそのことを百も承知なのである。そしてカナは今夜も男たちの、よるべない愚痴を聞かねばならないのであった。

カナとの邂逅

上村は晴ヶ峰の静香鉱山の主任技師だった。身分は軍属で、鉱山の現場では朝鮮人の徴用労働者を、憲兵に準ずる待遇で管理する任務に当たっていた。

今日上村は料亭の客だったが、カナに対して利害関係人のように丁重だった。カナが直下にある安国寺村の村人であることを知ったからである。

「宮川村の方々には大変お世話になっていきます。」

これが上村が、自分の運命の女となるカナへの第一声だった。

「鉱山の成果は上がっているかね。」

「空爆で、精錬所が狙われると思いますから、今のうちにと急いでいます。」
すでに戦況を思えばこの業界では綱渡りの操作が必須だが、明日のことはわからない。

い。というのだった。

「この田舎にいと、どこでドンパチ戦争をやっているかピンとこないが、どうも日本はかなり劣勢の雰囲気です。」

上村は悲観的なことを言った。

「全国から供出した金属類も、置き場に山のようになっているが、ちっとも捌（は）けない。なんのために供出したのか。」

と、口を濁すのだった。上村は、何か情報をもっているようであった。一般人が知りえないことをポロっともらした。

「鉱山の管理をやっている私たち軍属には、召集はない。」

これは、はつきり断言した。

「そういう人もいるだねえ。」

カナはため息をついてこの酒肴の座をはずした。ちょうど22時の新宿行きの列車が茅野の停車場を発車する時刻で、ポーという遠慮がちの汽笛が鳴った。

蒸気の吹き出し音だけは地響きのように勇壮に聞こえ、動輪の金属音を伴って、その音は喘息の人の息のように聞こえてきた。

上村には翌朝再び会うこととなった。昨日鉱石を運んだトラックに飯場の生活資材をつんで鉱山へ上ると言った。

上村は、東北の「民話の里」といわれる「遠野」の出身だと自己紹介した。そして諏訪の自然は、遠野郷に似て自分は好きだといっていた。

カナは酒のお酌に出るつど上村に、静香鉱山の辺りの山の幸を語った。カナには、勝手知ったホームグラウンドの山々であった。

茅野の停車場から静香鉱山を見上げると、低木の稜線付近に張り付いたような飯場の屋根が見え隠れしていた。その脇には神も転げ落ちそうな山峡（やまかい）の谷があつて百々（どうどう）沢の川筋となり、あの氾濫の大川の源支流のひとつとなつているのだった。

この支流を「天竜のひげだ」と、爺っさ（じっさ＝祖父）が言っていたのをカナは懐かしく思った。

晴ヶ峰から見おろした諏訪盆地は穀倉地帯に見えるが、太古はすべて湖で今ある姿は湖底が現れたものである。と、カナの爺っさが語ってくれたと告げたが、上村はその話をことさら喜んで聞いてくれた。

「そうかもしれないナ。見れば大川が2本うねっているが、川筋がひとところに固定することはないから、この盆地全体が流域だろう。今、田園地帯になつてはいるが、いったん氾濫すれば全体が水に浸かるだろう。」

上村の理解は早かった。

「私のふるさとの遠野郷は、いまでこそ穀倉地として豊かな平地だが、諏訪と同じように大昔はす

べてが湖水だったそうだ。遠野の遠（トオ）は、アイヌ語の湖（みずうみ）のことだよ。」
 カナには、遠野がどこにあるのかも分からなかったが、多分上村の話では、この諏訪と共通の地勢をもつ、みちのくの田舎だろうと想像した。

上村は、今朝のトラックで町まで鉱石を輸送した。その帰路に町での生活物資の調達が終わるとカナの店で一杯飲んだのであるが、おなじトラックでその日のうちに鉱山へ戻らねばならないらしかつた。

上村は、途中でトラックがエンコするのをさかんに心配していた。下りは鉱石満載でもいいが、上りの急坂はボンコットトラックはカラ荷でも危ない。

翌日上村は坑道へ入る前に付近の山道を散策した。白樺の芽吹きは、なでしこ色（うすいピンク）である。

そして白樺の木の梢（こずえ）は清（さや）かだった。濃紫（こむらさき）のりんどうを抱く乙女の姿である。

上村はいつしか故郷の遠野の山々を、カナの容姿に重ねて思い出していった。

女気のない飯場での男の会話は女の話題しかない。労務者の多数が朝鮮半島から拉致同然に連れてこられた男である。

男勝りの飯炊き女が一人いるが、労務者はこの女に向けてさえその尻の動きをじろじろ見ながら、朝鮮に残してきた妻子の夢をみるのであった。

上村は幼時ババから寝物語に聞いた、故郷の遠野の民話を思い出した。

「山中の伐採の小屋の前から、夕方になると人夫がいずれかへ迷い出て行く。帰っては来るがそのありさまは尋常ではなく、おしなべて茫然自失の態であった。後に正気ついて申すには女が来て誘い出した。と言うのであった。」

と、いう民話のさわりの部分である。

実に殺伐としたこの鉱山には起こりうる話である。

上村も哀れとは思いますが、今は戦時で非常時である。責任者の上村は、掘り出す鉱石の量のノルマを確保するため、大声で怒鳴って労務者を鞭打つ日々が続いていた。

怒鳴られモグラのような生活に明け暮れる徴用された労務者にとっては、戦況の情報もなければ明日もない。ただただ鶴嘴（つるはし）を振るうだけの、日々絶望の世界であった。

夕映えが対面の八ヶ岳の峰々を照らす夕、上村は労務者を叱咤し発する自らの怒鳴り声から開放されホッと休息できる。そのときふと次に鉱石を輸送するときは、町の料亭のカナに遠野伝説の怖い民話でもしてやろうと思うのだった。

今日も晴ヶ峰から見る正面の八ヶ岳のパノラマは、地球をかすめた千載の宇宙からの光を受けて、数種の自然色で浮き上がったたり沈み込んだりする、不思議な絵模様を見せていた。

日本の断末魔

諏訪の郷には空襲はなかった。東京から多数の学童の集団疎開があった。人民が住めない町を作ってしまった国家の責任は重大である。

国家の最低の責務は、国民の生命財産を守ることである。その義務をかなぐり捨てて国体だかなんだか知らないが、国は何をもくろんでこの戦争を続けようというのか。

カナは、再び召集された安国寺村の重作さの嫁殿（よめどの）が、出産したと聞いた。しかし父親がいない環境で生まれた子だから不憫である。無事に父親が帰ってくればいいが、戦死したらそのまま母子家庭となる。そして軍人恩給のわずかな扶助料（遺族年金）に将来をかけなくてはならないのである。

地付きの宮川村の婦人、今井野菊さんの60首あまりの歌が、昭和14年度の大日本国防婦人会宮川村分会の会報に寄稿されている。

帰りきて　こたつにひとり　座り込み

このふたとせに　涙をながす
（今井野菊）

二年間も会長という重責にあつた今井野菊さんが、お役から解放されて、つぶやいたいずれの歌も反戦の思いであつた。

諏訪湖の北方の塩尻峠を越えた先に陸軍松本空港があった。日本にもまだ航空機があったらしく、3機編成で諏訪盆地を横切ることがあり、時に超低空で飛行することもあった。

子供たちが喜んで手を振ると、両翼を上下に振ってエールをかえし南の空に消えていった。

昭和19年になってからは、茅野の停車場には、お役を命じられた国防婦人会による遺骨のお迎えが増えた。多くは、中身が遺骨ではなく、石だったとかいわれている。

それは事実である。激戦地で、にわか遺骨の収集を誰がやるというのか。いずれの兵士も、野たれ死にであった。

カナは兄がいまのところ召集されないのはありがたいことだと思った。召集の順序の決定を、長男とか一家の生計の維持者とかの境遇に配慮してのことかとも思った。

都会では、空襲の定期便が毎日訪れて、大勢の犠牲者が出ているという話も聞いた。カナは鉾山の上村さんが連絡で東京へ行つたと聞き、東京の様子を聞きたいと思

った。

日米開戦の3年後、各新聞の昭和19年12月8日付は、開戦記念日の報道で景気のいい記事が飛び交っていた。

しかしカナは新聞の隅に載った東南海地震の報道に疑念を持った。

その前日カナは、かなり強いゆれを感じて家を飛び出したからである。

雑貨屋の棚の商品が全部落ちたとも聞いていた。カナも床のゆれでまともに歩けず、這って逃げた

のだ。

報道によれば、近畿、中部にすこし被害。とあった。しかし戦後に明らかにされたこの地震の実態はことごとく報道と相違していた。

この東南海地震（M7・9）では1, 223人の死者があり、引き続き翌昭和20年1月に起こった三河地震（直下型のM6・8の余震、または二次地震）では2, 302人（民間調では3, 177人）の死者があり、家屋20, 807戸の倒壊があつたのである。

報道管制でほとんど秘匿されたが、名古屋の軍需工場が倒壊し、多数の動員学徒が圧死した。信州からおくられた学徒数人も犠牲になった。

橋梁は砕けて道路も陥没し、家々も軒並み倒壊するすぎましさであつた。

村人は、報道では「すこしの被害」と書いてあるが、絶対そんなことはない。と言ひあつた。

政府は現地での地震の実態は、秘匿できないことはやむを得ないとしても、なによりも国民の戦意喪失を懸念し、また対戦国への情報を秘匿するため報道管制を強力に押し進めた。

しかし対戦国アメリカは先進国である。日本の報道管制より前には地震を了知していた。

翌日には、日本軍をあざ笑うように「地震の次は何をお見舞いしようか。」とB29からピラをまいたのである。

一方の日本側からの情報戦も仕掛けられていた。その一つ米軍兵士向けの謀略放送「ゼロアワー」が、有名である。

この謀略放送の女性アナウンサーは、4人か5人いたが、有名なのは二世の捕虜の戸栗郁子であった。戸栗郁子は米兵の間で「東京ローズ」と呼ばれた。J O A K（東京放送Ⅱ現NHK）からオンエアされ、放送内容は連合軍兵士の厭戦気分をかますものであった。

「あなたの奥さんは、故国で、ほかの男と楽しくやっているよ。」
などであった。

後に戸栗は連合軍によって巣鴨に拘置され、東京裁判を受けた後アメリカへ帰国したが、今度は州で 国家反逆罪 で告発され有罪となった。

さらにその後は「孤児のアン」という受けて、米マスコミにもてはやされ人生に狂いが生じたという。

東京ローズ の悲劇は軍国日本の犠牲が、米国の日系二世社会にも及んだ実態がみられるのである。

日本の秘匿情報は暗号をはじめ、ことごとく敵国に解読されていた。だからいくら秘匿をもうろうが、日本が地震で大被害を受けたことくらい、先端技術を持つ対戦国アメリカには瞬時に分かることだった。

すでに昭和14年には、諸物資の払底が予測されたので物価統制令が施行され、配給以外の物資流通が禁止されていた。

これは戦後昭和30年代まで続いたのである。米の私的な輸送も禁止され、戦後になってからも早く離れた地に住む家族へ、米を送ることもできなかった。

戦中の食糧難も戦後のそれも変わることはなかったのである。米の販売、移転等がひっそりと自由化されたのは、なんと昭和40年代になってからのことである。

昭和30年代も国民ひとりひとりに「米穀通帳」が配布され、運転免許証が珍しいころはこれがIDカードに代替された。法的な制度としては、これは昭和57年まで廃止されなかった。

昭和20年に入ると、食堂や料亭の経営はさらに困難を極めることとなった。酒や調味料の割り当てが厳しくなったのである。出征用の酒の枠はわずかなものだし、酒造元から回してもらいう量も限定され、日々の商売ができない状態に陥ったのである。

カナは料亭が閉鎖されひまになったので、上村の働く静香鉦山のある晴ヶ峰へ登ってみた。

客の上村はこの山のいずれかにいるだろうが、村長（むらおさ）からは鉦山には、近つかぬよう言われていた。

峰から見下ろすと、戦況とはそぐわないほど9月の田は見事な黄金色に輝いて、諏訪の盆地全体が稲の刈り入れを待っていた。

柳田國男が「遠野物語」で、遠野盆地の稲田の景観を語っている。「高処より展望すれば、早稲まさに熟し晚稲（おくて）は花盛りにては水はことごとく落ちて川にあり。（略）谷を越えゆれば、早池峰（はやちね）の山は、淡く霞み山の形は菅笠のごとくまた片仮名のへの字ににたり。」と。

カナは先日上村が、遠野盆地も同様だといったのを思い出した。規模も遠野盆地とほぼ同じに見えるという。

盆地の生成過程も、湖（みずうみ）の跡にできあがった盆地で、遠野はすでに湖が干上がって消滅しているが、諏訪盆地はまだ諏訪湖が諏訪、岡谷をはさむ規模で残っているのはうれしいといっていたのだ。

カナの料亭であるが、酒がない料理屋など存在の意味がなく、昭和20年3月には、ほぼ休業の状態であった。なじみの客は四散したが、東京から上村が帰りにときおり寄った。なんと自分の飲む酒を持参したのであった。

「東京は全滅してしまった。」

上村は来るとすぐそう言った。1週間前の3月10日東京下町一帯が焼夷弾で全滅

したのであった。10万人以上の焼死者が出て、その被害はあの大正12年の地震をこえるものだったと話すのだった。そして、

「もう、日本は破滅だ。」

と、つぶやいた。

「鉱山は、いくら鉱石を送っても精錬ができないし、もうこれから大砲も飛行機も

製造できない。」

と、言うのだった。工場はのきなみ爆撃されていたのである。カナは、

「ほじゃあ、どういって、この戦争を、やめねえずら。」

と、聞いたが、上村は応えず、視線を遠方へむけた。その目はいらだちと憐憫の混じった瞳だった。翌日上村は晴ヶ峯の静香鉾山の現場へ戻っていったが、鉾山の朝鮮人はどうしただろうか。

サイパン玉砕の3ヶ月前の昭和19年の4月から5月連合軍は、ニューギニア島

へ上陸したが応戦できる装備も食料もない日本軍は、人跡未踏のジャングルを彷徨して14、600人が餓死した。

翌月は、ビアク島が圧倒的な力の差で3個大隊と高角（射）砲隊が玉砕した。

日本軍は、このころから部隊ごとの「ばんざい突撃」の玉砕方針を変え、忍者もどきのゲリラ戦で持久戦を命令されていた。少しでも本土への敵の接近を遅らせようとの目論見であった。

これにより米軍は日本兵の一括退治は出来なくなった。しかし落ち目の日本とは裏腹に、米国の新製品の開発力は目覚しかった。新たに130m射程の火炎放射器を開発し導入したのである。

そして米軍はこれを駆使することにより、日本軍のゲリラ戦を排除し優位に立つことができた。日本軍は、ゲリラ目的に窺ったあちこちの自然壕へ、この火焰を撃ち込まれ瞬時に多数の兵が焼き殺された。

作戦上では、銃による殺戮が壕中の障害物で困難なとき、火炎放射器の使用は有効である。

記録では、南方のビアク島の戦死者は11000人で、2013年現在、7000柱の遺骨が日本

へ帰っていない。

ちなみにインドネシア全体では84000人が戦死し、いまだその半分は野ざらしのままである。

さらにマノクワリ島で2個大隊が玉碎し、島の西ソロンを目標した逃避行は飢えと病魔で7、000人、別動隊は5、200人が亡くなった。

マッカーサー元帥のレイテ島上陸を阻止するための日本の軍隊は、マッカーサーが目的地に上陸してしまえば、そのミッシェンは敗北として完了するはずである。

しかるに、当事国の日本軍には、今自分が何を目的に戦っているかも理解できず、その後も目的も定かでない戦いを玉碎するまで続けた。

市谷の参謀本部は、敗残の部隊はすべて放置し、消滅させたい意向だった。後々厄介な復員などの問題を避けるためである。

国家、特に軍の思惑とは、これほどまでに国民を人とも思わず、軍事優先の思想にこり固まっているのである。

3月に入ると諏訪地方はカミ雪が降る。もともと諏訪の冬は寒さ主体で雪は少ないのが特徴である。それが、季節の変わり目の訪れに付随して、深雪に見舞われることがある。これを「カミ雪」とよんでいる。昭和20年の冬はとりわけ厳しかった。食料も乏しく寒さはその空腹の分だけより寒く

感じるのであった。日本中が飢え震えていた。すでに日本人の一億玉碎と言われる、国家によるジェノサイドが目前にせまっていた。

「天皇さまはどうお考えは分からないが、国は徹底抗戦を覚悟したようだけ。」

組長の爺っさが回覧板をもって来た折、カナに深刻な顔でそういった。

一億玉碎とは、日本人が一人もいなくなることである。

徹底抗戦を決意したという国家であったが、水面下ではすでに敗戦は覚悟しており、敵方との交渉で和睦の落としどころを探っていたようである。戦争が一日延びれば犠牲者は一日分増えるのであるが、いまさら政府にとっては、国民の犠牲などどうでも良かった。相手に提示した和睦の条件とは、戦争に負けても国体、即ち天皇制を護持ができる保障であった。

ポツダム宣言には、国体護持の保障はない。国体を巡る日本の不断と迷走は、戦勝に近い連合軍をイライラさせるに足るものであった。

その夜上村が寄った。カナはなじみのために確保しておいたわずかな酒を供した。

上村は、絶望的な戦況をひっそり話した。

「もういけない。先週、硫黄島は玉碎した。もう、アメリカは小笠原諸島を飛び越えて、伊豆諸島近海の千葉から百海里沖まで迫って碇泊中だ。毎日グラマン艦載機が、総武線沿いに無差別の機銃掃射をしている。」

昨日も、九十九里の横芝と成東（なるとう）の駅が爆破された。成田は、爆弾がぎれた（使い果たした）ようでも助かった。成東の波切不動さまも危なかった。」

上村は、次の玉砕は沖繩だといった。

上村が予言したとおり、3ヵ月後の6月には、沖繩は玉砕したのだった。

上村は、もう次の仕事を考えているようだった。

「鉾山は、まもなく閉鉾命令がくるだろう。カナさんにだからいうが、もう、日本は降参するしか道がない。」

といい、すこし視線を遠くへ投げた。

「だが、敗戦になればいま鉾山で使っている朝鮮人が、俺たちの上に立つことになるといわれているのは、まんざらうそでもない。おれたちは破滅さ。」

上村は鉾山を閉鎖する段取りを考えているようだった。早々に鉾山を閉鎖して徴用している朝鮮人を、できるだけ早く供給元へ返すためである。

徴用外国人には、朝鮮、支那人にとどまらず、欧米人やオランダ人もいるのである。

明日（あした）の力ナ

隣り組長から、「言（ゆ）い継ぎ」がきた。口頭の継走連絡網である。

「草刈カマ や 鍬（すき）や くわ に、長柄をつけて、武器に転用できるよう準備されたい。」
などとい持って廻ったのは向かいの爺っさだった。兄や身内は、日本ありようと墮ち行く先など、
なにもわかっていない百姓であるので、

「お向ここの爺っさは、なによ、ゆ（言）ってきただえ。」
と、伝意が理解できないようだった。

「鍬（すき）やカマに長げえ柄をいれとてちゅうどう。」

と、伝えると。なにか共同作業でもあるのかと、笑えない誤解をするのであった。

このお上からの通達こそ、いうまでもない徒手空拳の一億玉砕の準備である。

身内の鈍な反応に寄り添う力ナは、情けない気持ちだった。国境があれば家族で難民となって、異
国へ亡命でもしたい気持ちだった。

上村はその1週間後にやってきた。昭和20年の4月のことだった。

普通だったらいまごろは東京の墨田公園は桜花爛漫であろうが、爆撃を受けた焼け
ぼっくいだけの荒野であろう。

そう言うと、上村は、

「そのとおりだ。」

と同意した。

「いい時代に、あそこの桜を、カナさんに見せてあげたい。」

上村の言葉にカナはハツとした。そうだ、この言葉を待っていたのだ。

「つれていって。」

この一言で、カナの人生のゆくえが決まったが、上村すこし複雑な顔で微笑した。

カナのほうは、置き所のない羞恥の底に沈んだ。

もはや東京は季節を喪失した死の街だった。春を彩る桜もなく、秋を華やぐ紅葉もない。代わりに富士山をいずれからも見る事ができる、広々とした焼かれ跡の空間だけが残されていた。

今夜もちよつきり22時の上り新宿行き列車が、D51機関車の汽笛と蒸気音そして動輪の響きと地響きをあげて発車した。この列車は新宿行きだが、たぶん甲府駅で運行は打ち切られるはずである。

6月23日をもって、沖縄戦は精根尽きて果てた。「終わった」のではない、「尽き、果て壊滅した」と言うのが実感であった。勝負における「負け」とは、負けの判定を受け取る「人格」が存在してこそ「負け」という判定なのである。沖縄は勝敗の判定もない究極の壊滅であった。

武器もなく徒手空拳の戦いで、住民は軍により玉砕を強要された。沖縄戦の最高司令官の牛島司令官は、カッコよくはやばやと割腹自殺したのであった。しかし敗残兵や沖縄住民は依然として右往左往しており、そんな自分勝手の安易な自死を容認できる客観状況ではなかったはずである。

牛島司令官は自分が自殺によって、沖縄戦線は混乱するだろうと予測した。

その混乱を利用して米軍を沖縄に食い止め、少しでも米軍が本土へ侵攻するのを遅らせようとしたのである。

すでに東京の硫黄島は玉砕していたが、硫黄島は住民は早くから根こそぎの強制疎開後で、今は住民がいけない島である。しかし沖縄は違う。軍兵より多数の住民がいる生活の島であった（山崎豊子「運命の人」）。

最高責任者の牛島司令官を生き返らせてでも、沖縄戦末期の戦闘の交通整理をさせるべき状況であったのだ。

「牛島さん。死んでのんびりいる場合じゃないよ。」

という混乱状態であった。

ともかく沖縄戦では、日本側だけで、244、136人の犠牲者が出たと記録されて

いる（米国防省資料）。

このうち13歳までの子供の死者は、11、483人である。そして理由別では、こともあろうに日本軍によって壕から追い出されたため、という理由がみえる。これが1万人を超えるものとなって

いるのは注目されることである（自衛隊資料）。

敗戦

すでに1年前、サイパン陥落をもって日本の敗戦は決まっていた。思い切りの悪い戦争指導者は子供だましの「神風（かみかぜ）」を呪文のように唱えて、狂気の特攻に明け暮れる愚を演じ、ただただ無為無駄に負け戦をひきずっただけのものであった。そのため、最大多数の死ななくてもよかった国民の生命をドブへ捨ててしまった。

国体護持にこだわって、踏ん切りの悪い軍部と政府は、こと此処にいたつてもぐずぐずと、「玉砕」というジェノサイドを、国家的な新たな話題にして戦争の終結を引き伸ばしていた。

日々、飛び出していく神風特攻隊は、既に宗教戦争の自爆テロそのものであった。

「戦争」という生き物の首に「敗戦」という鈴をつけ得る人は、天皇という現人神しかないのであった。

しかし統帥権の主体の軍務局と実践部の陸海軍との折り合いは悪く、天皇もむやみに裁断できなかったという。

結局、昭和20年8月の二回の原爆投下が、事実上敗戦勧告の強烈なカンフル剤となった。

日本の軍国主義は、すでに1年前のサイパン玉砕で叩きのめされていたが、この2発の原爆は、その

身は無傷で懲りない軍国官房族の徹底抗戦マインドへの、完膚ない鉄槌となった。もう虫の息の日本帝国は、国是の徹底抗戦を嘯（うそぶ）くその余裕もなかった。そしてこの原爆投下が、天皇に敗戦への決断を促すものとなった。

原爆投下という究極まで、戦争を引き伸ばした日本国の責任と、人道にもとる原爆を投下したアメリカの責任という、相反する当事者への責任を裁く神の審判は、それから21世紀に至る今も下っていないのである。

「原爆は戦争の早期終結に有効だった。」

と、エノラゲイ（原爆投下したB29の愛称）の搭乗員は死ぬまで主張してやまなかった。その最後一人が2014年に逝った。これらの戦闘員の主張は、日本人の複雑な思いの中で迷走している。

昭和20年8月15日、国民は非民主独善の日本帝国から解放された。国家は破滅したのである。犠牲は大きかった。厚生省の資料によれば、日本人の死者は310万人とある。

4百万人に近い高い国民の生命と、計り知れない国民の財産を犠牲にした戦禍は散々なものだった。

そしてこの日はまた、日本国民の地獄の苦難の始まりの日であった。国民は改めて八熱地獄（亡者を責める八つの地獄）の苦を課せられた。

親を殺された子たちは、浮浪児となって群れをなした。目をギョロつかせ心はすさまじくみきっていた（中沢啓治「はだしのゲン」）。

外地におくられた移住民や、敗残兵は、正当なその国々の国民から、石もて追われる身となった。大陸ではソ連参戦で激戦地となったが、守るべき関東軍は民間の邦人をほったらかして、いち早く逃亡していたのであった。

このため棄民（きみん）となった邦人たちは、明日の身も知れぬ引き揚げの集

団を組み、いのちからがら赤い夕日の満州の荒野をさまよひ、故国へ向かったのである

（藤原てい「流れる星は生きている」）。

また捕虜となつた敗残兵は、60万人ちかくが極寒のシベリアへ送られ重労働を課された。そのうち復員したのは、50万人そこそこであったといわれる。

後に分つたことであるが、敗残日本兵のシベリア抑留は、当時の日本政府が戦後賠償の代償の一部としてソ連との間で裏取引で了承したものである。終戦時の日本政府がいかに血迷つていたかを示すものである。シベリヤ抑留とは、おどろいたことに窮余の日本国がソ連へ提供した人柱であつたのだ。

そして、復員までの数年間に多数の人が命を失つた（瀬島龍三「幾山河」）。

ビルマへは30万人の将兵を投入したが、その60%が亡くなつた。

南方での死者は、ほとんどが軍関係者である。また給路のとだえた南方の離島では、熱帯のジャングルの中で、数えきれない将兵が餓死した。

「数え切れない」という表現は、一般には単に「多数」を表す形容だが、ここで言う「数え切れない」は、数えなければならぬ死者数がかめないという深刻な事実の表現なのである。

戦後の南方や大陸からの移住邦人や敗残兵の復員事業は、国家の一大事業であった。

配船が間に合わず3年も留め置かれ、その間に連合軍に徴用されて土木作業を課せられるケース（独立戦争中のインドネシア）もあつたし、収容所に拘禁されたケースもあつた（拙著「悲劇の南十字星」）。

平行して、戦犯裁判も執行され多数が処刑された。A級は東京裁判で世界に配信され注目されたが、B、C級は現地で行われニュースにもならなかつた。

現地のB C級戦犯裁判は、はじめはショーもどきに観客席まで設（しつ）らえるほど盛況だったがやがて飽きられた。

戦犯裁判は連合軍名による裁判であつたが、インドネシアでは事実上旧宗主国のオランダが報復裁判を行い、内容は戦勝国の恥も外聞もない報復裁判だつた。日本がかつて占領時に行つた過酷な軍政への返礼を受けたのである。

インドネシアではスカルノによる独立戦争が勃発した。したがつてその敵となつたオランダによる戦犯裁判はできなくなり、未決囚は日本の巢鴨プリズンへ送られた。

くりかしのなるが、そもそもこの戦争はだれが見ても勝てないと分かつている勝負だつた。それを平気で続行した日本の責任者がいたのであり、戦後その責任を課するのは当然である。しかし日本政府

には自身で戦犯を裁く能力も人材もなかった。

自国による戦犯への責任追及はできず、すべて戦勝国による責任追及すなわちA、C級戦犯の国際裁判にゆだねられた。

カナの出戸（でど＝里）の安国寺村でもこの戦争による消耗は大きかった。爆撃こそなかったが村人は打ちひしがれていた。

上野の地下道では多くの餓死者が出た。いまは形ばかりの日本の仮政府は何の手も打てず、何の役にもたたなかった。

カナは、今が夏でよかったと思った。冬だったら数倍の餓死者が出たことであろう。

日本は滅亡したが、まだ私たちは生きているのだと、自分の手の平を見ながら思ったものである。

カナがしみじみと見た自分自身の手は動いていたし、陽光はエメラルド色の空から祝福するようにカナに降り注いでいたし、自分の心の臓の鼓動も実感できた。

それは一億玉砕を声高に叫んだ日本国が、神を敵にまわして日本人消滅を企図したジェノサイド（みなごろし）作戦が破綻した末に、改めて神か無垢な日本国民に恵与してくれた福音であった。

また世界各国にとつては、日本の敗戦それ自体を世界平和への貢献と受け止めた。

カナは、二回目の応召で出征した同村の重作さが、フィリピンのレイテ島沖海戦で戦死したと聞いた。

2 回目の出征というめぐり合わせとは、よくよく運の悪い重作さだったが、その後誕生した女子はついに父親とめぐり合う星はなかった。

今、カナも上村もまた誰一人明日の自分が見えている人はおらず、日本人の全員が打ちひしがれて絶望の底にいたのである。

カナは、上村を待った。鉾山の後始末で飛び回っている上村を毎夜夢にみた。

徴用した朝鮮からの労務者の解散とその処遇は、法務省や入国管理の部署との折衝が必要であろうし、まもなく占領軍が進駐してくるのである。

日本軍隊の武装解除は進駐軍が来る9月を待って行なわれると聞いた。日本国家が政権を連合軍に引き継ぐその日までは、従来どおり日本軍は解散せず国内の治安維持に当たることになった。

ともかく日本国民は敗戦によって、空爆や艦砲からは開放されることとなった。

そして焼かれ跡の野原には、埃にまみれた名も知らぬ雑草の花が咲く熱い夏であった。

空には占領軍の不気味な哨戒機P38の双胴機が常時警戒飛行し、日本国は手錠で拘束され、占領軍の監視下に置かれている実感は色もないモノクロの世界だった。

街々に流行歌「りんごのうた」が流され、それを聞くと日本の行方は見えないが、そこはかとなじ救いがありそうな幻影が見え隠れしたものの、国民の心は途方にくれたままであった。

戦後の混乱へ

戦後史の原点は、進駐軍の慰安施設の設置から始まった。

8月18日、すなわち終戦から3日目各県知事あて、内務省警保局長名通達が出された。内容は「外国軍駐屯地における慰安施設設置に関する件」および「外国駐屯軍慰安設備に関する整備要項」という、国家の大恥をさらす売春促進という行政行為の通達であった。

一方、警察も背に腹は変えられず、いつもなら恐持（こわも）てに取り締るべき花柳業界へ、平身低頭して売春への協力要請する厚顔であった。

その背景であるが、日本政府が最初に直面した問題は米軍の進駐からわずか10日間で、神奈川県下だけでも1336件の強姦事件が発生した事実であった。

あわてた日本政府は「日本女性の貞操を守る犠牲として愛国心のある女性」を募集し、連合軍向けの慰安所を設立するためである。

国が企画したこのリクルートには、総計55000人が募集説明会に集まった。救世観音（くぜかんのん）さながらの女の出番であった。

政府は女性募集の広告をしたが、さすがに「業務内容」を記載するのをはばかった。このように「業務内容」が記載されていなかったため、多数が応募したものの、参加した説明会で業務内容が「売春」だと聞いて、ほとんどの女性は怒りの態で去っていった。

しかし他に生活の術(すべ)のない戦争未亡人や、困窮する子女が多かった時代背景もあり、背に腹は変えられず東京都内だけで1600人、全国で4000人の女が、このリクルートを受け入れて働くことになった。

9月には連合軍が進駐し地方には、「マッカーサー司令部諏訪支隊」などの名称で支隊がおかれた。

村長からの依命通知(受令を村長名で転発)では、稚拙な訳文が出た。進駐軍のジープの周りでハローハローなどとコールし追いかけるのは、気分が悪いし危険だとか、立小便の禁止、衣服をまともせず外出するなどであった。

今、どこからでも富士山がハッキリ見える景色は、焼け果ててさえぎるものもない、そして何も無い荒野となった東京ならではの歴史的にも貴重な風物であった。

戦後日本統治のため、連合軍民生部が直接「軍政」を布く案が検討された。

しかし、時(とき)の外務大臣重光葵が占領政策に「天皇の權威の活用」の効用を主張し、これを連合国側が受け入れたため、最終案では暫定日本政府を通じた「間接」統治の方針が決まった。

この方針は偶然だが、その後の世界の冷戦構造の勃発に際し、朝鮮戦争の主役アメリカ側に計り知れない利をもたらす先見の明となった。

仮に日本が3、4の占領国の分割統治となっていたら、朝鮮戦争でアメリカは、後方の日本基地をあれほど自由に駆使することはできなかった。

あるいはアメリカは、朝鮮戦争の敗戦国になったかもしれない。また、分割統治のままの講和条約は締結が困難だったと思われる。日本は、東西南北の4つの国に分割されていたであろう。

ほかにも占領期間の公用語を英語に変更する政令を、翌朝10時までに国民に布告するよう命ぜられたが、外務省の交渉によってすべて白紙撤回させた。

しかし占領下に英語は必要との考えから、NHKラジオで「カムカム英語」の番組を流させた。聞いた国民には、冒頭の「猩猩寺の狸ばやし」の替え歌だけが受容されたようである。

村の寄り合いの酒の席で、引揚者の親父がバケツを叩いてこれを囃（はや）したのが印象的だった。

さらに日本語の「ローマ字化」が検討された。しかしこれも調査の結果、日本人の漢字の識字率が極めて高いことから現状維持となった。

婦人参政権、労働組合法、農地改革などの改革は、新憲法改正案が成立するより早い時期に明治憲法下でなし崩しに法制化された。

結党の自由も保証され、当然政治犯の釈放、治安維持法の廃止。「思想犯」として捕らわれていた共産党員などが解放され、結党再結党の自由も保障された。

軍国主義思想の復活を防ぐという名目で、剣道や歌舞伎、神道など伝統文化のうち「好戦的」あるいは「民族主義的」とされるものについて、活動停止や組織解散や教則書籍の焚書などを行った。

教育改革では神話や教育勅語が廃止され、国民や学会は暗黒の教育から開放された。さらに文学作

品に、日本の神話にを引用したものは検閲により削除された。

占領当初は靖国神社を焼き払って、ドッグレース場にする計画が立てられたが、連合軍内での論議では、まやかしの神道とはいえ「神」の扱いに賛否両論が出た。

駐日ローマ法王庁・パチカン公使代理のブルーノ・ビッテル神父による、民族信仰の重視の抗弁で靖国神社は焼き払いを免れた。

戦後の象徴のようなツーショットで有名な、天皇とマッカーサーの単独会見は天皇の「命乞い」だと噂された。かつて明治政府が統治手段として、神格化した天皇だったが、この神は自発的に「人間宣言」を行なったので神は死んだ。

この日から現人神であった天皇陛下は、無権の単なる「象徴」になった。

国中打ちひしがれた日本だったが、自然災害はそれに斟酌なく追い討ちをかけた。

戦後早々の秋の枕崎台風は、終戦後、原爆で混乱する広島を直撃し、原爆で崩壊い仮した広島など一帯を総なめし、2000人以上の原爆で苦しむ人々を仮借なく責め、その命を奪うなど無慈悲に襲ったのである。

わからない仲

戦禍を免れたカナは、上村と懇（ねんご）ろな関係が続けていた。上村も諏訪へ来ると、いそいそとカナに会いにきた。

カナは、すでに上村によって女にしてもらっていた。カナは上村のたくましい体に覆われて、とまどいながらも開き愛を受け入れた。

上村は渴いているようだった。その夜連続して3回目の愛にカナは、耐え切れず首を横に振ったが、熱い愛はカナに向かつてほとばしった。

ある日兄の金雄が、戦時に応召して帰ることがなかった旧家が家作に出ているから。と、その家を借りてくれた。気の利かない兄と思っていたが、事情は先刻承知のようだった。

家具もない畳とふとんだけのただっ広い家は、隙間風が吹いていた。それでも上村は、
「こんな広い家は初めてだ。」

と、喜んだ。「事実婚」だったが、近所の手前東京で「式」をあげたと説明した。

実はカナはこのとき、誰にも明かせない上村の過去を聞いていたのであった。

「姉（ネエ）サだから言うが、俺は以前、犯罪にかかわったことがある。」

と、告白した。故郷の遠野で、木材会社の社員だったころ、あまりの専横な社長に、堪忍袋の緒が切れ森の中で殴り合った事件であった。上村のパンチが40歳の社長を制し、社長は苦悶の中で死んでいった。しかし上村は撲殺のことは、妻のカナにも明かさなかった。

もともと誰も知らないことである。撲殺した上村とそこで死んでいった社長との二人だけの事件で

あつた。

そのときまだ20代の上村だった。上村は動転したが伐採の事故に見せかけ、警察へもそのように虚偽の申告をした。社長は、死に際、

「そんなに、おれが憎かったのか。」

と、信じられないという複雑な顔をみせた後、誤って谷底へ転落して死んだのである。

上村は、落ち着いてから、深く悔やんだ。憎しみで殺意をもつてした殺人だが、

「そこまでしなくても、どこかで折り合いがつかなかったのか。」

と、今は反省している。上村はこの殺人を伐採の事故に見せかけた。そして社長の死は、上村のもくろみ通り事故死として処理された。

なにも知らない社長の妻の京子は、上村に会社を引き継ぎ社長になってくれと頼むのであつた。あまつさえ未亡人となつた京子は、なんと上村を夫にしたい意向もみえたことから、上村はいたたまれないほどの懺悔を強いられた。

このままでは自分自身が分裂してしまう。上村は夜逃げ同然に故郷の遠野を離れ東京へ向かつたのだつた。

事件の生々しい記憶は故郷の遠野を思い出す都度（つど）、繰り返しよみがえるのである。結局、上村はカナに、「ある犯罪にかかわつた。」と告白したが、殺人とまでは伝えられなかつた。

諏訪の製糸業界は、片倉製糸が地場産業の生糸部門を独占していたが徐々にかけりが見えていた。

時代とともに繊維業界の主流は化繊に変わっていた。神奈川のタイトスの厚木ナイロンや、八王子のベンベルグなどの化学系の糸が飛び交った。

大衆的なメリヤス織りには絹より、綿糸や麻糸、テトロン（ポリエステル）が適うのである。その後片倉製糸も、キャロンの靴下の製造など化繊の世界に移行した。

生糸にかわって、諏訪の地場産業は生き残りを賭けて、時計やカメラなどの光学機器の製造に活路を求めて試行錯誤していた。

セイコー、シチズン、オリンパス、ヤシカ、などが操業をはじめ、その下請け工場も増えていった。

諏訪は空気が透明で水質がピュアなので、このような精密機器を製造する基盤的な自然環境においては良好らしい。労働力もその扱いも、飛騨の糸ひき娘を集めた伝統からノウハウを持っていてこの業種に引き継がれていった。

妻のカナは上村がヤバイ橋を渡るのは好まなかった。できればこの諏訪で新しい関連事業を起こすなど考えてほしかった。しかし上村には東京のヤミ市場あたりが魅力的らしく、地元に着する兆しはなく数週間おきに東京へ通っていた。

あるときカナは、諏訪警察の私服の警官の訪問を受けた。離れたところにジープがあり、制服の警察官が立っていた。

「あなたの旦那が、山梨県警に留め置かれた。家宅搜索をする。これが令状だ。」

刑事はただ広い何もない家の中を見回し、何もないのを確認した。だけで黙って帰っていった。容疑も状況も伝えずカナも聞かなかった。まさに形式的な家宅搜索の儀式にみえた。

以前から山梨県の警察の身入りは少なく、国柄も吝嗇（りんしよくけち）だからヤミ物資の摘発はしつこい。と上村が言ったことがある。

しかし摘発物資を召上げたのだから、いつまでも拘留しないだろうと思っていた。カナが予想したとおり、翌日には上村は平然と帰宅した。

「1万円の損害だった。」
と、ポツリ言った。

「あぶねー橋をわたらなくて、こっちで仕事したらどうだね。」

上村は、うなずくそぶりで、
「パン屋でもやってみるか。」

と、つぶやいた。

昭和21年、カナは男の子を出産し、昭和24年には女の子を出産した。

上村の転進

上村は、焼け跡の東京で勝負をした。建築資材の仕入れ販売を手がけたりヤミ物資を扱ったりしたが、同業者が多く合間をかいこぐる生存競争はなかなか大変なことだった。

代表的なヤミ物資とは、米、砂糖、ゴムなどであるが、そのほかにもモノがあれば何でも売れる時代だった。

東京のヤミ市は復興に伴って徐々に消えていったが、鎌田駅西口、赤羽、大井町、三軒茶屋、上野、新宿、新橋、渋谷の商店街は、永い間ヤミ市の佛（おもかげ）を残す町であった。

上村たちは、ヤミ米を運ぶ列車内で、「手入れ」に遭ったこともあった。仲間は逃げたが荷物番の上村は逃げず逮捕され米も押収されたのである。どうせ官憲の私用にされる物資だから、ブツさえ引き渡せば無罪放免である。

ブタバコへ留置すれば、警察はその被疑者に三食与えなくてはならない。

「留置所へ食らいこむと、カツどんが食える」

と、かえって喜ばれるから、警察にしてみれば早く放免したほうがいいのである。

上村は朝鮮戦争のころは、古財の鉄くずを集めたりした。かつての朝鮮から徴用した残留朝鮮人を知っていたので、実労はこれら朝鮮人にやらせたのである。

これらの商売は、それなりの見返りはあったので諏訪にいる妻のカナと子二人の生活費に事欠かな

い程度の金は稼げた。

数年前は浮浪児やルンペンが、東京のいたるところにたむろしていたが朝鮮戦争のころは、上野、渋谷、新宿あたりへ集中していた。バラックが並んだ焼け跡の空き地は、すでに半減し、だれも除草しない残地が草深く断続してみられた。

東京の治安はかなり悪かった、朝の仕事の手配屋が来る前は労務者同士の小競り合いも頻発したが、なにせ皆空腹で喧嘩にまで至る勢いはなかった。

昭和21年には、戦前の行政処分による出版の「発禁」がなくなった。事前納本の出版法がなくなって、おびただしいエロ雑誌が出版され始めた。紙が乏しいので、見栄えの悪い再生紙である。

カストリという密造酒がカストリ横丁などで売られていたが、3合飲むと「酔いつぶれた」。これをもじってこれらエロ雑誌を「カストリ雑誌」と呼んだ。いずれの雑誌も、3号(合)まで発行すればいいほうで、すぐ「つぶれた」からである。

オンリーの女

昭和24年になったころ、上村は滞在中の東京でメリーという女と懇(ねんご)ろになった。メリーは米将校のオンリーをしていたが、相方(あいかた)の米将校が朝鮮へ渡ってしまったので離別のやむなきにいたったものである。女は本名は分からないが通称をメリー といった。

数回の売買春でなんとなく気が通じた二人であつた。メリーも、上村が気に入らなかつた。

「わたし、女の仕事をしたいから、エスコートしてちょうだい。」

と、メリーは誘いかけた。このころは花より団子のほうが魅力の時代だから、なかなか女を漁る余裕のある客は少なく、女は街にあぶれていたのである。

「俺は、経験がないから、女街（ぜげん＝ボン引き）に頼め。」

と、上村は逃げをうったが、メリーはモノ（商売）のなりそうなかなかの器量だつた。

女の色白は七難を隠すというが、十分に隠せるように見えた。

「お客は、私がキャッチするから、ガードを頼みたいの。なかなか適当なパートナーがいなくて。」

メリーは、米将校の日本妻を気取つていただけあつて、特技はブローキングイングリッシュであつた。

このころ米軍宿舎は代々木のワシントンハイツ（現 代々木公園）、王子、立川などに点在してゐた。

上村はメリーの陰の役でメリーを援助することになつたが、この外人相手の仕事はけっこう身入りがよかつた。

午前中はメリーは寝ているので宵のころからだ、メリーは、夕方から厚（あつ）からずの化粧

で化（ば）け、渋谷や新宿に出かけるのだった。

「カモがいたよ。見ていてね。」

数人の米兵を見つけるとメリーはそれとなく接近し、何かパフォーマンスらしきそぶりをすると、早速米兵たちは口笛を吹き、けたたましい英会話が始まるのであった。

話が決まるとメリーは、遠くでたたずむ上村を指さすのである。

ここからは一時的だが上村の出番になる。メリーは、

「いいかい。一人、千円だから、三千円もらって。」

メリーは3人程度は1時間でこなしていた。二輪車、三輪車などといわれても、上村には何のことか分からず、上乗せ料金とか追加料金とかスペシャル料金など指示されるまま料金を徴収した。

上村はメリーのガード役だが会計係も勤め、なじみの専用ホテルを要所に確保する役でもあった。

メリーは自分の生き方を割り切った感覚でこなしていた。自虐はなく金のたまるのを楽しんでいくようにだった。

「私パラオがえりなの。親と渡ったよ。だけどね、19年7月のサイパンの玉砕の3ヶ月前に、もうだめと分かったとき、ちょうど船が出たから日本へもどったんだよ。パラオの三丁目帰りサ。」

「そうか、良いタイミングだったね。1便遅れたら地獄の三丁目だったな。あちら語がうまいから、将校さんから教えてもらったかと思っただよ。親御さんはどうしたね。」

「空襲で死んだと思うわ。墨田区の横網（よこあみ）にいたからね。私は、英文タイプができたか

ら、当時は日本軍の事務所に雇われていたの。」

メリーの身の上話に上村は興味はなかった。

上村は言われたとおりに、目立たないようにメリーのそばに影のようについていた。

やがて上村はダーバンの高級背広を与えられ、当時の巷ではけっこう目立つようになった。上村は心配になって、

「姉（アネ）さん。もうすこし俺たちは、質素な格好したほうがいいんじゃないか。」

と、いさめたが女の浅知恵か強気のメリーは、

「いいのよ。みすばらしい格好じゃ。商売に差し支えるからね。」

しかし案の定その夜縄張りのやくざにからまれ、場所がえせざるを得なかった。この世界ではモグリだから、おおっぴらな客の勧誘はやくざの逆鱗に触れることもあった。

「二回でもシヨバ代を払ったら、身動き取れなくなるからね。」

メリーは、強気にそう言うのだった。

そんなこんなで上村は、妻のカナや子の待つ諏訪への往復は、しばしば無沙汰となった。

諏訪郷のカナ

カナの身についた唯一の芸らしきものは、料亭で昔とった杵つかの、唄と三味線だった。

村の盆踊りは、手回しの蓄音機から電蓄に変わっていたので、週一回設定されている電休日を避けて明るいうちから開かれた。しかしそれでも停電が多く、肝心なときに停電になると、盆踊りの場がシラけるのである。そんな時こそカナの出番であった。

カナは盆踊りの役員に呼ばれ、よく通る声でお諏訪節とか天竜小唄などを、輪の中央で唄った。夫の上村はよそ者だったし、めったに居つかない男だったので、そのようなカナの目立つ行為は、自分たちの存在を村人にアピールできてよかった。

カナのパフォーマンスは不在の上村という夫の存在も、あわせて村人に認知させる効果をもっていた。

二人の子持ちだったカナの懇願で、上村は諏訪へとどまることを考えてみた。地元の精密工場の、ヤシカ光学や、オリンパス光学へ勤めることも考えたが、工場勤めは生来苦手である。

また、地場の寒天製造は冬の仕事である。カンカン場（干し場）は農家から農閑期に借用するので容易だが、地方から季節労働者を受け入れる必要があった。質の良い天草を伊豆や新潟方面から買い込む手間も馬鹿にならず、自分には困難な仕事だと思った。

同じ寒冷地を場とする凍り餅や氷豆腐は、多数の人手は不要だが、やはり寒風吹きすさぶ外の仕事であることを思えば遠慮したい仕事であった。

思えば故郷の遠野にいたころは深い雪の中で、山から材木の搬出をしたものであった。雪にまみれる外仕事は、困難を極めることは十分わかっている。あのころ若いからできた仕事であ

る。今はもうあの寒さと雪との戦いはしたくない上村であった。

そして思い当たったのが、パンの製造であった。食は今の時代有望な分野だと思った。町に工場を借りれば一人でもできる仕事ではある。

パン屋の案は、カナも積極的ではないが賛成した。しかし上村はこのアイデアは出したものの、なかなか腰が上がりなかつた。やはり東京のことが頭にあつたのである。

進駐軍の撤退

朝鮮半島では1950年に朝鮮戦争が始まつた。そのため日米関係も戦後の新しい局面で、非常に難しい時代であつた。

日本社会は平和憲法で、一旦民主化されたようにもみえ、一時は、共産党でさえ占領軍を、解放軍と持ち上げたがそれは幻影だつた。

日本が朝鮮戦争の後方基地となる見込みにおよんで、1948年ごろから、国内における反動化政策が進んでいった。

まずは日本の再軍備であつた。1949年ポツダム令による警察予備隊、1952年保安隊設置、そして政府はこれを突破口に、1954年自衛隊の創設と日本の再軍備を着々と進めたのである。平和を語る総理大臣の衣の下には、鎧（よろい）と武器が見えていた。

前後してれそれまでの進駐軍の民主化政策は、手の平を返したように真逆な方向に進むことになる。

レッドパージが頻発し、松川事件や三鷹事件など不思議な事件が多発し、これを理由に共産党の弾圧などが始まったし、ニ・一ゼネストなど労働組合運動へも進駐軍からの弾圧が及ぶのであった。

1951年に、サンフランシスコ講和会議が行なわれた。講和会議には、戦争状態にある社会主義国（中華人民共和国、朝鮮人民共和国）および社会主義国（ベトナム民主共和国、モンゴル人民共和国）は講和条約に招請しなかった。また国によって個別交渉にこだわる向きあり講和の状況は多様だった。

加害国日本が四面楚歌のなかで、わずかに寄ってたつ瀬は、「日本が今後立ち行く限度での賠償」をこの会議で主張できたことである。

日本国力の疲弊のなか、多額の賠償要求は無理との周知から、賠償金を生産物や役務に替えて支払う方法が加味された。経済援助や借款などの中間賠償がこれである。

日本はフィリピン、ビルマ、南ベトナム。「フランス」の4国だけでも1千億ドルの天文学的な額が突きつけられていたのである。この「フランス」とは、カンボジア王国、ラオス王国、フランス領インドシナの宗主国だった立場からここに表記されている。

受けて立つ日本の、当時の国民総生産が百億ドル足らずのときある。インドネシアの賠償要求は8億ドルだったが、藤山愛一郎全権が提示した額はその15%に留ま

り、全権のハッタから、

「バカにするな、」

と、蹴飛ばされた。金銭賠償にこだわったインドネシアとは、1957年の岸信介総理の時代まで賠償額が決まらなかった。

世界の冷戦構造のなかで、オールラウンドな講和はできようはずもなく、片面講和となり、ソ連などの講和は保留となった。

日本政府は、この講和条約成立後も20年かけて、ねばり強く条約不参加国との個別条約を結び、賠償を決め国交回復した。

それらの世界情勢は、日本国内にもあらゆる形で影響を及ぼすのだった。

当時オンリーさんや英語のできない女性のために、アメリカ兵の恋人への恋文の代書のサービスをする36の店があった。封筒の天びね（ママ上）に紅をつけた、なまめかしい恋文も作られた。むかし吉原のおいらんが、唇の紅で囁んだ天紅（てんべに）の再来であった。

こここそがヤマノテライン（山手線）の、渋谷駅前に名高い「恋文横丁」である。

この公序良俗にもとる戦後卑近の文化は、不幸か幸か昭和40年に失火で焼けてしまい、その後は碑だけ残る伝説となっている。

講和条約が締結されると、基地以外の街々から進駐軍兵士は見えなくなった。しかし沖縄は施政権

がアメリカに留保されたので、昭和47年まで事実上の米軍基地の島として占領が続いた。

米軍の朝鮮半島へ転進後は、日本国内の治安は、創設された保安隊や自衛隊が肩代わりしたのである。

メリーの顧客だったアメリカ兵が、みんな朝鮮半島へ渡ってしまつては、メリーの夜のお仕事も休業であつた。

茶をひいていたメリーは、思い出したように上村の寝室へ入ってきた。

「ねえ、私は、水商売しかできないから、この際、転進して料亭でもやろうよ。資金はあるからさ、援（たす）けてよ。」

メリーはベッドで、上村の胸毛をつまみながら誘いかけた。客がいないと、上村に伽をさせたいメリーだった。

上村は諏訪の妻子を思うと即答はできなかつたが、メリーが上村を信用して頼りにしているのも理解のうちだった。

過去数年の間上村は、メリーの仕事のパートナーとして、利を分け合ってきたのであつた。

もちろんボス役はマドンナのメリーだが、上村は番頭方として何のごまかしもなく真摯に「勤めた」のだ。

こんなジゴロ（ひも）のような役は、上村として潔ぎよしとしないところだが、この時代職業を選べる時代ではない。ありがたい恵与のことと思わねばならなかった。

いまさらそれではと鉦山技師として、かつての諏訪の宮川の静香鉦山のような、穴ぐらへもぐる積極性も今の上村にはなかった。

一方、妻のカナからは帰郷する都度、地元で起業してほしいといわれていたのである。二人の子の育児・教育を思えば当然である。

今年も諏訪は洪水に見舞われた。カナの家作は低地にありその上部を、このころめつたになかった立体交差橋で押さえられているので土地のかさ上げができなかった。

宮川は水位がギリギリまで上昇していた。カナは夫がいななで、途方に暮れていた。子を育てるようになった生活では、昔とちがつて家財も増えていたのである。

カナは本能的に爺つさが遺した、あの遺言を反復した。

「沢の上へ逃げる。身ひとつで逃げる。」

兄の金雄宅はどうしただろうか、兄宅は堤防脇のもつとも危険な地帯だから、早々に沢上まで荷を運んだに違いない。

昔、爺つさが言い遺（のこ）した、

「とにかく、見境なく逃げる」

という遺言は、耳について離れないのであった。

しかし祈るしかない。幸いこのときは天竜は一声吠えただけで終わり、堤防の決壊が避けられて、カナも村人も一息つくことができた。

東京の上村

上村はメリーに路上の仕事からの商売かえを提案されていたが、諏訪の三人の家族を思うとメリーの依頼に即答はできなかった。

しかしこの数年はメリーの付き人のような生活をしてきた上村には、改めて別のところへ行つて新規事業を起こすような目処（めど）もないのであった。

メリーのヒモのような日本流に言えば、美人局（つつもたせ）の、おいしい生活に浸かつてしまつていたのであった。

しかし上村は、無節操な生き方はしたくなかった。自らを「商品」とするメリーに必要以上に接近しなかった。

メリーが愁波をおくつてくることもあつたが、上村が一時の迷いでメリーに手を出すことはなかった。

メリーがモットーとする女の「品質」とは、単なる女の見映えだけではない。女も客も生身の人間だから、会話もあれば一瞬でも心の交流がある。そのとき客は瞬時の恋をするのである。

「そこが大切だ。」

上村はそう思っていた。この荒（すさ）んだ時代に、荒んだ心の女ではおもてなし にならない。客の心まで荒んでしまう。

商品メリーにはその品質に向上の余地を残し、客にとって価値あるメリーでなくてはならない。

現にリピーターの客もいるのである。メリーにほだされた客が、いまでも路上でメリーを待つてゐる。

男も女も愛に関して、同じことを望んでいるとは限らない。メリーの生き方は男たちのそれを遙かに超越していて、潔（いざぎよ） ささえ感じさせる。まさに外面如菩薩内面夜叉（がいいんによぼさつ、ないめんやしや）の本性を象徴しているようにみえた。

「そうだ、それがこの世界で生きるメリーの生き方だ。」

上村は、メリーの生き方に敬服したものである。

メリーは、金儲けには積極的だった。これまでの仕事も並みの神経の女にできる仕事ではない。この女は必要があれば殺人でもなんでもやりそうなタイプだった。

親と一緒にパラオへ渡り、サイパン陥落の直前に逃げ帰った戦争犠牲者の一人である。

メリーは命を銃口のまえにさらされても生き抜いて帰国したのである。その経験は凶太い神経に進化して今のメリー自身のものについている。

翻（ひるがえ）って自分をみると、上村は自分のふがいなさを改めて情けなく思い知るのだった。

忘れもされない12年前の昭和16年上村は、遠野で社長を撲殺し夜逃げしたのであった。

そのとき絶望の自分は、火車（かしや）で地獄へ運ばれる仏話の主人公だと感じたのである。あの上村はメリーが、自分より一枚も二枚も上手（うわて）の、何事にも動じない神経の持ち主だと思っただけである。

佐々木社長の死は伐採現場の事故として届けたので、真犯人の上村はいままで逃げおおせてはいない。しかし、今もって思い出したくもないその記憶は醒めず、火車に乗った日々を恐怖で振り返るのである。

「お前、そんなにおれが憎かったのか。」

と、ゆがんだ顔で息絶えた社長の顔が鬼面のように宙を舞うのであった。

上村は、メリーの強い心を見習って、過去を捨て去らねばならないと思った。

上村には「戦時」「戦後」という、霧のようなベールが幸いして、あの殺人事件をうまく覆い隠してくれている。

今になって自分が真犯人とバレて、罪に問われることはないだろう。

上村はあれから一度も上野駅から北へ足を向けたことはない。そしていまとなつては故郷の遠野村へ顔を見せるなど思いもよらない上村であった。

ただ撲殺した佐々木の妻の京子の行く末は気になっていた。社長を失ったあの材木会社はどうなっ

ただらうか。故郷の身内とも音信不通で既に10年過ぎていた。

諏訪へ来てから自然が遠野と似ているせいか、上村はときどきあの「へ」の字の形の早池峰（はやちね）の、夕暮れの絶景を蓼科山に重ねて見た。

遠野物語に山の話がある。3人姉妹が母の女神から良い夢をみた順序で、3つの山を与うと告げられた。末の娘が夜半に姉の胸に靈華が降りたのを見て、そつと自分の胸に移した。このため最も美しい早池峰を得た。姉たちは、六角牛と石神を得た。というたわいもないものだが、オチはこの三つの山が女の山だということである。遠野の女たちはこの三つの山には、女神の嫉妬を恐れて入山することはない。

上村が撲殺した佐々木の妻の京子も、そのような由来で、佐々木が死んだ早池峰の殺人現場を見ることはなかった。

メリーは、上村に料亭の経営を提案してきているが、いわゆる居酒屋をイメージしているのか、本格的な料理屋を考えているのかハッキリしない。

カナに、思いつきで漏らしたパン屋は、こちらから販路を開拓しなければならぬが、居酒屋だったら客のほうに来てくれるし、酒飲みの「のん兵衛」は世に真砂のごとくいくらでもいて客層は厚い。

カナからは、何度も諏訪で起業するように勧められてはいるが、今となっては諏訪へ戻ってパ

ン屋を起こすのはわずらわしくもあつた。

上村は、メリーとカナとを並べて見比べ、いずれかに立てられる道を考えていた。

メリー

ふとメリーは思った。オンリーのときは、安定的に囲われているのだから実に楽だった。オンリーでぬくぬくと過ごせる恩恵は、日本の敗戦の賜物(たまもの)ともいえるかもしれない。あんな楽な生活は生涯はじめてだった。

明治時代に東南アジアへ出稼ぎに出た九州の女は、からゆきさんといわれた。

カネのため身を挺した女の生き様である。ジャワには、ジャガタラお春などという娼婦の名が歴史にしっかりと刻まれている。もともと女というものは、身さばきに長けている。ジャガタラお春は、世界に羽ばたいた女たちの先駆けであつた。

その女たちの勇気を思えば、メリーの生業(なりわい)のオンリーなどという商売は天国である。

政情からその幸運は破れて、今は路上運転に転進したが、日本の復興の先駆けはこの仕事なのだ。とは言つてもこれまでは、敗戦による絶望の世情不安定のさ中でのことあつた。

路上での単独のアタックは危険だし、食い逃げもいるしやくざもいるから、どうしてもセキユリティーが必要だ。その点、上村さんは最適なパートナーである。

次の仕事はやはり水商売しかない。上村さんには料亭をやろうといったが、手っ取りばやいののはタマを集めて、手元に置いて提供する旅館だ。

2ルームでも3ルームでもいい。それ用に設(しつら)えた旅館の入り口にポर्टレートを貼る。いまだきタマはいくらでもいる。見映えのいい未亡人や人妻でもよい。

メリーは、自分が客を見る目があると思っていた。そうでなくては生き馬を抜くこのお世界を闊歩できない。

今回の商売では、客をえらぶ主体はこちらだが、提供するタマの格にも責任を持たねばならない。この仕事をしようとするタマは、総じて社会では無能で学歴もない、ただ女としての見映えを武器に日々一見(いちげん)さんを相手に一発勝負するそれだけの女である。

江戸時代、新吉原のおいらんは、そうではなかった。客との接点ではさらに教養が必要だったから、和歌のひとつも吟(うた)う才覚を持っていた。

特に、お職を張る(看板役の)おいらんは、多数のおいらんの鏡ともなつて、後輩の指導もしたのである。

タマを使う側のメリーから言えば、おもてなしの心の欠けたタマのサービスでは客の満足を得られない。いかに良質のサービスを提供し、客に満足してもらうかが繁盛のポイントである。

人の心がずさんでいるこの時代だからこそである。

メリーは明日からは良いタマ集めをしようと思つた。商売の繁盛のもとにはそれに尽きるのである。

そして3日後には上村さんが、諏訪から戻って来るから、その意向を聞こうと考えた。

うまくいけば私はこの仕事から足抜けして、新しいタマへの指導だけの経営者の立場になる。

上村

上村は諏訪へ戻っていた。妻のカナは数週間前の宮川の氾濫について報告するのだった。

「すんでのところで、大川の堤防が決壊するところだったよ。みんなホツとしたね。こんなとき手がないと非常の場合に困惑するし、子供を二人抱えて心細いよ。」

と、カナは訴えるのだった。

「さもあらん」と、思いを共有する上村であったが、

「ここにもどって住む。」

とは、なぜか言いがたいものがあつた。上村はその夜、褥（しとね）でカナをひきよせながら、口には出せず、

「何かがおれを引っ張っている。」

と、思うのだった。カナは上村にしがみつき、耳を胸によせて上村の思いを探るそぶりであつた。

「ねえ、どうして帰ってこないの。」

「まだ、東京の仕事が片つかないのだ。」

静かな夜だった。川のせせらぎは、大川の大口水門から排出された農業用水掛（みずかけ）水路からだった。

この水路は、カナの宅前から安国寺観音堂經由の秋葉街道沿いに小町屋神原（こうはら）方面へ流れ、途中名刹安国寺小路方面へ分岐した後、今は遺跡となった旧大町市場と諏訪の殿様のご廟（びょう）付近を流れ田畑を潤す。

そこは昔は「どべつ田（底なしの泥田）」だったが、田の基底へ荒木土（あらかきど）を客土、その下に「水道（＝水抜路）」を作ったので今は普通の田んぼになった。

画期的な土地改良事業だった「どべつ田」の由来は、言うまでもなく大川の流域の無定形な氾濫であり、諏訪盆地全体を河川敷としている。いま流れる大川は600年前は500mも南の山岸を流域としていたし、もっと前は一帯が湖沼だった。だからこの地はいずれも1尺も掘れば水が湧いてくる。

そして諏訪の盆地がすべて流域だった名残は、どこを掘っても石ころだらけであることである。

国道20号線の旧道の茅野駅前後から頼岳寺手前までの崖線（がいせん＝河岸段丘）部分を過ぎ、中州村のほうへ向かうと地盤はさらに心もとなくなっていく。

もともとが諏訪湖の湖底だったのだから数千年たっても湖底は湖底である。国道20号線は、軟弱地盤の上にコンクリートの道路が浮島のように浮いているようなものだ。コンクリートの重みですこ

しずつ沈降するので、道路舗装でかさ上げして現在を保つのである。

「あなた。東京で何をしていますか。」

カナは少しでも上村の動向が知りたかった。

「ヤミの仕事だ。余計な心配は要らない。」

上村の返事にカナは納得できないものを感じたのだった。

「この人はうそをついている。大の男が一月も妻と離れて、好ましいことをしているわけがない。必ず女がいる。この人がきまつて月1回だけ帰ってくるのは、女の都合だ。」

男の体が語っていた。「この人は、渴（かわ）いていない。」カナには分かるのだった。

「3日後に、また出かけるよ。あとは頼むよ。」上村は、そのまま寝てしまった。

いつもの22時の、のぼりの列車の汽笛聞こえた。この人は3日後のこの列車で出かける。いや、女のところへ行くのだ。カナは、締め付けられる思いだった。

天竜と神話

朝起きると、上村は、散歩に出るといった。

「私も行くよ。」

カナは、先にたつて脇の堤防へ登った。今日の大川は渇水状態で魚影が見えた。

「あなた、魚つりでもしたら。」

カナは、大川の淀みを見透かした。腹の赤くなつたハヤの群れが片側の土手脇の淀みに集まつていた。

川の水は本流となる中央部分は、盛り上がりつて早瀬となり、左右のいずれかは淀みになる。魚が群れるのは淀みである。

「いまは、産卵の時期だからえさは食べない。引つ掛けでやるんだよ。」

昔、祖父が教えてくれた漁法である。手取り早いのは投網を投げるのである。

数百匹のハヤは誘うように黒々と背を並べ、浅いところでは赤い腹を見せてハネ上がつたり水の中は喧騒だった。

今年も年一回の田作が始まつていた。一冬越えた田は昨秋の稲刈り後の状態がそのままに残されている。田には、稲の切り株が定型的にどこまでも四方八方に続く硬い土であつた。

これを耕すことから始まるのである。万能くわ（まんのがー）で株のあたりを一つ一つ掘り起こし、土をひっくり返す作業である。

後の世では耕運機で行う作業だが、このころは機械化といつてもせいぜい牛馬でひつばらせる鋤（すき）で、田の端から順次鋤くのである。これが従来の鋤（くわ）で一振り一振り耕す「田ぶち」を飛躍的に効率化する機械化であつた。

この後から水が必要となる。これは次の一番代（しろ）かき、二番代かきの作業に続いていく。

代かきのころになると、水が大量に必要なになるので、農家組合が水路の水の取り合いを調整するのである。

きょうも田ぶち（田おこし）にいそしむ農夫の姿が、広大に広がる田園にちらほら見えていた。

「落ち着いたら、料亭でもやろうかと思っている。」

上村は、カナに向かつて、ぼそぼそと言った。

「どこで料亭をやるつもりなの。」

「東京だ。」

上村は牛馬も混じって作業する田園風景のほうへ目をやった。

「じゃあ、帰ってこないの。」

カナは、無気力に言った。

「客が多いのは、やっぱり東京さ。」

上村は笑っていった。

「この大川には、天竜が住んでいるそうよ。おじいさまが言っていた。明治の大水は、天竜があげられておこしたものだそうよ。」

「そしてこの水路。」

カナは、水門から流れ出す支流をゆび差した。

「これは、天竜のひげ。」

守屋の山に大入道雲がたっていた。守屋山は太古からの諏訪の守り神である。

「2000年以上前、蛇の神様が、天から守屋山の頂上へ降りたと聞いた。3匹のサルを連れてきたそうよ。それが蛇かみさま。」

この神は、庚申塚に象徴される青面金剛で、3匹の猿で表されることもある。

そして、「蛇かみさま」は、族神のミシャグチ様と習合（擦り寄る）して諏訪の明神さまになった。カナは、むかし祖母の七（なな）から聞いた伝説を復唱した。

西方の紺碧の空に飛行機雲が見えた。守屋山の山かげへ落ちてゆくような形だった。

「諏訪湖が八ヶ岳のふもとまで広がっていたころ、霧ヶ峰から、大門峠、金沢峠、そして守屋山一帯に6つの狩猟部族が、狩場を棲み分け暮らしていたの。」

漏（守）矢族をはじめとするいずれの狩猟族も、その武器となるの矢じりの材料として、黒曜石を岸向こうの和田峠で採取したらしい。

黒曜石とはこの地方では、浅間嶺の噴火で飛んだガラス質の火山弾らしい。和田峠に集中したのは、蓼科山に跳ね返ったものだらうか。獲物を殺傷する矢じりの加工に最適である。縄文人は、小船で諏訪湖を渡り黒曜石を採集し輸送した。

やがて弥生の時代へ代わっていくが、出雲族に象徴される弥生族が藤つるを武器に、諏訪へ攻め込み、地元守矢族の縄文側は鉄輪（かなわ）で防戦したという神話がある。

この戦は、縄文から弥生への時代の入れかわりを象徴したものである。

時代の移り変わりを象徴した伝説なら、おそらく数百年にわたる抗争であったに違いない。

全国でいつせいに縄文時代から弥生時代になったわけではない。古代生活の糧の源泉が狩猟から稲作へ数百年かけて変遷した。人種が違う族同士が「経済」と文化をテーマにして時代を変えていく歴史だから、攻防は、実にゆつくりしたものであっただろう。

つまり、縄文人の狩猟には山野のフィールドが必要だが、一方の弥生人の稲作には耕地が必要という縄文経済と弥生経済の争いである。しかもこの争いは、彼我異人種の間での陣取り合戦なのであった。

幸いにも諏訪湖は徐々に水位が下がって、湖底であったところが弥生族の農耕の適地になった。一方山野はそのまま温存され縄文の守矢族が陣取り、両者ともに諏訪を棲み分けることができた。

抗争を通しながらも、縄文族と弥生族の百年の恋は守られて、時代を超えてきたのである。

今でも秋田山形のマタギは、ミシャグジさまを山の神として信仰しているという。

マタギという名は平安のころにつけられたものだが、源は弥生の稲作族に追われた縄文族が、山中奥深くに棲み残ったその末裔だと思われる。

縄文族に属する地元の守屋族も、流入した出雲族もそれぞれの地神を持っていたが、時代とともに融合していった。しかし広大な諏訪湖は縮小され、諏訪湖神の天竜は居場所を失った。

いま天竜は、排水路の天竜川と流入路のいくつかの大川に潜み棲み、かつての湖底が耕地に変わっ

た諏訪盆地一帯を大水となつて右へ左へ大暴れるのである。

「私たちは、いつも天竜に狙われているのですよ。」

カナの話は、祖の実体験を語り継いだだけあつて真に迫るものがあつた。

気が付けばあたりにはすずらんが群生していた。白い多数の釣鐘型の粒粒の集合はいじらしかつた。

「おもしろい話がある。」

上村は、地神と諏訪神社のつながりに古事記との関連をみた。

高天原から出雲へ降りる途中のスサノウの話である。空腹のスサノウは、オホゲツヒメに食事の提供を依頼した。オホゲツヒメは海山の珍珠を次から次へ出してきた。不思議に思ったスサノウは、厨房をのぞいたところ姫は、口や鼻、耳、尻から大量の食物を出して供しているのであつた。

驚いたスサノウは、怒りオホゲツヒメを叩き殺したのであつた。すると、姫の死体のそれぞれの場所から、米、麦、大豆などの種子が出てきた。これが農耕のはじめに必要なタネである。

出雲に降りたスサノウは、「ヤマタノおろち」を退治した。このとき代償に得たのがクシナダヒメである。ヤマタノおろちは一説では揖斐（いび）川を象徴する。この川は暴れ川で、激流は海に至るまでに八つの支流と本流を流域としていた。スサノウはこの川の氾濫をおさめたということである。

そしてオホゲツヒメの体から出てきた種を、川筋の沃地に植えて稲作や畑作に貢献した。この神話が縄文時代から弥生時代への移行を象徴した語りとして伝承された。ヤマタのおろちに象徴される掛

斐川の氾濫をおさめた土木技術から、スサノウを象徴する出雲族は朝鮮からの一族であろうといわれている。

これが、上村が語ったヤマタノオロチが暴れ川の揖斐川を象徴したものだという話であった。

「諏訪湖の天竜とおなじだねえ。」

カナは驚いた。諏訪では天竜が暴れ川の象徴だが、出雲では天竜ではなく八岐大蛇（ヤマタノオロチ）だったのだ。

これは越の方面では、ヤマタノオロチが越の八豪族ということになり、地方によってヤマタノオロチの正体が異なるのである。

伝承では、諏訪神は出雲神に侵入されて諏訪神の守矢を従えた。その因縁は二千数百年にわたるものであった。

ヤマタノオロチはスサノウによつて駆除されたが、諏訪の天竜は今も営々と生き続けていた。

「もつとも、ヤマタノオロチとは、揖斐川ではなく、越の8人のあばれ豪族をあらわすものだと
いう説もあるのだよ。みんな神話さ。」

「どれも不思議なはなしだねえ。」

カナと上村の夫婦は、顔を見合わせて笑った。

あと十日もすれば、諏訪盆地一帯の田は、水が張られて青い空を写すだろう。水のおいとトラクターが響き渡るのである。

上村とメリー

「今月は、景気がいいわね。この旅館のたたずまいと、私たちのサービスがお客の気に入っている証拠だわ。洋（よう）さん料金も手ごろだといっていた。」

「私たち」とは、メリーとインダのことである。

メリーは機嫌がよかった。洋（よう）さんというのは、近在の酒屋の親父で病弱な妻を抱えている。上村も時々見て知っている。

「タマをもう一人探すわ。人手が足りない。」

メリーは強気だった。

「上村さん。1ヶ月に1週間帰ってもらっているけど、もう一人か二人タマがそろえば、女のさわりの日程の調整もつくから、ずっと東京にいて頂戴。」

上村は2人の女の「さわり」の日程に合わせて、カナのもとへ帰っていたのである。

「それは困る。おれの都合もあるぜ。」

「じゃあ、あのインダをあげるわ。あなたの囲いの女にしなさい。商売用には別のタマをさがすから。奥さんには分らないわよ。」

メリーは、上村を離したくないようだった。

「それにしても、ぜんぜん帰らないわけにはいかない。」

「なによ。遠洋航海で半年も帰らない漁師の男だっているのよ。」

メリーは妥協がなかった。

上村と旧鉾山

上村は、カナと見た、晴ヶ峰から見下ろす諏訪の平らを思い出した。中央を2つの河川が、蛇のようにうねっていた。カナは、あれは天竜だといっていた。

この晴ヶ峰は戦時中、あの静香鉾山の操業で上村は軍属で鉾山長だった。徴用して拉致まがいに行ってきた朝鮮人を、ここでもぐらのように坑道へ追い込んでノルマを課したまさにその場所だった。

めしたき女を雇って炊事をさせた。女には、昭和17年に生まれの双子がいた。ひごと訪れた鉾山の飯場には、まだその3人がひっそり暮らしていた。戦後鉾山は解体解散し、朝鮮人や他の労務者は四散したが、この女と子には行き場がなく鉾山の飯場にそのまま居ついたのだった。

畳みもない筵のただっ広い広間は、労務者がゴロ寝をしていた飾り気のない場だった。

「上村さん。ご無沙汰だね。私たちはあれから変わっていないよ。」

「そうかい、それは何よりだ。病気もせず立派だ。お子さんはどうだね。」

子の母は屈託なく挨拶した。35歳くらいだろうが山暮らして化粧もなく50女にも見えた。

「この子たちはもう4年生だ。学校が遠いし、小飼峠の平安道は通学のとき熊もでるんだよ。冬がくるまえに街場へ出ようと思ってる。生活保護費をもらいにいくのも遠くて大変だから。それにこの飯場はもう雨漏りがひどくて。」

上村は、さもあろうと思った。平安道とは、平安時代から続いている小飼峠（晴ヶ峰）の峠越えの古道で、東山道とも言われる由緒ある古道である。

今は道の境界も不明な国有公共用地（公図ではアカミチ）となつて公図上確認できるだけである。部分的には民地に取り込まれていて、とても一般の生活道にはなりえないし、めしたき女の家族と熊以外には利用する生き物はない。

「相談にのるよ。決心がついたら繋（つな）いでくれ。」

数千円を包んで上村とカナは女にわかれを告げた。

諏訪盆地の向こうに、同じ標高の霧が峰がかすんでいた。そしてさらにその向こう、浅間山がいつもの薄い噴煙をみせ、煙は空の向こうへ漂っていた。二人は、

「活火山の浅間山の活動が活発化しているとラジオのニュースで聞いていたが。」

と話を交わしつつ峰下の蚕飼（こがい）峠から山中に残った古道をたどつて下つた。

晴ヶ峰の雲上の世界は、鉱石を掘るといふ戦争遂行のための国策上の後方支援とはいえ、上村もあの飯炊き女と共有したこの世の苦界ではあつた。

上村は明日も見えない真つ暗闇の戦中に、朝鮮人グループと掘って掘った鉾山のもぐら人生のところが懐かしかった。

あの朝鮮人たちは日本の敗戦を福音として、数年のうちにはほとんどが故郷の朝鮮へ帰還していった。上村は心ではホッとしたのである。日本の敗戦は、それ自体アジア諸国家への貢献だったのだ。

徴用の国家賠償は両国で話されたが、1965年に日韓条約で解決をみた。徴用、慰安婦、朝鮮現地の日本官吏職の未払い賃金などは一括して国同士の間で終わった。

韓国国内でも日本でも国民の側からの、日韓条約への反対運動は激しかった。

この交渉中、日本側からは属人的に個別に保障する案を提示したが、韓国政府は個別には韓国が行うから、日本は韓国に対して一括して保障金を支払ってくれ。との申し入れがあったのである。

しかし韓国政府は、約束を違えて個々人へ個別の保障をしなかった。そのあいまいな韓国政府の行為が、65年最後の2013年になってから蒸し返し、「被害者」による韓国裁判所への提訴を誘発した。

鉾山で徴用朝鮮人や、飯炊き女たちと苦楽をともにした俺だが、今の俺は何だ。

女術（ぜげん＝ポン引き）まがいの、誰に聞かれてもまともに答えられないはずかしい立場ではないのか。

しかし、メリーに言わせれば

「私だって女の立場で国策に協力しているわ。」

と笑い飛ばすところであろう。

メリーとインダ

インダは上等な女だった。メリーはインダを店の戦列からはずし、過去に自分がそうだったようにオンリーとして上村にプレゼントした。

上村の感覚でもインダは上ダマだ。客があとを引くタイプだと実感した。東南アジアの女だから肌色は黒いが、日本語は上手だしベッドテクニクもよい。

裸体のプロポーションのよさは男をそそる源泉だが、なにより日本女離れた褐色の胸や下腹部が下の毛の黒さとマッチしているのがいい。

白いパンティと白いスリップで出れば、中身の肌が日本女より浮き立って見え、客にはこたえられないだろう。胸も大きい。上村は、メリーに、

「ありがたいプレゼントだが、おれにはもつたない。店に出して仕事をさせたほうが店の利益に貢献するんじゃないか。」

「本当はそうだけど。実は、タマのスカウトハンターが接触してきているんだよ。」

インダには、ほかの店から誘いがかけられていた。したたかなメリーはそれを察知してインダを戦列からはずし、上村のオンリーに仕立てたのであった。

いずれほとぼりが冷めたころ、また店に戻すつもりであろう。

メリーはそのハンターから、逆に2人のタマをハンティングして店を充実した。メリーは3人体制で商売しようと考えているらしかった。

インダは東南アジアの女特有の開く股を持っていた。衰えた男性でも自分の手の介助なしで自然のまま子宮近くまでスムーズに入っていた。

これは個別に老客の掘り起しができそうだ。商売のハバを広げるオプションを提供できると考える上村であった。メリーに相談すると、

「男の見立てだね。いいよ。インダをつかって販路を拡大したら。アガリはインダと分けなさい。」
インダは店の損益勘定からすでに外して、上村にプレゼントした女だから扱いは上村に任せるというのであった。

上村は、すでに色恋の道をあきらめている、後期高齢の好色家に声をかけた。結果は上々であった。

接点が衰えて女とつながらない老人が、インダにかかると誘い込まれるように中へ吸い込まれていくのだった。

上村は金持ちの高齢クライアントがインダを囲いたいという希望に、期限付きでかなり高額の占有料金で同意した。インダは上村を旦那と認識していたが、

「いいよ。私、商売だから、あなたの指示ならば、ヌシさんにサーブスするよ。」

「次のさわりに前に、ここへ戻すから、頼むよ。」

このようにして上村はこのクライアントのもとにインダを派遣した。

「アネ（姉）さん。タマも増えたから、月に1週間の休みをくれないか。アネさんが、おれの代わりに帳場へ座ってくれ。インダは一ヶ月間客に寄託したから不在だ。」

「上村さん。月に1週間の休暇というのはね。女のさわりと同じペースなんだよ。日程は苦しいよ。そんなとき客を取らせるわけにいかないからね。」

上村はインダを囲ったクライアントからの前受け金の一部を渡し、

「インダの今月分のアガリの分け前だよ。アネさん、ピンチヒッターの女を探しなよ。素人でいい。月2日でも3日でもいい。」

大枚の現金を前にしてメリーは、

「考えてみるわ。でも、インダをほかささないで。そばにいろいろなささせなさい。」

炊事、洗濯、あの娘は家庭的だから、女の役割以外に女中にも使えるよ。かならずあなたの役に立つよ。ホカすのはこれつきりにして。」

メリーは一手先を読んでいた。その一手先には何よりも上村を自分のパートナーから離脱させないための努力がみえた。

その夕方から新しい女が面接に来た。すでにその女の採用はメリーが事実上決めていた。店の権威

付けのようなもので「だんな役」の上村が、面接して決定する形である。裁判所の審判で補助役がすでに決めてきた案件を、裁判官が最終的に宣告する権威付けの儀式と同じである。

そうではあるが上村は、タマのスレ具合を点検した。「見ず転（みずてん）金（かね）だけの女」は許容できるが、まだ真心（まごころ）があるタマでなくてはならない。荒（すき）んだ心をもつタマはよくない。これは、上村の持論だった。

「あなたが、ここへ移つて来るにしたがつて、何人くらい客が移つてというか、ついて来るかね。」
「7〜8人です。」

「割りは、5割。あとで料金表を見て。ショート30分1000円。出前もある。交通費つけるよ。個人取引はだめですよ。どこに住みますか。部屋はここにもあるよ。みんなで仲良くやってくれ。」
というような内容である。

新規の女たちは上村をボスと信じ込み、みちのくの山育ちのごつい風貌にやくざまがいの畏れさえ感じたようであったし、メリーはそれを見て満足気であった。

上村の胸は複雑なものであった。オレはこの女術（ぜげん）まがいの世界から抜けだせないのではないか、と絶望的な閉塞感に襲われるのだった。

幽霊の妻

この一ヶ月間、上村は与えられた女インダを、近在の高齢者のにわか妾として預けていたので、気楽な日々を過ごしていた。それでもそろそろインダのさわりにかかる日程なので、上村の住むここへ戻さねばならない。

「ぬしさん。あのおじいさん客は楽だったよ。1ヶ月一緒に暮らしたけれど、めったに遊ばないよ。私の体を眺めているばかり。股の形がいいといつて、1時間もそこに頬ずりしていたわ。」

インダの若い褐色の裸体を眺め、乳を抱え込み、股の付近を頬ずりする老人の恋は、インダには扱いやすい客であった。

愛の表現はそれぞれが、それぞれの方法でアピールすればよい。インダは、この1ヶ月の間老人に買われ、妾の役を演じたのである。内容はといえば、ほとんど実害のないリップサービスだけで、老人を有頂天にさせたようであった。

いずれ将来は自分もあの老人のように、具体性のないセックスもどきのまやかして、自分の男を満足させようとするのだろうかと思う上村であった。そのときは自分も、女の股に頬ずりするような愛の表現をとるのだろうか。

まもなくインダはさわりだから、老人との契約期間の1ヶ月を満了する。しかし次の契約までは、上村はインダと同居せねばならないのである。

上村は、諏訪のカナや子の信頼を損ねる生活態様は避けたかった。どこかアパートを借りてインダを住まわせる方法をとっても、インダとの同居は避けたかったのである。

インダと同居することになれば、インダは日本人ばなれした熱い愛で上村に旦那としてからみつくに違いないし、上村も邪険にはできない。日本の女とは生来が異なるのでホカすのは困難だ。上村にはありがた迷惑だった。

そんな上村の思いを知ってか、知らずにかメリーは、

「上村さん、インダはどう。かわいいでしょ。かわいがってやってね。」

と、能天気だった。メリーは、第一線を退きマネージメントに徹していた。

すでにメリー自身と他からスカウトされかかったインダを戦列から外し、今は新規に抱えた3人で勝負をしていた。

そして、上村といえど女将メリーの支え役を続け、外見では旦那として全体をみまわす役だった。

メリーは順風満帆の営業成績を背景に、パートナーで身内もどきの上村を、自分の片腕として事実頼りにしていたのである。

メリーが上村をかけたがえないパートナーとして頼る理由は、かつてオンリーだったメリーと早くから知り合い、路上の営業を援助してきたその功績が大きい。人格的にみれば、上村が女におぼれない冷静な視点と、経理面での硬さを持っているのが魅力だった。

さらに強いて言えば、上村のヤクザまがいの田舎男の風貌も、この商売上には有用と想っていた。

「上村さん。常勤3人ではさびしいから、アルバイトで週2〜3回来てくれるタマがいるそうよ。女術（ぜげん）の善さん から電話でした。」

その一人は新宿のクラブで働いているから、明日にでもあなたがお客で行って指名して会ってき
て。男の目でよくその女を見てきてください。源氏名は、きょうこ。はい、これが経費です。」

タマの女のスカウトも営業のうちであり、必要な経費はメリー持ちである。

税務部門の役人が「料理飲食税」の不正調査のためクラブや料亭で豪遊し、もらった領収書の額と
後に税申告で出される額を突合調査する、いわゆる「おとり調査」では調査に要する費用、すなわち
飲み食いの経費は上部から渡される公金である。

翌日の夕方、上村は新宿のお目当てのクラブへ「出勤」した。クラブ「山路」は、西武新宿駅前の
北海道のカニ屋の筋向いにあった。

その横丁は出勤間際のホステスや、飲食店へ氷や食材、ビールを運び込む小型トラック、清掃や調
理の準備で動き回る白衣の店員で喧騒きわまる状況であった。

街角のバックには「青い山脈」が流され、そろそろ勤めが終わったサラリーマンが、今宵の止まり
木を物色しながら、そぞろ歩きをはじめていた。

客引きやプラカードに「格安サービス」のプラカードをもち、愛嬌をふりまくサンドイッチマンも
みられた。

上村がドアを押し開けると、

「いらっしゃいませ。」

黄色い声の歓迎コールがいつせいに発せられた。カモの到来とも思っているのだろう。

座席に座っただけで、テーブルチャージ（席料）は、サラリーマンの1日分の日当くらいはふんだくられる。これは手始めの基本料金である。また一杯の水割りも飲まない時点である。

定番のホステスサービスは、おしぼり、タバコの火付け、お酌、ボーイや厨房への注文取次ぎである。ホステスはついでに、胸のブラジャーの中に手を突っ込んでなまめかしい名刺を出し、客に握らせ、

「しんど指名してね。」

などと言い、客を飽きさせないような程度の低い世間話でつないでいくのである。

ホステスの腕とは、客が持参している金をお帰りまでに全部使わせる才覚である。

「ビール。きょうこさんはいるかね。」

このオーダーは、とりあえずの飲食の注文と、「きょうこ」というホステスの「指名」である。

ロビーには、ボーイのほかにメンバーという役がいて、ホステス個々の出勤の点検や指名の状況を記録するのである。

飲み物は、客用と侍（はべ）ったホステスドリンクとは、アルコールの入れ具合が異なる。ホステスドリンクは客自信が飲んだものとして加算されるが、ほとんどアルコールは入っていないのである。

店にはカウンター席もあった。4人掛けと、6人掛け、8人掛けなどのボックス席が、ぼんぼり灯に浮き上がっていた。

適度なエアコンが効きバックのミュージックはラテンやボサノバだった。

「きょうごさんは、8時出勤です。あと30分お待ちください。代わりに、あずさがお相手します。」

メンバーは慇懃に言つてさがり、あずさと名乗るホステスが上村にはべった。

「あずさ、でえす。」と、若手の和服のホステスが上村の脇に掛け、かいがいしく運ばれたオーダブルを並べて水割りを2つ作った。

下品な雑談して時間を過ごしていると、メンバーが

「きょうごさんが来ました。」

と伝えてきた。

そして、やはり和服のホステスが、ほの暗い奥側から近付いてきた。きょうごと名乗る上村の目当てのホステスは、結城しまのつむぎに名古屋帯の、結構優雅ないでたちであった。衣装は自前である。

そして目前で灯に浮かび出たその顔を見たとき、上村は飛び上がるほどびっくりした。

「何が起こったのだ。」上村は、自問した。

それは、まぎれもなく故郷遠野の忘れもされない、あの京子だった。

上村が、ふとしたきっかけから撲殺することとなってしまった、遠野木材会社の佐々木社長の妻で

ある。

思えばいつぞや、いまわしいあの社長撲殺事件の後、事件に秘められた真相を知らない京子から、会社に残るよう懇願されたのであった。

上村は自らの心の、その、罪の意識をかわしきれず、京子の下（もと）から逃亡同然に離れたのだった。あれから10年、ひと時も上村の脳裏から消え去ることがなかったあの撲殺事件の当事者であった。

その京子も、客が上村と分り驚愕した。

「まあ、次郎さん。」

と、絶句して言葉も出なかった。しかし、京子の見開いた目は、徐々に斜め下に下ろされた行つた。

対面している上村は客である。上村も屈折した思いと、突然の再会とのギャップを埋められず、さらに、今、この店の客としての立場という三重の思いに整理がつかないまま、京子と会話しなければならなかった。

先行して来ていたホステスの、あずさが、姿を消し、京子は上村の脇に座って、テーブルに広がつたオードブルや、箸をそろえなおす作業をした。

「京子さん、いつからここに。」

「主人の7回忌の後、上京したの。」

京子の夫の故佐々木社長は、昭和16年に40歳で逝去した。真実を知るものは誰ひとりいないが、当の上村が撲殺したのである。

「きさま、おれがそんなに憎かったのか。」

と、意外な。なぜ。という声色で断末魔を迎えたあの佐々木の声と情景は、繰り返し繰り返し、上村が目を開けるたびに、場所、時、状況を問わず浮かぶ地獄の絵図である。

京子は昭和16年の「事件」の後、社長を継いだが、太平洋戦争の進行とともに地域の労働力は乏しくなり、社員や作業員も戦争に取られ、木材会社は立ちゆかなくなつて、ついに昭和18年に解散することになった。

材木会社は荒くれ男が何人も必要だが、この時代、適役は皆戦場へ取られていたのである。

あれほどの老舗だつたし佐々木社長が生存していれば、会社がつぶれることはなかつたであろう。

佐々木の経営能力からすれば、戦時中であろうとも木材が軍用に欠かせない資材であることを武器に、国策会社等に組み込ませるなど逆境をチャンスに変え、むしろ会社を発展させるように己が才覚を生かしたはずである。

また、もし上村が周囲の期待通りに佐々木社長の後を継いでいたら、上村も社長として同様の策を施したであろう。

しかしそれは、あの「事件」を考慮に入れなかつた場合の話である。実際には、佐々木社長を撲殺した犯人は上村である。上村があのまま殺人を犯した遠野へ残つて、佐々木の後を継ぐようなことは

絶対になかったのである。

佐々木社長はその辣腕をふるう機会を、すでに上村により閉ざされてしまっていた。

そして後継者の京子社長は結局数年後、ゆき詰まった会社を畳(たた)むことになってしまい、家族は路頭に迷ったのである。

その最たる原因を作った犯人が、ほかならぬ上村であったのだ。上村には一面では、遭遇したくなかった過去の人であった。

京子は戦後の昭和22年、会社の創業者の父と母を黄泉へ送った後、その機会に乗じて東京へ出たのであった。

「なぜ、東京へ。」

上村は、おそるおそる問うた。

「遠野は、家も手放して、行くあてもなかったし、東京には昔、主人と仕事をした上村さんもいると聞いていたので、もしかして会えるかとも思ったの。」

上村には京子の一言一言が、つき刺さるような痛みであった。お互いに言葉少なく交わした重い会話だった。

「わたし、あのとき、次郎さんがいなくなったことが信じられなかった。何が源で逃げたの。」

「悪かった。京子ちゃんをこんなめにあわせてしまった。」

最後に、上村はいった。

「私が、できる限りのことをしよう。このクラブは、今日かぎり、辞めてください。」
京子は予期しない植村の言葉に、驚きの顔を隠せなかった。

佐々木京子

「女に会って話を聞いたよ。」

翌日、上村は、メリーに昨夜のスカウトの報告をした。

「姉（あね）さん、ほかのタマをさがそうよ。せつかくだが昨日のホステスは、不資格だ。」

昨日は、スカウトした女をこの店のタマにする目論見だったが、偶然その女が京子だったことから、京子との関係のいわれはメリーに伏せ、タマの調達はできなかつたと報告したのである。

しかし、メリーには上村の意図は理解できず、また疑いもせず、あつさり

「そお、じゃあ、いいわ。」

とあきらめたようだった。上村は、畳みかけるように、

「替わりに、俺のインダを店に復帰させたらどうだ。ちようどさわりで帰ってきているよ。」

「そうね。あなたはいいのですか。」

「オレは自分好みの女を囲うよ。」

メリーは笑った。そしてメリーはスカウトの候補に挙がっている、懸案のもう一人のタマの調査を

改めて命じるのだった。

上村は、運命のように出現した京子を守ろうと思った。それは過去からの請求書ともいえるものだった。生きている限りの時効のない償いである。

インダの柔軟な股を好んだ老人は、資金切れで高額なインダを引き続き占有することはあきらめたようだった。

上村が、渋るインダをメリーの店の、元の仕事に戻した数日後、京子は上村の孤り部屋へ引つ越して来た。

思えば10年前、遠野木材会社の家付きの若奥様だった京子は、入り婿の夫の社長が、やみくもに社員や作業員を怒鳴るのをいさめていた。上村も協力を要請され、何度も社長との確執に明け暮れた、社長夫人と社員の間柄であったのだ。

社長の夫の死後、6年間も経営に苦闘したが、結局時節の流れには勝てず、老舗の材木会社の終焉を看取る宿命に甘んじた京子だった。

天涯孤独となった身で、故郷の遠野を離れ5年もの孤りの東京暮らしは、やむを得ないとはいえ夜の蝶の道だった。

そしてその果てには、アルバイトの「からゆきさん」まがいの仕事まで覚悟した京子だった。ありえないほどの偶然中の偶然で、元の会社の社員であった上村と運命的に邂逅した京子であっ

た。

「気が付いているだろうが、今の俺は、女衞まがいの夜の仕事だ。夜はほとんど不在だから、この部屋は自由に使ってくれ。そのうち落ち着いたら、お天道様の下でまともな職を探せばいい。」

京子は、潤んだ目で黙って上村の言葉を聞いていた。

「上村さん、あなたは主人が事故死した後、逃げるように去ってしまったけれど、どこで何をしていたの。」

「そうだ、あたのご主人は事故死だった。（おれが殺したのだ）」

上村は、うなるようにつぶやいた。

「京子さん、そのことはいずれ。（いずれうちあける）」

10年ぶりに邂逅した京子と上村であったが、二人は同郷の生まれである。同じ自然環境で育まれた同じ池の鯉であった。

みちのくの方言も、自然への感性も底辺は共有していた。地元の話題には事欠かなかった。

「上村さん。遠野のお身内のことは知っていますか。」

京子は、数日後、おずおずと言った。

「戦争があつたからね。遠野を離れて以来、行ったこともないよ。あれから遠野のことは何ひとつ知らない。」

京子は、ひっそりと「そう。」と言ひ、上村を見た。目が会うと、言葉を継いだ。

「戦争中にご両親は、病で相次いでお亡くなりになりました。もう、6、7年も前のことです。お兄さんご夫婦とお嬢さんがあとにおられますよ。」

上村を驚かせないよう、言葉を一つ一つ選んで、トツトツと語る京子だった。父母の死を、上村は、「やはり。」と思った。

遠野は、上村にとつては鬼門であった。思い出すのもおぞましい。

あの日上村は、父に、

「おど。おら、東京サいぐだ。もう、帰らん」

と、短く告げたのが、今生の別れと覚悟して去った故郷であった。おそらく父は、黙って消えた上村について、母や兄にはよしなに話し、自らが死ぬ前には、

「次郎は、もうここへは帰らんぞ」

と、係累のすべてに因果を含めてくれたはずである。

引き続くように起こったあの戦争の惨禍は、失踪した上村次郎を周囲の目に対して、奇異と思わせない程度の隠れ蓑にしていた。

父母の死に際しても、

「次郎ちゃんはどうしただ。どこにいるだ。」

などと詮索されることもなかったであろう。しかし今となつてはどうでもいいことである。

当然ながら兄が嫁を取り、今は子もいるという。聞けば今年父の七回忌にあたる。帰郷しない限

りは墓参もできないのだから、律儀な田舎の周回忌などは兄にゆだねておくしかない。幸い次郎は惣領ではないのである。次郎は父母に、懐かしい、会いたいとの感情を持つことはあつたが、係累のレベルで血が騒ぐこともなかつた。次男の特権である。

「生死の順が、逆でなくていいがったなあ。」

上村は、ポツつと京子に返した。

親のほうが、子より後に残るような死に方は親不孝である。

「旧家は、お兄さんがお達者です。」

「兄貴が。そりゃ、何よりだ。」

上村は遠野を離郷して10年、偶然の京子との出遇いで、やっと故郷の親兄弟の動向を知ることができたのであつた。

それは寂しい会話だつた。上村の両親はいつの間にかまかつていた。さらに幾多の親戚のことを問いたい未練心もあつたが、自らを犯罪者と自認する上村には、慎むべき無用と断じたのだつた。

「京子さん。ありがと。親の死を聞いて、解放された気持ちだ。遠野に気兼ねがなくなつた。」

京子とめぐり遇うことがなかつたら、生涯、身内の動向は分らなかつたのである。

「次郎ちゃん。もう、遠野であつたことは、苦にせずともいいのよ。」

次郎は、京子のセリフにドキツとした。しかし京子と次郎は別々のことを考えてのセリフだつた。しかし、次郎が真実を打ち明けたとき、京子はなんと言うだろうか。おなじセリフを言うという確

信はない。

父母が既にみまかった事実を聞き、次郎の心は穏やかではなかった。あの日あのとときの父母のそれの面影が、くりかえし次郎の目に浮かぶのであった。

そして、次郎は聞いた。

「次郎。遠野へおいでなんしょ。」

それは、次郎に父母が、ひっそりささやく黄泉からの声だったのだろうか。

故郷とは、身内や知人など人脈があつてこそ故郷（ふるさと）なのである。山河だけ残つて知り人が絶えた場所など、仮にそこが次郎の生誕した場所であろうと、それは次郎の故郷とは言い難い。兄が健在とはいえ、父母がいないあの故郷に何の意味があるうか。

黄泉から次郎にささやくその呼び声は、いつまでも時空をこえた底に留まっているのだった。

「んだ。京子ちゃん。いつかもういちど遠野へ戻ればいいね。生き残つた子の義務かもしれね。」

二人は、いつかのように顔を見あつて互いに微笑んだのであった。

「ジロちゃんと一緒に、遠野へ戻れたら夢のようだわ。もう一度、遠野中学のころの素敵な次郎ちゃんに会えるかしら。」

「遠野高女の頃の京子ちゃんは、美人で魅力的だった。」

次郎と京子は、今は帰らぬ昔を共有するのだったが、いずれも遅きに失した会話だった。

京子にしてみれば、上村が、今は同じ閨（ねや）で布団を並べて、手近に横たわっている自分を、なぜ抱こうとしないのかを奇異に感じていた。度々熱い目で上村を誘ってみても、上村は背を向けて寝てしまうのである。

「ねえ。次郎ちゃん。私に触れないのは、きたない女と想っているからですか。」

京子は、あまりのことに次郎にあけすけな不満を漏らした。

「そんなことはないよ。」

と、応じたが、次郎は京子に対しては、あの事件がトラウマとなっていて、性的に不能なのであった。

「そう。」

京子は、次郎の腑抜けた男の部分を確認した後、そつと後から抱きしめるのだった。

上村は、夜場で京子と不整合のまま同衾したが、京子はそれが上村の体質と受け止めたようであった。京子はそれ以上の疑念は持たず母親のような、スキンシップする夜毎であった。

世界の情勢は冷戦を背景に、再び混沌としていた。大陸では中華人民共和国が建国され、朝鮮半島は南北に分断された。冷戦は米ソ核保有の競争に移行し、マーシャル諸島を舞台にソ連との間で水爆実験競争を行なうまでに至っていたのである。

1946年アメリカ合衆国は、当時信託統治領であったマーシャル諸島のビキニ環礁を核実験場に

選び、1958年までの12年間に、23回にわたる実験を行なったのである。

現地ビキニ諸島の住民や、日本の第五福竜丸などの乗組員が多数被爆し、その後癌などで罹病死していった。第五福竜丸の久保山愛吉乗組員の葬儀は、NHKで全国実況放送され、後に、俳優宇野重吉主演で映画化される、センセーショナルな被爆事件であった。

世界で唯一日本だけが、広島、長崎に続き被爆被害を都合3回も蒙ったという特異性が、このメディアで世界中へアピールされたのである。

日米政府は第五福竜丸のみ被爆と認定して、米国が日本政府へ見舞金を払うことで問題を処理した。しかし実は、公表されている第五福竜丸のほかにも、100隻におよぶ多数の日本漁船が被爆し、同様の被爆者が出ていたのである。

政府は第五福竜丸以外の、他の漁船の被爆を隠蔽した。背景には、実際には被爆した漁師たちが、風評によってマグロの売れ行きが悪化するリスクを恐れ、自らの被爆が表ざたになることを恐れたためであり、政府も対米外交上、それを良しとした政治的配慮だという。

このように、3回目の日本の被爆に関しての、世界への情報発信は複雑怪奇であった。

天竜の予告

そのころ帰ってこない上村を、諏訪の妻カナは待ちわびていた。上村と離れているときどき上村

が夢に出る。

「あなたは、東京に女がいる。今でも私は戸籍上は妻ではないし、子供も上村姓を名乗れない。山田姓で放置されたままだ。」

「すまない、俺は犯罪にかかわった男だ。子供たちに迷惑をかけたくない。」

そして、そこへ警察のジープが来て、家から離れたところにとまるのである。刑事が来て通告する。

「あなたの旦那が、拘束された。ヤサの捜索にきた。」

いつぞやの、ヤミ物資運びの検挙と、上村が、いつかもらした、自分の「犯罪」というセリフがミックスして夢の中で混同している夢である。

翌日思い出したように、久しぶりに上村は帰ってきた。

「ずっと、このように東京で生活するのですか。」

カナは、それなら家族全員で、東京で生活してもいいと思った。

「多分そつだ。諏訪で仕事はおぼつかない。収入も減ってしまう。」

「東京でなくてはだめなのですか。私たちも連れていってください。」

上村は返事に迷った。遠野から上京した京子とは、同居しているが男と女の関係ではない。

だから京子を自活の道で援助すれば、カナや子が諏訪から上京してきて、上村と同居することに

なつてもなんら差し支えはない。

また一方の女、メリーとは女将と仮旦那と見せかけるややこしい仕事の関係だが、事実上メリーは上村のボスである。

もつとも、この女術まがいの商売が永続する保証はない。つい先だつてから、女性の国会議員を中心とする売春防止法の制定の運動が、大きなうねりをみせてきていたのである。

戦後10年を経て、日本は国際的にも再生できたが、近代国家の資格である公序良俗と、メリーや上村の生業の性産業とは相反するのである。

メリーや上村のこの仕事は、いずれ国法で禁止になるかもしれない。そのとき、みんなが食いはぐれる可能性は否定できない。

カナは、夫が性産業を生業とし、自分たちもその傘下でメシを食っているとはゆめ思っていないのである。

「もう少し待ってくれ。けっこう複雑なところもあるのだよ。」

カナは、上村が時間延ばしで、自分の問いに逃げを打っているとみた。

「今回は、いつ東京へ出るのですか。」

「明日の夜、出発する。」

「あなた。女がいるのですね。」

カナは柳眉を逆立てた。カナの抗議は凶星だった。京子にめぐり合う以前であれば、事実、自分の

居宅に女はいなかったのである。

しかし今は、京子を同居させているのが事実である。過去に上村が起こした京子の夫を殺したつぐないの心から、京子を夜の世界から救い上げ、暫定的だが一緒に寝起きする男女となっている。

これらの事情を妻にどうしたら穏便に説明できるだろうか。誓って男女関係がないと宣言して通る話ではなからう。

上村は当然だが、妻のカナと知り合うまでの20年間は、カナの知らない別の人生を通過してきた。

カナと夫婦同様になったのは、鉱山の仕事を始めた昭和17年のころである。料亭に仲居でいたカナを見初めたとき、カナは20歳、上村は30歳であった。数年のつき合いから同棲に及んだのは終戦の年だった。

見初めた年以前の上村の前歴には、カナから見れば10年もの空白があるのである。

この10年はカナが未成年の時代であった。そしてこの10年の間に、上村は将来を規定する殺人を犯していた。

この殺人は、上村が事実を隠蔽したため公にならず、被害者の佐々木は「事故死」となっているものである。つまり、上村の人生の決定的な転機が、妻のカナには見えていない。

幼時から共通の生活体験をもつ兄弟姉妹ならともかく、普通は世間のいずれの夫婦はもともとは他人だし、殊に歳差のある夫婦だったら、そのようなギャップは当然あるのである。

これらは上村の社長殺しの後遺症である。上村が自らショックを受けたその精神的なトラウマが、周囲へ不幸を拡散し作用しているのであった。

「あなた。女がいるのですね。」

と、カナはいったが、上村にとつては、カナが想像するような下世話な三角関係ではないのである。

「あなた、殺人の償（つぐな）いをしなくてはいけない身なのですな。」

と、読み替えなくてはならないのだ。

いま、京子は、上村の部屋に同居同然でいるが、夫婦もどきではない。カナのいう、「女」ではなく、上村にのしかかった「つぐない」が、そこに居るのである。

事実、上村は夜は仕事で不在だし、昼前に戻って夕方まで仮眠し、また宵に出勤する不規則な生活で、京子と同居してはいるが上村の「女」ではない。

「きさま、おれがそんなに憎かったのか。」

と、言つて息絶えた、京子の夫の佐々木社長の、あのとときの驚愕の目が、上村の男を萎えさせて京子を「女」にしないのだ。

カナに、自分の状況と心根に理解を求めるには、過去の「殺人」を打ち明けるしかないと思った。

「実は、私が、犯罪にかかわった。というのは、殺人だ。」

その夜上村は、カナにその隠された事実を初めて打ち明けた。

茅野駅裏の料亭でカナを見初めた昭和18年より10年ちかく前のこと、上村は岩手県の遠野で老舗の材木会社へ勤めていた。

やがて会社の中堅になった上村は、材木を供出する前の立木の見立てのため入った山で社長と殴り合いの争いとなった。

その末路に社長を撲殺する事件に及んだのであった。しかし事實は秘められ社長は「事故死」となった。

戦中、戦後のドサクサのなか、幸いにも罪は隠蔽できたが、以来、殺人現場での壮絶な記憶がトラウマとなり、寝てもさめても懺悔の念にさいなまれ続けた。

上村が、心ならずも撲殺した社長の妻は、社長の死後、上村にこの会社をひき継ぐよう希望したが、もちろん上村にはそんなことができようはずもなかった。

上村は会社にもいたたまれず、故郷の遠野から逃亡同然に離郷したのであった。社長不在の会社は解散のやむなしに至り、7年後には京子の一族は離散することになった。

そして京子は東京へ出て、夜の蝶としての生活を続けたが、女衞にからゆきさんもどきの仕事に誘われ、偶然その宿のマネジャーの上村に救い挙げられたのであった。

雇うべき売春のタマが、なんと京子であることを知った上村は、自らの罪の深さに打ちひしがれたのあった。

上村は黙っていた。

「あなたがかわつた殺人なら、そのときなぜ法の償いつぐないをしなかったのですか。今頃まで償いを引きずつてくるとは。あなた、その殺人の償（つぐな）いのため、その女を囲っているのですか。」

カナのテンションは次第に上がっていた。カナの言葉は、上村に改めて身につまされる事件への悔恨の思いを湧きたたせた。

そのとき上村は、佐々木社長が谷底へ転落する前後のいまわしい情景を思い浮かべていた。

「そうだ。おれはあの時、事実を隠した。いまその報いが来ている。」

あの時上村には、正直に事実を供述する途と、隠す途の二つの選択があり、いずれも可能だった。そして上村は事実を隠すことにより司直の手から逃れた。

しかし、事実通りに供述して逮捕され、犯罪者として受刑もしていたら、今の上村はどのようにあつたであろうか。

「あのとき、オレが法の裁きを受ける途を選んでいたら、カナ。おまえとめぐり合う星はなかったのだよ。」

その夜同衾の床の中、カナの体は火のように熱かった。上村のすべてを吸い取ろうとする別の何かである。

一方の、上村は京子を抱いていた。その夢枕に、社長の幽霊はなかった。カナはいま私は抱かれていないと感じるのだった。

「このひとはいま別の女を抱いている。」

薄目を開けると、目の前に上村の恍惚の顔が見えた。

「私は、あの女に上村を渡さない。」

カナは、上村を自分の女で挟み込み締め付けた。とたんに撃たれた上村の熱いものを奥へ吸い込むカナであった。

いま、天竜の臨降がはじまっていた。カナは天竜の娘である。ひとたび燃え立つとその心は暴れまくり、大川の土手でさえ越波して凶暴に暴れまぐる天竜である。

翌日の夜、いつもの22時の新宿行きに乗車する上村は、送ってきたカナの顔にただならぬ何かが見なぎっているのを見た。

「それでは、あとは頼むよ。」

上村は、カナに笑んだ。カナは、じつと上村の顔を見て、一言も発しなかったが、その目には、空恐ろしい光が見えた。

「あなたは、じきに帰ってくる。」

その目はそう語っていた。

改札口を抜けてホームに移動した上村は、跨線橋のむこうの駅舎を振り返ったが、カナの姿は見えなかった。

そのときカナは、人知れず進行方向前方へ走り始めていた。そして出発前の釜の蒸気を点検中の機関助手は、脇を走り抜けていくつむじ風のような気配を感じたという。

上村は三等車のデッキに上る直前に、盛んに蒸気を噴出している先頭の釜のほうをチラッと見やった。

そこには赤青のポイントの標識灯だけが、闇のなかにいくつか浮き出して見え、生臭い風が吹いていた。

天竜の女（ひと）

やがて蒸気機関の始業点検が終わり、22時茅野発の新宿行きは、長い汽笛を響かせ、恐ろしい音で蒸気の息を規則正しく吐き始め、音の割には止まっているような微速で前進を始めた。

茅野駅の跨線橋付近から発車の汽笛が響くと、黒煙が息する轟音と共に真つ暗な空にはき出された。大太鼓のようなボイラーのリズムと、すべてを圧倒する蒸気の息つかいが、線路を地響きとも伝わってきた。

「あなたを、あの女のところには行かせない。」

カナの目には、天竜が吠え、乱れた髪は川風にまかれ、まるで歌舞伎の「滝夜叉姫」のように渦巻いていた。

列車が、鉄橋まで来る時間はわずかである。それでも出発時の微速では、歩いたほうがはやい速度である。

「あなたは殺人を犯し、悩み続け、そして殺した男の妻に懺悔している。身も心も捧げて、許しを乞うている。」

列車は東側の踏み切りを通過し、速度を上げながら近付いていた。吐き出す煙は、夜目にも真っ黒で、標識灯の赤青の光を消し去った。

「あなたは、殺人の報いに自分を捧げてしまった。」

蒸気機関車の暗い前照灯は、目印程度の役割しかなく、前方を照らすには実に心もとない光であった。機関士はシグナルだけが頼りの盲目の運転であろう。2つの短い汽笛が鳴った。

「あなたは、自分が乗った列車で、私を殺すのよ。その殺人にも悩むがいい。あの女と比べて、どっちが愛（いと）しいか後から考えなさい。」

カナは、笑っていた。

もう、前照灯は、目の前にあつた。天竜の娘は吠えた。

「あなたを、あの女のところには生かせない。行かせるものか。行かせるものか。」

突然、ぼつ。ぼつ。ぼつ。ぼつと、けたたましい汽笛が連続するとともに、ギー　ギー　の制動音が相乗して、夜更けの町に響きわたった。

突然の異常な音とその雰囲気に、近所の家々から多数の人々が飛び出してきた。

列車内には、三等車両で上村が、荷を網棚にあげ、やっと座席に腰掛けたときだった。車内はガラガラだったが、立っている人や、トイレで小水をしている人は慣性で転倒する人もいた。

緊急停車した列車には、上川の鉄橋の先に機関車2両があり、盛んに黒煙を吐いていた。牽引する6両の車両の半分は鉄橋の上にあった。

「何があったのだ。」

乗客はみんな窓から外へ顔を出していた。しかし鉄橋で停車したその車窓を両手で引き上げてのぞいてみても、外は真っ暗闇でなにも見えなかった。ただ川の瀬音だけが高かった。

駅員が、数人、後方からかけてきた。機関士も下車しているようだった。

「汽車往生だ。マグロ（遺体）はどこだ。」

甲高い声が闇に響いていた。上村は混沌としていた。

「まさか。」

列車は当分動きそうもなかった。

「女の飛込みだ。野次馬を規制しろ。」

駅員や、機関士が叫んでいた。消防団のハッピをきた集団や、警察官も集まってきた。上村は、心さわいで下車することにした。荷をまとめデッキに出てみたが、ちょうど鉄橋の上で、開口部は降りられない。最後尾のハッチから降りることにして、ずっと車内を後方へ歩いた。

川の瀬音に混じって、いろいろな音が混在していた。ふと、上村は聞きなれない咆哮の音が聞こえたような気がした。

「あれは、天竜の咆哮ではないだろうか。」

と思うと、いても立ってもいられない焦りを感じた。

最後尾の連結器に足をかけ、開口部から危なっかしく下車し見回すと、鉄路や枕木、敷石の碎石に人間の肉片や体内からの食かすであろうか、形をとどめない多数の小間物が散っていた。

上村は、機関車のある前方へ鉄橋の進行左に渡した「歩行板」を歩こうとした。

警察官が、規制していたが、

「とびこみが、身内かもしれない。」

と、言うのと、

「頭と胴体は、2両目の機関車の下にあります。」

と先導してくれた。そこには血みどろのカナの顔だけが暗闇から浮き出すようにあった。

「カーナー。」

上村は、われを忘れて叫んだ。気が付くと、警察官が上村の左のひじを支えていた。

「あなたのお身内ですか。」

警察官が気の毒そうに、やさしい言葉をかけた。

「遺体の位置の確認が終わったら、列車を発車させます、これが最終列車ですから

朝の一番列車までは時間があります。その間にできるだけご遺体を收拾します。現場検証は明るくなつてからやります。」

警察官は、やさしかつたが事務的だつた。上村に出せる言葉はなかつた。

散つたカナの遺体は、駅員が中心になつて木箱へ一つ一つ入れられた。片足の付いた胴体の収容が困難だつた。

作業を見ている上村は、夢現（ゆめうつつ）であつた。警察から連絡が行つたらしく兄の金雄夫妻が飛んできた。

「何があつたのだ。」

と、怒りの態だつた。上村をみると、

「上村さん。お前。」

と、絶句した。

遺体の始末や事情聴取の主体は、直近の身内である兄の金雄に移り、身元調査には上村も内縁の夫として立ち会つた。

当面最大の問題は、二人の子供に現場を見せない配慮だつた。事務的な処理のマニュアルにしたがつて、徐々にカナの存在は上村から遠のいていった。

「自殺」と公式に認定されるまでは、加害者は国鉄である。後日、事情聴取と医師の診断で事件の原因が自殺と公式に決まつた後は、遺体が引渡され遺族が主体の後始末となるのである。

このときから国鉄当局が被害者に変わり、国鉄が被害にかかる損害賠償を請求できる立場になるのである。

天竜のゆくえ

上村の内妻のカナは、天竜となつて大暴れし天にかえつていった。

それもただの死ではない。上村のふがいなさへの復讐であつた。これ以上過酷な報復はない。

上村の乗つた列車でカナは轢死した。上村はカナを列車で踏みつぶしたのである。

二人の子は、何がおこつたのか分からず母を捜した。

上村は針の筵（むしろ）へ座らされ、カナの葬儀をとり行つた。上村は、今、地獄を見ていた。

村のならいで告別式には、村人は義理を果たすためすべての家が例外なく香典を手に弔問するのである。

しかし誰もが上村に、くやみの声さえかけることはなく無言で香典を手渡すのだった。

沈黙の中で読経が流れ、上村は喪主としていちいち深く頭を下げ、機械的に感謝の言葉を繰り返した。

風の便りで知つたか、旧静香鉾山の元飯炊きの女が晴ヶ峰から山を下つてきて弔問した。

「上村さん、辛かろう。察するよ。」

元飯炊き女は、言葉少なに言った。弔問客からの初めての悔やみだった。

「ありがと。わるかった。」

上村は、感極まり不覚にも落ちる涙を元飯炊き女に委ねたが、自分の返事が的外れだと思った。元飯炊きの女の言った「辛かろう」は当を得ていた。それはあたかもカナが言ったように聞こえたのだ。

そして元飯炊きの女に言った、「わるかった。」は、カナへの謝罪であった。

上村は、元飯炊きの女のうす汚れた若老婆の顔が観音菩薩に見えた。

村人はふだん見慣れないカナの連れ合いだという上村が、弔問を受ける様を遠巻きに振り返りながら帰っていった。

すでに人間の体の態をとどめていなかったカナのバラバラの遺体は、茶毘に付されていた。

カナの骨箱は、上村の胸から下げられカナの家系の菩提寺の信濃安国寺の永観堂墓地へ野辺送りされた。信濃安国寺は古来の名刹である。その日墓地は杉の木立に阻まれ、陽もささずいやがうえにも暗かった。

「どおゆうで、こんなことになっちまったずら。」

と、誰からともなく周囲でささやかれたが、一同はそれ以上の言葉もなく無言だった。

上村は絶望の淵にいた。今の上村には藁（わら）ほどの救いもなかった。しかも二人の子のうつろ

な四つの目が、同じ絶望の淵から父の上村に救いを求めて父を追うしぐさはだれの目にも痛々しかった。

昭和16年、上村が殺（あや）めた遠野の佐々木社長の遺体を、何食わぬ風を装って菩提寺の土の埋葬したときも、上村はなんともいいよのない罪悪感にさいなまれたのであった。

それは当然である。秘してはいるが殺害した犯人は自分なのである。その葬儀は殺人犯が被害者の葬儀を執り行うという異常なものであった。

今回もそうだ。カナを殺したのは事実上自分である。いま上村は、誰の目にも明らかな殺人者であったし、あのときの隠蔽した殺人事件とともに、再び自分を名実ともに人を殺した罪人にしなければならなかった。

22時の新宿行きの列車が発発する直前、カナは、上村にうらみの目を向けた。その目には、そろそろしい光が見えたのだった。

「あなたは、すぐ帰ってくる。」

その目はそう言っていた。

「そうだ、俺は、お前が言うとおおり、新宿行きの列車から引きずり下され、すぐに帰ってきた。」

上村はカナと会話をした。

「しかし、カナ。お前はもういなかった。」

カナは、笑っていた。

「おれがそんなに憎かったのか。」

上村は、そう言ってみてハツとした。そのセリフこそ、いつぞや撲殺した佐々木社長が断末魔に、犯人の上村へ投げつけたおなじセリフだったのである。

その犯人であった自分が、今回の妻殺しで再び犯人となり、血迷った末に思わず発した巡る因果のセリフであった。

カナがいなくなつた家は空虚だった。いつもの場所へ座つてみても落ち着かない。

「庭の掃除をしてください。」

といわれるのでは、と腰を上げてみたり。

「ご飯ができたよ。」

といつてくる前に、書き物を済ませなくては。と思つてみたり。

「おとうさん。」

と突然そばに来る子供を、母のもとへ追いやろうとして、

「そうだ、もう母はいなかったのか。」

と、愕然とし、おさまらないすべてが宙に舞い上がっていくのであつた。

カナと同衾した大柄模様の敷布団や、掛け布団を押し入れから出し入れしてもなにか足りない。

「そうだ、布団を干してなかった。敷布はどこだったか。」

見つけた敷布は、洗濯してきちんとたたんである。しかし何か問いたい相手のカナはいなかった。

すべてが迷路だった。

別離（わかれ）

二人の子は、まだ母が恋しい年頃の子供たちであった。先日まで母とはいつもそばにいるものと思ひ込み、一時（いつとき）たりとも母のない時間はない年月を過ごしてきた子供たちである。

一時の留守ではなく、もう永久に会えない母になってしまったという衝撃は尋常なことではないし、子にとっては明日も見えない絶望の世界であろう。

上村は、カナの葬儀が終わると、この村にいたたまれず二人の子どもを連れて子の故郷の諏訪の地を離れた。

すべての行動に違和感をもった子供たちは上村を問い詰めた。上村は、心がちじんで行くような絶望を覚えた。

「お父さん、おらーち、どけーいください。」

「8月は新盆だから、またここへ戻ってお母さんの墓参りをしよう。」

上村は父親役として、むなしい会話だと分っていたが言ってみてみた。

おそい春に中央本線茅野駅は、冷たい朝霧のなかで静謐（せいひつ）だった。まだ通勤時刻前の早朝である。客もおらず下り列車はまだ来ない。

駅前のコンクリートの広場では、労務者が2〜3人町の委託事業の路上清掃をしていた。

「上村さん。おはよう。」

あの旧静香鉱山の飯炊きだった女だった。

「やあ、どうなっているのだ。これは。」

「山を下りただよ。晴ヶ峰で10年。やっと熊の生活が終わったちゆうとこ。いまは ニコヨン（失対労務）で食ってるだわえ。」

「そうかい。それは良かった。お子さんのことを考えればそれが一番だ。」

「上村さんは、どちらへおいでだね。」

「名古屋で暮らすことにした。お前さんも達者でな。」

「上村さん。いやなことは、はやく忘れっちまったほうがいい。奥さんのお墓参りはしておいてやるでね。」

「ありがと。救われる。あの時はぶざまに自分をさらけ出してしまったね。恥ずかしいよ。おめさまには、戦前の静香鉱山の時代から、えらい世話になったね。」

あのとき というのは、カナの葬儀の折の、取り乱した自分のことだった。

「インネ、ほれどこじゃね。上村さん。何も苦にすることはねえだぜ。悪い夢を見たのだよ。これ

からは無理なんで自然に生きるのがいいだよ。」

女は畳みかけるように説教した。

そのとき蒸気を吐きながらD51のカマが、6両の列車をひっぱって、比較的静かに下りホームに入ってきた。

D51は停車すると、息継ぎするように蒸気を吐いた。それは客が乗降する数分の間にも、大太鼓を叩くような鼓動で存在感を誇示していた。

「上村さん。お子もおいででお困りずら。はやく後添えをおもらいやれ。」

「生きていれば、またお前さんにも遇えるかもな。」

「上村さんも達者でね。いつもありがとうございます。また諏訪へおいでなして。」

女は、上村が握らせた幾枚かの百円札を押し頂き、笑顔で上村たちに手を振った。

左の車窓から南側の晴ヶ峰の稜線ちかく、木々の隙間に灰色の大屋根が見えた。戦時、上村が心血注いだ静香鉱山の飯場小屋である。

鉱山はすでに死んだ廃坑だが、あの日あの頃は活気があった。この静香鉱山から鉱石を運び、その帰りには看板娘のカナのいる料理屋に寄ったものだった。

その駅裏の料理屋はもうないし、ないこと自体が時間の持つ重みなのだ。

カナと暮らした10年の間、この茅野駅からはいつも22時の上り新宿行きの夜汽車で東京へ出た

のであつた。カナは、機嫌は良くなかつたが、必ず見送りにきてくれた。そのいわゆるある列車に、カナは怪気の果てに飛び込んで死んだのである。しかも上村が乗車している列車だつた。

上り方面へ数百メートル先には、カナが飛び込んだ上川鉄橋があり、鉄橋を通過する蒸気機関車の通過音の響きは天竜の咆哮である。すなわち天竜の娘のカナの断末魔の叫び声であり、情（なさけ）余つて憎さ数百倍の怨念で上村を呪う声だ。

「行かせるものか、行かせるものか。あなたをほかの女のもとには行かせない。」

今の上村には、東京方向は鬼門であつた。茅野駅の東、上川鉄橋は天竜がきばをむいて吠えている恐ろしいその口だつた。

「新盆の8月には、お母さんの墓参りに帰えらうな。」

上村は、ここでもカナへの鬱積した思いを先送りして語り、そのときは、墓前でカナと落ち着いて対話ができることを念じるのだつた。

東京の女ボスのメリーや、いわくつきで同棲に及んだ京子に対しては、カナの汽車往生で帰京できず、みなさんの胡散（＝うたがわしい）を買うことになつてしまつたと、上村は心中悔恨の極みであつた。

「申し訳ない。私の身から出たさびで、こうなつてしまつた。」

上村は、幾度も東京の方向へ頭を下げた。それで済む話ではないが、ここは鬼になつてしのごうと

決意した。殊に、京子には、

「あなたのご主人を撲殺したのはおれだ。」

と、わびねばならないのだった。一時は、京子の生活が立ち行くまでの援助を、申し出た上村だったのだ。しかしいまは、それも叶わないことになってしまった。

昨日は、せめてもの償いに幾許（いくばく）かの生活の糧を、京子に送った上村であった。

帰京できなくなつたいきさつは、京子には伏せてある。しかしいづれ伝えて詫びねばならない。

上村は、かつて生前の母が幼い次郎をひざに抱いて、ささやくように語ってくれた遠野の民話を、自らの身の上ばなしに変えて京子に語ることになるだろう。

「京子さん。もうすこし待ってくれ。」

同時に、カナにも言つた。

「カナ。オレは男だ。そしてこれは損得ない男の誠だ。恪気せずオレの話を聞いてくれ。」

諏訪の郷は、上村には静香鉾山を舞台に自分の半生にかかわつた地であつたが、上村の生まれ故郷ではない。しかし子供たちには、100%の故郷であり、生粋の諏わっ子である。

母を失なつた子供たちの心の将来にわたるフィールドに、この茅野という故郷が、今後どのように残っていくだろうか。

思いがけずも子供たちが、心に大きな傷を負う場となつてしまったこの茅野という地が、子にとつては忌避する故郷になつてしまふ懸念はある。それは上村が撲殺事件を原因に、遠野を忌避し続けて

いるトラウマとも軌を一にするものである。

下りの列車は、長い汽笛を残して茅野駅を離れた。

列車は、南西の晴ヶ峰を抱く守屋の峰と、反対側の卑近な永明寺山を、置き忘れたように後（うしろ）にした。

去って行く列車が茅野駅に残したのは、D51のカマが吐き出す石炭の、硫黄の臭気だけだった。

翌年も暑い夏が来た。それは八ヶ岳の空に入道雲がかかる子供たちの夏休みのものであった。

例年8月16日は、名刹の信濃安国寺の旧盆のおくりの明け日で、村人はこぞって墓参するのである。

その日村人は、片手に花を持ち線香を持って墓標に傳（か）しずく、ふだん見なれない3人連れを見た。

言うまでもなく、カナを失った上村親子であった。

墓標には戒名はなかったが、カナの墓とあり、一首の歌が添えられているのだった。

なきぬれて 心ならずや ゆめの跡

いずこそ明日は 天竜の女（ひと）

真夏の諏訪郷独特の陽の影の濃い日だった。上村は、墓標に向かって語りかけている風情だった。

さらに、いつかまた、無造作に歳月は過ぎていった。

その後村人たちは、上村と子供たちの姿をふたたび見ることはなかった。そしてやがて、村人の記憶からも消え去っていった。

エピソード

明治の横押しの大水から60年後の昭和34年、諏訪郷は強大な伊勢湾台風に襲われた。八ヶ岳の西壁は強風を受けて様装を一変したほどであった。

諏訪湖へ流れる二つの大川も大水に見舞われた。その濁流は、宮川と上川の二つの川の幾箇所かの堤防をことごとく越流し、中流の数箇所の手手が決壊する事態となった。

木橋の渡戸（わたと）橋は、明治31年の「横押しの大水」に続き、世紀を隔ててまたもや崩落したのであった。

農家の物置小屋が、そのままの状態で、流されてきた。そのかやぶきの屋根に、ねずみが数匹右往左往する笑えない風景も見られた。

いつもは岸辺の浅瀬の水草やカトギ（葦）あし、よし）の葉は、急流に引き込まれ荒瀬になびきす

べて下流へなびいていた。それは上流へむかつて登っていく天竜の背びれのようにも見えるのだ。た。

豪雨に混じって時折稲妻も呼応した。日中でありながら雲の色は暗黒で、ときどき見え隠れする極端に白色の空もあった。

大太鼓が打たれているような地響きの中で、天竜の顔や手が、雲の切れ間に顔を出すようにもみえ、黒雲は急速に走りながら流れていた。

カナを天に迎えた天竜は、いまなお一層の大暴れをしていたのであった。了

上 昭和21 新宿駅南口（甲州街道口）と海軍の解体 下 昭和20年日本占領軍の国土分割案



昭和20年日本占領軍の国土分割案



上
戦後の日本各地を空から監視した米P38哨戒機
下
上村次郎



●
著者プロフィール



伊藤正房 いとう まさふさ

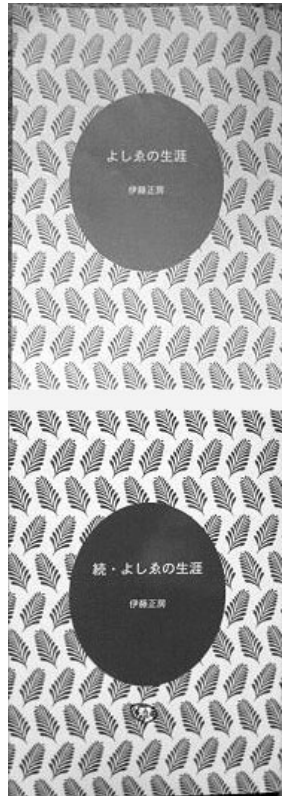
信州諏訪郷宮川村に生まれる。岡谷工業高校中退。諏訪清陵高校卒業後、法政大学ほかに学ぶ。東京都庁勤務後著作活動。インドネシアバリ島在住。

伊藤正房の本
1



大陸ぼたんの里 (B6判 100ページ)
栄光の南十字星 (B6判 188ページ)
昭和の夕映え (B6判 360ページ)
流れの果て (B6判 206ページ)

伊藤正房の本 2



よし糸の生涯 (B6判 220ページ パウダーガイド社刊)
続・よし糸の生涯 (B6判 228ページ パウダーガイド社刊)

「残俠諷わっ子」の前作。2014年刊



伊藤正房の本 3

パウダーガイド社の本



ワカコさんのアメリカンキルトワールド 田村和嘉子著

富士山を知る見るハイキングガイド 伊藤フミヒコ著

バックカントリースキー&スノーボード 伊藤フミヒコ著

残侠諷わっ子

著 者：伊藤正房

発行日：2014年09月10日

発 行：MyBooks.jp (www.mybooks.jp)

運 営：欧文印刷株式会社

〒113-8484

東京都文京区本郷1丁目17番2号

電話：03-3817-5910

<http://www.obun.jp>

組版・印刷・製本：欧文印刷株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが下記のアドレスにご連絡ください。

support@mybooks.jp

107957-20140910084220-HRH



107957-20140910084220-HRH